

博士論文

近代日本における知識人の中国認識

—中国文学研究会を中心に—

朱 琳

2017 年

目次

序章	1
第一節 本研究の問題意識	1
第二節 研究対象	3
一 中国文学研究会の概要	3
二 本研究における中文研の活動期間の区分	4
第三節 研究方法	6
一 先行研究	6
二 なぜ中国文学研究会を検討するのか	9
三 研究方法	11
第四節 本研究の構成	12
第一章 近代日本における中国認識の形成	14
第一節 戦時下の中国認識に関する言論構成	14
一 政治界	14
二 現地調査に関連する諸機関の活動	16
三 学术界	19
四 新聞・総合雑誌などのメディア界	21
五 文学界	22
六 1930年代の言論環境と中国文学研究会の方向	23
第二節 中国文学研究会の創立	27
一 発足以前の主要メンバーの活動	27
二 発足の経緯	30
三 機関誌『中国文学月報』の創刊と変遷	32
第三節 まとめ	38
第二章 草創—発展期（一）：同時代の中国文学への覚醒（1934.3-1937.10）	39

第一節	はじめに.....	39
第二節	同時代の中国文学との接触.....	40
一	誌上における中国近代文学に関する文章の概況.....	40
二	例会、懇話会および中国文学者による講演.....	42
三	同時代中国文学の翻訳活動.....	46
第三節	中国文学をめぐる人的交流.....	51
一	増田渉と魯迅.....	51
二	左翼系作家との交流：謝冰瑩、茅盾を中心に.....	54
第四節	戦時下の中国の民衆に対する注目.....	57
一	漫画と木刻画からみた民衆と労働者の姿.....	57
二	農民から導かれた文学的価値.....	61
第五節	ポスト・プロレタリア文学の視点から.....	67
第六節	まとめ.....	69
第三章	草創—発展期〈二〉：漢学への反抗（1934. 3-1937. 10）	70
第一節	はじめに.....	70
第二節	1930年代の漢学論：漢学の日本化と実用化.....	74
一	本研究における漢学と「漢学」の区別.....	74
二	漢学と国民精神.....	75
三	漢学の日本化と実用化.....	76
第三節	中国文学研究会の漢学批判.....	79
一	竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の漢学観.....	79
二	竹内好と竹内照夫の漢学論争.....	82
三	他の同人の反響.....	86
四	外国文学としての中国文学.....	89
第四節	竹内好の漢学論と保田與重郎.....	92
一	竹内好と保田與重郎の高校時代と大学時代.....	92

二	竹内好の漢学論にみられる保田與重郎との関連性	95
第五節	まとめ	98
第四章	模索—轉換期：中国における二人の交叉（1937.11-1940.3）	100
第一節	はじめに	100
第二節	竹内好：「政治」への自覚	102
一	政治への目覚めを促した北京体験	102
二	政治性を求める再出発	107
第三節	武田泰淳：「文化」の追究	111
一	民衆と文化的破滅を目撃した戦場体験	112
二	民衆と風土を求める再出発	116
第四節	二人の交叉：「政治」と「文化」の間	118
第五節	まとめ	123
第五章	中興—葛藤期：中国語問題の展開（1940.4-1943.3）	124
第一節	はじめに	124
第二節	漢学批判の復活	126
一	翻訳論における漢文訓読批判と中国認識	126
二	漢文教育と中国語教育との衝突	134
第三節	国語運動から「支那語学」へ	140
一	第一期における国語運動に対する関心	140
二	「支那語学」に関する言論の断層	145
三	「支那語学」から逸脱した「支那語」	149
第四節	まとめ	152
終章	153
第一節	中国文学研究会の終結	153
第二節	結論	158
資料	：『中国文学月報』・『中国文学』の内容一覧	163

参考文献	195
謝 辞	204

図表一覧

【表】

表 1 中国文学研究会について	3
表 2 本研究における中文研の活動期間の区分	5
表 3 『中国文学月報』と『中国文学』の書誌情報	33
表 4 『中国文学月報』・『中国文学』の内容概略	34
表 5 『中国文学月報』・『中国文学』の誌面の変遷	35
表 6 近代文学・文化に関する内容の掲載概況	41
表 7 中文研の開催した例会	42
表 8 中文研による翻訳書の出版	46
表 9 『中国文学月報』に転載された中国近代漫画と木刻画	57
表 10 『中国文学月報』における農民文学関連の文章	61
表 11 高校時代における竹内好と保田與重郎の活動	92
表 12 大学時代における竹内好と保田與重郎の活動	93
表 13 戦前における竹内好の中国体験	102
表 14 戦前における武田泰淳の中国体験	112
表 15 本誌における翻訳論に関する文章	127
表 16 本誌における中国語教育に関する文章	135
表 17 「支那語学」に関する論文・随筆・批評	146

【図】

図 1 近代日本における中国認識の形成の仕組みと中文研の活動の幅	11
図 2 『現代支那文学全集』広告（朝日新聞）	50
図 3 梅斐爾徳木刻士敏土之圖	53
図 4 『中国文学月報』に転載された漫画	58
図 5 『中国文学月報』に転載された木刻画	60
図 6 『中国文学』終刊号	153
図 7 岡崎俊夫「我們的『中国文学』」（『藝文雑誌』第 2 卷第 2 号、1944.2）	157

凡 例

1. 日本語表記

引用文については、底本に従って「歴史的仮名遣い」を使う。ただし、出典によって「現代仮名遣い」を用いる場合もある。なお、漢字は新字体に改める。

2. 参考文献

文献を引用した際に、その都度脚注に書誌を掲げるが、二回目以降は簡略して記載することがある。

序章

第一節 本研究の問題意識

今日、日本と中国のあいだに、経済的な相互依存が深化している一方、歴史認識や領土問題などの政治的な摩擦が絶えない。いわゆる「政冷経熱」の現状において、両国の文化的交流の低迷と相互理解の不足を認めざるを得ない。そして、このような状況は戦後に生じたのではなく、明治時代から継承されたものといえる。これは、近代日本における対中認識の変遷から確認できる。

明治前期の日本においては、中国に対する畏敬と軽蔑が混在し、重野安繹の「日清提携論」や福沢諭吉の「脱亜論」などの論説が見られた。しかし、日清戦争（1894）の勝利によって、中国を軽侮する風潮が俄然高まり、日本の対中認識は大きな転換期を迎えた。1898年東亜同文会を創立した近衛篤磨は、次のように述べている。

近時日本人は戦勝の余威によりて漸く傲慢の心を生じ、支那人を軽侮すること益々太甚しく、特に支那の各地に在る日本人は恰も欧州人の支那人に対する如き態度を以て支那人を遇し、以為らく、日本は東洋に於ける唯一の文明国なり、支那の先進国なりと。

1

このような近衛の言葉からは、日清戦争以降、近代日本人の対中認識が変貌した様子が読み取れる。その後、日露戦争（1904）、第一次世界大戦（1914）などを経て、満州事変（1931）の勃発により、日中両国はついに戦争に突き進むこととなった。これにより、戦中の日本における中国論は、さらに複雑な様相を呈した。中国に関する学術的な研究は前近代中国を中心とする一方、同時代の中国に対して、戦争需要を満たすための満鉄や興亜院などによる現地調査が盛んとなった。日中戦争（1937）後、蠟山政道、三木清らの提唱した「東亜協同体論」が見られるものの、のちに「大東亜共栄圏」構想への変質を余儀なくされる。このように、当時の日本知識人たちは、古代文明の大国としての中国、および戦場としての中国に目を付けた一方、同時代の中国文化の変容に対してほぼ無関心ともいえる。まさに安藤彦太郎氏の指摘したように、明治維新後に日本人の中国認識において、「現実世界への侮蔑と古典

¹ 近衛篤磨「同人種同盟、附支那問題研究の必要」（近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』〔別巻付属文書〕、鹿島研究所出版会、1969、62頁）。初出：『太陽』、博文館、1898年1月1日号。

世界への尊崇」²という二重構造が見られる。

このような歪みに満ちた中国認識は、第二次世界大戦から約 70 年、交通手段の発達やインターネットの普及により、誰もが容易に中国にアクセスできる現在においてなお存在すると言わざるを得ない。つまり、上述の中国認識の歪みの原因は、中国に関する情報量の問題ではなく、日本人がどのような視点から、どのような心境で、またどのような方法で中国を見ているのかということにあるのではないか。

これらの様相を明らかにするためには、戦後だけではなく、戦前の中国認識の形成まで追求する必要がある。特に 1931 年の満州事変後、日中戦争が全面的に展開することによって、日本では中国の言語、政治、経済、教育、習俗などに関する調査が盛んに行われた。戦後の対中認識はこの時期の継承ともいえるだろう。今日の日中間の相互理解を活性化するためにも、戦前日本における中国認識の形成を反芻することが必要とされているのである。

そもそも、1930 年代は日本近代史における重要な時代として盛んに研究されてきた。しかし、そこには一つの欠点が見られる。それは、文化的課題が戦争という政治的文脈に限定される傾向である。これも戦後から継承されている問題であり、例えば、吉見俊哉氏は日本で語られた 30 年代論³に関して以下のように述べた。

日本の近代史研究は、明治維新と昭和ファシズムという二つの政治的激動期をピークとして、政治史や経済史を中心に発達してきたわけで、三〇年代の思想史や文化史は、政治的・経済的な面からのファシズム研究に従属したかたちでようやく問題にされるにすぎなかったのである。そして、そのような文脈で三〇年代が語られる場合でも、議論はファシズム体制のなかでの抵抗と転向の軌跡を語ることに終始していた。⁴

先行研究の詳細は後述に譲るが、吉見氏の指摘したような傾向が、近代日本の「中国認識」研究にも存在していると考えられる。つまり、戦時下の政治戦略を基底とする「中国認識」が、「畏敬か軽蔑か」、「侵略か提携か」などの限定的な図式によって解釈される傾向が色濃く存在するのである。しかし、文化的視点からみると、日本知識人の目に映っていた異なる文化様態としての「中国」について、上述のような図式によって説明するのは明らかに不十分である。そもそも日本の「中国認識」を語るためには、歴史学は言うまでもなく、文学、芸術などの諸分野の横断が不可欠であり、本研究は、このような多面的視点によって、戦時下における中国認識の再検討を試みるものである。

さて、戦時下の中国認識といえば、無論諸種のメディアを通して形成された一般民衆にと

² 安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書、1988、52 頁）。

³ 30 年代論について、吉見俊哉氏はこれを「30 年代の思想と文化、知についてのアプローチ」と解釈し、さらに四つの流れと分けた。詳細は吉見俊哉「一九三〇年代論の系譜と地平」（吉見俊哉編『1930 年代のメディアと身体』、青弓社、2002）に参照されたい。

⁴ 吉見俊哉「一九三〇年代論の系譜と地平」、前掲書、14 頁。

っての「中国」も存在するが⁵、本研究では、情報発信者に注目したい。その主体は学者、作家、ジャーナリストなどの知識人である。要するに、本研究での「知識人」とは、戦争中に文化的視点から、同時代の中国を学問的な見地から研究し、知的活動を行った日本人を意味する。その中で代表的な一群が中国文学研究会なのである。

本研究で言う「中国認識」と類似する課題として、「中国像」、「中国観」に関するものが挙げられる。具体的にいうと、日本に形成された「中国像」、あるいは「中国観」はいかなるものであったかという問いが立てられる。これを解明するには、さらに中国がどのように記述され、いかに表現されるのかという表象論的な課題⁶が提起される。本研究にとって、無論、認識客体としての中国の様相を考察することが前提である。ただし、より重要なのは、認識主体としての日本の知識人たちが中国を通して何を見ているのか、また中国を見ることによって、彼らはどのように「日本」と「戦争」を理解しているのかであろう。これらの問題を意識しながら、中国文学研究会の対中認識の歴史的意義を明らかにし、また、同時代の中国言論においていかに位置づけできるかを考察してみたい。

第二節 研究対象

一 中国文学研究会の概要

本節は、本研究が着目する中国文学研究会（以下略称：「中文研」）の概況を紹介する。まず、中文研の活動時期、メンバー、機関誌などの基本情報については、表1のとおりである。

表1 中国文学研究会について

活動時間	●戦前：1934年3月〔成立〕～1943年3月〔解散〕 ●戦後：1946年3月〔復活〕～1958年秋頃〔休会〕
同人グループ	●1936年（同人会で内規決定の時）： 竹内好、岡崎俊夫、武田泰淳、松枝茂夫、増田渉、曹欽源、斉藤護一、 実藤恵秀、豊田穰、陣内宜男、土居治、千田九一、吉村永吉、岡本武彦、

⁵ 例えば、戦時下ではないが、日本人の他者理解を研究する一環として、馬場公彦氏は、戦後のメディアに現れた中国像を取り上げた。馬場公彦『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』（新曜社、2010）を参照されたい。

⁶ 例えば、表象論的な課題として、竹内実『日本人にとっての中国像』（春秋社、1966）、芦谷信和、上田博、木村一信編『作家のアジア体験：近代日本文学の陰画』（世界思想社、1992）、川西政明『わが幻の国』（講談社、1996）などが挙げられる。

	飯塚朗。 ●1940年（同人組織の解消決定の時）： 竹内好、岡崎俊夫、武田泰淳、松枝茂夫、増田渉、曹欽源、実藤恵秀、 豊田穰、陣内宜男、土居治、千田九一、吉村永吉、飯塚朗、飯村聯東、 猪俣庄八、小田嶽夫、小野忍、神谷正男、目加田誠、梅村良之。
機関誌	●『中国文学月報』：第1号（1935.3.5）～第59号（1940.2.1） ●『中国文学』：第60号（1940.4.1）～第92号（1943.3.1） ●〔復刊後〕『中国文学』：第93号（1946.3.1）～第105号（1948.5.1）

中文研は1934年3月、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫らを中心に結成された団体である。初期の中文研は同人会によって運営され、同人会のメンバーは年々変わっていた。そして、1940年に同人会は解消されたが、旧同人から幹事（交替制）を選び、機関誌の編集やほかの仕事を委嘱することとなった。表1に記したように、同人会に参加した人は数多くいるが、中文研の方向を左右する人物は限られている。前述した中心人物の三人以外に、増田渉と松枝茂夫も中文研の活動に多大な影響を与えたのである。

戦前における中文研の活動時期は1934年から1943年までの10年間であり、ちょうど満州事変（1931）に続いて、日中戦争が本格的に展開した時期と一致する。従来の伝統的な漢学を批判し、同時代の中国の文学、言語を学術的に研究しようとする点に特徴がある。主な活動として、機関誌の発行、研究会や講演会などの開催、同時代中国文学の翻訳などが挙げられる。戦後に一時的に復活したが、復刊された機関誌は13号しかない。その後、中文研の活動は定期的な研究会を開催している。1958年休会するまで、戦前のような活躍ぶりを見せることはなかった。

二 本研究における中文研の活動期間の区分

表1に記されているように、中文研の活動期間は戦前期と戦後期に分けられている。竹内好は、中文研の活動期間について以下のように語っている。

中国文学研究会の事務所というのは三回移っているんです。白金の時代、本郷に事務所を借りた時代と、目黒の時代。そのあと、雑誌の発行が生活社に移る、そして最後に、あれは昭和十八年だったかな、四三年ですね。解散しました。これが第二期で、そのあとブランクがあって、戦後にほかの人が復活したのが第三期ってわけです。だから私だけの関係でいえば、三四年に始めて、四三年の三月に、これははっきりした形で店を閉じたんです。⁷

⁷ 竹内好「わが回想」（竹内好『方法としてのアジア』、創樹社、1978、21頁-22頁）。初出：『第三文明』10、11月号（第三文明社、1975）。『竹内好全集』⑬（筑摩書房、1981）に収録。

竹内は事務所の移転によって、中文研の活動期間を三期に分けた。すなわち、第一期：白金時代と目黒時代（1934.3－1940.3）、第二期：生活社時代（1940.4－1943.3）、第三期：戦後復活時代（1946.3－1958）である。しかし、機関誌『中国文学月報』と『中国文学』の内容を見ると、誌上の内容と中文研の方向性が同人の移動によって大きく変貌を遂げたことが確認できる。なかでも設立者である竹内好の動向が著しく中文研の発展に影響を与えたと考えられる。ゆえに本研究は、1934年から1943年までの時期に注目し、竹内好の動向と出版状態の変化に従って、戦前期における中文研の活動期間を以下のように三期に分ける。

表2 本研究における中文研の活動期間の区分

期間	時間区分	機関誌	
第一期：草創—発展期	1934.3—1937.10	第1号—第32号	『中国文学月報』
第二期：模索—転換期	1937.11—1940.3	第33号—第59号	
第三期：中興—葛藤期	1940.4—1943.3	第60号—第92号	『中国文学』

各期間の特徴について述べてみよう。第一期の草創—発展期は、中文研の成立から竹内好の北京留学までの期間とする。1934年には団体を創立するために、同人たちが種々の準備作業を行った。そして、1935年によりやく機関誌が刊行されるようになり、誌上に中国近代文学の紹介や、漢学批判など多種多様な内容が見られる。また、中文研は中国近代文学講読会・中国語発音講習会などの種々の行事を開催し、活気溢れる様子を見せていた。この状態は1937年まで続き、同年10月には、竹内好だけではなく、武田泰淳も応召して中国に渡った。岡崎俊夫もまた、一年前の1936年に朝日新聞に入社し、名古屋に転居した。このように主要メンバーの3人が不在の状況となり、中文研は第二期の模索—転換期に入った。

この時期、機関誌の誌上に第一期のような中国近代文学に関する特集が見えなくなり、漢学批判に関するものも著しく減少した。例会・中国近代文学講読会・発音講習会などの行事も停滞状態に入った。誌上に掲載された文章はまとまりがなく、また実際の中国を目撃した竹内好と武田泰淳は、それぞれ中文研の方向性を反省しはじめた。そして2年後、二人が同時に帰国した後、機関誌が『中国文学』と改題され、一般雑誌と変貌した。そこから中文研は新たなステージに入り、画期的な進展を実現した。

第三期の中興—葛藤期は、機関誌改題後から中文研の解散までの時期とする。この時期においては、中国語教育と翻訳批評に関する文章が誌上に数多く掲載された。これは、第一期に行われた漢学批判の継承といえる。しかし、戦争の深刻化に従って、誌上に時局に乗るような論調が出現しはじめ、従来の中文研の姿勢と衝突するような傾向が見られるようにな

った。

本研究は、上記したような活動期間に従い、第一期について、中国近代文学の紹介と漢文批判を中心とし、第二期について、中国に赴いた竹内好と武田泰淳の方向性の転換に注目する。そして、第三期については、誌上に掲載された中国語教育に関する記事と翻訳批評を検討し、戦争と葛藤する中文研の輪郭を描き出す。

第三節 研究方法

一 先行研究

本研究は、戦時下の中国認識を軸とする知識人論である。ここでは、政治、文学、メディア、民間文化人という四つの視点から、日本知識人の中国認識に関する既存研究において、どのような「知識人」が取り上げられ、戦時下の中国認識がどのような構図で検討されたかについて明らかにする。

1 政治の視点

前述したように、1930年代～1940年代には、中国に関する議論が戦争という主題をめぐって展開されていた。そのため、近代日本の中国認識についての研究は、対中政策とつながりを持つ人物を重要視した。例えば、野村浩一氏は大隈重信、内村鑑三、北一輝、宮崎滔天、尾崎秀実、橘樸などを考察した。⁸野村氏は、中国と緊密な関係をもっていた政治的人物のありようを、個人の思想形成、およびそれぞれの実践的な行動を中心として解明したのである。

また、諸中国論を時代順に体系的に考察したのは、松本三之介氏である。松本氏は、前述した諸人物のほか、江戸時代の儒学者をはじめ、福沢諭吉、岡倉天心、吉野作造、三木清などの人物も取り上げ、「江戸時代の華夷思想と皇国思想との関係——明治前半の日清提携論——日清戦争後の中国保全論——辛亥革命後の対中方針・政策に関する論調——日中戦争中の東亜協同体論」という系列において議論を展開し、昭和期の日本における中国認識について、昭和研究会の人々の提唱した東亜協同体論に着目した。⁹松本氏は日中間に絶えず見られる摩擦や衝突が明治初期から形成された中国軽蔑によるものだと述べ、そして三木清や尾崎秀実らによって提唱された東亜協同体論がこうした中国認識の克服から出発した

⁸ 野村浩一『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』（研文出版、1981）。

⁹ 松本三之介『近代日本の中国認識——徳川期儒学から東亜協同体論まで』（以文社、2011）。

ものだと指摘した。

政治の視点による研究に共通しているのは、戦争に関する国家の政策的動きと関連しながら人物を取り上げることである。そして、これらの人物の言論が、主に対中政策の検討を中心とするため、彼らを通して得られた中国認識の形相は政治本位のものとなる。この種の研究は、帝国イデオロギーにおいて形成された中国像の解明に大きな貢献を果たしたものの、前にも触れたように、その論証は、必然的に対中認識を「連携——侵略」、「協力——抵抗」、「軽蔑——理解」という構図に限定する。つまり、政治的視点から考察された中国認識は、必然的に単純化され、重層的な中国像を発見しにくくなる。

2 文学の視点

明治時代以降、中国を訪れた文人には、漢学者の岡千仞、内藤湖南などがあるが、1920年代以後、芥川龍之介（1921）、谷崎潤一郎（1926）、佐藤春夫（1927）などの文学者たちが次々と中国を訪問した。このような訪中した文人たちの紀行文学を調査し、その中に反映された中国像を考察するものが、文学的な視点からみた「中国認識」といえる。例えば、竹内実氏の評論集¹⁰では、前述した明治漢学者の紀行文学が含まれている。竹内氏は、竹添井々の『棧雲峡雨日記』（1879）に記された清末の中国に対する好意的な評価、岡千仞の『観光紀游』（1892）に現れた中国批判と近代日本が中国文化圏から離脱する思想、内藤湖南の『燕山楚水』（1900）に読み取れた中国に対する日本の優越性を順に考察し、明治時代に書かれた中国に関する紀行文学には中国民衆に対する関心が消失していったと結論づけた。また、竹内氏は、昭和時代に書かれた小説を戦前（1926～1935）、戦中（1937～1945）、戦後（1945～1955）の三期を分けて、それぞれの時期に現れた中国像を「革命的中国像」、「空白的中国像」、「贖罪的中国像」と名付けた。¹¹

同様の成果として、川西政明氏の『わが幻の国』も挙げられる。氏は上海・紹興・揚州・南京・大連・哈爾濱・敦煌・北京の八つの地域を順に取り上げ、各地域で活躍していた中国人作家と、その地域を訪れた日本人作家の文学作品を並行して記述した。¹²本書は、数多くの作家と作品に網羅的に言及しているものの、随筆的な性格があるため、体系的な中国像が提示されていない。

そのほか、祖父江昭二氏の『近代日本文学への射程』¹³も挙げられる。本書は二部構成であり、第一部は「近代日本の文学と朝鮮・中国」をテーマとしている。なかには、①「わが無知について」、②「日本のプロレタリア文学と朝鮮・中国」、③「近代日本文学と中国」、④「近代日本の文学者と中国——芥川龍之介と谷崎潤一郎」、⑤「日中両国の文学者の『交

¹⁰ 竹内実『日本人にとっての中国像』（春秋社、1966）。

¹¹ 竹内実「昭和文学における中国像」、前掲書。

¹² 川西政明『わが幻の国』（講談社、1996）。

¹³ 祖父江昭二『近代日本文学への射程——その視角と基盤と』（未来社、1998）。

流』——郁達夫に焦点を当てたおぼえ書き」、⑥『『近代日本文学と中国』芻議』の6作が含まれている。祖父江氏は、日本のプロレタリア文学に表現された日中韓三国の民衆の連帯感を指摘し、そして戦時下の中国を描写した作家が数多く取り上げ、各作品に反映された作家の中国認識の形成を考察した。

これらの研究は、「地域設定——関連する文学作品——作品から見られる文学者たちの視点」という経路で論証されている。つまり、一人の作家とそれに対応する作品を中心に考察が行われており、作家・作品の違いによって、それぞれの中国像が個々に提示されているため、断片的な中国認識しか読み取れない。たとえ複数の作家を取り上げた場合にも、それぞれの中国像の関連性が見えない。「地域——文学作品——文学者の視点」という論考の経路によるものである限り、「断片的な中国像」という局限性は突破しにくいと考えられる。

3 メディアの視点および民間文化人の視点

前述したように、1930年代の総合雑誌には、中国に関する情報が溢れている。にもかかわらず、それらの誌面に現れた中国像という課題に関する研究が、管見の限りなされていない。関連するものとして、十重田祐一氏と根岸智代氏の研究が挙げられる程度である。

十重田氏は改造社の刊行物に反映されている上海に関する言説を考察した。十重田氏によると、改造社は創業頃から『改造』をはじめ、小説や紀行文学などの出版を通して、積極的に中国の状況を日本に紹介したが、1937年末以後、「誌面に中国ならびに上海をめぐる言説には、中国を戦争相手国とみなし、侵略を肯定する好戦的な論調の評論や座談会の発言が数多く見られるようになってくる」¹⁴という。

また、根岸氏は1930年代半ばの『中央公論』を対象とし、誌上に掲載された中国に関する文章を研究ノートの形で整理した。¹⁵根岸氏は1935年から1937年前期までのあいだに、誌上に中国を統一的な民族国家として見るのかについての議論がすでに存在していたことを確認した。

他方、中国認識に関連するものとして、戦争中に中国と緊密な関係を持っていた文化活動者たちに関する考察も無視できない。いわゆる「支那通」として活動していた人々、および日中文化交流事業に参加した民間人たちである。

このような課題は、近年提起されるようになってきた。例えば、太田尚樹氏は上海における内山書店に着目し、店主の内山完造をめぐる日中文化人たちの交流史を考察した。¹⁶また、勝山稔氏は従来「支那通」として認識されてきた井上紅梅の生涯を追い、彼の戦争中のさま

¹⁴ 十重田裕一「改造社のメディア戦略と上海——第二次世界大戦前日本の『中国』言説の一側面」(『アジア遊学』62、勉誠出版、2004、39頁)。

¹⁵ 根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇——『中央公論』誌を中心にして」(『現代中国研究』、中国現代史学会、2015)。

¹⁶ 太田尚樹『伝説の日中文化サロン：上海・内山書店』(平凡社、2008)。

さまざまな翻訳活動を綿密に考察することによって、井上紅梅の業績を再評価したのである。¹⁷ そのほか、井上桂子氏は鹿地亘に焦点を当て、その戦争中の反戦的思想の形成および中国現地での活動を歴史的に考察した。¹⁸ 現在、この種の研究は限られている人物にしか展開されておらず、さらに研究対象を開拓する余地がある。

また、前述した諸視点から出発した研究と異なり、子安宣邦氏の『日本人は中国をどう語ってきたか』（青土社、2012）は重層的な中国認識を発見した意味で、大きな進展を示した。子安氏は北一輝から溝口雄三まで、日本の戦前・戦中・戦後の思想家、ジャーナリスト、文学者など多様多様な分野で活動した論者を時系列に検討し、それぞれの著作に現れた中国論の内実を考究した。子安氏が多分野に形成された中国認識を包括的に考察したのは、従来の研究に見られなかった方法を提示したといえよう。

以上、各視点から行われた中国認識に関する研究を整理してみた。近代日本における知識人の中国認識という課題は、政治思想論、文学論、メディア論など様々なルートによってアプローチできるのである。しかし、近代日本の他者理解の多面性を明らかにするために、諸分野間の境界線を打ち破る必要があるのではないかと考えられる。

二 なぜ中国文学研究会を検討するのか

このように、各知識人の目には、それぞれ異なる中国像が映っていたが、各分野に描かれた中国認識が「蛸壺化」していることも否定できない。他国認識を考える際になにより重要なのは、政治、文学、メディア、民間文化人等々のあいだに存在している関連性である。例えば、政治や時局の動きが作り出した言論環境は文学の内容を左右する。そして、メディアは小説や評論などの担い手であり、メディアの戦略と文学とのあいだには緊密な関係がある。むろん、民間文化人の活動も、政治家、学者、作家、ジャーナリストなど種々の人とのつながりによって展開される。つまり、異なる分野において生まれた中国認識はそれぞれ孤立しているものではない。その分野間の境界線を打破し、互いの関連性を見出し、より立体的な中国像を発見することで、既存研究の局限性を打開できると考えられる。

ここから中文研に注目する必要性が生まれてくる。中文研は新たな中国研究を提唱しようとするという点で、その学術的一面が窺える。一方、彼らは中国文学に注目すると同時に、自ら文学創作も行った。つまり文学的な気質も備えている。彼らは雑誌も発行し、メディア的活動にも積極的に参加した。この過程において、田中慶太郎などのような民間文化人との交際も見られる。無論、彼らの言論における時局に対する葛藤も読み取れる。つまり、中文

¹⁷ 勝山稔「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」（勝山稔編『小説・芸能から見た海域交流』、汲古書院、2010）。

¹⁸ 井上桂子『中国で反戦平和活動をした日本人——鹿地亘の思想と生涯』（八千代出版、2012）。

研の活動は、いくつかの分野に跨っているため、さまざまなルートを通して中国にアプローチすることが可能となった。そのため、彼らに注目することによって、異なる分野に横断する中国の形相が発見できる。本研究の学術的な独創性もここにあるといえよう。

また、中文研は戦争中に解散されたものの、そのメンバーたちは、戦後において多彩な活動を行い、さまざまな分野において活躍していた。彼らの行動は戦後中国学の発展に大きく関連しているものの、全面的な検証は管見の限り存在しない。関連する研究成果は、数少ないのだが、主に二つの方向に沿って展開している。

一つは「中文研の同人」、つまり、その中心的メンバーの活動に視点を置いたものである。大原祐治氏は、武田泰淳が竹内好の思考進路を補正する役割を担ったと論じた¹⁹うえで、両者の盟友関係が、「雑誌「中国文学」誌面における二人の言説配置においてこそ生成していった」²⁰と指摘し、中文研の中に見られる竹内好と武田泰淳の関連性を論じた。また、永井健一氏は、『中国文学月報』と『燕京文学』を中心に、中文研の同人である飯塚朗の中国文学認識を考察した。²¹さらに、渡邊一民氏は、武田泰淳と竹内好に焦点を当て、彼らの1930年代から1970年代までのあいだに行われた活動を比較考察した。二人のあいだに見える「竹内が短兵急に新しい問題提起をおこなう一方、泰淳がつねに一步さがって多様な角度から検討する複眼的視座を守りぬいた」²²という関係を明らかにしている。

もう一つは、「中文研の果たした役割」の解明を目指すものである。秋吉収氏は、誌面に見られる中文研の中国語重視が、戦争への「精一杯の抵抗」²³であると指摘し、米谷匡史氏は、戦時下の中文研と「帝国のメディア」とのあいだに生じたジレンマを考察した。²⁴

ただし、ここで注意すべきなのは、中文研が、中国語問題に限らず、古典文学や現地報告など、各々の分野で中国研究を試みた点である。異なる分野において形成されていた中国認識が、最終的にどのような形になったのかは、中文研が果たした役割を検討する際に無視できない問題となる。

¹⁹ 大原祐治「北京の輩と兵隊——「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳」（『学習院大学人文科学論集』11、学習院大学、2002）。

²⁰ 大原祐治「羅漢と仏像——雑誌「中国文学」における竹内好・武田泰淳」（『昭和文学研究』45、昭和文学会、2002、77頁）。

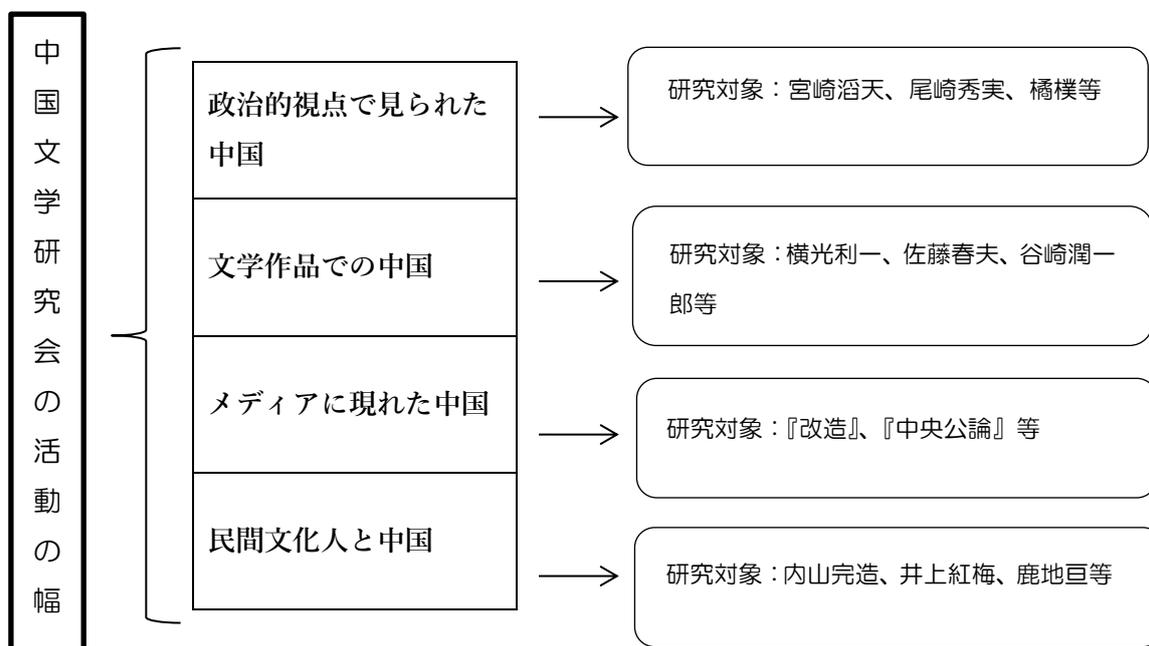
²¹ 永井健一「戦時下の飯塚朗——「燕京文学」「中国文学月報」を中心に」（杉野要吉編、『交争する中国文学と日本文学——淪陥下北京1937-1945』、三元社、2000）。

²² 渡邊一民『武田泰淳と竹内好——近代日本にとっての中国』（みすず書房、2010、318頁）。

²³ 秋吉収『「中国文学（月報）」と中国語：竹内好らの活動を軸として』（『中国文学論集』35、九州大学中国文学会、2006、69頁）。また、中国文学研究会の「抵抗」について：渡邊一民「戦時下一〇年の中国と日本——中国文学研究会をめぐって（上、下）」（『思想』第1010号、第1011号、岩波書店、2008）にも論じられた。

²⁴ 米谷匡史「日中戦争期の文化抗争——「帝国」のメディアと文化工作のネットワーク」（山口俊雄編、『日本近代文学と戦争——「十五年戦争」期の文学を通じて』、三弥井書店、2012）。

図1 近代日本における中国認識の形成の仕組みと中文研の活動の幅



三 研究方法

本研究で使用する資料は、中文研の機関誌『中国文学月報』と雑誌『中国文学』を中心とする。本誌は長期間刊行され続け、多くの中国に関する学術的・文化的情報を戦時中の日本に紹介したものの、その全体像はいまだ明らかになっていない。

本誌の全体像を把握するために、まずは、掲載された内容をデータベース化²⁵する。これを基礎とし、内容によってそれぞれの文章を A.近代中国文学・文化、B.中国文学の翻訳、C.日本における中国研究、D.中国の古典文学と伝統文化、E.中国語問題、F.現地体験、G.文学創作、H.日中関係と日中交流事情、I.諸国と中国との接点、J.中文研関連、K.文化消息・会報・コラムと分類する。さらに、この分類に従い、掲載文章の数量的分析²⁶を行い、時間的推移に伴う誌面の変化を捉える。

この作業を通して、時期にしたがって呈示された問題点が探り出せる。さらに、上述の作業によって抽出された問題点が、誌上においてどのように論じられたかを検討する。つまりテキストの解釈作業を行う。中文研にはある程度に類似する主張が散見されるものの、実際には執筆者のあいだでそれぞれ異なる論調が存在するため、それらに統一的な姿勢を見出すことは困難である。例えば、当時の中国研究の主流であった漢学に対して、中文研は共通

²⁵ 資料『『中国文学月報』・『中国文学』の内容一覧』を参照。

²⁶ 一つの文章に多数の主題が含まれる場合もまれに見られるため、厳密な分類を行うのは難しい。そのため、分類と数量的分析にはこのような文章を対象外とした。

的に批判的な姿勢を取ったが、メンバー間の相互批判も確認できる。したがって、本研究は数量的分析を通して、誌上の論調の流れを把握しつつ、内容的分析を通して、テキストの中に含まれている異なる論調の関連性を重視する。

そして、異なる論調の関連性を明白にするために、本研究では比較考察も行う。具体的にいうと、外部比較と内部比較という二つの方向がある。外部比較は、中文研の言論と他者との比較を意味し、主に中文研の同時代の中国文学との関係、漢学批判の形成などを論じる時に行われる。例えば、第三章では竹内好の「漢学論」と保田與重郎の文学批評を取り上げ、両者の言論を比較しながら、竹内の漢学批判の内実を探る。また、内部比較は中文研の同人間の比較を意味し、主にメンバーの現地体験と中文研の中国語問題を論じる時に行われる。例えば、竹内好と武田泰淳は同じ時期に異なる身分で中国を訪れたため、第四章では両者の体験と思想的な転換を比較することによって、彼らの現地体験が帰国後の共同活動にどのような影響を与えたかを察知できる。そのほか、第五章では創刊頃と終刊頃の中国語に関する文章を比較し、中文研の時局に対する態度の変化を把握する。

無論、雑誌以外に、執筆者たちの経歴を示す日記、書簡、および同時代の他の文学活動の記録も併せて利用する。このように、資料の多様性、および分析視点の多面性によって、中文研の中国認識を構造的に把握することが期待できる。

第四節 本研究の構成

最後に、本研究の構成を簡潔に説明したい。本研究は序章、終章を除き、全五章で構成されている。

第一章では、まず1930年代前後における中国認識を形成した言論環境の様相を探り、かかる環境において発足した中文研の方向性を明らかにする。そして、発足以前の主要メンバーの活動、中文研創立の経緯、およびその機関誌の概況を把握する。特に、機関誌『中国文学月報』（『中国文学』）の全体像を明らかにするために、内容上の統計を行うことによって、各時期の誌面上の特徴を考察する。

第二章では、第一期の中文研に看取される同時代中国文学に対する関心を考察する。まず、機関誌に掲載された関連する文章の概況を把握し、中文研の組織した諸活動の実像を明らかにする。また、中文研成立当初の中心メンバー、例えば、竹内好・武田泰淳・岡崎俊夫は、多かれ少なかれ、左翼系の文学活動と関連し、中文研を創設した後も、中国の左翼系作家と接触があった。その経緯と事実を明らかにしたい。そして、かかる経験が雑誌にどのように反映したのか、誌上に掲載された内容と関係者の言論を分析することによって明確化した

い。

第三章では、主に第一期の機関誌に現れている漢学に関する言論を考察する。従来、中文研は戦時下唯一の近代中国文学を研究対象とする団体として知られているが、彼らはもっぱら中国の新文学に没頭するのではなく、新たな中国文学研究法を模索するため、漢学を批判的な視点で議論した。本章では、誌上での言論を通して、竹内好を中心とする中文研の漢学に対する見解を示す一方、同時代の文壇で活動していた保田與重郎と比較することによって、竹内好の漢学論の形成を考察したい。

第四章では、第二期における竹内好と武田泰淳の現地報告を中心的に取り上げる。1937年10月、竹内好は、外務省文化事業部からの補助金で北京に留学すると同時に、武田泰淳は兵士として中国へ行くこととなった。第33号(1937.12.1)から、中国の現状を報告する文章がしばしば誌上に見られるようになる。彼らは、中国文化に深く関心を寄せる一方、戦火に焼かれた中国現地を目撃し、戦争と文化とのあいだで葛藤する。誌上に掲載された報告文から、彼らの心境を探り出す一方、二人の中国認識の転換、および中国体験によって生まれた二人の連帯性を明らかにし、かかる体験が彼らの帰国後の行動にどのような影響を与えたのかを考察する。

第五章は、主に第三期の機関誌における中国語関連の文章を分析とする。本誌には、中国語の変革、および中国語の日本での受容に関する内容が多数見られる。具体的にいうと、中国国内で行なわれた国語運動をはじめ、日本における「支那語学」の現状、「支那語」教育、そして翻訳法から見られた中国語理解など、中国語は、言語学だけではなく、様々な視点から本誌において検討されていた。そのため、これらの文章を分析することで、日本における中国語の受容の動態を考察する一方、太平洋戦争勃発後の中文研の変化を明らかにしたい。

第一章 近代日本における中国認識の形成

中文研の発足した1930年代は、近代日中関係にとって重要な時代である。中文研の成立する背景を知るために、この時期の日本社会に形成された中国論を把握する必要がある。本章において、まずは政治界・現地調査に関連する諸機関・学术界・メディア界・文学界の五つの面から、中文研の置かれていた言論環境を明確にしたうえで、当時の言論環境が、中文研の人々にいかに認識され、また中文研の活動の方向にどのような影響を与えたのかを検討する。最後に、中文研が成立した経緯、および機関誌の創刊と変遷を考察する。

第一節 戦時下の中国認識に関する言論構成

言論の形成は様々な要素によって影響されるが、なかでも、政治的要素は無視できない。1930年代～1940年代では、中国に関する議論が戦争という文脈において展開していたため、この時代の中国認識といえば、まずは政治的指導者の言論や現地調査に関連する諸機関の活動を中心として概観しておきたい。その上で、当時の中国研究の主流的存在であった「漢学」と「支那学」を切り口として、学术界の情勢を明白にすると同時に、東亜同文会のような教育機関にも言及する。また、メディア界については、新聞や総合雑誌などに報道された中国を取り上げ、文学界については、戦時中に書かれた中国を題材とする小説を対象とする。

一 政治界

1930年代以後の政治界に現れた中国に関する言論を、政治的指導者の発言を通して見てみたい。この時期における内閣総理大臣の中で、特に中国に関心を寄せたのは、犬養毅(1855-1932)、広田弘毅(1878-1948)、近衛文麿(1891-1945)などが挙げられる。以下、彼らの中国に関する発言を順次見てみよう。

犬養毅²⁷は、1931年に首相に就任した後、満蒙問題に熱心に取り組んでいる。満州事変

²⁷ 犬養内閣は1931年から1932年までの期間である。在任期間が短いものの、犬養は就任以前から長い間に中国と緊密な関係を持ち、孫文、康有為と交友関係を築き、辛亥革命にも協力していた。1910年代に発表された文章をみれば、彼は経済的視点から「支那保全」論を主張していることが分かる。例えば：「支那保全と東亜」(『朝鮮公論』、1巻9号、1913)、「禍根を将来に残す勿れ」(『洪水以後』8、1916)。また、犬養毅の中国認識に関する先行研究について、児野道子「孫文を繞る日本人——犬養毅の対中国認識」(平野健一郎編『近代日本とアジア：

後、積極的に日中関係の改善を求める意志を示した²⁸が、その主眼は国際関係の根本的な改善とはいえ、あくまでも経済的利益の保障を目的とするものである。この時期に発表された「内憂外患の対策」において、彼は日中関係に関して次のように述べている。

もう一つ私の不思議でならないのは、彼（筆者注：中国を指す）の軍国主義侵略主義である。我国をして軍国主義、侵略主義だと云つてゐる。これは在る方面の宣伝も大分あるが私は決して左様な主義は持たない。（略）然るに満州事変、上海事変、これは一体どうして起つたと云へばこれまで非常に忍んで居つたのが萬己むを得ずして剣を取らなければならぬと云ふ場合になつたからだ。²⁹

これは、1932年5月、中央放送局の依頼によって、犬養がラジオを通して行った講演である。³⁰そこで彼は、中国を軍国・侵略主義とし、満州事変などがあくまでも日本が耐え切れなかった結果であると主張した。つまり、戦争責任を中国に負わせる言論を社会に拡げる犬養の姿がここに確認できる。彼の言論には、経済的利益の保障を前提とする日中共存を強調しつつ、戦争責任の面での曖昧な態度も読み取れる。

また、斎藤実内閣、岡田啓介内閣の外相を担当し、1936年から首相となった広田弘毅は、中国に深く関連する人物である。広田は、1933年9月に斎藤内閣の外相に就任した際に、満州について以下のように述べた。

我が外交関係のうちで最大重要問題は何といつても満洲問題でこの問題を中心として総ての対外政策を樹立することが必要である、即ち満洲国の完全なる建設を実現することが日本としては東洋平和の維持方法として最善の方法であると確信するのでこの実現のために努力する方針である又満洲国問題を中心とする帝国外交の将来に何等悲観の必要はない。³¹

さらに、翌年9月に発表された「日本外交の基礎」において、「対支、対露、対米、対英

文化の交流と摩擦』、東京大学出版社、1984）を参照されたい。

²⁸ 1932年5月の上原勇作への書簡において、犬養はこのように述べた。

「満蒙事変の終局も近づきたれと現在の趨勢を以て独立国家の形式に進めば必ず九国条約の正面衝突を喚起すべく故に形式は政権の分立たるに止め事実の上で我目的を達したくもっぱら苦心致し居候小生の目的としては成るべく早く此事変を終熄し此機会を以て支那との関係を改善したき理想に候」（鷲尾義直編『犬養木堂伝』中巻、原書房、1968、944頁）。

²⁹ 犬養毅「内憂外患の対策」（『朝鮮及満州』294号、朝鮮雑誌社、1932）

³⁰ 鷲尾義直編、前掲書、952頁。

³¹ 「外交難局に非ず 躍進的国家に非常時は当然 広田外相抱負を語る」（『朝日新聞』、東京、朝刊、1933.9.15）

政策の如きも、此の満州問題を離れては考へられない」³²と述べているように、広田は満州問題を日本外交の重大な要務として重要視した。広田の言論には、日本の国力の充実も対外関係も、満州の一点に係っているとする考えが読み取れる。後に広田が中国との「善隣互助」を強調し、「協和外交」を主張したのも、すべて満州国の存在を前提としている。

そして、近衛文麿は、昭和期に三回にわたって首相を務めた。³³その政治活動は、常に中国を視野に入れたものであった。それぞれの時期における対中認識を見てみると、彼の対中侵略の姿勢が徐々に明白となる。ここでは第一次内閣を中心に簡単に述べよう。

1937年7月、組閣の一か月後に盧溝橋事変が勃発し、矢部貞治によると、近衛は7月23日の特別議会において、「事変の不拡大とか局地解決とかいうことは、(略)誠心誠意そう考えている」³⁴と述べ、中国との提携を強調した。しかし、その後戦局が拡大の一途を辿り、9月3日に再び召集された臨時議会において、近衛は「中国が反省せず、あくまで執拗な抵抗を続けるなら、日本としては長期戦も覚悟しなければならぬ」³⁵と述べた。さらに、1938年12月、近衛は「日支国交調整方針に関する声明」(「近衛声明」)を発表した。その中で、「終始一貫抗日国民政府の徹底的武力掃蕩を期すると共に、支那に於ける同憂具眼の士と相携えて、東亜新秩序の建設に向って邁進せんとする」³⁶と述べた。また「善隣友好、共同防共、経済提携」という「近衛三原則」が、彼の汪兆銘政権を擁護する姿勢を明確に示した。

その後の第二次近衛内閣は「万民輔翼」、「指導者原理」を中心とした体制構築を成し遂げ、三国同盟の成立を促した。要するに、盧溝橋事変後、近衛文麿を中心とする日本政界において、中国に対する侵略的な姿勢が深化する一方であったとすることができる。

戦争中に中国に関与した多くの政治家の中から、上述の三人をピックアップした。それぞれの人物の意見と主張は、当時の中国に関する言論に大きく影響を与えたといえる。昭和初期において、犬養毅のような「支那保全論」が見られるものの、それは日本の経済的利益を保障するためにすぎなかった。満州事変後、満州国の重要性がつねに強調され、第二次近衛内閣を経て、戦争の拡大を促進する政治的な言論環境が作り上げつつあったといえる。

二 現地調査に関連する諸機関の活動

前述した政治的情勢によって、中国に関連する政治機関が設けられるようになった。例えば、1938年に設立された興亜院が挙げられる。また、政治機関ではないが、政治的要素が帯びている民間機関も1930年代以前から相次いで創設されていた。以下は東亜同文会、満

³² 広田弘毅「日本外交の基礎」(『中央公論』、第49巻第1号、1934)。

³³ 1937年6月から1939年1月まで第一次内閣、1940年7月から1941年7月まで第二次内閣、1941年7月から同年10月までは第三次内閣を組織した。

³⁴ 矢部貞治『近衛文麿』(読売新聞社、1976、274頁—275頁)。

³⁵ 同前、284頁。

³⁶ 同前、376頁。

鉄、および興亜院を中心に、これらの機関の活動、および日本国内に提供された中国情報を整理してみたい。

1 東亜同文会

東亜同文会は 1898 年に「支那保全」の綱領³⁷によって設立された。初代会長は近衛篤磨 (1863-1904) である。

東亜同文会は政党の外に立つことによって、時局の変動にかかわらず長期的な活動が続けられたという。³⁸しかし、歴代会長などをみれば、政治に係わる人物が多くいることが分かる。したがって、東亜同文会がまったく政治と無縁であったというのは必ずしも適切ではない。

設立綱領に従い、東亜同文会は教育事業を中心とし、東京同文書院 (1899-1922)、東亜同文書院 (1901-1946) などの学校を開設した。また、政治・経済・地理などの調査旅行を実行し、日本の中国研究の発展に大きな影響を与えたのである。³⁹このような現地調査の実施にともない、調査研究の成果が多く刊行物に発表された。例えば、同文会の機関誌として『東亜時論』(1898.12-1899.12)、『東亜同文会報告』(1899.12-1910.6)、『東亜同文会支那調査報告書』(1910.7-1911.12)、『支那』(1912.1-1945.1) が継続的に発行され、中国・朝鮮に関する時事解説や現地の文化的事情の紹介など、多くの情報を提供した。また、機関誌以外に、中国関係の図書を編纂、出版した。⁴⁰このような現地調査の実施、および新聞・雑誌などの発行は、戦争の需要を満たす一面を否定できないが、中国に関連する知識の普及に力を注いだのである。

このような様々な行動を見せた東亜同文会は、戦時下の日本において中国事情の普及を促進し、日本人の中国に対する認識を啓蒙したといえる。例えば 1939 年上期の「東亜同文会事業報告」に「東京に於ては雑誌『支那』及び『東亜週報』を刊行して支那に関する知識を普及する外、支那人に対する『日本語の教へ方』及支那社会経済の研究の刊行を行ひ、又夏期に講習会を大阪及東京に開催して中小学教育界方面に対し、大に支那知識と時世に対する認識の涵養に資する」⁴¹と記されているように、世間における中国への関心の高まりを刺激しようとする東亜同文会の姿勢が窺える。

³⁷ 東亜同文化の綱領は「一、支那を保全す。一、支那および朝鮮の改善を助成す。一、支那および朝鮮の時事を討究し実行を期す。一、国論を喚起す」である。出典：東亜文化研究所編『東亜同文会史』(霞山会、1988、33 頁)

³⁸ 東亜文化研究所編、前掲書、33 頁。

³⁹ 東亜同文書院の中国調査について、藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』(大明堂、1999) が挙げられる。

⁴⁰ 機関誌と刊行物の詳細については東亜文化研究所編『東亜同文会機関誌・主要刊行物総目次』(霞山会、1985) を参照。

⁴¹ 霞山会編『東亜同文会史論考』(霞山会、1998、289 頁)。

2 満鉄

教育・出版事業を中心とする東亜同文会と異なり、1906年に設立された南満州鉄道株式会社（通称：満鉄）⁴²は鉄道と附属事業の経営を中心とする半官半民の会社であり、戦時中の中国に深く関係している。小林英夫氏によると、初代総裁の後藤新平（1857-1929）は特に調査事業を重要視し、満鉄本社を構成した五つの部門において、調査部は中心部局であったという。⁴³また、満鉄の傘下で満鮮歴史地理調査部（1908）、東亜経済調査局（1908）、地質研究所（1910）など多くの調査機関が活動していた。これも「創立時の後藤の意向が強く反映された結果である」⁴⁴とされている。

これらの調査機関は、戦争中において様々な調査活動を行い、その成果を雑誌や報告書などの形で公開している。例えば、東亜経済調査局は1928年5月に『東亜』（1928-1945）を創刊し、その「創刊の辞」には、「かくして『東亜』の期する処は、正確なる事実の報道と之に基ける同人の研究とを發表する事によつて、支那及満州問題に対する指針たらんとするにある」と記されている。『東亜』の目次を見ると、中国の政治・経済・社会的事情が誌面に溢れていることが確認できる。⁴⁵また、1939年に行われた「支那抗戦力調査」によって、10冊の調査報告が出版され、戦時下の中国の内政や、交通、貿易、金融、農業など、多面的に中国の抗戦の相貌が反映されていた。

このような大規模の調査活動を行うには、知識人たちの力が欠かせないため、満鉄調査部の周辺に多くの学者、帝大卒業者などが集まり、「知的集団」が形成されていった。⁴⁶しかし、小林氏は「この『知的集団』は、あくまでも日本に視線を向けた集団だった」⁴⁷とし、中国人との交流を深化するために活動したわけではないと述べている。つまり、これらの知識人は科学的な認識を持ち、客観的な立場から中国の実態を日本に伝えようとするが、その根本的な目的は戦争の需要によるものだと言わざるをえない。ただし、その広汎な調査活動と膨大な研究成果が中国研究の基礎を築いたことも否定できない。

3 興亜院

興亜院は、1938年12月から1942年11月まで政府官庁として存在し、その活動は主に

⁴² 満鉄の歴史について、『満洲と満鉄』（南満州鉄道株式会社、昭和13年版）、満鉄会『満鉄四〇年史』（吉川弘文館、2007）などを参照されたい。

⁴³ 小林英夫『近代日本と満鉄』（吉川弘文館、2000、14頁）。また、満鉄調査機関の構成と変遷について、原覚天『満鉄調査部とアジア』（世界書院、1986、25頁—42頁）にも詳しく書かれている。

⁴⁴ 小林英夫『近代日本と満鉄』、前掲書、14頁。

⁴⁵ 『東亜』の目次について、近代中国研究センター編『中国関係日本文雑誌論説記事目録2』（創文社、1965）を参考した。

⁴⁶ 小林英夫『満鉄——「知的集団」の誕生と死』（吉川弘文館、1996）。

⁴⁷ 同前、216頁。

調査活動を中心とした。ほかの調査機関に比べると、興亜院が第一に「純然たる国家機関であった」こと、第二に「日中戦争の開始以降、中国占領地行政を推進するために設置された侵略戦争遂行のための機構であった」こと、第三に「短時間しか存在しなかったにもかかわらず、興亜院は膨大な人員を動員し多方面にわたる活動を展開した」こと、という三つの特徴を備えている。⁴⁸興亜院は北京・張家口・上海・厦門・青島に連絡部を設置し、その調査地域は、華北から華南までにわたった。また、調査内容は工業・農業をはじめ、国防資源や宗教なども含まれている。これらの調査により、大量な調査報告書が刊行された。⁴⁹ただし、興亜院の調査成果に対して、満鉄が高く関心を示したものの、民間ではあまり反応がなかったという。⁵⁰

三 学術界

1930年代の大学において行なわれていたアカデミズム的な中国研究は、漢学と支那学を中心に展開されていた。漢学と支那学の状況を説明するために、まず明治以後の学術研究の制度的変遷について簡単に触れなければならない。

1872年の学制頒布以後、東京大学が開設され(1877)、その中に文学部を設け、さらに文学部の下に第一史学哲学及び政治学科、第二和漢文学科を設立した。この時期において、漢学は独立した学問ではなく、国学とともに古典教養を身につける役割が重要視されたのである。そして、1886年の帝国大学の成立によって、文科大学⁵¹の下に哲学、和文学、漢文学、博言学の四学科が設立された。さらに、1889年に漢文学科を漢学科と改め、漢学は初めて一学科として独立したのである。⁵²

そして、明治以後の漢学研究は、従来とは異なる一面を備えていた。それは自由民権運動を牽制する作用が期待されたことである。この点については牧野謙次郎の『日本漢学史』において下記のように述べられている。

斯くして自由民権は、天下の関心を奪つた傾がある。而してその論者中には随分過激な論を吐き、稍々もすれば国体の基礎に影響を及ぼさんとするやうな恐れがあつた。(略)
是に至つて文部省は之を匡正するには今迄の西洋式の智的、功利的許りの教育ではいかぬ、東洋式の道徳的教育をも施さねばならぬ事を痛感し、やがてその方針を漸々と転

⁴⁸ 本庄比佐子、内山雅生、久保亨編『興亜院と戦時中国調査』(岩波書店、2002、5頁)。

⁴⁹ 「興亜院調査報告所在目録」は前掲書『興亜院と戦時中国調査』に収録されている。

⁵⁰ 松重充浩「興亜院の設立と在『満州』日本人社会」、前掲書『興亜院と戦時中国調査』、56頁。

⁵¹ 帝国大学は大学院および分科大学によって構成されている。また分科大学は、法科大学、医科大学、工科大学、文科大学、理科大学と分けられていた。

⁵² 斯文会『斯文六十年史』(斯文会、1929)、第17章を参照。

向して来たのである。⁵³

このような事情によって、前述した和漢文学科、漢文科の設立があったのである。つまり、漢学は国家体制を維持するための学問という性質を備えるようになったのである。また、戸川芳郎氏は、漢学に現れたこのような傾向の欠点について次のように指摘した。

漢学、支那哲学の名称に、ややもすれば体制教学的権威主義のにおいをいまなお感じるとすれば、それは天皇制国家権力に癒着しそれを精神的に支えた儒教イデオロギーを、科学的な批判の前に据えきれなかった弱み、摂受された洋学方法論の限界、などからくる不信の反映とみななければならない。⁵⁴

しかし、東京帝国大学を中心に展開された漢学が、すべて空虚なものであったわけではない。例えば、服部宇之吉（1867-1939）は1909年に東京帝国大学に復帰したあと、中国哲学に関して数多くの講義を担当したと同時に、『東洋倫理綱要』（京文社、1916）、『儒教と現代思潮』（明治出版社、1918）、『支那の国民性と思想』（京文社、1926）などの著作を出版した。また、白鳥庫吉（1865-1942）は西域史、中国の神話伝説に関して種々の研究成果を発表し、東洋史学の開拓に功績を残した。⁵⁵

一方、支那学は京都帝国大学を中心に形成されていく。その開設は1906年であり、「当初からの気風はことに唯一の官学であった東大文科への対抗意識と独自体制をつくり出そうとする意図」⁵⁶にあると言われている。そのため、講座の設立から教官の選定まで東大と異なる形を取っていた。例えば、『京都大学文学部五十年史』によると、「支那哲学、東洋史、支那文学は東大と異なつてそれぞれ別の講座として存在し」⁵⁷、また教官の選定も「野に遺賢を求むる」⁵⁸ことによって、帝国大学卒などの条件に拘泥せず、新聞界から内藤湖南（1866-1934）を東洋史に招聘した。

このように、支那学は狩野直喜（1868-1947）、内藤湖南を中心に形成されつつあり、東大の伝統的な漢学と異なる一面を示した。その研究法の特徴といえば、狩野直喜の門下である小島祐馬（1881-1966）はこのように語った。

此等の先生（筆者注：狩野直喜、内藤湖南、桑原隲藏）の一致した意見として、支那の学問というものは、各部門が相互に関連をもっているから、他と独立して一局部一時期

⁵³ 牧野謙次郎『日本漢学史』（世界堂書店、1938、271頁—272頁）。

⁵⁴ 戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点」（『理想』397、1966. 6、14頁）。

⁵⁵ 当時の諸学者の研究活動について、『東洋学の系譜』（大修館書店、1992）を参照。

⁵⁶ 戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点」、16頁。

⁵⁷ 京都大学文学部編『京都大学文学部五十年史』（京都大学文学部、1956、9頁）。

⁵⁸ 同前、9頁。

のことを研究するわけにはゆかない。されば一局部一時期のことを研究するにしても、先ず一応支那の学問全体に通じた上で然る後やるべきであるというのであつた。これがその後京都大学でいう支那学の意味であつて、単に支那に関する研究ならば何でもそれは支那学であるとするのとは少し趣が違ふ。⁵⁹

したがって、儒学を中心とする漢学に比べ、支那学の研究者は古典文献を基礎とする一方、劇曲・白話小説・天文学・歴史地理研究などを研究対象に入れた。例えば、狩野直喜は戯曲や『紅樓夢』などの戯曲と白話小説に関する論文を発表し、小川琢治（1870-1941）は『山海経』、『禹貢』などの文献によって中国の歴史地理研究を行った。⁶⁰

そして、もう一つの特色は現地調査と新資料の利用を積極的に行ったのである。1910年、狩野直喜をはじめ、小川琢治、内藤湖南、富岡謙藏（1873-1918）、濱田耕作（1881-1938）の五人による調査団が北京に出張し、敦煌寫本の調査を行った。北京滞在中、彼らは羅振玉（1866-1940）などの中国人学者と知り合い、のちに羅振玉と王国維（1877-1927）が日本に亡命し、京都にいる支那学の学者たちと学術的な交流を行った。このような現地調査と同時代の中国学者との人的交流は支那学の発展を大きく刺激し、日本における敦煌学の発達の一翼を担った。⁶¹しかし、支那学は「王道」・「儒教」を中心とする漢学と異なる面で中国研究を展開したものの、依然として古代中国を中心とし、同時代の中国にはあまり関心を向けてなかった。

四 新聞・総合雑誌などのメディア界

一般民衆にとって、中国に対する直観的な認識は新聞、総合雑誌、ラジオなどのメディアを通して形成されていく。ここで、新聞と総合雑誌を中心に、1930年代の言論空間において現れた中国論を簡潔に整理してみる。

「満州事変」の後、新聞などのメディアが排外熱を引き起こしたが、軍国主義化・ファシズム化に対する批判的姿勢が失われてしまったとは言いきれない。⁶²ただし、日中戦争後と

⁵⁹ 小島祐馬「開設当時の支那学の教授たち」（『京都大学文学部五十年史』、436頁）。

⁶⁰ 狩野直喜は「水滸伝と支那戯曲」（『芸文』第一年五月、1910）などの論文を発表し、これらの成果は『支那学文叢』（弘文堂、1927）に収録されている。小川琢治は「支那上古の地誌として禹貢と山海経の価値」（『芸文』第三年二月、1912）などが挙げられる。また、京都帝国大学支那学に関連する学者や研究成果などについて、倉石武四郎『本邦における支那学の発達』（汲古書院、2007）に詳しく書かれている。

⁶¹ 支那学者による中国での現地調査について、高田時雄「狩野直喜」、礪波護「内藤湖南」、山中一郎「濱田耕作」、杉山正明・庄垣内正弘「羽田亨」（すべて礪波護、藤井讓治編『京大東洋学の百年』、京都大学学術出版会、2002）、倉石武四郎『本邦における支那学の発達』（汲古書院、2007）を参照されたい。

⁶² 北河賢三「戦時下の世相・風俗と文化」（藤原彰・今井清一『十五年戦争史2』、青木書店、1988）。

なると、「大新聞はこぞって戦争拡大を唱えて国民を煽った」⁶³という。『朝日新聞』を例にすると、満州事変後、「忍苦数十年の我權益 支那官民侵害の跡 朝鮮人への圧迫 185 件」（『東京朝日新聞』1931.9.25）などのような中国を侵略的なイメージとして表現する言論が多く確認できる。

無論、このような中国論の流行は新聞に限らない。1930年代は総合雑誌⁶⁴と呼ばれるメディアが隆盛となり、『中央公論』、『改造』、『文芸春秋』、『日本評論』などの大手雑誌をはじめ、国民向けの総合雑誌が多く出現している。戦争の進展にしたがって、中国に関連する文章が数多く誌上に現れ、さらに各誌が中国特集号を出すようになった。例えば、『中央公論』は〈現代支那読本〉（1934.5）の特集で、中国の政治・外交・社会・文化・経済などを紹介した。その後、〈抗日支那の解剖〉（1936.10）、〈「非常時支那」読本〉（1937.2）、〈支那問題特集〉（1937.9）などの特集が次々と刊行されたのである。一方、『改造』は1926年7月に〈現代支那号〉の特集を組み、胡適、梁啓超、徐志摩、郭沫若、田漢などの中国思想家や文学者などの文章を掲載し、中国の文学作品を大々的に取り上げた。また、〈支那事変増刊号〉（1937.10）を刊行し、1938年から毛沢東の文章を掲載するようになった。訳者増田渉（1903-1977）の回想によると、毛沢東の抗日戦論が日本に紹介されたのは、恐らく『改造』が最初であるという。⁶⁵このように、戦時下のメディアを通して、中国側の時局的、文化的な言論が日本に紹介されているといえよう。

五 文学界

明治時代から中国を訪ねた日本の文人たちは、あるいは紀行文学、あるいは小説などの形で彼らの目に映じた中国の形相を記録している。無論、戦争中においても中国を題材とする小説が発表され続けた。例えば、1932年に改造社より刊行された横光利一（1898-1947）の『上海』は当時の中国を題材とする小説の代表作である。本作品は、参木という上海に住んでいる日本人銀行員を主人公とし、五・三〇事件（1925）を通して、上海の持っていた「植民地都市」、「革命都市」、「スラム都市」という三つの側面を表した。⁶⁶また、同じ中国の都市を描写した作品として、1938年に刊行された阿部知二（1903-1973）の『北京』も挙げられる。1935年、阿部知二は北京を訪れたあとに数篇のエッセイを発表し、これらのものを材料として『北京』を執筆し、日中戦争以前の北京を描いた。王成氏によると、阿部知二は北京という都市空間を描くことによって、「夏目漱石以来の、中国の下層社会に対する日本

⁶³ 同前、242頁。

⁶⁴ 総合雑誌の形成史について、竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』（創元社、2014）の「序論」を参照されたい。

⁶⁵ 増田渉「思い出すこと」（関忠果など編『雑誌『改造』の四十年』、光和堂、1977、171頁）。

⁶⁶ 前田愛「SHANGHAI 1925：都市小説としての『上海』」（『文学』49巻8号、岩波書店、1981）。

の知識人の差別的な眼差しを転換しようとする」⁶⁷とされている。また、盧溝橋事件(1937)後、石川達三(1905-1985)の「生きてゐる兵隊」(『中央公論』、1938.3、発禁)、火野葦平(1907-1960)の「麦と兵隊」(『改造』、1938.8)が続々と発表され、中国の戦場を描写する文学が注目されるようになった。⁶⁸

六 1930年代の言論環境と中国文学研究会の方向

以上、政治界・調査機関・学術界・メディア界・文学界の五つの視点から、1930年代前後の日本に形成された中国論を概説してみた。

まず、犬養毅をはじめとする指導者たちは、「支那保全」論、「協和外交」論などを主張したものの、その裏には日本の経済利益や、満州国の存立などが前提とされている。したがって、犬養のラジオ講演にせよ、近衛の「声明」にせよ、このような民間に向かって発した言論の中に、日本の戦争意識を希薄化し、戦争目的を粉飾する一面が窺える。戦争の深刻化が進んでいく中に、学術界、文学界などにおいても国策的な色を強めている。

このような流れの中で、東亜同文会、満鉄、興亜院などによって行われた現地調査が盛んとなった。多くの知識人が種々の現地調査に参加し、大量の調査成果を得た。これらの成果によって、近代日本における中国事情の普及が進んだといえる。しかし、それらの調査は中国人との理解を深化するために行われたことではない。そのため、大量な調査データにより作り上げた中国の現状が日本国民の中国理解を促進したともいえない。

そして学術界について、漢学は体制教学的な一面を備え、それに対抗して形成された支那学は学界に新しい視点を提供することを実現できた。にもかかわらず、同時代の中国文化は学術研究の対象から排除されたのである。

同時代の中国の文学者や思想家などが日本で知られるようになったのは、1930年代のメディア界によるものだといえる。特に大手総合雑誌が中国に関する特集号を編集し、断続的に中国の文化的な動向を日本に伝えていたのである。また、中国に関する小説も、これらのメディアを通して世間に送り出されたのである。

1930年代の日本において、戦局の進展につれて、中国事情はますます日本人に注目されていくように見えるが、実は同時代の中国文化の変動に目を付ける人は決して多いとは言えない。中文研の活動の方向は当時の言論環境に緊密な関係を持っていると考えられる。同人たちは直接に時局に対して発言しなかったが、別の文脈で書かれている文章、および戦後の回想や評論から、彼らの心境を察知できる。

⁶⁷ 王成『阿部知二が描いた“北京”』(国際日本文化研究センター、2004、21頁)。

⁶⁸ 胡桃沢耕史ほか著『コレクション 戦争と文学 7 日中戦争』(集英社、2011)において、日中戦争を描いた短編小説を多数収録されている。

例えば、竹内好は1955年に発表された文章において、1937年7月から1945年8月までのあいだを「暗い谷間」と言い、当時の文学と政治的状況との関係について以下のように書いている。

この時期の文学の特徴を一口にいうと、強権による自由の精神の完全な抹消、およびそれと表裏の関係にある時局便乗型のエセ文学の横行、ということになる。

文学は、人間に対する信頼が失われる度合いに応じて、やはり全体としては衰微していった。このことは、権力が、法律や制度や宣伝を通して、国民生活に干渉し、戦争遂行のためにあの手この手と着々布陣していった事実と対応している。⁶⁹

竹内好の話から、1930年代の文学が強権に抑圧されていた様態が窺える。実はこのような抑圧は文学だけではなく、言論の産出にかかわる個人、または組織に例外なく影響を与えたといえよう。例えば、前述した国家のイデオロギーに利用された漢学、そして戦争の深化に伴い成立された種々の調査機関の動きなどから、政治が言論を左右する様子が読み取れるだろう。このような環境の中で、中国に関する出版物が歴大に流通していたが、中文研のメンバーたちは文化の不在を見とおしたのである。例えば、武田泰淳は、1940年に出征から帰国した後、このようなことを指摘した。

私が日本に帰って驚いたことは支那関係の出版の華やかさでありました。しかし今はその空しさに驚かすにはあられもないのです。日中親善のすべての機関、支那研究のための著書、それ等の文化的なものが我々には何となく影が薄いもののように見えて仕方ないのです。⁷⁰

無論、この引用文は、武田の戦場体験と深く関連している。その背後にある複雑な心境については第四章に譲ることにするが、ここで強調したいのは、戦時下の日本において中国に関連する機関と中国研究の著作が多数存在していたが、その中に真の「文化的なもの」が武田には感じられていなかったのである。

そして、彼は「生きて動いてゐる支那人が支那を形成してゐる」といい、中国の文化を知るといのはつまり中国人を知ることだと主張した。国家の支配層が中国を重要視することによって、当時の社会に中国に注目する勢いが引き起こされ、中国関係の出版物が盛んに出されているが、その中に中国の人間について書かれているものは少なかった。武田の言っ

⁶⁹ 竹内好「転向と抵抗の時代」(『全集』⑦、211頁—212頁)。初出：1955年2月28日発行『日本プロレタリア文学大系』第八巻「転向と抵抗の時代」(三一書房刊)の「解説」として発表。

⁷⁰ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」(『中国文学月報』第58号、1940.1)。

た「影が薄いもの」とは、時局に乗った中国研究における人間の不在を意味していると考えられる。

また、中国を題材とした小説に対しても、彼らは不満を持っている。例えば、阿部知二の『北京』について、竹内好は「読み返してみるほどの気もなく、借りてきたまま机の上に放つてある。つとめて頁をくることはあつても、それだけである。何のことはない。妙に色褪せた感じである」⁷¹と冷評した。そして、武田泰淳は戦地に届いた日本の雑誌の中に、「支那人を書いた日本作家の小説はないかと眼を皿のやうにして探し」⁷²たという。しかし、彼は優れた作品を発見できず、また雑誌に掲載された中国に関する「評論研究」をこのように酷評している。

私共は此等の敬愛する作家達が支那人の事を書かなかつたといつて、彼等の怠慢の為だとは少しも考へません。(略)それは、小説等においては謙譲な自己反省的な伝統を持つてゐる日本人が支那に対する評論研究においてはそれと反対の傾向を示してゐることです。(略)其の中には古くさくて役にたたぬもの、雑然として整理されてゐないもの、感情に走つて理性を忘れたもの、議論だけしておけば良いといふ無責任なものが含まれてゐます。其の中には支那人が生きて動いてゐるものだと言ふことを忘れてゐる部分があります。⁷³

この文章の中に、武田は二つのことを批判している。一つ目は、「作家達が支那人の事を書かなかつた」ことであり、つまり中国人に注目したうえで書かれた中国に関する小説が日本に見当たらなかった。二つ目は小説が貧弱である一方、当時の日本の文壇に空虚な評論が氾濫していることである。戦時下の日本文学界と言論界に対して、武田の抱いていた失望感、この文章を通してひしひしと伝わってくるのではないか。

そして、前述した諸機関の調査研究、および大学機構を中心とするアカデミズム的な中国研究に対しても、中文研は批判的な態度を取った。それに関して、竹内好は以下のように回想している。

そのときの気持ちとしては、文壇というより既成の学界に対する不満がまず第一にあったわけです。それは、東京帝国大学の支那文学科、これはもとは漢学科といったのだけれども、これがまったく阿呆な存在で、話にならなかった。(略)支那文学科といいながら文学のにおいもない、そういうのがいやだった。漢学の伝統で、教育勅語を祖述するような、そういうことばかりやっていた。

⁷¹ 竹内好「支那を書くといふこと」(『中国文学』第80号、1942.1.1)

⁷² 武田泰淳「支那文化に関する手紙」。

⁷³ 武田泰淳、同前。

もう一つは京都大学、(略) こっちは漢学とはいわない。支那学という。(略) 漢学イデオロギーでは困る、そうでなく学問として独立させようという雰囲気があって、彼らが一つの学風をつくった。(略) ただ、それで固定してしまって、われわれの時代には、支那学というのはやはり脱イデオロギーで戦闘性がない、東大の似而非学問を倒すという初期にあった破壊的な情熱がなくなって、一つの小ぢんまりした学風になってしまったという感じを持っていました。

もう一つ、社会科学の、具体的にいうとプロ科、プロレタリア科学研究所の支那研究、これは現代を扱っているように見えて実は人間不在なんだな。全部機構だけで見てしまう。その機構も自分の力で抽象化してきたのではなくて、人が抽象化したものを借りている。

こちらに文学的な関心があり、小説なんかも読もうという姿勢があるから、よけいそれを感じたんでしょう。その三つでしょうね。それに対してわれわれはそういう抵抗の姿勢から貧弱ながらすこし仕事をやっていた。⁷⁴

この引用文は、中文研の活動の方向を明白に提示したといえる。まず、その主要メンバーは東大出身にもかかわらず、当時の漢学イデオロギー的な東大の学風に強く反発していた。竹内好は大学時代に、「学校へほとんど出なかった」⁷⁵し、武田泰淳は途中で大学を中退し、在学していた時に「塩谷温教授と宇野哲人教授の講義をそれぞれ一回ずつ聴いただけで、何となく足が遠のいてしまう」⁷⁶という。彼らの関心は官学的な学問ではなく、東大の伝統的な漢学と全く異なる面で中国文学を研究したいという点にあった。そして、漢学イデオロギーから脱出し、独自の学風を樹立した支那学に対して、竹内はその功績を評価した。しかし、支那学の中に、彼らの求めていることとずれがあるように思われる。武田泰淳もこの点について、1942に執筆された『司馬遷』の「初版自序」において語っている。

私達は学生時代から、漢学と言うものには、反感を持っていた。反感を持つと言うより、まるで興味を惹かれなかった。(略) 日本人として、中国文化を研究する道は、ほかのところにある。それを自ら苦しみ、自ら見出さなければならぬ。そう私達は考え定めていた。私達は、京都派の支那学についても、ひととおりの関心は持ったけれども、やは

⁷⁴ 竹内好・高橋和巳「文学 反抗 革命」(竹内好『状況的：竹内好対談集』、合同出版、1970、33頁—34頁)。初出：『群像』、1969年3月号。

⁷⁵ 同前、33頁。

⁷⁶ 古林尚編「武田泰淳年譜」(塩谷雄高編『武田泰淳研究』、筑摩書房、1973、468頁)。

り先人の学は先人の学であり、私達の精神とは、かなりへだたっている、と思われた。要するに、私達の求めていたのは、「文学」そのもの、哲学そのものであり、中国文学、中国哲学ではなかったのかも知れぬ。⁷⁷

このように、竹内好と武田泰淳は、東大の漢学に身を置きつつ、京大の支那学に対してもそれなりに関心を寄せていた。しかし、彼らの発見したい中国、または彼らの求めていた「文学」は漢学と支那学にはなかったようだ。またはプロ科の中国研究に対して、竹内は中国人に注目しない点を批判した。これは、前述した武田泰淳による評論研究に対する批判に共通するといえる。

要するに、1930年代の言論環境からみると、中文研の活動は二つの出発点によるものだと考えられる。一つは、漢学と支那学に対抗し、文学そのものに注目することによって独自の研究分野を開拓したいという志願であり、もう一つは、日本の文壇や研究機関に広く存在していた「人間不在」、つまり同時代の中国人に対する注目と理解の欠失という状況に対する不満である。

第二節 中国文学研究会の創立

第一節において、中文研の活動していた1930年代前後の言論環境を確認し、その文脈に確認される中文研の目指していた方向を検討してみた。本節は、中文研の創立史に関する諸事情に注目し、その設立までの各メンバーの活動、設立の経緯、および機関誌の概況を整理する。

一 発足以前の主要メンバーの活動

中文研の発足は、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三人を中心とするものであった。発足するまでの三人が、どのような経験を積んだのか。これは中文研の設立時の背景、および性格に関わる問題である。まず、竹内好の日記に書かれた中文研設立当初の様子を見てみよう。

三月一日（1934年）

横地、佐山、武田、岡崎氏来訪、中国文学研究会の第一回準備総会を開く。会名は中国

⁷⁷ 武田泰淳「初版自序」（『司馬遷——史記の世界』、講談社、1965、11頁）。初出：『司馬遷』（日本評論社、1943）。

文学研究会に決定、披露まで当分の間準備行動とす。各自過去の研究コースの紹介と将来の希望を述ぶ。例会、毎月一日、十五日二回に決定。回覧雑誌を出し、各自翻訳一篇ずつ今月中に書くことを決める。中国文学の研究者に交渉をつけること、各自担当、自分は池田孝と一戸務。⁷⁸

上記の日記から分かるように、設立に参加した人物は、竹内好をはじめ、横地倫平、佐山蒨、武田泰淳、岡崎俊夫の五人である。⁷⁹1934年3月、竹内は東京帝国大学文学部支那文学科を卒業し、横山と佐山は、大学時代の同期で、よく話し合った二人であるという。⁸⁰ただし、この二人は、後に中文研の活動に積極的にかかわった様子が確認できず、同人メンバーにも属してなかったため、ここでは、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫三人の中文研結成以前の活動を見てみたい。

まず、竹内好の年譜⁸¹から分かるように、彼は大阪高等学校の時代から校友会学芸部の機関誌の編集を担当し、ジャーナリズムに対する関心を見せていた。1931年、東大に入学した後、RS（リーディング・ソサエティ。唯物弁証法などを研究する）の読書会に参加し、そこに武田泰淳と知り合った。元々「無試験」のために支那文学科に入った竹内は、最初は中国文学にそれほど深い関心を持っていたわけではなかった。また前述したような漢学に対する不満があり、そして大学での授業はほぼ漢文を中心とするもので、彼は教室にも顔を出さなかった。竹内が中国に目を向けるようになったのは1932年の時である。この年に、彼は外務省対支文化事業部の半額補助を受け、朝鮮—満州—北京にわたり、二か月ほどに旅行し、その際に北京で初めて孫文の『三民主義』に接した。これは彼の後年の活動に大きな影響を与えた。1957年に発表された「孫文観の問題点」において、竹内はこのように語っている。

私は一九三四年から、仲間たちと中国文学研究会をはじめた。私の念頭にはいつも、一九三二年の秋に植えつけられた『三民主義』の強い印象がまつわりついていた。そこに

⁷⁸ 「中国文学研究会結成のころ」（『竹内好全集』⑤、筑摩書房、1981、45頁）。

⁷⁹ 中文研の成立事情について、立間祥介編「中国文学研究年譜」（『中国文学（別冊）』、汲古書院、1971）には：

昭和九年（一九三四）

一月 竹内好宅（芝区白金今里町八十九番地＝現・港区白金台二丁目八十九番地）において、研究会設立のため最初の会合を持つ。出席者は一戸務、岡崎俊夫、竹内好、武田泰淳、増田渉、松井武男、松枝茂夫の七名。研究会はこの時に実質的に発足、以後、不定期に会合を持った。

と書かれているが、これは間違った記述である。竹内好自身も「日記」を公表した時（1972年『辺境』第9号、井上光晴編、辺境社）に書いた文章の中にこの間違いを指摘し、「このころは岡崎、武田をのぞいて他の人はまだ面識がない」（『竹内好全集』⑤、40頁）といった。

⁸⁰ 同前。

⁸¹ 久米旺生編「竹内好年譜」（『竹内好全集』⑦に収録）。

感じた中国人「一般」の心情といえるようなもの、その実態が何であるかを私は文学的に解こうとした。それを解くこととの関連で文学をやっていた。⁸²

このように、満州と北京での旅行、および孫文の『三民主義』に、竹内好は深く感銘を受け、「中国人『一般』の心情」の実態を発見しようという動機によって、本格的に中国文学に接近しはじめた。

一方、武田泰淳の年譜⁸³によると、彼は高校時代に『紅樓夢』、魯迅、胡適などの白話文学や近代文学などを読みはじめた。と同時に、左翼組織の一員として活動し、1931年東大に入学した後も左翼運動にしばらく参加していた。1931年5月、ゼネストに関するピラ撒き事件のために留置され、釈放後もほかの左翼活動のために三回逮捕された。1933年、小説の創作も行い、狐塚牛太郎の筆名で雑誌『明日』に「世界黒色陰謀物語」⁸⁴を発表した。また、年譜には書かれていないが、1934年に武田は同じ筆名で雑誌『文化集団』⁸⁵に「中国左翼文壇の現状」(7月号)、と「中国文学情報」(10月号)を投稿した。いずれも中国の左翼文学を紹介する文章である。また、既述したように、大学での授業に関心を持たずに、竹内好と同じように漢学に対して嫌悪感を持っていた。

岡崎俊夫は、1930年東京帝国大学文学部支那哲学科に入学した。それ以前通った高校が武田泰淳と同じく、浦和高校であった。高校生活について、岡崎は回想文に下記のように記している。

ぼくは、高校時代、初めの二年間寮に住み「寮友」という雑誌の編集をし自分でも小説や戯曲を書いた。二年のとき文芸部の委員になって「学友会雑誌」を編集し、これにも小説を二度ばかりのせた。また同じころ「浦高時報」という校内新聞(月刊)を創刊し、主筆気取りで社説や評論を書いた。左翼運動の盛んなころだったので、当然その影響をうけて論調もはげしく、そのため生徒監にたびたび注意をうけた。⁸⁶

このように、岡崎は高校時代から文筆活動を行い、雑誌の編集にも取り組んでいたことが

⁸² 竹内好「孫文観の問題点」(『竹内好全集』⑤) 初出：『思想』396号(岩波書店、1957.6)。

⁸³ 古林尚編「武田泰淳年譜」、前掲書。

⁸⁴ 「世界黒色陰謀物語」を掲載した『明日』の所蔵は今のところまだ発見されていないが、その原稿は日本近代文学館の「武田泰淳コレクション」に所蔵されている。

⁸⁵ 『文化集団』：文化集団社から1933年6月から1935年2月まで刊行された雑誌である。祖父江昭二氏によると、本誌は機関誌または同人誌ではなく、営業誌であるという。また、執筆者にプロレタリア文学者が多く存在し、雑誌の内容も文学だけではなく、映画・演劇・美術など諸芸術ジャンルが含まれている。詳細は文化集団社編『「文化集団」別巻』(久山社、1986)を参照されたい。

⁸⁶ 岡崎俊夫『「中国文学研究会」のこと』(『天上人間：岡崎俊夫文集』、岡崎俊夫文集刊行会、1961、154頁)。

確認できる。そして、大学に入った後、プロレタリア科学研究所に所属し、支那問題研究会で仕事するようになった。その間に、彼は中国語を勉強しながら、同時代の中国小説に触れるようになった。また、武田泰淳との接点も彼の中国語学習の開始時期にあたる。

岡崎は当初東洋哲学に関心があり、東大支那哲学科に入学した。ところが、「入ってみると幻滅、支那哲学とはいっても、哲学のテの字もない、要するに漢学なのだ。後悔したがもうおそい」⁸⁷といったように、岡崎の漢学中心の大学に対する不満が読み取れる。

要するに、中文研成立以前の竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三人の経歴が非常に似ていることが分かる。まず、出身大学は同じく東京帝国大学の文学部であり、竹内好と武田泰淳は同級生であり、岡崎俊夫は一年上のである。岡崎俊夫と武田泰淳の場合は、高校も同じであったが、二人が緊密な関係も持つようになったのは、大学を出てからである。しかし、中文研の成立は、このような同窓生によるものという単純な理由だけではない。上述から分かるように、中心メンバーとしての三人の活動の方向性には多くの共通点が見られる。つまり、彼らには、ジャーナリズムへの関心、左翼運動との関わり、文筆活動への熱中、漢学中心の大学教育への不満および同時代中国との関連などの共通点を確認できる。このように、中文研の立ち上げは、東大支那哲学支那文での同窓という理由以外に、それ以前に彼らの活動に示された知的関心の共通性にもつながっているといえよう。

二 発足の経緯

1934年に実質的に成立された中文研は、初期の頃に、同年の3月には武田泰淳の清朝小説研究、4月には横地倫平の蔣光慈研究などのような個人による研究発表を中心に活動していた。しかし、竹内好日記に示されているように、その間に、彼は中文研を世に知らせるために奔走していた。日本側に関して、竹内は長谷川如是閑(1875-1969)、新居格(1888-1951)などのジャーナリストを訪ね、日華学会、東方文化学院などの研究機関を訪問した。後に中文研同人となった松枝茂夫(1905-1995)、増田渉などの知識人と知り合いとなったのもこの時期である。中国側に関して、東京で活動していた留学生たちとの交友関係を持ちはじめ、「留学生と数度にわたって懇親会を重ねるうち、顧志堅、王瑩らを知り、かれらを通じて中国文壇の情勢について少なからず知識を得た」⁸⁸。このような種々の人的ネットワークが築かれていくうちに、中国文学研究会という名前を世に送るチャンスを迎えた。それは、周作人(1885-1967)の来日であった。

1934年7月15日、周作人は妻との帰省で東京に到着し、その後日華学会、外務省をはじめ、さまざまな文人およびメディア関係の人物に会った。⁸⁹と同時に、竹内好は外務省の人

⁸⁷ 同前、154頁。

⁸⁸ 「竹内好年譜」(『竹内好全集』⑩、292頁)。

⁸⁹ 詳細は張菊香・張鉄榮編『周作人年譜(1885-1967)』(天津人民出版社、2000、448頁-452

から周作人来日の情報を得ると、1932年北京留学の時に知り合いとなった池田孝道⁹⁰とともに周作人の歓迎会を計画しはじめた。その経緯は、竹内の1934年の日記に確認できる。

七月十九日（木）

外務省へ行って天羽情報部長に会ったら、(略)周作人が来ているから日本文人達が一夕の招宴を催したい、池田孝に話してあると言う。池田と共に尽力を約す。この点、将来も、中国文学研究会の中国文人歓迎会と日本文人の催す奴と如何に調和してゆくかむつかしい問題ではないかと思う。

七月二十五日（水）

朝、池田を訪う。(略)中国文学研究会やってくれぬかと頼みしに、お高くとまってる様子にて援助はするなど言う。(略)新居格来る。大変機嫌よし。周作人歓迎会、我々研究会が主催する形にしろと言う。大いに結構なり。奔走を約す。⁹¹

このように、歓迎会を主催することによって、中文研の日本文人とのつながりを作ろうとする竹内の意欲が、彼の日記において示されている。その後の竹内は、武者小路実篤(1885-1976)、与謝野寛(1873-1935)、佐藤春夫(1892-1964)、有島生馬(1882-1974)など文壇で活躍する作家やジャーナリストを次々と訪ね、発起人の依頼を行った。

そして8月2日、まず『読売新聞』の朝刊に周作人歓迎会の予告が載せられ⁹²、4日に東京の山水楼にて宴会が開催された。その様子は当時の外務省にいる柳沢健によって記録されている。

偕て当夜は三十人を越える人々の集りで、殊に其の大部分は我が国文壇乃至は画壇の

頁)を参照されたい。

⁹⁰ 池田孝道は竹内好日記に「池田孝」というペンネームで書かれている人物である。池田は同時代の中国文学を研究し、北京にいる間に、膨大な中国の文学雑誌を収集した。池田の蔵書は戦争中の中国文学研究会の活動に大きく役を立ったという。詳細は竹内好「本のことなど」(『竹内好全集』⑬、初出：『野草』第6号、中国文芸研究会、1972.1)

⁹¹ 「中国文学研究会結成のころ」(前掲書、67頁—68頁)。

⁹² 「日支親善は文学から——魯迅氏の弟中心に歓迎会」(『読売新聞』、1934.8.2) 具体的な内容は下記の通りである。

日支の友好関係を深めるには外務省のお役人の手ばかり借りてゐるよりも同文同種の文化外交の手で行く方が近道だらうといふわけで先ごろ来朝して目下本郷菊富士ホテルに滞在中の中国の文豪魯迅氏の弟で日本文学研究者として知られてゐる周作人氏及び徐祖正氏の両氏を主賓に来る四日午後六時から日比谷山水楼でわが学界並に文壇人の歓迎会が催される。この美しい会合の発起人は与謝野寛、佐藤春夫、新居格、東大文学部助教授竹田復の諸氏で中国文学研究会の新人たちも出席して大いに文芸談を交へ、歓談裡に素人外交の実を挙げようといふ計画である。

知名の氏であるだけ頗る賑かで、和やかな空気の中に終始し、両先生とも頗る御満足の態に見受けられたことは参列者の一人として此の上なく愉快に思はれたのである。殊に我が文壇の耆宿島崎藤村氏が態々出席せられ、挨拶を述べられたのは恐らく両先生、殊に同氏の著作を北平で刊行せられて居る徐先生にとって特別に深い喜びであつたことかと想像された。⁹³

このようにして、中文研はようやく正式的に活動しはじめ、日中の文人に名を知られるようになった。当時の竹内、武田、岡崎などは、大学を卒業したばかりの新人であり、彼らが中国の有名な文人の歓迎会を主催することによって、中文研の存在を学界だけではなく、より広い範囲で知らせることも可能となった。このような竹内好の一連の行動の中に、彼の中文研を設立する動機が読み取れる。つまり、単純に研究グループを作るのではなく、既成学界の雰囲気打破し、ジャーナリズムに近きながら文壇に影響力を拡大しようとする意志が現れているといえよう。

三 機関誌『中国文学月報』の創刊と変遷

中文研は、成立した翌年（1935）に機関誌『中国文学月報』を発行した。創刊頃の本誌は、「雑誌といっても最初は非常に貧弱なものでした。なにしろ菊版の一二ページですから、雑誌の体裁をしていなかった」⁹⁴という。このような状況で五年を続き、第60号（1940.4.1）から『中国文学』と改題し、約48頁の市販雑誌となり、発行も生活社に委託された。1935年3月から1943年3月までのあいだ、検閲制度や同人の移動などの種々の困難の中で、本誌は欠号なしで全92号が刊行された。創刊号と改題後第60号の詳細について、表3を参照されたい。

⁹³ 柳沢健「周・徐両先生を迎へて」（『支那』第25巻第9号、東亜同文会編、1934.9）

⁹⁴ 竹内好・高橋和巳「文学 反抗 革命」、前掲書、32頁。

表3 『中国文学月報』と『中国文学』の書誌情報⁹⁵

『中国文学月報』創刊号	『中国文学』第60号
<ul style="list-style-type: none"> ● 定価一部 10 銭。 ● 編輯発行兼印刷人：東京市芝区白金今里町 89 竹内好。 ● 印刷所：東京市神田区神保町 1-34 株式会社開明堂。 ● 発行所：東京市芝区白金今里町 89 中国文学研究会。 ● 印刷部数 1000 部（第二号以降 500 部、途中 800 部のこともあった）。 ● 菊判アンカットで、9 ポ 14 字 24 行 4 段組。表紙なく 12 頁。 ● 編輯は同人合議で行なったが、原稿には竹内が率直な批判を加え、場合によっては加筆訂正を行なった。 ● 題字「中国文学」は武田泰淳が郭沫若に依頼して書いたもの。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 定価一部 25 銭、年 3 円。 ● 編輯発行兼印刷人：東京市目黒区上目黒 5-2468 竹内好。 ● 印刷所：東京市神田区神保町 1-34 株式会社開明堂。 ● 発行所：東京市目黒区上目黒 5-2468 中国文学研究会。 ● 発売所：東京市神田区鍛冶町 3-6 生活社。 ● 菊判アンカット。表紙（色刷）つき、48 頁。本文は 9 ポ 27 字 21 行 2 段組、および 6 号 20 字 27 行 3 段組、「後記」は 6 号 15 字 27 行 4 段組。「文化消息」欄は下段に表波線で囲い、6 号 14 字 2 段組とし、余白の埋草にした。 ● 題字は増田渉が書いたもの。

⁹⁵ 表 1 の作成は立間祥介編「中国文学研究会年譜」（『復刻中国文学：別冊』、汲古書院、1971）を参照した。また、図版は東洋文庫所蔵本による。

竹内好の回想文において、雑誌の創刊頃の事情が下記のように記録されている。

『文藝春秋』の一番初めの形、こちらはもっと厚いんですけど、大体、あんな感じで始めたわけです。ワク付の四段組みっていうのも『文藝春秋』の一番初期のやつ我真似じゃないかな。

印刷屋は開明堂っていいました。工場が浜松にあってね。これは日本で精巧社とならんで一番漢字の活字を持っている印刷屋だったんですよ。しかし、わりに安いね。そこに依頼したんですが、仲を取り持ったのは文求堂という本郷にあった本屋のおやじさんで、田中慶太郎という人なんです。⁹⁶

『中国文学月報』は一団体の機関誌にすぎないが、その作りは一流の文芸雑誌を真似し、また当時の社会で通用していた「支那」という呼称を敢て使わずに「中国」を使った。そして、創刊号の題字を近代中国文学のリーダー格として知られている郭沫若に依頼したこと、および多くの日中文人、学者と交際関係を持つ田中慶太郎から協力を得たことも、当時の中文研の文壇・学界に進出するための努力を物語っていると見える。その中に、竹内好自身の抱負が無論含まれているが、日本の文壇に同時代の中国について発信しようという中文研の姿勢も表われているのではないか。

このように、中文研のさまざまな動きは、多くのジャーナリストや学者などに注目されていることが事実である。そして、本誌の内容は非常に豊富であり、学術論文と研究随筆を中心とし、翻訳・書評・資料紹介なども加えて、同時代の中国の文学、文化動向を紹介している。そのため、本誌は当時の日中文化交流の促進に一役を果たしたといえよう。

そして、時間の変化によって、本誌は異なる特徴を呈している。本誌の内容は、表4のようまとめることができる。

表4 『中国文学月報』・『中国文学』の内容概略

A	近代中国文学・文化	中国文人と文学作品に関する紹介および考察、漫画・木刻・劇曲・映画、関連する本の書評
B	中国文学の翻訳	近代文学、論文などの翻訳 (B1) 古代から清末までの文学の翻訳 (B2)
C	日本における中国研究	漢学批判(C1) 日本の中国研究に関する批評、資料など(C2)
D	中国の古典文学と伝統文化	古典文学の研究と資料紹介、伝統文化に関する研修、関連する本の書評

⁹⁶ 竹内好『方法としてのアジア』、前掲書、12頁。

E	中国語問題	中国の国語運動問題、中国語教育と翻訳法批判、中国語に関する言語学的研究、関連する本の書評
F	現地体験	紀行文、戦地報告
G	文学創作	同人の書いた短編小説など
H	日中関係と日中交流事情	中国に関連する日本の人物、政策、諸事情など
I	諸国と中国との接点	日本以外の諸国における中国理解と中国研究
J	中文研関連	中文研および機関誌に関する文章
K	文化消息・会報・コラム	中国文壇の文壇ニュースなど

そして、筆者は表4に提示された各内容をA～Kに分類し、誌面に掲載されたA～Jに関する文章を中心に、数量的な統計を行った。⁹⁷その結果は、表5のとおりである。

表5 『中国文学月報』・『中国文学』の誌面の変遷

時間 ⁹⁸	A	B1	B2	C1	C2	D	E	F	G	H	I	J
第一期： 第1号-第32号	57	19	2	8	5	35	14	0	0	7	2	3
第二期： 第33号-第59号	18	24	5	2	6	13	5	17	0	10	12	0
第三期： 第60号-第92号	38	15	12	0	6	23	40	16	6	29	21	15
合計	113	58	19	10	17	71	59	33	6	46	35	18

⁹⁷ 数量的統計は、誌上に掲載されたものすべて含まれているものではない。原則として統計の際に「書評」、「文化消息」、「会報」などのコラムを採用しないことにする。また、序章の研究方法にも言及されたが、一つの文章には、多数の主題が含まれる場合もまれに見られるため、厳密な数量的統計を行うのが難しい。そのため、数量的統計にはこのような文章を対象外とした。なお、資料『中国文学月報』・『中国文学』内容一覧において、統計された文章に対応する分類のアルファベットが表記されている。

⁹⁸ 時間の区切りは中文研の三つの活動時期に従った。詳細は序章の「表2」を参照。

第一期：草創—発展期（1934.3—1937.10）

第二期：模索—転換期（1937.11—1940.3）

第三期：中興—葛藤期（1940.4—1943.3）

表4と表5を通して、本誌の内容的概況と誌面の変遷が読み取れる。

まず同時代の中国文学の紹介に関して、A類とB1類の文章が挙げられる。「A.近代中国文学・文化」には主に中国の新文化運動（1910年代）以降の文学作品や戯曲・漫画などの芸術類が含まれ、「B1.近代文学・論文の翻訳」には小説・新詩・戯曲脚本だけではなく、中国に発表された研究論文も含まれる。同時代の中国文化界の状況を日本に紹介することは中文研の一大課題であるため、誌上にA類とB1類の文章が多数見られる。その勢いは特に第一期においては著しい。特に第1号（1935.3.5）から第32号（1937.11.1）までの誌面に近代中国文学に関する特集号が多数編集された。例えば、第6号（1935.8.25）と第7号（1935.9.25）の「現代小品文」特集、第20号（1936.11.1）の「魯迅」特集、そのほか、第22号（1937.1.1）と第28号（1937.7.1）の「作家論特集」、第31号（1937.10.1）の「現代長編代表作特集」なども挙げられる。しかし、第二期に入ると、A類の文章が一気に減少し、作家論を散見する程度である。その代わりに、B1類の翻訳が増加した。そして、第三期に徐々に回復する傾向を見せたものの、第一期には及ばない。また、掲載されたものは書評を中心とし、作家論と作品論が少ない。特集も第77号（1941.10.1）の「民国三十年記念特集」の一冊のみ編集されたのである。

つぎに、中国の古典文学と伝統文化に関係するのはD類とB2類である。「D.中国の古典文学と伝統文化」には、主に『三国志』や『三言二拍』などの白話小説、清末の通俗小説、および民国初期の中国の文学研究に関する文章が含まれている。ただし、唐詩などのような古典文学に関するものがまれに掲載される程度である。D類の文章は第一期において少なからず見られ、特に第26号（1937.5.1）は王国維の記念特集号として刊行され、中には王国維の人物像、紅樓夢研究、『人間詞話』（1910）に関する批評などが掲載されている。その後、特集として刊行されたものはなくなったが、第二期、第三期において断続的に唐詩、戯曲、または康有為の伝記的研究などに関するものが載せられていた。また、B2類の翻訳は、第一期と第二期において少数しか見えないが、第三期では『老残遊記』（劉鉄雲）、『日本雜事詩』（黄遵憲）、『思痛記』（李小池）のような清末の文学作品の翻訳が連載されていた。全体的にいえば、本誌において中国の古典文学に関する内容が大きな割合を占めているといえよう。

また、日本における中国研究に関して、「C1.漢学批判」と「C2.日本の中国研究に関する批評、資料」がある。C1類は文字通りに漢学を批判する文章であり、C2類は中国文学研究法に関する批評、または東洋史などの他分野の中国研究に関する論文と資料である。特に漢学批判は中文研の活動の出発点ともいえる一大課題であるが、興味深いのは、直接に漢学批判の主題に触れた文章はそれほど多くないことである。表5に示しているように、C1類の文章が掲載されたのは第一期に集中しており、第二期ではわずか2篇しかない。第三期となると誌面からまったく消えてしまったのである。その理由の一つは、後期の中文研が中国

語問題を重要視することにあると思われる。

「E.中国語問題」に関する文章は、第一期においては主に中国の国語運動を紹介することを中心としているが、第三期となると、その「重心」は日本における中国語教育、および中国語翻訳の批判に推移した。「翻訳時評」の連載をはじめ、第83号(1942.5.1)の「日本と支那語特集」などの中国語に関する議論が盛んとなり、そのため、第三期ではE類の文章は急激に増加する傾向が見られる。その中に、「漢文訓読法」に関する批判が度々言及され、つまり、誌上においてC1類のような正面から漢学を批判するものがなくなっているように見えるが、それは後期になると、中文研の漢学批判が具体化され、「漢文訓読」に集中するようになったためである。

つぎに、1937年10月から中文研の同人が相次いで中国を訪ねるようになったため、「F.現地体験」は、中国での見聞を記録したもの、あるいは中国からの手紙などである。その中に、竹内好と武田泰淳との現地体験が多く見られる。竹内好の場合は、留学時の通信と「旅日記抄」の連載があり、武田泰淳の場合は、戦地での体験を記述した書簡と随筆が見られる。またほかの同人の現地体験について、実藤恵秀(1896-1985)の中国での本屋めぐりに関する記録、飯塚朗(1907-1989)の中国での生活に基づく感想などが散見する。

そのほか、「G.文学創作」は主に同人の書いた短編小説であり、第75号(1941.8.1)の「創作特集」に集中している。「H.日中関係と日中交流事情」は日本文学の漢訳、日本文学に描かれた中国像、中国人日本留学生に関する考察などのような日中文化交流史に関わるもの、または戦時中の対中文化政策を言及したものであり、第一期から第三期までに徐々に増加する傾向がある。「I.諸国と中国との接点」では、アメリカやフランスなどの欧米諸国の中国研究の紹介、および日本以外の外国人の中国理解、または中国と東南アジアとの接触を言及した文章が含まれている。例えば第三期には第68号(1941.1.1)の「アメリカと中国」の特集が発行され、アメリカの中国調査、中国語研究などが紹介されている。また、第82号(1942.3.1)には「南方関係支那文献解説」が掲載され、清末から近代までの中国人に書かれた東南アジアに関連する著作が記述されている。

以上、各種類の概況について述べた。本誌の時期的な変遷には、以下のような特徴が挙げられる。

まず、第一期では、近代中国の新文学に関する内容が最も充実している。特に同時代の中国文学に関して、この時期において盛んに紹介され、誌上で多く論じられている。そして、直接的に漢学批判を言及した文章は限られているが、中国古典文学、特に白話小説・通俗小説・戯曲などに関する考察が多くなされている。第二期では、竹内好と武田泰淳の不在によって、本誌は全体的に低調期に入り、誌面に第一期のような活発な議論が見えなくなる。近代中国文学に関するものが依然として多く見られるが、作家論と作品論のような文章が少なくなり、翻訳が増加するようになった。そして、第三期に最も多く現れたのは中国語に関する論述であり、これは第一期の漢学批判を継承したものと考えられる。

第三節 まとめ

本章の第一節では、1930年代前後の日本における中国認識の形成に注目し、政治界・調査機関・学术界・メディア界・文学界という五つの分野に形成された中国論を考察した。その結果、1930年代の中国論には同時代の中国民衆への関心が希薄である傾向が明らかとなった。調査機関が多数存在し、中国に関する情報が日本に溢れていたものの、中国人の実態を反映するものは少なかった。また、大学における中国研究は支那学のような新たな研究視点が形成されつつあったものの、同時代の中国文化界に対しては無関心のままであった。このような言論環境において、中文研は既存学界に対する対抗、および同時代の中国人に注目することという二つの方向に向かって出発したのである。

そして、第二節は、中文研の創立と機関誌の概況を考察した。まず、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三人の中心人物に注目し、彼らの高校時代と大学時代における知的関心の共通性を明らかにした。そして、中文研の発足時の事情は、竹内好のジャーナリズムに接近することによって文壇に進出する意欲を物語っている。彼らの創刊した『中国文学月報』は、当初には12ページぐらいのものであった。とはいえ、中文研の発足と機関誌の創刊が日中の文壇で活躍していた多くの文人に関与した事実からも、彼らが当時の文壇において一定の知名度を有していたことが推察できるだろう。最後に、機関誌の時期的な変遷をたどり、異なる時期によって示されたそれぞれの特徴を明らかにした。次章以降では、各時期の特徴を追いながら、中文研の十年間にも及ぶ活動の実像を追っていく。

第二章 草創—発展期〈一〉: 同時代の中国文学への覚醒

(1934.3-1937.10)

第一節 はじめに

安藤彦太郎氏が、「日本で最初に現代文学を研究し、それを世に広めたのは昭和の九年ごろに成立した中国文学研究会だ」⁹⁹と述べているように、中国文学研究と言えば、およそ古典文学研究を意味した 1930 年代に、中文研は、初めて近代中国文学の研究に取り組んだ団体であった。中文研が成立したのは 1934 年であり、当時は中国を「支那」と呼ぶ時代であるにもかかわらず、当団体はその名を「中国」文学研究会と名付け、さらにはアカデミズムにおいて等閑視されてきた近代中国文学に光を当てたのである。

団体名にあえて「支那」ではなく、「中国」という言葉を選んだ理由について、竹内好は以下のように述べている。

多少の支那文字を読み習ひ、多少の支那人と識つた僕らは、支那人がどんなに支那とよばれることを嫌ふか、逆に中国とよぶことが彼らをどれほど喜ばすかといふ、頗る単純な国民心理の洞察に基いてこれが応用を企てたわけである。(略)

漢学や支那学の伝統を打ち倒すために、中国文学という名称は是非ともこれを必要としたのである。僕らは中国文学の旗の下に何をなしたか、いま考へたくない。考へることはみじめである。少くとも僕らは、現代に於て最も支那人の心に近づいた、或は支那人をして近づかしめた少数の日本人の一人であることは確信してゐる。¹⁰⁰

つまり、竹内は二つの意図から、「中国」を選んだのである。一つは、中国人の心に近づきたいという考えである。彼は回想において、「『支那』は古くさいし、中国人が支那という言葉に非常に嫌うことは、文学を通してこっちにはわかっていたので、わざと『支那』を避けて『中国』という名をつけた」¹⁰¹ (傍点筆者による) と述べたこともあり、言い換え

⁹⁹ 安藤彦太郎「戦時期日本の中国研究」小島晋治等編『20 世紀の中国研究：その遺産をどう生かすか』(研文出版、2001、159 頁)。初出：『中国研究月報』607 号、1998.9。

¹⁰⁰ 竹内好「支那と中国」(『中国文学』第 64 号、1940.8.1)。

¹⁰¹ 竹内好・松本昌次「中国と私」(『状況的』、前掲書、213 頁)。初出：『未来』1969 年 2 月号。

れば、竹内の「支那人をして」中国に近づきたいという心理には、文学を通して戦争中に等閑視された中国文化のありようと民衆の実状を理解したい願望が窺える。

もう一つは、伝統的な中国研究としての漢学と支那学を打ち倒すことである。これに関してはすでに第一章で述べたように、中文研を創立した中心的な三人である竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫は、既存学界への対抗という認識を共有していた。そのため、近代文学に対する関心は、中国研究の新たな道を模索する出発点ともいえるものであった。しかし、彼らは具体的にどのような近代文学を紹介したのか、また彼らの活動をいかに評価すべきなのか、これらの問題はほぼ検討されていない。

第一章で紹介された誌上の内容の概況を見れば、中文研の近代文学に対する関心は、第一期に止まらず、第二期と第三期にも及んでいる。ただし、誌面の変遷に示されているとおり、翻訳を除き、近代文学に関する論文の発表などは第一期に集中している。そのため、筆者は近代文学への目覚めを第一期のキーワードとして位置づけ、第二期と第三期での活動にも触れながら、その全体像を提示してみたい。本章は、同人の中国知識人とのコミュニケーション、および機関誌で紹介された中国文学を中心に、初期中文研の実状を明らかにする。

第二節 同時代の中国文学との接触

本節は、中文研が同時代の中国文学を日本に紹介するために展開した活動の概況を考察する。まず誌上に掲載されている中国近代文学に関する内容を概説したうえで、機関誌の「会報」欄を調査し、中文研の主催した例会・懇話会などのイベントの様子を検討する。特に郭沫若講演会の事例をピックアップし、その中に見られる中国文人の中文研に対する態度を確認する。最後に、中文研の同人による翻訳活動の実状を明らかにしたい。

一 誌上における中国近代文学に関する文章の概況

中文研が創立した頃の中国は、ちょうど左翼文学の時代であり、1940年代に入ると、「抗戦」を主題とする文学が主流となった。一方、1930年代の日本における中国研究は、漢学と支那学を中心としたものであり、新文化運動以後の中国文化を等閑視する状態であった。近代中国文学を研究対象として扱ったのは、当時においては中文研にが唯一であった。機関誌『中国文学月報』・『中国文学』には多くの文章が掲載され、同時代の中国の作家と作品、および文学に関連する演劇、美術などが入念に紹介された。では、中文研は具体的にどのように中国文学を紹介しているのだろうか。まず、誌上に掲載されている中国近代文学に関す

る文章の概況を見てみよう。

資料「『中国文学月報』・『中国文学』の内容一覧」、および第一章の表 4 から分かるように、本誌において、近代文学に関する文章は二種類があり、A 類は同時代の中国文学・文化に関する評論と論文であり、B1 類は関連する文学作品と論文の翻訳である。そして、第一章の表 5 に示されているとおり、A 類の文章は第一期に集中している。つまり、草創一発展期は同時代の中国文学を最も盛んに議論した時期であるといえる。各年度別¹⁰²の掲載状況は下記のとおりである。

表 6 近代文学・文化に関する内容の掲載概況¹⁰³

年度	改題前					改題後			合計
	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	
項目数	32	30	19	15	22	23	22	8	171
うち翻訳	9	2	13	9	10	11	4	0	58

表 6 に示されているとおり、A 類と B1 類に属する内容は合計 171 項目があり、数量的には、各年にさほど大きな差がないが、全体的に減少する傾向が見られる。特に 1940 年の雑誌改題以後、雑誌の規格は毎号約 48 頁となり、以前の 12 頁のものより遥かに分量を増やしたものの、誌面に掲載された近代文学に関する文章は改題前の約半分となった。

内容の面からみても、年々変化が見られる。1935 年度に全面的に同時代の中国文化界の状況を紹介するものが見られる。例えば、第 1 号 (1935.3.5) の竹内好による「今日の中国文学の問題」、第 4 号 (1935.6.18) の岡崎俊夫・実藤恵秀による「中国本位文化建設の運動」などがそれに該当する。また、小品文と左翼系芸術の紹介に関する文章が多く見られる。特に、第 6 号 (1935.8.25) と第 7 号 (1935.9.25) は、「現代小品文特集」として刊行され、魯迅、周作人、林語堂、郁達夫などの作品を翻訳した。また、中国民衆の日常生活を描いた漫画、および左翼系芸術——木刻画が熱心に紹介されていた。

そして、1936 年度は魯迅を集中的に紹介した時期である。1936 年 10 月に魯迅が急逝し

¹⁰² 雑誌の編集事情によって、各年度別の時間帯は以下のとおりである。

1935 年度：1935. 3—1936. 3 (第 1 号—第 11 号)
 1936 年度：1936. 3—1937. 2 (第 12 号—第 23 号)
 1937 年度：1937. 3—1938. 2 (第 24 号—第 35 号)
 1938 年度：1938. 3—1939. 2 (第 36 号—第 47 号)
 1939 年度：1939. 3—1940. 2 (第 48 号—第 59 号)
 1940 年度：1940. 4—1941. 3 (第 60 号—第 70 号)
 1941 年度：1941. 4—1942. 3 (第 71 号—第 82 号)
 1942 年度：1942. 4—1943. 3 (第 83 号—第 92 号)

¹⁰³ 表 6 の作成は、資料「『中国文学月報』・『中国文学』の内容一覧」のデータによるものである。

た直後、第 20 号（1936.11.1）は「魯迅特集」として刊行され、作家論・作品論・魯迅に関する目録と年表など、さまざまな形で魯迅を論じた。左翼系作家と魯迅の特集がメインである。

次に 1937 年度から 1940 年度までのあいだに、作家・作品論と小説の翻訳が集中的に掲載されている。とりわけ 1937 年の誌上に作家・作品論に関する文章が多く見られ、沈從文、葉紫、蕭軍などの現実社会を描写する作家が注目されている。1940 年度になると、項目数からみると前年度に比べ大差がないが、その内実は書評を中心とし、作品論と作家論の数が減少している。

そして、1941 年度から、小説の翻訳が一気に減り、中国現地、特に満州などの日本人と関連深い地域の文芸状況が紹介されるようになる。許地山（落華生）、艾蕪などの東南アジアを舞台とする作品が翻訳される一方、日支文化の建設などを主題とするものが確認できる。いずれも、戦争の東南アジアへの展開と中国における戦局の深刻化に関連すると考えられる。また、1941 年 10 月に刊行された第 77 号は「民国三十年記念」特集であり、新文化運動以後に活動していた作家、および中国の文芸雑誌が紹介された。1942 年度に入ると、近代文学については誌面にわずかししか掲載されていない。

このように、本誌における近代中国文学の掲載状況を確認してみたところで、全体的に以下のような傾向があるといえる。まず、1935 年度から 1936 年度までのあいだは、最も盛んに議論が行われた時期である。1937 年度から作家論と作品論が一時的に多く見られ、その勢いは改題まで維持されていた。そして改題後となると、翻訳が減少し、近代文学への関心が弱まる傾向が見てとれる。

二 例会、懇話会および中国文学者による講演

誌上に同時代の中国文学を紹介するほか、中文研は例会、懇話会などを開催し、精力的に近代文学の研究に取り組んだ。機関誌の「会報」によると、1934 年 8 月の周作人・徐祖正歓迎会をはじめ、1937 年までに計 23 回の例会が開催された（表 7 参照）。

表 7 中文研の開催した例会
（中国近代文学に関する内容をコジックで表記した）

	時間	題目/報告者
1	1934.10.29	・郁達夫論（不安の文学）/一戸務 ・最近の中国文壇/辛島驥
2	1934.12.5	・中国新文学の展望/池田孝
3	1935.1.26	・易に就て/郭沫若

4	1935.3.12	・大衆語に就て/武田泰淳 ・啼笑因縁の話/松川朴平
5	1935.4.5	・老舎と沈從文（支那的なる現代作家）/岡崎俊夫 ・呉組綱論/増田渉
6	1935.6.21	・梁啓超の研究/実藤恵秀
7	1935.7.16	・近世漢学者の唐話学に就て/石崎又造
8	1935.9.27	・北平に於る日本文化研究の現状/錢稻孫
9	1935.10.24	・漢初の文化政策に就て/豊田穰
10	1935.11.29	・北平の話/陣内宜男
11	1936.4.27	・趙元任氏のレコードによる中国国音研究/曹欽源
12	1936.6.6	・支那語音について/曹欽源
13	1936.7.4	・唐代莊園文学論/武田泰淳
14	1936.10.3	・張資平の不平衡的偶力/長瀬誠
15	1936.11.4	・紅樓夢の作者をめぐる/吉村永吉
16	1936.12.5	・中国文学研究の方法/竹内好（郁達夫の講演を予定したが、取り消し）
17	1937.1.12	・周作人について/松枝茂夫
18	1937.2.3	・日本文学研究の現状/仲賢礼
19	1937.3.4	・支那文学の鑑賞について/佐藤春夫
20	1937.4.6	・上海文壇の近況/日高磨瑳 ・唐代小説について/土居治
21	1937.5.6	・上海旅行談/小田嶽夫
22	1937.6.4	・音訳語を通じて見たる漢字の表音能力について/魚返善雄
23	1937.7.8	・李健吾の喜劇について/武田泰淳 ・「子夜」と「第三代」/竹内好

例会は主に同人による研究発表の場である。その内容からも分かるように、例会に取り上げられた内容は中国語、古典文学に関するものも見られるが、中国近代文学に関する題目が明らかに多く見られる。

そして、中文研は例会において郭沫若と錢稻孫などのような知名度の高い中国学者を招き、講演を行った。そこから、中文研が中国人文学者と積極的に交流しようとしていたことが窺える。特に1935年1月26日の郭沫若の講演はかなり注目を集めたのである。

郭沫若（1892-1972）は1921年に郁達夫（1896-1945）とともに「創造社」¹⁰⁴を成立した

¹⁰⁴ 創造社：日本留学生によって組織された文学団体。1921年7月（あるいは6月という）上旬に東京で結成され、上海を中心に活動し、1929年2月7日に国民党政府によって禁止されるが、1930年の左翼作家連盟の成立まで活動を持続。中国近代文学の草創期から革命文学の提唱に至るまでを通じて大きな位置と役割を担った。その活動は通常、前後二期あるいは三期に分けられる。主な同人は、郭沫若、郁達夫、成仿吾などが挙げられる。（丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』、東京堂出版、1985、「創造社」項目より抜粋、168頁—170頁）。

人物である。1928年に彼は二度目の訪日をし、その後日本で約10年の亡命生活を送りながら、中国古代史の研究に専念していた。竹内好が郭沫若と知り合ったのは、1933年頃であった。当時、竹内は卒業論文「郁達夫研究」の執筆のため、千葉県市川市に住んでいた郭沫若を訪問した。竹内の話によると、当時の郭沫若は「すでに中国古代史の研究では世界的な学者になっている」¹⁰⁵という。

そして、中文研の成立後、郭沫若は時々その活動に関わるようになり、その存在は中文研の人々にとって「はげまし」となっていた。竹内好はこのように回想している。

私たち（竹内自注：岡崎俊夫、武田泰淳、竹内好等）は昭和九年から「中国文学研究会」をはじめた。この会は郭氏から有形無形のはげましをうけた。雑誌の題字は郭氏に書いてもらった。研究例会に謝礼なしに出でいただいたりした。ただ文学については語りたくないというので、このときの演題は「易について」だった。異例の盛会で、聴衆が堂にあふれた。在日留学生が多かった。¹⁰⁶

そして、この例会の実際の様子について、竹内の日記に下記のように記されている。

一月二十六日（土）

涙流るる盛会なり。無慮一百零四名。学士会館第二号室、殆ど溢れんとして椅子の不足を呈する程なり。口毎に盛会の祝辞を与えらる。高田（筆者注：高田真治）教授、竹田（筆者注：竹田復）助教授、共に来る。郭氏の講演、一時半にはじまり三時過ぎまであり。郭氏自身も極めて昂奮せる様子なり。（略）曹氏（筆者注：曹欽源）、速記者を伴い来り、講演を『同仁』に貫いたしと云う。岩波の『思想』に内定の故を以て断り、（略）留学生数十名来る。多くは新聞を見て来りしようなり。¹⁰⁷

この引用箇所書かれているように、参加者は主に学者と留学生であるが、今度の例会がメディア界にも関心を持たれていたことが推察できる。のちに郭沫若は講演に基づいて、同年4月号の『思想』（第155号、岩波書店）に『『易』の構成時代』と題する論文を発表した。これをあっせんしたのも竹内好と岡崎俊夫である。また、曹欽源（1907-1993）は中文

¹⁰⁵ 竹内好「郭沫若氏のこと」（『竹内好全集』⑬、57頁）。初出：『秋田魁新聞』（1955.12.6）。

¹⁰⁶ 同前。

¹⁰⁷ 竹内好「中国文学研究会結成のころ」（『竹内好全集』⑮、92頁）。

研の同人の一人であり、当時、東京同仁会¹⁰⁸の雑誌『同仁』¹⁰⁹を編集していたため、曹は郭沫若の講演を『同仁』に掲載することを企てた。結局それは実現できなかったが、竹内好日記によると、講演の翌日に竹内、武田、岡崎は郭沫若と『思想』と『同仁』の件を打合せたという。¹¹⁰その結果、郭沫若は『同仁』の1935年4月号に「考史余談」を寄稿したのである。

このように、中文研同人の活動において、郭沫若は様々な形で協力をしたといえる。中文研は、会名に「支那」ではなく「中国」を使い、そして同時代の中国文学者を日本に積極的に紹介している。このような活動によって、当時に文壇と学界の名士として誉れ高い郭沫若は「会に対し極めて熱心に支持を寄せらる」¹¹¹という。

そして、例会のほかに、中文研は中国文人との懇話会を三回開催した。懇話会は「研究を主とする例会に対し肩のこらぬ集まりを持とうという趣旨で設けたもの」¹¹²であり、三回の懇話会の概況は以下の通りである。

第一回（1934.12.9）は謝冰瑩（1906-2000）を招き、「吾が文学経歴」と題する講演が行われた。謝冰瑩は中文研の初期の活動に緊密な関係を持っていたため、その詳細について後述に譲る。第二回（1935.5.5）は董康の「中国文学我見」であり、董康（1869-1947）は清末の法律の編纂に関わり、中国の戯曲研究にも詳しい人物である。のちに彼は中華民国の法典編纂会副会長・司法総長・財政総長などの司法関係の要職を歴任する、文化人というよりは官僚である。¹¹³1935年4月4日、斯文会の湯島聖堂の復興竣工式・孔子像鎮斎式が行われ、董康は招待されて来日し、中文研の機関誌の創刊を支援していた田中慶太郎（文求堂主人）は、董を中文研に紹介し、この懇話会を企画した。¹¹⁴そして、第三回（1935.5.18）は鐘敬文

¹⁰⁸ 同仁会は中国における医学と医療技術の普及を目的に、1902年6月から1945年まで活動していた医学関係の団体である。その主な事業は中国と朝鮮への医師の派遣、満州と朝鮮における病院の開設、および中国人医療関係者の育成だという。同仁会と雑誌『同仁』に関する先行研究は、大里浩秋「同仁会と『同仁』」（『人文学研究所報』39、神奈川大学、2006.3）が挙げられる。

¹⁰⁹ 『同仁』（1927.5-1938.5）は中国の医療関係の内容を日本に紹介するために発行された雑誌であるが、その内容は医学だけではなく、中国の文学事情の紹介も含まれている。

¹¹⁰ 竹内好は日記においてこのように書かれている。出典：竹内好「中国文学研究会結成のころ」、前掲書、92頁。

一月二十七日（日）

朝、武田、岡崎来り、互いに労をねぎらう。並びに批判。共に郭氏を訪問することにする。（略）郭氏大に喜び迎う。『思想』及『同仁』の件打合わす。

¹¹¹ 同前、93頁。

¹¹² 立間祥介編「中国文学研究会年譜」（『復刻中国文学』別冊、汲古書院、1971、40頁）。

¹¹³ 董康の詳細について、孔穎「晚清中央政府の法制官董康の日本監獄視察について」（『或問』第18号、近代東西言語文化接触研究会、2010）を参照。

¹¹⁴ 立間祥介編「中国文学研究会年譜」、前掲書、48頁。

(1903-2002)の「中国文学の蒐集と探求」である。鐘は中国民俗学に関する学者であり、当時、早稲田大学に留学中であった。懇話会への出席を依頼したのは、同じく早稲田大学出身の実藤恵秀(1896-1985)¹¹⁵である。

ただし、研究発表の場としての例会と中国文人を囲む懇話会はどちらも長続きせず、1937年7月以後、中国文学の講読会と中国語の発音講習会以外に、前述したようなイベントは開催されなくなった。にもかかわらず、少なくとも中文研は第一期において例会と懇話会を通して、中国文人との交流を深めていたといえる。彼らは中国近代文学研究の開拓に机上の空論を語るのではなく、中国の文学者との接触を通して、同時代の中国にアプローチしようとした。

三 同時代中国文学の翻訳活動

前述した雑誌編集とイベントの開催以外に、中文研の翻訳事業もかなりの成果を挙げた。1934年成立後、同人による中国文学の翻訳書が数多く出版されている。詳細は表8を参照する。

表8 中文研による翻訳書の出版¹¹⁶

	訳者	書名(原作者)	出版社	出版年	注
1	増田渉	『支那小説史』(魯迅)	サイレン社	1935	
2	増田渉、松枝茂夫、武田泰淳	佐藤春夫編『支那印度短編集』	河出書房	1936	凌濛初「幸運児」、魯迅「眉間尺」ほか
3	増田渉ほか	『大魯迅全集』	改造社	1937	
4	松枝茂夫	『中国の西北角』(長江)	改造社	1938	范長江『中国的西北角』
5	松枝茂夫	『北伐』(郭沫若)	改造社	1938	
6	小田嶽夫	蕭軍『第三代』	改造社	1938	
7	増田渉	『上海の真夜中』	改造社	1938	茅盾『子夜』(「大陸」に

¹¹⁵ 実藤恵秀は1926年に早稲田大学支那文学科を卒業し、在学中から中国人留学生に関心を持っていた。中文研の同人に参加したのは1935年4月からである。当時は早稲田高等学院に教鞭をとっていた。

¹¹⁶ 表8の作成は立間祥介編「中国文学研究会年譜」(前掲書)、飯倉照平編「松枝茂夫略年譜・著作目録」(『松枝茂夫文集』第二巻、研文出版、1999)、立間祥介・檜山久雄編「岡崎俊夫編訳書目録」(岡崎俊夫『天上人間』、河出書房新社、1961)、古林尚編「武田泰淳年譜」(埴谷雄高編『武田泰淳研究』、筑摩書房、1973)、「増田渉教授略歴(自記による)」(『人文研究』第19巻第10号、大阪市立大学文学部、1968)を参照した。

					連載)
8	松枝茂夫	『周作人隨筆抄』	改造社	1938	
9	飯塚朗	『斷鴻零雁記』(蘇曼殊)	改造文庫	1938	
10	小田嶽夫	『同行者』(蕭軍)	竹内書房	1938	
11	松枝茂夫・佐藤春夫	『浮生六記』(沈復)	岩波文庫	1938	
12	岡崎俊夫	『母親』(丁玲)	改造社	1938	大陸文学叢書 5
13	武田泰淳	『支那邊疆視察記(下卷)』(陳賡雅)	改造社	1938	
14	松枝茂夫	『辺城』(沈從文)	改造社	1938	大陸文学叢書 7
15	松枝茂夫	『中国新文学之源流』(周作人)	文求堂書店	1939	支那学翻譯叢書 4
16	中文研編	『春桃』短編集	伊藤書店	1939	支那現代文学叢刊・第1輯
17	中文研編	『蚕』短編集	伊藤書店	1939	支那現代文学叢刊・第2輯
18	飯塚朗	『繁星』(謝冰心)	伊藤書店	1939	
19	松枝茂夫・岡崎俊夫	『西康西藏踏査記』(劉曼卿)	生活社	1939	
20	猪俣庄八	『創造十年』(郭沫若)	東成社	1940	現代支那文学全集・第1卷
21	岡崎俊夫	『沈淪』(郁達夫)	東成社	1940	同前・第2卷
22	武田泰淳	『虹』(茅盾)	東成社	1940	同前・第3卷
23	小田嶽夫・武田泰淳	『愛すればこそ』(蕭軍)	東成社	1940	同前・第4卷
24	飯村聯東	『新生』(巴金)	東成社	1940	同前・第6卷
25	武田泰淳ほか	『女流作家集』	東成社	1940	同前・第9卷
26	増田渉ほか	『隨筆集』	東成社	1940	同前・第10卷
27	松枝茂夫ほか	『文芸論集』	東成社	1940	同前・第12卷
28	松枝茂夫	『紅樓夢(一)』	岩波文庫	1940	
29	松枝茂夫	『周作人文芸隨筆抄』	富山房	1940	
30	松枝茂夫	『瓜豆集』(周作人)	創元社	1940	
31	松枝茂夫	『紅樓夢(二)』	岩波文庫	1940	
32	岡崎俊夫	『老殘遊記』(劉鉄雲)	生活社	1941	中国文学叢書
33	竹内好	『賽金花』(劉半農)	生活社	1941	同前

34	実藤恵秀・豊田穰	『日本雑事詩』(黄遵憲)	生活社	1941	同前
35	飯塚朗	『啼笑因縁』(張恨水)	生活社	1941	同前
36	松枝茂夫	『紅樓夢(三)』	岩波文庫	1941	
37	大島覚	『湖南の兵士』(沈從文)	小学館	1942	武田泰淳訳

表 8 に示されている通り、中文研の同人は数多くの中国近代文学の翻訳書を出版したため、翻訳は中文研の雑誌編集以外の一大事業と言っても過言ではない。このような活動をサポートしたのは、佐藤春夫と増田渉である。佐藤春夫(1892-1964)は1900年代から詩人と作家として活動し、その文学作品には中国文学の面影が色濃く反映されている。さらに、佐藤春夫は中国通俗小説と詩の翻訳者としても名高い。1923年に小説短編集『玉簪花』(新潮社)をはじめ、小説「揚州十日記」(王秀楚作、『中央公論』1927年12月号)、詩集「車塵集」(武蔵野書院、1929)、「孤独者」(魯迅、『中央公論』1932年7月号)などの一連の翻訳を行った。特に当時、中国の通俗文学の口語訳はほぼ行われていなかったため、佐藤春夫は先駆者的存在と言っても過言ではない。¹¹⁷

一方、増田渉(1903-1977)は高校時代から佐藤春夫に傾倒し、中国文学に目覚めるようになった。¹¹⁸そして、大学に入ると「大学の教室が、どうにも非文学的で、というよりは現代ばなれがしていて、私がかねて描いていた中国文学の夢とはおよそ違いすぎる世界、漢学的世界であって、何の生新なものも与えてくれなかった」¹¹⁹といったように、大学において彼の中国文学への想いは満たされなかった。その時、増田は佐藤春夫に手紙を出し、以後、佐藤の訪問日には「たいてい出かけて行って、学校ではみたされないものを、佐藤氏の応接間でうけるとようになった」¹²⁰という。やがて、増田は佐藤春夫の中国小説の翻訳の下訳をするようになり、佐藤と緊密な関係を結んだ。¹²¹

その後、増田は竹内好と知り合い、中文研の創立頃から同人として参加したのは1934年頃であった。増田と中文研との関係について、竹内は「中国文学研究会との関係にかぎっていうと、彼はいつも一定の距離をおいて、いくらかの警戒心と、かなりの程度の無関心をも

¹¹⁷ 佐藤春夫と中国文学との関係、および佐藤春夫の翻訳活動について、大内秋子「佐藤春夫と支那文学」(『日本文学』37、1971.1)、勝山稔「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について—佐藤春夫「百花村物語」を中心として」(『中央大学アジア史研究』32、2008.3)などを参照されたい。

¹¹⁸ 増田渉「佐藤春夫と魯迅」(『魯迅の印象』、角川選書、1970)。

¹¹⁹ 同前、267頁。

¹²⁰ 同前、267頁。

¹²¹ 増田渉の翻訳活動と佐藤春夫との関連性について、勝山稔「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について：増田渉の事例(一九二七)を中心として」(『国際文化研究科論集』19、2011.12)を参照。

って、私たちを見ているようであった」¹²²と回想したが、実は翻訳事業において、増田は重要な役割を果たした。

1937年11月、増田は「改造社ヨリ『大魯迅全集』出版ノ責任者トシテ招カレ、同全集ノ企画編集、及ビ翻訳ニ従事」¹²³し、さらに翌年2月に改造社を入社してから、1939年3月退社するまでに「翻訳及ビ『改造』『大陸』ノ編集ニ参加」¹²⁴した。増田の改造社入社は、中文研の翻訳事業の展開にとって大きな力となった。これについて、松枝茂夫（1930年東京帝国大学文学部支那文学科卒業、中文研同人）の証言が残られている。

増田さんには随分世話になった。私を佐藤春夫先生のところに連れて行ってくれ、そのおかげで「浮生六記」を佐藤さんと共訳の形で岩波文庫に入れてもらえた。改造社で「大魯迅全集」を出版したとき、増田さんは責任編集者として改造社員になったが、私もその訳者の一人に加えてもらった。その後、改造社から長江の「中国の西北角」、郭沫若の「北伐」、それから「周作人随筆集」などを続けさまに出版することができたのも、みな増田さんの蔭の力のたまものであった。¹²⁵

松枝の回想を通して、増田渉と佐藤春夫は、中文研の翻訳事業に大きな影響を与えた存在であることを確認できる。前述したように、中文研に参加する以前に、増田は中国文学の翻訳を通してすでに佐藤春夫と緊密な関係を持っていたため、増田を介して、中文研の同人は佐藤春夫と知り合うことができた。さらに、佐藤は中文研の同人に翻訳上の指導を与え、増田は翻訳の企画から、出版社との仲介まで、中文研の翻訳事業に働きかけた。また、1940年に東成社によって出版された『現代支那文学全集』も、この両者と緊密な関係を持っている。増田渉は「奥野さんを憶う」において、その経緯を記述している。

昭和十五年の初め、東成社から『現代支那文学全集』十冊が出版されたが（増田注：全部出なかったように思う）、同社が佐藤春夫氏に相談し、佐藤氏が奥野さんと私とを推薦したというようなことで、その前年から私は奥野さんと一しょに、その全集のプランを立てたり、ねり直したり、また翻訳者を選定したりの用事で、度々顔をあわせるようになった。¹²⁶

¹²² 竹内好「増田渉——人と学問」（『竹内好全集』⑫、110頁）。初出：『中国の八大小説——中国近世小説の世界』（平凡社、1965）。

¹²³ 「増田渉教授略歴（自記による）」、前掲書、737頁。

¹²⁴ 同前、前掲書、738頁。

¹²⁵ 松枝茂夫「増田渉さんの思い出あれこれ」（『松枝茂夫文集』第二巻、研文出版、1999、169頁）。初出：『文学』1977年5月号、岩波書店。

¹²⁶ 増田渉「奥野さんを憶う」（村松暎編『奥野信太郎 回想集』、三田文学ライブラリー、1971、285頁）。

「奥野さん」とは、1925年に慶応大学文学部を卒業した奥野信太郎（1899-1968）であり、増田渉と同じく佐藤春夫の門弟である。佐藤の推薦によって、増田と奥野は『現代支那文学全集』の企画と編集を行い、中文研の同人を参加させた。このシリーズはもともと全12巻を計画した（図2参照）が、結局八巻で中絶した。にもかかわらず、中には郭沫若などの創造社の作品をはじめ、東北作家である蕭軍の小説、随筆など、幅広く同時代の中国文壇に活躍していた作家が包括され、中国近代文学の日本での受容に多大な貢献を示したといえる。



図2 『現代支那文学全集』 広告（『朝日新聞』 朝刊 1940. 1. 28）

上記のとおり、中文研の翻訳活動は第一期において主に改造社を通して展開されていたことが確認できた。無論、彼らが中国近代文学を翻訳したのは第一期だけではなく、1942年まで持続していたが、この翻訳事業の基礎を築いたのは、初期における増田渉と佐藤春夫の種々の努力であるといえる。

本節の内容をまとめると、主に以下の三点が挙げられる。まず、誌上に掲載されている文章の概況を見てみると、中文研の中国近代文学に関する議論は主に改題以前の1935年度から1939年までの間に集中していることが分かった。そして、1937年までに開催された中文研の例会と懇話会を通して、その同人たちが積極的に中国の文学者に接触すると同時に、中国の文学者からも多大な支援を受けた様子が窺える。最後に、中文研の翻訳活動の実状を考察することによって、長年にわたる同人の翻訳活動を支えていた増田渉と佐藤春夫の存在を浮き彫りにした。このように、中文研が中国近代文学を日本に受容するプロセスは主に第一期において展開されていくといえる。要するに、中文研の同人たちは、文筆活動に止まらない行動によって中国近代文学に接近し、その過程を通じて戦時下における日中文化界の人的なネットワークを構築することもできたことなのである。

第三節 中国文学をめぐる人的交流

第二節で、機関誌に現れた中国近代文学に関する基本的な情報を確認した。その中に、中文研の同人たちが同時代の中国文学者との間にさまざまな人的交流を実現した様子が窺えた。本節においては、増田渉と魯迅との交際、謝冰瑩と中文研との交流、および中文研の茅盾に対する評価を中心に、これらの人的な交流は中文研同人の中国認識の形成にどのような役割を果たしたかについて探求してみる。

一 増田渉と魯迅

前述したように、増田渉は中文研の同人であり、創立から解散までその中心人物として活動した。そして、増田は魯迅と深い関係を持ち、両者の交際は中文研の初期活動の方向に影響を与えたのである。その経緯を明らかにするために、まず増田渉の略歴、および中文研に参加する以前の魯迅との関係を見てみよう。

1926年、増田渉は東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。在学中に塩谷温教授の中国小説史、および瀧精一教授の東洋美術史講義に関心を寄せていた一方、学外では前述した佐藤春夫の指導を受け、中国小説の翻訳を手伝った。魯迅を知ったのも在学中であり、同級生が集った研究会において、増田は『故郷』について論評し、魯迅に大きな関心を示した。¹²⁷そして、大学卒業後の1931年3月から12月まで上海に遊学した。その時、上海には内山完造の経営している内山書店があり、日本からの文人たちは殆ど内山完造を介して魯迅を訪ねてきたのである。¹²⁸増田は佐藤春夫から内山完造あての紹介状をもらい、内山によって魯迅に紹介され、さらに師事することもできた。「毎日約三時間、同氏ノ寓居デ『中国小説史略』及ビ『呐喊』『彷徨』等ノ講解ヲ受ク」¹²⁹という。この経験によって、彼は1932年4月号の『改造』に「魯迅伝」を發表し、これは魯迅を日本に紹介した嚆矢でもあった。

その後も、増田は魯迅と手紙によって交流を保っていた。それらの手紙をみると、増田が帰国後、魯迅は翻訳上の指導を続けていただけではなく、増田の中国文学者との交流にも関連していた。¹³⁰また、魯迅は増田に中国の文学事情を伝え、増田は直ちに機関誌において公

¹²⁷ 増田渉『魯迅の印象』、前掲書、14頁。

¹²⁸ 魯迅と内山書店との詳細について、太田尚樹『伝説の日中文化サロン：上海・内山書店』（平凡社新書、2008）を参照。

¹²⁹ 「増田渉教授略歴（自記による）」、前掲文。

¹³⁰ 1934年末、増田渉は呉組紺（1908-1994、1930年代に中国の農村を題材とする小説家として文壇に高い評価を得た）の小説に注目しはじめ、呉と文通によって小説における「ユーモア」の技法について交流するようになった。そして、増田は呉に送った手紙を魯迅にも見せ、魯迅から様々な批判とアドバイスを受けていた。このあたりの事情について、丸山昇『魯迅添削・呉組紺宛増田渉書簡原稿』解説（『汲古』10、汲古書院、1986.12）において詳しく述べられ

表する事例も見られる。例えば、魯迅は 1935 年の手紙において、中国での文学作品に対する検閲事情についてこのようにいった。

1935.1.25

『文学』は僕から書屋に頼んだのです。(略) 二月号には僕の「病後雑談」が出るはづで、それは原文の五分之一、あとの五分之四は皆な検査官にけされたのです。つまり拙作の首です。

検査官の中に頗るモガが居ます。彼の女達(増田注:これは明治時代のかきかた)は僕の文章をわからないで手を入れるから、やられるものは頗る気持がわるい。¹³¹

魯迅は自分の文章が検閲官によって無茶に削除される事情を増田に詳しく説明し、そして、このような中国文壇事情は増田によって素早く日本に紹介された。同年の『中国文学月報』創刊号(1935.3.5)に発表された「雑言」において、増田は魯迅の「病後雑談」の話を採りあげ、中国の文学に対する検閲制度を批判した。増田は言う。

早い話が、今日の支那文学が当面してゐる実際問題として、無茶な検閲制度がある。(略) 検閲がやかましいとは前から聞いてゐるが、この頃また聞いた話ではやかましいといふより出たらめのやうだ、例ば「文学」二月号の魯迅の「病後雑談」などは原文の五分之四が刪去されたとかいふ話だ、すると活字になつたのは五分之一だ。(略) その検閲なるものが、何も解りもしないモガなどのやる仕事だといふから恐入る、(略) だからこんな代物に手入されて活字になつた部分をつかまへ、構成に缺けてゐるとか、混乱してゐるとか言つてみたところで、お話にならない話である。

増田は魯迅の手紙に書かれた話を再現し、中国文壇の検閲事情を述べ、不完全な作品に対して構成を指摘しても話にならないと主張した。当時に日本の学界にせよ、民間にせよ、同時代の中国文学をあまり評価していなかった。この文章を誌上に載せるのは、中国の文学事情を日本に知らせた一方、日本の研究者が中国文学を客観的に評価するために根拠を提供したといえる。

また、中国文学の事情だけではなく、魯迅は、1931年11月に増田に自分の編集したドイツの木刻画集を贈呈し¹³²(図3参照)、増田の帰国後も上海の内山書店を通して、『北斗』、『中国論壇』、『文学』などの左翼作家連盟の機関誌をはじめ、『水滸伝』、『鏡花縁』、『儒林外史』、『老残遊記』などの白話小説、張天翼などの左翼小説にいたるまで、増田に様々な中

ている。

¹³¹ 「魯迅の手紙」(増田渉『魯迅の印象』、前掲書、183頁。なお、原文はすべて日本文である。

¹³² 『梅斐爾徳木刻士敏土之圖』(三間書屋、1930)、原本は関西大学「増田渉文庫」に所蔵。

国の雑誌と書籍を郵送しつづけたことが分かる。¹³³例えば、1935年3月と4月の手紙に下記の事情が書かれている。

1935.3.23

又別に『文学季刊』(四)一冊と『芒種』と『漫画生活』と二冊ずつ送りました。『芒種』は反林語堂(増田注:林語堂に反対)のもので『漫画生活』は大に圧迫されて居る雑誌です。上海ではエロチクの漫画の外はこんなもの、見本として。

1935.4.9

三月卅日御手紙到着、先月『小品文と漫画』一冊送りました。¹³⁴

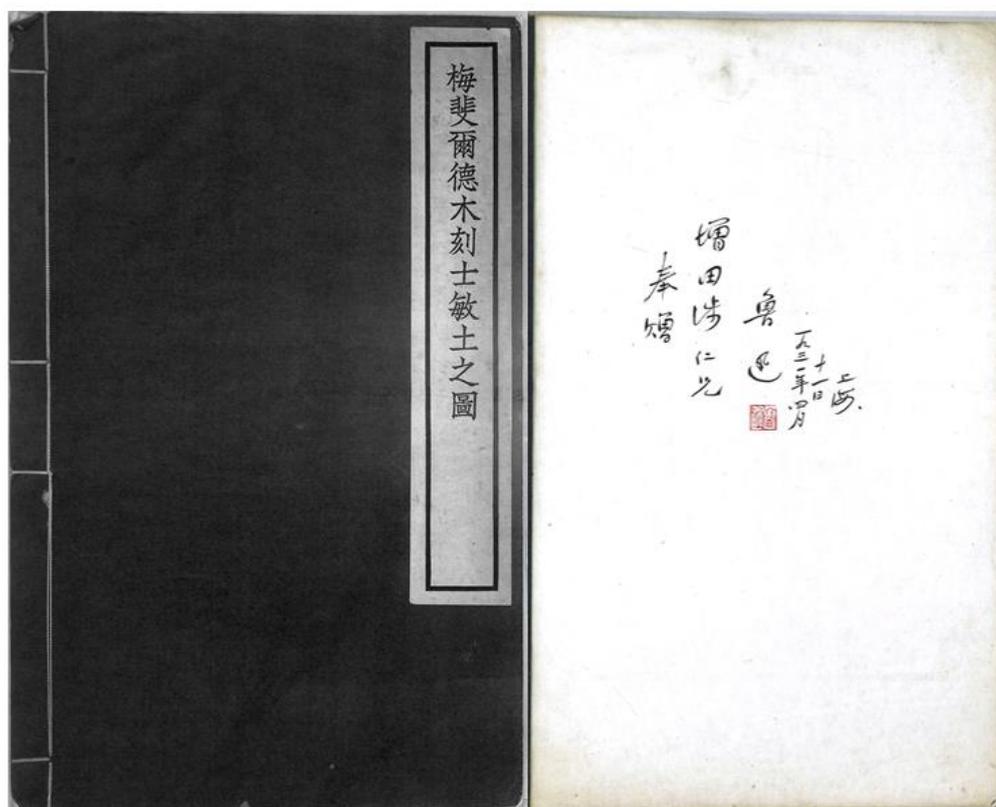


図3 梅斐爾德木刻士敏土之圖

『文学季刊』は1934年、鄭振鐸によって編集された雑誌であり、巴金、老舎などの作品がそこに発表された。また、『芒種』は1935年上海に創刊された小品文を中心とする雑誌である。ここで指摘したいのは、1935年の機関誌に小品文が盛んに掲載され、漫画と木刻画

¹³³ 『魯迅書簡——致日本友人増田涉』(香港朝陽出版社、1973)を参照。

¹³⁴ 「魯迅の手紙」、前掲書、187頁-188頁。

に対する紹介もこの時期において行われたということである。つまり、魯迅が増田に小品文と漫画に関する雑誌を送った時期において、中文研機関誌の誌面もまた小品文と漫画・木刻画を中心にしていたということである。

ここで、再び前述した竹内好の増田渉に関する回想を思い出す。増田は中文研と「一定の距離をおいて」、確かに誌上にもさほど投稿しなかったが、前にも触れたような彼と中文研の翻訳事業との関わり、そして1935年前後に彼と魯迅との交流を考慮したら、増田渉は中文研の活動を活性化しただけではなく、初期の機関誌の編集方向にも影響を与えたといえるのではないか。

二 左翼系作家との交流：謝冰瑩、茅盾を中心に

設立当初の中文研は、中国の左翼系作家との交流が緊密であった。謝冰瑩はその中の一人である。謝は1927年北伐に参加した経験を持つ中国の女性兵士の第一人者であり、翌年その体験に基づいて執筆された『従軍日記』は「中央日報」に連載されていた。この『従軍日記』は林語堂によって英訳され、さらに1929年に上海の春潮書局によって出版され、謝冰瑩が文壇に一躍脚光を浴びる。初めての来日は1931年で、「東京左聯」の創立に参加した。同年末、「九・一八」事変を抗議して帰国した。

1934年秋、謝冰瑩は留学のため再び日本に来航し、すでに中国の女流作家として注目を集めていた。同年の12月9日、中文研の第一回懇話会が開かれ、謝冰瑩がゲストとして招かれ、「吾が文学経歴」をテーマに講演を行なった。その様子について、竹内好は日記で以下のように記した。

十二月九日（日）

中国文学研究会第一回懇話会なり。（略）極めて盛会。窪川稲子、中条百合子を除き出席回答者全部来る。殊に長谷川時雨、若林つや子、村田修子（『婦文』〔婦人文芸〕）を集めたるは珍しき会なり。謝氏の熱弁一時間半、満場を魅了し去る。ライケン〔川上雷軒〕曰く、段々女ぷりが上がってきた。（略）¹³⁵

この懇話会には、中文研だけではなく、長谷川時雨（1879-1941）などの日本で活躍していた女性の作家なども招待されている。そして、翌年の『婦女文芸』1月号に懇話会に関する記事が掲載され¹³⁶、謝冰瑩の経歴と作品が広く知られるようになった。さらに、第2号（1935.4.5）の「来朝中の中国文人」において、竹内好は「一言に盡せば、彼女の特質は純朴な情熱の中にある。『従軍日記』の成功は、この素晴らしい生活経験をそのまま奔放に歌

¹³⁵ 『竹内好全集』⑮、79頁－80頁。

¹³⁶ 村田修子「来朝中の中国女流作家謝冰瑩女史を囲んで」（『婦人文藝』、新知社、1935.1）。

ひ出すことの出来る自由な感覚に負ふところが多い」と、彼女の『従軍日記』に描かれた生活体験の純朴性を高く評価した。

また、彼女と初期の中文研との交流の緊密さに関して、1945年に竹内好が謝冰瑩へ送った手紙「不堪回首」にその一端が窺える。

武田泰淳という名前と言ったら、長泉院が必ず記憶に浮かんできます。それは東京の西郊にあったお寺で、また武田の自宅でした。君は日本に遊歴しに来たその年、我々はちょうど中国文学研究会の設立を準備していた時でした。みんなが集まって、語り合うチャンスは非常に多く、この長泉院も閑静な所であり、私達の穏かな集まり所でもありました。(略) 私達は、毎日そこに集結し、全心の情熱を傾けて、文学に関する種々の意見を交わしました。¹³⁷

これを見ると、謝冰瑩が懇話会だけではなく、日常的に中文研の同人と頻繁に文学上の交流を行なったことは明らかであろう。

そして、中文研の同人に注目された中国の左翼系作家は、謝冰瑩だけではない。同時代の中国で、左連に加盟した茅盾(1896-1981)は、長編小説『子夜』(1933)の出版により、30年代の文壇の寵児として一躍脚光を浴びた。そのため『中国文学月報』にも、茅盾に対する関心が見られる。無論、同人たちの評価が一致していたわけではないが、その中には類似の傾向が見られるのである。

竹内好は、第14号(1936.5.1)に茅盾を「悪文家」として酷評し、またその作中人物に対する描写が機械的、不自然であると批判した一方、茅盾の成功した理由について以下のように述べている。

彼の作品が好評を得たといふのは、彼の人生解釈が消極的に正しきが故に外ならぬ。言ひ換へれば、文学としての渾然さが然らしめるのではなくて、文学の外の、いはば社会的に切迫した不安の感情が彼一身の上に凝固して露呈されてゐるからである。現存社会の機構とこれを支配する法則の实在を確信しながら、その発展について期待する自由を奪はれた智識階級の鬱然たる気運に際会したからである。¹³⁸

¹³⁷ 原文：

提起武田泰淳这个名字來，勢不可不回憶到長泉院，那是一個仏寺，也就是武田的住宅，处在東京西郊。那年你來遊歷日本，我們恰好在籌辦中国文學研究会，大家聚会暢談之機會，当然是够有的。而這個長泉院，地方特別幽美，等於是我們一個美滿的俱樂部。(略) 我們天天聚在一起，傾出滿肚裏的熱情來討論着文学上種種的意見。

竹内好「不堪回首」(『竹内好全集』⑬、92頁)。原文は中国語で書かれ、引用文は筆者訳。

¹³⁸ 竹内好「茅盾論」(『中国文学月報』第14号、1936.5.1)。

つまり、竹内から見れば、茅盾の成功した原因は、その文学作品によるものではない。むしろ、茅盾の小説が中国で流行していたのは「文学の貧困を立証する以外に何物も含まれぬ」¹³⁹と、竹内は言った。茅盾は 1930 年代の中国農村を描く作家として広く知られ、社会の現実に対する「厳密な観察」と「客観的な描写」¹⁴⁰を重要視している。竹内の理解した茅盾の成功は、彼がリアリズムの手法によって現実社会の不安をそのまま小説に暴露し、またその感情が中国の知識人の共感を得たということにある。このようにして、竹内好は完膚なきまで茅盾を批判したが、その小説に現れたリアリズムを感知したといえよう。

竹内の酷評と対照的に、増田渉は茅盾を高く評価した。1936 年 6 月、増田は、魯迅の病氣見舞いのため上海を訪れた際、魯迅の紹介で茅盾と面会することができた。その事情を記したのが、第 18 号に載せた「茅盾印象記」である。面談の中で、茅盾に「『子夜』を読んでどう思ったか？」と問われた時、増田は以下のように答えたのである。

作者の巨大な力量を覚えた。深くとは言へないが、広くあらゆる現実的な問題的な社会の各面をムンツ、ムンツと掴み来たつて、それを捏混し、しかも全体として時代的な歴史の流れの方向へとグイグイひた押しに押しころがして行く大胆にして計画的な腕力といふか蛮力といふか、(略) 何にしても視野は広いし、時代を全体として克明に描き取らうとしたケタ外れの大陸的な膂力だ。(略) 今日の日本には今日の支那の時代性をとらへて描いたものを紹介したいと思つてゐる、及ばずながら僕はこの方面に努力したい、子夜が今日の支那を、社会的な時代性を描いてゐるといふ点に於て、僕は日本に紹介したい。¹⁴¹

増田は『子夜』に強い関心を示し、その中に表れた現実的な社会性に評価を与えた。竹内の酷評と正反対ではあるが、両者はともに『子夜』に読み取られるリアリスティックな視点を認めたのである。茅盾の『子夜』、および前述した謝冰瑩の『従軍日記』は、題材が異なるものの、中国の民衆の現状を反映した点において共通している。

中文研が接触したこの二人は、いずれも中国の左翼作家として活躍していた人物であり、1930 年前後の中国では、民衆を題材とする左翼文学が最も盛んに行われていた。中文研の同人が魯迅をはじめ、謝冰瑩や茅盾などのような左翼系作家に接近するのは、このような時代的な流れでは道理にかなう行動といえるだろう。これによって、中文研の人々は中国文学でのリアリズムに注目するようになる。増田渉の言ったように、中国文学を日本に紹介した

¹³⁹ 同前。

¹⁴⁰ 茅盾は 1922 年に発表した「自然主義與中国現代小説」(『小説月報』第 13 卷第 7 期)において、自然主義文学に用いられている「客観描写」(客観的に描写すること)と「実地観察」(現実を厳密に観察すること)の手法を提唱した。

¹⁴¹ 増田渉「茅盾印象記」(『中国文学月報』第 18 号、1936. 9. 1)。

い理由は、そこに現れた「今日の支那の時代性」である。つまり、中国人の現実的な生活から反映された中国の時代的特徴を日本に知らせたい。このような姿勢は、後に本誌の民衆重視の基礎的なものになったのではないかと考えられるのである。

第四節 戦時下の中国の民衆に対する注目

第三節では、中文研の左翼系作家との接触を取り上げ、そこに現れた彼らのリアリズムに対する関心を提示した。それは、彼らの現実社会における中国の民衆に対する関心につながっている。

このような中国の民衆に対する関心は、既に創刊号（1935.3.5）に見え、「農民文学」や「大衆語」などの提起にも反映されている。また、誌上において掲載された漫画・木刻画、および中国の現実社会を描写する農村文学の紹介と評論などが挙げられる。本節は、近代中国の漫画と木刻画、および農村文学への関心という二点から、中国の現実を表現する美術と文学に対して中文研はどのように認識していたのかについて検討を試みる。

一 漫画と木刻画からみた民衆と労働者の姿

前述したように、1935年頃に魯迅は増田に文学雑誌だけではなく、漫画・木刻画に関する雑誌をも中国から送った。同じ時期に、『中国文学月報』の誌上に漫画と木刻画が転載されている。具体的には表9のようになる。（図4、図5を参照）

表9 『中国文学月報』に転載された中国近代漫画と木刻画

タイトル	作者	掲載号	出处
我們所造的（漫画）	豊子愷	第6号	『太白』
北海所見蒙古人（漫画）	葉浅予	第6号	『時代漫画』
「夏」の一部（漫画）	胡考	第6号	『時代漫画』
三農婦（木刻画）	羅清楨	第7号	『文学』
口入屋（木刻画）	野夫	第7号	『太白』
泊（木刻画）	張慧	第9号	未記載
工場地帯（木刻画）	新波	第9号	未記載

まず、漫画を見てみよう。漫画は第6号（1935.8.25）に三つの作品が転載され、いずれも当時の中国民衆の生活をテーマにした作品である。（図4-1、図4-2、図4-3を参照）



図4-1 我們所造的

図4-2 北海所見蒙古人

図4-3 「夏」の一部

図4 『中国文学月報』に転載された漫画

そして、漫画の掲載について、竹内は同号の「解説」で以下のようにコメントしている。

中国の漫画は腹をかゝへて笑つてすませるアメリカ式のものでなく、何かしら小市民を嘲笑したり貧民に同情したりする漫画家の目玉が我々の方を睨んであるやうだ、といはれる。

豊子愷は漫画界の大先輩であり、最近はそのリリズムを市井描写に融込ませて独自の味ひを出してゐる。(略)「我們所造的」(俺たちが拵へた)は「太白」から取つた。

葉浅子の「北海所見蒙古人」は(略)実際に目で見た庶民生活を描く所謂速写(スケッチ)の試みの一例として挙げた。(略)特に小市民生活の鋭い批判を蔵し、中国漫画の優れた一面である。

胡考は特異のペースと技巧をもち、豊子愷と別の意味で抒情派である。(略)本号に転載したのは「時代」(筆者注:『時代漫画』のこと)所載の「夏」と題する人物八人より成る構成の断片で、大意次の説明がある。

夏——こゝにはアイスクリームも扇風機もプールもない。

しかし我々は我々の、団扇や、水や、風や——とに角我々も毎年夏を過してゐることは事実だ。¹⁴²

上記したとおりに、本誌において転載された漫画は、市井の描写、庶民生活を主題として竹内によって解釈されたものである。中国漫画史研究の第一人者である畢克官氏によると、1930年代は近代中国漫画の発達期であり、その中で、中核的な地位を占めたのは雑誌『時代漫画』である。¹⁴³この雑誌は1934年9月から1937年6月までの間、全国で刊行されたが、ちょうど満州事変が勃発した直後、全国に抗日感情が高まっていた時期でもある。誌面には、抗日を宣伝する作品を掲載する一方、当局を諷刺する作品と社会最下層の生活を反映した作品が多く見られる。¹⁴⁴

例えば、葉浅予(1907-1995)¹⁴⁵の「北海所見蒙古人」(図4-2)は、このような一般市民の生活を反映する作品といえる。特に、葉浅予のものは一般的な漫画と異なり、「漫画スケッチ(速写漫画)」と呼ばれている。漫画スケッチが通常のスケッチと異なるのは、描写対象の社会性を重視するところがあり、誇張な手法で描かれるが、実は「人物の感情・動態に注意すると同時に、漫画家の眼でそれを取り巻く社会を観察し、现实生活の中の、ある種の意義のある事柄、面白い事物をピックアップしなければならない」¹⁴⁶というリアリズムの作品である。「北海所見蒙古人」は、北京に見られる漢民族化されたモンゴル人を描き、おそらく葉浅予が1935年に北京での旅行中に作成したものである。¹⁴⁷作中の人物はモンゴル人であるが、「長衫」という漢民族の服装を身につけている。葉浅予は、このような一般市民に見られるいくつかの特徴をつかみ、「漫画スケッチ」を通して現実的な民衆生活を表現している。ほかに掲載された豊子愷と胡考の作品は「漫画スケッチ」ではないが、いずれも市井の風景を表したものである。

そして、第7号(1935.9.25)と第9号(1935.11.27)に掲載された4つの木刻画(図5-1、図5-2、図5-3、図5-4)は、より中国農民と労働者の生活を反映し、左翼色を帯びた作品である。また、第9号に、「現代中国の木刻」と題する文章が掲載され、30年代の中国の木刻運動を紹介した。本文はまず中国に輸入されたロシアとドイツの木刻画に簡単に触れ、そして中国国内の木刻画の発展過程と特徴について以下のように記されている。

¹⁴² 竹内好「解説」(『中国文学月報』第6号、1935.8.25)。

¹⁴³ 畢克官著・落合茂訳『中国漫画史話』(筑摩書房、1984、123頁)。

¹⁴⁴ 同前、124頁。

¹⁴⁵ 葉浅予：漫画家、美術家。1930年代に上海で活動し、長編漫画『王先生』と漫画スケッチで注目された。1937年、中華全国漫画界救亡会を成立し、抗日漫画に取り込んだ。

¹⁴⁶ 畢克官著・落合茂訳『中国漫画史話』、前掲書、148頁。

¹⁴⁷ 葉浅予『葉浅予自伝：細叙滄桑記流年』(中国社会科学出版社、2006、88頁)。



(清麗) 作 清麗 婦 農 三

図5-1 三農婦



(純吉) 作 純吉 屋 入 口

図5-2 口入屋



張 張 泊

図5-3 泊



波 新 帶 地 場 工

図5-4 工場地帯

図5 『中国文学月報』に転載された木刻画

外国の木刻が輸入されたのは、魯迅や柔石（一九三二年春処刑）等文士の努力に負ふ所多く、彼等は一九二九年頃から上海にしばしば外国木刻展を開催し、又一方木刻講習所を開設して實際製作に当らしめた。この講習所の方はまもなく左翼的傾向の故を以て当局の弾圧を受け解散したが、彼等によつて今日まで幾多の外国木刻集が出版され中国木刻作家の手本となつてゐる。（略）

一九二九年と云へばプロレタリア文化運動の澎湃として高まつた時代で魯迅等のこの仕事は美術界に大きな波瀾を捲き起こした。（略）青年美術家が我も我もと争つて筆を棄て絵具を捨てて、刀鑿を把つて版木に向つた。そして絵画よりも更に力強い刻鑿による表現を以て労苦民衆の生活を描きはじめた。（略）就中野夫、一川、新波は最も一般の歓迎を受けてゐるやうである。それは彼等が大刀濶斧の刀法、簡明結実な線を用ひて

適切に労苦民衆の呼号、吶喊を表現してゐるからであらう。¹⁴⁸

この引用箇所から分かるように、中国の木刻画にはプロレタリア文化運動の一部として強烈な左翼色が帯びている。その題材はいわゆる「労苦民衆の生活」であり、図5に見られるように、畑に農作業している農婦、口入屋で仕事を待っている労働者の憂鬱な表情、埠頭で働いている人々、そして工場で怪我した工人の顔など、いずれも最下層の民衆の生活をリアリスティックに描写しており、左翼的傾向を表した作品といえる。

このように、これまで取り上げた誌上に掲載された漫画と木刻画は、いずれも中国の民衆の日常生活を反映したものである。前述した通り、成立頃の中文研は日本の文壇と学界に見られた「人間不在」的な傾向に大きな不満を抱いた。初期の誌上において漫画と木刻画を紹介するのは、このような中文研の出発点と一致すると思われる。そして、彼らの中国民衆に対する関心は、「農民」を描く小説に関する議論において一層明らかである。

二 農民から導かれた文学的価値

当時の中国において、農民は最も中国民衆の現状を反映する現場であった。したがって、本誌は、近代中国の農民を題材とする文学作品に強い興味と関心を示している。創刊号（1935.3.5）の「今日の中国文学の問題」において、竹内好は「農民文学の傾向」の項目において、茅盾の作品をはじめ、農民層の日常生活を描写する作家と作品を紹介した。以後、誌面において、小説の翻訳だけではなく、農民文学に関連する作家論および作品論の文章が多数発表されていた。以下は、本誌に掲載された農民文学と関連する文章である。

表 10 『中国文学月報』における農民文学関連の文章

題目	作者	掲載号	内容
今日の中国文学の問題	竹内好	第1号 1935.3.5	「革命文学」から「農民文学」への転換
今年度の中国文化（文壇）	岡崎俊夫	第10号 1935.12.31	農村文学の欠点
阿Q 正伝雑評	飯塚朗	第20号 1936.11.1	阿Qに見られた封建社会の農民の悲劇

¹⁴⁸ 資料部「現代中国の木刻」（『中国文学月報』第9号、1935.11.27）。

沈從文小論	岡崎俊夫	第 22 号 1937.1.1	沈從文の郷土文学
王魯彦のこと	岡崎武彦	第 22 号 1937.1.1	王魯彦の郷村小説の思想
葉紫瞥見	飯塚朗	第 28 号 1937.7.1	葉紫の小説集『豊収』を評論
「第三代」の蕭軍	千田九一	第 28 号 1937.7.1	蕭軍の文学性
湖上（葉紫）	飯塚朗訳	第 29 号 1937.8.1	翻訳
蕭軍のヒューマニズム	長野賢	第 29 号 1937.8.1	蕭軍の小説に見られる人間性
落日の光（蘆焚）	飯村聯東訳	第 37 号 1938.4.10	翻訳
「第三代」小感	小田嶽夫	第 40 号 1938.7.15	蕭軍「第三代」の評論
初夜（蕭軍）	猪俣庄八	第 46 号 1939.1.1	翻訳
村人の春（老向）	岡崎俊夫	第 48 号 1939.3.1	翻訳
虚妄の愉悅：松枝氏訳の 「辺城」を中心に	柳沢三郎	第 51 号 1939.6.1	沈從文『辺城』の創作、人間性、芸術性
「第三代」について	藤井冠次	第 52 号 1939.7.1	蕭軍「第三代」の評論
荒村（蓬子）	小山正孝	第 53 号 1939.8.1	翻訳
離郷の前夜（呉組細）	梅村良之	第 54 号 1939.9.1	翻訳
臧克家と卞之琳	武田泰淳	第 56 号 1939.11.1	臧克家の詩：生活的、単純；卞之琳の詩： 知性的
欧陽山走り書き	山本三八	第 56 号 1939.11.1	欧陽山の小説創作
手（蕭紅）	長野賢訳	第 58 号 1940.1.1	翻訳

表 10 から理解できるように、農民文学への関心は、主に 1937 年から 1940 年までの間に集中している。その中で湖南省の農村を描くことによって注目されている沈從文（1902-1988）¹⁴⁹、農民小説の執筆によって魯迅に評価された葉紫（1910-1930）¹⁵⁰、および「東北作家」¹⁵¹の代表者としての蕭軍¹⁵²が特に論じられていた。近代中国の農民文学には、農村における政治闘争や経済の動揺などを主題とする作品がある一方で、叙情的な手法で田舎の純朴と人間性の美を表す作品もある。本誌で紹介された作家において、葉紫は前者に属し、沈從文と蕭軍は後者に属する。

かかる文学作品によって、中文研の同人たちは中国の農村、そして農民のありようを捉えていた。彼らによって評価されたのは、その作品に見られる文学的な価値であった。この「文学的な価値」について、実際の文学作品と対照しながら、中文研の同人たちの言論を考察してみよう。

まず、沈從文について、第 22 号（1937.1.1）に載せられた岡崎俊夫の「沈從文小論」が挙げられる。次の引用文はその一節であり、農村出身の夫婦を題材とした小説「丈夫」に対する評論である。

「丈夫」は小城市の河岸の娼船を舞台に、売春を生業として恥ぢず次第に農民の素朴さを失って行く女、その妻の許に野菜など持つて訪ねて行く夫、その悲惨な状景を当時の左翼作家ならば、咏嘆と怒号を以てするところを作者は平静に克明に描き、しかもその底に測り知れぬ悲痛を漂はせてゐる。同じ中国を對象としながら他の多くの作家達とはなんと甚しく見る眼の異なつてゐることか。両者のうち、果していずれか真に現実の中国を表現してゐるか、私は中国へ行ったことがないので分らないが、しかし私の好きな前記の諸作をはじめ、農村や小城市の片隅の現れる小説を読むと、他の誰の作よりも本当の中国らしい気がする。中国の土の匂が感じられる。

「丈夫」は湖南省の農村出身の娼婦の日常生活を主題とする小説である。岡崎俊夫が、「丈

¹⁴⁹ 沈從文：作家。1927 年、短編小説「入伍後」で新進作家として認められ、胡適、郁達夫、徐志摩らの推薦により、『晨报副刊』、『現代評論』、『新月』などに作品を発表し、1934 年に代表作『辺城』を刊行した。

¹⁵⁰ 葉紫：革命作家。1933 年に中国左翼作家連盟に参加し、同年に共産党に入党。1935 年に魯迅の援助のもとに、蕭軍と蕭紅とともに奴隸社を組織し、同年 3 月、短編集『豊収』を『奴隸叢書』第一冊として刊行した。

¹⁵¹ 東北作家：満州事変と「満州国」の成立をきっかけに、中国の東北地方から脱出し、左翼文学運動に参加すると同時に、抗日文学を創作した青年作家を総称して「東北作家」という。

¹⁵² 蕭軍：小説家。1925 年に従軍している時期から小説を創作しはじめ、のちに軍隊での職を辞め、1932 年までにハルピンで文筆活動に専念する。1934 年に執筆された『八月的鄉村』は、魯迅に評価され、翌年に『奴隸叢書』の一冊として出版された。以後、長編小説『第三代』（1937）の発表によって広く知られるようになった。

夫」から読み取ったのは、平静な筆触で描かれた農村の風景であり、そしてその風景はいかに悲惨であろうが、作家の用いた手法は左翼作家と異なり、「詠嘆と怒号」が見えない。その代わりに、作家は穏やかな表現によって「小城市」における農民生活の輪郭を示す。具体的にいえば、「丈夫」において、沈從文は、景色或いは人物の動きと心理状態を繊細に描写することによって、農村の暮らしを表現している。例えば、妻が働いている娼船に客が訪ねた時、夫の心境について、沈從文は以下のように描いた。

晩になって、晩飯をすまし、またあの新鮮な味の巻煙草をふかしていると、客がやって来る。それは船問屋の親方か商人かで、(略) ふらふらしながら船にやって来、船にあがるなり、大きな聲で接吻しようの、寝ようのとわめきちらし、その大きな濁み聲といい、そのすごい羽振りといい、どの點から云ってもこの夫に村長さんとか、地主さんとかいった大人物の威風を思い出させる。そこでこの夫は云われるまでもなく心得て、おずおずと後ろの船艙へもぐって行き、艙の船艙の中へ逃げこんで、低く息をはずませている。(略) この夫はこの時になって必ず家の鶏と小豚を思い出し、何となしにそれらの小さな奴こそ自分の友達であるような気がし、それらこそ親身の人間であるような気がして来る。いま妻と接近しながら、家庭とはすっかり遠く離れてしまった、淡い寂寞が彼を襲い、彼はもう歸りたくなってしまう。¹⁵³

貧乏な農民の夫は家計のためにやむをえず自らの妻を娼婦にする、このような設定からも、農村の悲惨さが滲み出している。さらに、沈從文は、「おずおずと」、「低く息をはずませている」などのようなしぐさや、「夫」の心理状態を綿密的に描写することなどで、農村夫婦の苦痛を表現した。岡崎からみれば、左翼作家の「詠嘆と怒号」より、沈從文の繊細な筆致で描写された農村のほうが真実に近く感じられる。

これと対照的なのは、第 28 号 (1937.7.1) に掲載された飯塚朗の「葉紫瞥見」である。葉紫は、1935 年に魯迅の支援を受け、短編集『豊収』を出版した。中に収録された 6 篇の小説はすべて戦争下の中国農村を題材としたものである。

¹⁵³ 沈從文「夫」(松枝茂夫訳『現代中国文学全集第八巻 沈從文篇』、河出書房、1954、102 頁—103 頁)。

原文：

到了晚上，吃过晚饭，仍然在吸那有新鲜趣味的香烟。来了客，一个船主或一个商人，(略) 摇摇荡荡的上了船。一上船就大声的嚷要亲嘴要睡，那洪大而含糊的声音，那势派，都是这丈夫的想起了村长同乡绅那些大人物的威风，于是这丈夫不必指点，也就知道怯生生的往后舱钻去，躲到那后梢舱上去低低的喘气，(略) 这丈夫到这时节一定要想起家里的鸡同小猪，仿佛那些小小东西才是自己的朋友，仿佛那些才是亲人，如今与妻接近，与家庭却离得很远，淡淡的寂寞袭上了身，他愿意转去了。

出典：沈從文「丈夫」(『沈從文文集 第四卷・小説』、花城出版社、1982、4 頁)。

（『豊収』は）農村の暗影や、戦争挿話の様なものを描いたのであるが、至つて脆弱な感じがするもので、蕭軍の第三代などに比べたら、いゝ対称であらう。（略）兎に角、この一冊の本からは、弱い、暗い、そして稚拙な葉紫しか見だせない。（略）まして戦争ごつこなんか書くのはもう止めて貰ひたい。戦争の蹄にかけられた道傍の花を、ちつと見凝めるのが葉紫だ。

一方、葉紫の『豊収』に収録された作品は、殆ど戦争下の農民の苦難と反抗を題材とした小説であり、沈從文とは異なる手法で戦争中の農村を読者に伝えた。例えば、小説「豊収」は、干害と水害に苦しむ雲普という農民の物語である。その中で、豪雨で米の畑が流されてしまった雲普一家の悲劇は以下のように描写されている。

雲普が狂ってしまった。（略）彼は、終日叫んでいた：

「ああ神よ！私の一粒一粒の黄金が水になってしまった！」

（略）去年5月から今まで、彼はたらふく食べたことが一度もなかった。（略）8人家族で、とうとう草まで食い尽くした。（略）8月になり、華家堤で観音粉（筆者注：食べられる白い土）が掘り出されたので、村の人々がわれ先に食べに行った。雲普は立秋を連れて、2、3石を掘ったが、これを食べて2日間に満たず、父親と6歳の虎児が死んでしまった。¹⁵⁴

このように、葉紫の作品は、人物の心理描写が少なく、非常に素朴な言葉と表現で農民達の怒りと悲鳴を強調することによって、農村の惨状を強く語る手法を用いている。そして、葉紫の小説の中に、地主の圧迫や資産階級との対立などを批判する要素も見られ、政治的な一面が読み取れる。このような小説は、飯塚朗の目に「弱い、暗い」ものとして映り、それは文学ではなかった。さらに、飯塚はこのまま創作を続ければ、「記録か報告になってしまう」恐れもあると指摘しているのである。

同じ農民文学に対して、飯塚の評価は岡崎と大きく異なるものであるものの、両者の間に共通点も見受けられる。つまり、この両者の共通点は、同じ農民を題材とした小説としても、文学性を重視する作品への肯定、および政治性を表現する作品への批判であるといえる。

換言すれば、中文研の同人たちは中国の農民文学に対して政治性に束縛されない文学的

¹⁵⁴ 原文：

於是雲普叔發了瘋。（略）他終天的狂呼着：

『天哪！我粒粒的黄金都化成了水！』

（略）去年五月到現在，他還沒有吃飽過一頓乾飯。（略）一家有八口人，後來連青草都吃光了，（略）八月裏華家堤掘出了觀音粉，壟上的人都爭先恐後的跑去挖來吃，雲普叔帶著立秋挖了兩三石回來，吃不到兩天，雲普爺爺升天了，臨走還帶去了一個六歲的虎兒。

出典：葉紫「豊収」（『豊収』、奴隸社、1935、13-14頁）。引用文は筆者訳。

な価値を追求する。それが千田九一の蕭軍に対する評価から読み取れる。蕭軍は、1937年に長編小説『第三代』の第1部と第2部をまとめ、文化生活出版社より単行本として出版した。20世紀初期の中国東北地方を背景にし、当地の農村生活をリアリスティックに表現した本作は、中文研に重視され、高く評価された。第28号（1937.7.1）に載せた千田九一の「『第三代』の蕭軍」から、その一面を窺えることができる。

我々が蕭軍に魅力を感じ、期待を繫いでゐる所以のものは、彼が特権としてもつ茫漠たる自由の歩みと、世界人的な野性の息づかひだ。日常的な政治に煩はされない文學者の図太い心臓だ。中国の文学は一般に政治に圧倒されてゐる。圧倒してゐる政治が悪いと言ふのではない。圧倒されてゐる文學が意気地がないといふのだ。文学と政治の相剋が、ここでは最も素朴だが最もみじめな形相を呈してゐる。我々が「第三代」の作者に期待するものは、このみじめな文学が見事低俗な政治性から脱け出し呉れることだ。

この引用文において、千田はまず蕭軍が作品に表した「茫漠たる自由の歩み」、「世界人的な野性の息づかひ」といった文学的な性質を肯定し、そして政治に圧倒された中国左翼文学を強く批判したのである。このように、岡崎・飯塚・千田の発言と関連作品を結びつけてみると、以下の結論が導き出されるのである。

まず、単なる農民の怒号と農村の暗黒さを強調する左翼文学の小説は、優れた農民文学とは言えない。人間の感情と心理を重視し、ストーリーを自然な形で構成する小説こそ、より現実に近い農村文学であると中文研の同人たちが主張した。そして、岡崎・飯塚・千田たちの共通しているのは、決して政治に圧倒された文学を容認しない点である。すなわち、文学者が文学のために尽さないと、結局その作品の人間性が失せていくというのである。上述の二点が、中文研の同人たちが中国の農村と農民に見受けられた「文学的な価値」であるといえるのではないか。

要するに、中文研が何よりも関心を持ったのは、中国の近代文学において、いかなる手法で「農村」が描写され、どのような文学的な価値を含んでいるかであった。それは、中文研の設立当時に強調していた「文学的な関心」¹⁵⁵から生まれたものであると同時に、政治的な文学に対する批判でもありともいえる。また、中文研の農民文学に対する関心は、創刊初期に接した中国左翼文学の延長線上に位置づけることが出来るだろう。さらに、彼らの主張した文学と政治との関係は、日本のプロレタリア文学の動向にも関連すると考えられる。

¹⁵⁵ 竹内好・高橋和巳「文学 反抗 革命」、前掲書、34頁。

第五節 ポスト・プロレタリア文学の視点から

第四節で検討したように、第一期に出版された『中国文学月報』において、中国の民衆の実状に注目する傾向があり、誌面に下層の人々の日常生活を描く漫画と木刻画や、農民文学に関する批評などが掲載された。このような傾向が示されたというのは、前述した中文研が日本の中国研究の人間不在に抱いている不満、および彼らの文学的関心などの要素による以外に、中文研が置かれている日本文壇の状況を踏まえなければならない。

周知のように、1933年の日本の文壇には大きな事件が起きた。それは、小林多喜二の虐殺事件（1933.2）によって、元来文壇の主流であった日本プロレタリア文学の勢いが一気に下落したのである。その後、プロレタリア文学者の「転向」という社会的な思想転換があり、佐野学と鍋山貞親の「転向声明」が発表された翌年に、中文研が成立された。

ここで筆者が強調したいのは、中文研の中国人作家との接触、および彼らの農民文学に対する評価を、このようなポスト・プロレタリア文学的な思想上の文脈の中に考えると、非常に興味深いのである。

高橋春雄氏は、プロレタリア文学の挫折を「運動理論そのものに内在した尖鋭な政治主義や文学的不在」¹⁵⁶によるものだという。そしてプロレタリア文学退潮後の日本文壇といえば、なによりも徳永直、林房雄、宮本百合子などを中心に展開された政治と文学に関する論争である。つまり、外部からの弾圧だけではなく、政治的要求と文学的芸術性との矛盾という意味で、プロレタリア文学の衰退を内部から問うものである。

例えば、徳永直は1933年7月に「創作方法上の新転換」を発表し、文学作品をスローガンと理論に適合させようとするプロレタリア文学作家を批判した。また、徳永は「創作することは客観的現実を正しく描き出すことが内容である」¹⁵⁷と主張し、創作活動の政治的適応を糾弾した。そして、文学作家と政治との関係について、彼は以下のように語っている。

芸術は客観的現実の中から、作家の豊富な生活経験によって創りだされる。弁証法的世界観がいかにか作家をたすけるとはいえ、基本なのは前者だ。

作家としての実践を政治とすりかえてはならぬというのだ。イデオロギー的立場を強要し、官僚的支配に作家たちをくくりつけるなら、作品は「ピラ」のようになり、作

¹⁵⁶ 高橋春雄「現代文芸評論概観」（神谷忠孝、高橋春雄、吉田瀬生編『現代文芸評論』、双文社、1973、9頁）。

¹⁵⁷ 徳永直「創作方法上の新転換」（『後期プロレタリア文学評論集2』、新日本出版社、1990、268頁）。初出：『中央公論』（1933.9）

家は大衆からまったく孤立するであろう。¹⁵⁸

つまり、文学は芸術の一形式であるゆえに、政治的なスローガンに左右されず、客観的現実に基づくことが大事である、と徳永が主張した。そこから、彼の芸術主義的な立場が窺える。むろん、徳永の論点は、宮本百合子などによって批判されていた¹⁵⁹が、その論争の経緯を述べることは筆者の目的ではない。ここで強調したいのは、中国文学研究会の成立した時期に、日本の文壇では、このような政治と文学に関する議論が盛んであり、プロレタリア文学の方向を模索する動向が見られるということである。このような社会的風潮の中に、彼らが中国文学の政治性や芸術性を論じることは、必ず偶然なことではないと言わせざるを得ない。

その後、プロレタリア文学の解体と戦争による言論弾圧の強化に伴い、農民文学、歴史小説などの形が続々と現れ、日本文学の発展は様々な方向に向かって変化を見せる。竹内好は、戦後に発表された 1937 年から 1945 年までの日本文学の潮流を分析する文章の中でこう語っている。

この時期の文学の特徴を一口にいうと、強権による自由の精神の完全な抹消、およびそれと表裏の関係にある時局便乗型のエセ文学の横行、ということになる。一步一步の後退が全面退却になり、ついにまったく息の根をとめられるところまで行きついた。人間の生存のためのことごとく条件が奪い去られ、そのために、文学は創造のエネルギーを失ってしまった。砂漠のような荒廃が、残されることになった。¹⁶⁰

竹内好の描いた日本文学の「砂漠」は、1937 年 7 月以後、日中戦争が全面的に展開している時期であるが、それ以前にプロレタリア文学の退潮後の思想的な衝突によって、文学界はすでに激動する時代に突入した。

中文研の多くの人々は、プロレタリア文学の全盛期を目撃し、中には武田泰淳のような実際に左翼活動に関わった同人も存在した。自国の文学界の変動に関して、彼らはどのような思いがあったのだろうか。驚くことに、文筆活動に熱心していた同人たちは、戦前期において自国のプロレタリア文学についてはあまり発言しなかった。その代り、彼らは隣国の文壇に目を向けた。この時期の中国では、プロレタリア文学運動が盛り上りの気運を醸成してい

¹⁵⁸ 同前。

¹⁵⁹ 例えば、島田和夫「同志徳永の理論的誤謬について」（『プロレタリア文学』1933. 10）、宮本百合子「社会主義リアリズムの問題について」（『文化集団』1 巻 6 号、1933. 11）。なお、転向時代の文学論争に関して、高橋春雄「政治と文学論争史——戦前における三つの論争を中心に」（『国文学解釈と鑑賞』38 巻 14 号、1973. 11）を参照。

¹⁶⁰ 竹内好「転向と抵抗の時代」（『竹内好全集』⑦、207 頁）。初出：野間宏ほか編『日本プロレタリア文学大系』第 8 巻（三一書房、1955）。

る。彼らは中国の左翼作家と交流し、農民を描いた小説を盛んに議論した。このような行動の背後に、隣国の左翼文学の流れを観察しながら、自国文学の行方を模索する中文研の人々の意欲が現れているといえなくもない。

第六節 まとめ

本章は、中文研が初期活動に同時代の中国文学に覚醒するプロセスを辿りながら、彼らの中国文学に対する認識の内実を探ってみた。まず、雑誌に対して統計を行った結果、誌上における中国近代文学に関する文章は、改題以前に集中していることが分かった。また、中文研は誌上に中国文学を取り上げるだけではなく、例会や懇話会などのイベントを開催することによって、同時代の中国文学者との交流を促進し、郭沫若から様々な支持と協力を受けていた。そして翻訳活動も彼らの一大事業といえる。特に、増田渉は同人として誌上に発言することが少なく、中文研での役割は不明瞭であったが、実際は中文研の翻訳活動にとって、増田渉は無視できない存在であることが分かった。

次に、中文研の中国文学者との交流に関して、増田渉と魯迅との関係、および謝冰瑩と茅盾を中心に考察した。増田渉と魯迅との付き合いが、誌面に反映されている一方、初期の機関誌の編集方向にも影響を与えていると考えられる。そして、茅盾と謝冰瑩などの左翼作家との交流において、中文研の同人たちは中国文学に現れたリアリズムに関心を与え、これはまた、誌上に見られる彼らの中国民衆への注目にも関連する。彼らの中国民衆に対する関心は、初期の機関誌に掲載された漫画と木刻画、および農民文学に関する文章を通して読み取れる。

1937年から1940年までのあいだ、誌上に一連の農村文学に関する論文と翻訳が掲載されていた。中文研の同人たちの執筆した沈從文、葉紫、蕭軍に関する論文を比較した結果、彼らに共通的に見られる認識は、政治に圧倒された文学に対する批判的な態度である。

以上の考察から、中国近代文学の日本での受容に対して、中文研は作品の輸入から人的なネットワークの構築まで、大きな役割を果たしたことが明白となった。そして、中文研の関心は主に中国の民衆を表現するものに向け、さらに中国文学の政治性などを批判したのは、変動する自国文学に対する彼らの思考にも通底し、日本プロレタリア文学の批判的な継承ともいえよう。

第三章 草創—発展期〈二〉：漢学への反抗(1934.3-1937.10)

第一節 はじめに

漢学は中国の古典籍をもとにした学問を意味し、日本では古代より連綿と継続した伝統のある学問分野である。しかしながら江戸時代に至ると、従来の学問形態への反省から様々な批判が生み出され、屢々激しい論争を伴うこともあった。例えば荻生徂徠は漢文訓読法を批判し、中国の古典は中国音によって読むべきという衝撃的な主張を唱え、江戸期の漢学界に大きな波紋をもたらした。また明治後期に言文一致運動が発生し、漢字の存廃問題によって引き起こされた漢学論争¹⁶¹の動きは、ただ明治時代のみにとどまらず、大正時代、更には戦前・戦後にも見られ、漢学のあり方に対する様々な議論は断続的に行われている。このように、漢学は歴史の流れによって刻々と変化しつつ、異なる表象を呈している。

本章において、筆者は1930年代の漢学に関する議論に注目していきたい。その理由は二つある。まず一つ目としては、戦争中のイデオロギーにおける漢学の実像は今なおほぼ明らかにされていないからである。竹内好は当時の漢学について、以下のように回想している。

そのときの気持（筆者注：中国文学研究会の機関誌を発刊する頃の気持ち）としては、文壇というより既成の学界に対する不満がまず第一にあったわけです。それは、東京帝国大学の支那文学科、これはもとは漢学科といたただけけれども、これがまったく阿呆な存在で、話にならなかった。（略）学問的雰囲気は全然なかった。おまけに支那文学科といいながら文学のにおいもない、そういうのがいやだった。漢学の伝統で、教育勅語を祖述するような、そういうことばかりやっていた。¹⁶²

これは戦争の進行に従って、漢学が一種の政治的色彩を帯びていった事を示唆している。竹内は漢学を強く批判しているものの、その真意は果たしていかなるものであったのか、当時の漢学教育の状況、および漢学に関する言論の傾向を分析することにより、探っていききたい。

二つ目としては、この時期より中文研の漢学批判が活発に行われ始めた点が注目に値する。前述した引用文からもそれは読み取れるが、竹内が中文研を作り上げたその主たる要因としては、彼の抱いていた漢学に対する不満によるところが大きかったものと思われる。ま

¹⁶¹ 関連する先行研究は長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』（吉川弘文館、1998）、第三章参照。

¹⁶² 竹内好・高橋和巳「文学 反抗 革命」、前掲書、33頁。

た、竹内好にのみならず、中文研の同人たちが個々に発した漢学についての見解は、漢学との最初の接点に深く根ざしているともいえる。中国研究の分野において初めて正面から漢学に挑んだ彼らの活動を究明することは、近代日本における中国研究の全体像をつかむために大きな意味があるといえよう。

中文研の活動は、草創一発展期においては二つの主題を中心に展開されている。一つは第二章で既述したような近代文学への関心であり、もう一つは漢学に対する批判である。中国研究と言えどもっばら中国古典の研究を意味した当時の斯界において、中文研の行動は異色的である。彼らは主流派とは決して言えなかったものの、同時代の一部の学者の中には、これを肯定的に捉える者もいた。例えば、1940年から東京帝国大学で教鞭を執り、日本の中国語教育に革新的な影響をもたらした倉石武四郎は中文研について、「東京における支那哲文学科の不振、かてて加えて斯文会が教化の面のみ多くして、研究、乃至芸術的な若さを失ったのにあきたらぬ少壮の人たちが、中国文学研究会を結んで、(略)これはもっばら現代中国の文学を研究しようとするもので、自由活発な運動を展開し、雑誌も号を重ねるとともに、その叢書をかなり世に送り、清新の気を学界に注入した」¹⁶³と、その活動を高く評価した。

中文研は近代中国文学を研究する団体として発足したものであるが、その同人たちは、戦時中の漢学を批判的な視点で議論した一方、新たな中国研究の行方を模索してもいた。彼らの残した漢学に関する言論はしばしば先学に引用されている¹⁶⁴が、それらの発言の背後に潜んでいる思想的な原因にまでは深く考察が及んでいないと筆者は考える。中文研の同人たちの漢学に関する思考の源泉、そして彼らを反漢学の方向へ導いた原因はどこにあるのだろうか。また彼らの行った漢学批判をいかに評価すべきなのか。これらの疑問点に関する研究は十分なされているとは言い難いのである。

本章に関連する先行研究は主に戦時中の日本漢学史に関する研究、近代日本の中国研究から見られる中国認識に関する研究、および中文研の漢学批判に関する研究である。戦時中の日本漢学史に関する先行研究が決して多いとは言えず、国語史、教育史などの関連する研究¹⁶⁵の中に散見するものの、いずれも漢学と国語との関係を論じるために取り上げられたものである。

また、『東洋学の系譜』¹⁶⁶、『東方学回想』¹⁶⁷のような明治、大正、昭和時代に活動した各学者を記録した資料が見られる。『東洋学の系譜』は日本東洋学の基礎を築いた学者たちの経歴と業績を統合したものであり、『東方学回想』は東方学会の機関誌『東方学』に掲載さ

¹⁶³ 倉石武四郎講義『本邦における支那学の発達』(二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム、2006、95 頁)。

¹⁶⁴ 例えば、渡邊一民『武田泰淳と竹内好』(みすず書房、2010)などが挙げられる。

¹⁶⁵ 長志珠絵(1998)では、国語史の一部として、日清戦争以後の「言文一致運動」における漢学の位置づけが論じられた。そのほか、石毛慎一『日本近代漢文教育の系譜』(湘南社、2009)も明治以後の漢文教育の変遷を言及し、漢文科の存廃に関する論争を考察した。

¹⁶⁶ 江上波夫編『東洋学の系譜(全2集)』(大修館書店、1992-1994)。

¹⁶⁷ 東方学会編『東方学回想(全9巻)』(刀水書房、2000)。

れた先学を語る座談会の記録集である。どちらも人物ごとに編集されたものであり、近代日本の漢学史を知るための重要な手掛かりである。ただし、これらの成果は人物の業績を中心とするものであるため、功績を称えることに偏る傾向が見られ、さらに時代背景によって日本漢学に付与された歴史的意味が系統的に論じられていない。

近代日本の漢学史を系統的に考察したものとして、李慶氏の『日本漢学史』¹⁶⁸が挙げられる。本書は三部によるシリーズであり、その中の第二部は戦時中における日本漢学の発展を考察したものである。李氏は国際漢学と日本漢学との比較について述べたうえ、20世紀初頭の学制の構成を切り口とし、東京帝国大学と京都帝国大学を中心とする研究体制について記述した。また、1919年から1949年までの日本漢学について、李氏は「研究（筆者注：日本漢学を指す）の内容について、前半期には西洋シノロジーからの影響が多く受けられ、中国学界と互いに影響しているのも見られる一方、後半期には時局の発展に伴い、政治に関連する面もかなり見られる」¹⁶⁹と、戦争中の日本漢学の特徴を指摘した。李氏は日本漢学の歴史的な発展を万遍なくまとめ、その史的全体像を提示した意味で、大きな成果を挙げたといえる。しかし、具体的な問題点はあまり深く触れられず、論証もやや表層的な考察に留まる一面も否定できない。

また、戸川芳郎氏¹⁷⁰は明治時代の学制改革をはじめ、日本漢学の研究法上の一連の変化について言及した。さらに、井上哲次郎と服部宇之吉を取り上げ、日本漢学の官学アカデミズムの系統を明らかにし、東京帝国大学と京都帝国大学を中心として、漢学と支那学の発展史を体系づけた。更には戦後の竹内好の魯迅研究会を取り上げ、その「中国文学に真の近代を追求する姿勢」を認めながら、従来の系譜との対立が避けられないと主張した。戸川氏は竹内好の漢学に関する主張を取り上げたものの、肝心の戦争中における竹内の漢学論の形成について深く追求していなかった。

それに関して、孫歌氏の「漢学の臨界点」は日本漢学を世界漢学の視野において考察し、より明白的に竹内好の戦争中の漢学論を検討した。孫氏は「『漢学』が日本語の文脈にどのような『臨界点』を持っているか」¹⁷¹という発問を設定するところから出発し、日本漢学の帰属問題、荻生徂徠の翻訳論、19世紀末の日本漢学の復活と支那学の登場、および1930年代の竹内好を中心とする中国文学研究会を逐一に検討した。こうした意味で、孫歌氏は従来の研究に補完的な役割を果たしたのみならず、新たな視点をも提示したといえる。

ただし、孫歌氏の竹内好に対する考察は、あくまでも「中国研究者としての竹内」という

¹⁶⁸ 李慶『日本漢学史』（上海外語教育出版社、2004）。シリーズには第一部「起源和確立」、第二部「成熟和迷途」、第三部「転折和発展」が含まれる。

¹⁶⁹ 李慶『日本漢学史』第二部、160頁。原文：「研究的内容，前半多受西方汉学界影响，并和中国学界互相交替影响；后半则多具有日本社会当时的色彩，和政治有相当关系。」

¹⁷⁰ 戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点——近代アカデミズムの成立と中国研究の“系譜”」（『理想』397、理想社、1966）。

¹⁷¹ 孫歌（佐俊俊彦訳）「日本漢学の臨界点——荻生徂徠・竹内好から引き継ぐもの」（原田勝正編『「国民」形成における統合と隔離』、日本経済評論社、2002、82頁）。原文は孫歌『主体弥散的空間：亜洲論述之兩難』（江西教育出版社、2002）に収録されている。

一面的な視座によって行われた。あらゆる個人の思想形成の過程には、その人物が活躍している分野に限らず、その時代背景がもたらす当該人物への影響という要因も含まれる。したがって、竹内の残した言葉も中国研究者としての彼の側面からのみ見るのではなく、他要素との関連性も含めて総合的に洞察する必要もあるであろう。実際、竹内の目線は彼の専門とする中国研究以外のところにも向けられていた。彼の言論や主張には、ときに同時代の他分野に生きた人物との関連性が見られる。したがって、竹内好の人間関係に注目し、それらの経験が彼の思想形成に与えた影響も含めて、包括的に竹内好の言葉の内実を分析すべきではないかと考えられる。

なお、最近の研究成果として、『日本思想史学』第39号に掲載された「近代の漢学」の特集が挙げられる。中には明治期から昭和期までの漢学の概況が諸先学によって検討された。例えば、斎藤希志氏は、「前近代の漢学は普遍の学として、諸学の基礎に置かれたのに対して、近代の支那学は、あくまで中国という地域の文明ないし文化について考究するもの」¹⁷²と支那学を位置づけ、近代の大学における漢学と支那学の成立を整理した。また、吉田公平氏¹⁷³は、近代における漢学者たちの活動、および明治から昭和前期までの漢詩文の概況を紹介した。

これらの研究成果は、主に近代における漢学の発展に関する歴史、また関連する代表的人物の主張と実績を中心に考察を行ったものである。しかし、時局の文脈に置かれた漢学がどのような様態を呈したかについて、まだ考察する余地が見られる。

また、中文研の1930年代の漢学批判について、前述した戸川氏と孫氏によって論じられたが、それ以外に、渡邊一民氏の成果も挙げられる。渡邊氏は機関誌に行われた漢学論争を通して、竹内好の「短兵急に断定する」¹⁷⁴傾向を指摘した一方、武田泰淳の「複眼的視座が、『月報』の誌面に波紋をよび活気をあたえている」¹⁷⁵と評価した。ただし、渡邊氏の論点は主に漢学論争に現れた竹内好と武田泰淳の関連性に置いたため、誌面に現れたほかの主張について詳しく分析を加えなかった。

以下、本研究では、まず新聞や雑誌などのメディアに現れた言論を通して、満州事変勃発前後の漢学論の動向を確認するうえで、中文研における漢学批判に関する議論を分析し、戦時下の日本における漢学のありようを明らかにしていきたい。また、中文研の中心人物である竹内好を同時代の文壇に活動している文人と関連しながら、彼の漢学批判の源泉を究明する。

¹⁷² 斎藤希志『『支那学』の位置』（『日本思想史学』39、日本思想史学会、2007、3頁）。

¹⁷³ 吉田公平「近代の漢学」（『日本思想史学』39、日本思想史学会、2007、11頁－19頁）。

¹⁷⁴ 渡邊一民『武田泰淳と竹内好』（みすず書房、2010、20頁）。

¹⁷⁵ 同前、20頁。

第二節 1930年代の漢学論：漢学の日本化と実用化

中文研は1935年から1936年までの間において漢学批判を盛んに行われた。前述したように、日本漢学の発展史について、多くの先学によって考察されたため、本節ではまず、先行研究を踏まえながら、本研究に使い分けられている漢学と「漢学」の区別を明言したい。そのうえで、1920年代後期から1930年代までに活動している漢学者の言論、および漢学の中心核である斯文会の機関誌『斯文』に掲載された文章を取り上げながら、中文研の活動している時期に主流となっている漢学論の形相を探索する。これによって、1930年代において、漢学という言葉にはどのようなニュアンスが含まれているのかを紐解いていく事が可能となる。

一 本研究における漢学と「漢学」の区別

「漢学」という言葉にどのような意味が含まれているのだろうか。これは日本漢学史¹⁷⁶という大きな課題にかかわり、そして日本における漢学の変遷は、時代の違いによって多面性が呈しているため、一口に漢学と言っても、単純に定義を加えることが難しい。吉田公平氏は、漢学の持ち広義的意味と狭義的意味をそれぞれ以下のように定義した。

漢学の語義として広義には漢民族・漢字文化の学問の意味であり、対概念は和学(国学・国史・国文・国語)である。(略)

狭義では、中国の漢代の学問のこと。漢唐訓詁の学とも呼称され、その全盛期の学問を清朝考証学という。文献学・古典学であり、書誌学・文字学・音韻学・校勘学を本領とする。対概念は宋学である。宋明性理学ともいう。その特色は人間(心)とその本質(性)を問い、自力救済論と政治哲学を中心課題とする。¹⁷⁷

吉田氏は対概念を挙げながら、異なる範囲における漢学の意味を提示した。つまり一般的な意味として、漢学を「中国の古典に関する学問」と理解しても差し支えないだろう。むしろ現在においては、漢学というより、現代中国研究も加え、「中国学」という言い方のほうがよく見られる。

¹⁷⁶ 日本の漢学史を網羅的に論じる代表的な著作として、牧野健次郎氏の『日本漢学史』(世界堂書店、1938)が挙げられる。牧野氏は古代から明治時代までに発展してきた漢学を第一期：上古・平城朝・平安朝、第二期：鎌倉時代から戦国時代まで、第三期：徳川幕府時代、第四期：明治時代と分けて、それぞれの時期に呈示した漢学の特徴を指摘した。ただし、本書の出版された年代から分かるように、大正以後の漢学史について触れていない。

¹⁷⁷ 吉田公平、前掲文。

ところで、時代をさかのぼり、昭和期の中国研究はどのような仕組みであるのか。第一章において既に述べたように、大別すると、アカデミズムを中心とする中国研究と実務的なニーズによって行われた調査研究という二種類がある。さらに、アカデミズムの中国研究においては漢学と支那学の存在があり、実務的な調査研究は満鉄や東亜同文会などによるものである。

第一章で述べた通り、中文研は批判する矛先をなによりも東京帝国大学に拠点を置いた漢学へ向けていた。そのため、本研究において、特別な説明がないかぎり、漢学は古代から日本に伝来した漢民族・漢字文化の学問を意味し、「漢学」は中文研の批判対象となる戦時下の東京帝国大学を中心に行われた日本漢学を意味する。一見、純粋な学問分野であるかのように見える漢学は、戦時日本においてその時々政治的状況の変動によって様々な変化を見せてきた。果たして当時、漢学はどのような言論環境に置かれていたのか。中文研の漢学論を客観的にみるには、戦時中の漢学の状況を確認することが前提となる。以下、漢学界の学者や中心的な組織などを中心に、漢学に関する言論の変遷を捉えていきたい。

二 漢学と国民精神

まず、日本漢学者の発言や、漢学に関する学術団体の機関誌から見てみよう。1890年に「教育勅語」が發布されて以後、漢学は明治時代の退廃的状況¹⁷⁸から復活し、その教育上の価値を忠孝という儒教的倫理に比重が置かれるようになった。特に第一次世界大戦後、大正デモクラシーの風潮によって大衆運動は高揚期を迎え、さらに関東大震災後、大正天皇により『国民精神作興に關スル詔書』（1923）が頒布された。漢学もこのような時代の潮流の中で、国民精神形成のための論理的支柱の一つとして、より強調されるようになった。

1925年、漢学者である小柳司氣太は、講演「日本と漢学の思想」¹⁷⁹を行い、その中に漢学を「一種の精神的なもの」とであると表現した。彼は「漢学が日本に来てさうして恰も川の土堤を決するが如く、澎湃として日本の国にひろがったのは、一体どういふ訳であるか」¹⁸⁰という問題を取り上げた。そしてその答えとして、「矢張り我輩の考に依れば漢学の精神とそれから日本の国有の精神と、相一致する所のものがある、言ひ換へると漢学が日本の国民精神に相合して居る所があるのではないかと斯う思はれる」¹⁸¹を挙げた。

一般的に考えれば、漢学は中国古典を中心とする文献学ではあるが、この講演の中に、小柳ははるかに文献学の範疇を超え、「教育勅語」と「五倫の道」との関係、「敬天愛民」の思

¹⁷⁸ 明治維新後、文明開化への傾倒により、漢学は国学者と洋学者によって批判され、漢字廃止論、漢字制限論などの論調が盛んとなり、漢文科の廃止も行われた。具体的には、牧野謙次郎（1938）、石毛慎一（2000）などを参照されたい。

¹⁷⁹ 小柳司氣太は当時東京帝国大学文学部の講師であり、彼は1925年に「日本と漢学の思想」を題にして、明治聖徳記念学会で講演を行った。この講演の記録は『明治聖徳記念学会紀要 23』（1925）に収録されている。

¹⁸⁰ 小柳司氣太「日本と漢学の思想」（『明治聖徳記念学会紀要』第23号、1925.5、61頁）。

¹⁸¹ 同前、62頁。

想からみた日本の皇室と中国の聖人との類似性などを論じて、漢学が持つ日本の国民精神との一致性を強調した。無論、この講演を行った場である明治聖徳記念学会¹⁸²の性質を考えると、上述した発言がなされたのも自然の成り行きであろう。ここで注目すべきなのは、この講演から、1920年代頃における変質を求められていた漢学の表象、すなわち国民精神を育成する一翼を担う学問としての漢学の輪郭を窺い知ることができるのである。

このように、漢学の国民精神化は戦争の進展によって加速し、特に満州事変勃発後、学界における漢学は純粋な学問ではなく、その政治的意義がさらに強調されるようになった。

三 漢学の日本化と実用化

中国古典研究の中心的存在であった「斯文会」¹⁸³は、時局の変動に応じて漢学の重要性を力説していた。その機関誌『斯文』において、国民精神との関連によって変容してきた漢学は露骨な政治性を帯びていった。

1933年3月、日本は国際連盟を脱退し、その翌月に刊行された『斯文』4月号は、国連脱退に関する昭和天皇の「詔書」および内閣総理大臣齋藤実の「告諭」を全文にわたり掲載した。また本号には、学者ではなく、多くの政治家が「非常時」、「国難」をキーワードとして文章を発表し¹⁸⁴、非常時の日本に対する漢学の貢献について活発に論じられている。『斯文』の目次をめぐればわかるが、これは本来、学術成果の発表する場であったはずの『斯文』において、極めて異例のことである。例えば、当時の協調会理事である吉田茂は、このように漢学の日本化の必要性を強調している。

¹⁸² 明治聖徳記念学会は1912年に成立した日本の神道研究を中心とする学術団体である。当時の会則の中に、この学会の目的について、「主トシテ人文史的學問ノ新研究ニ照シテ本邦思想ノ特色ト我ガ建國精神ノ大本トヲ闡明シ、我カ國體ノ精華ト日本ノ文明トヲ内外ニ顕彰シ、以テ自ラ知ルニ努ムルト同時ニ、日本文明ノ真相ヲ世界ノ學界ニ紹介シテ、彼我ノ精神的理會ニ資セムコトヲ期ス」と書かれている。

¹⁸³ 斯文会:今も現存する漢学研究を中心とする学術団体である。その前身は1880年、岩倉具視、谷干城などの創設した「斯文学会」であり、種々の再編成を経て、1918年に公益財団法人斯文会となった。主に、孔子祭の挙行、公開講座の開講、学術誌『斯文』の発行などを中心に活動を行った。斯文会の歴史に関して、斯文会編『斯文六十年史』(斯文会、1929)、斯文会編『財団法人斯文会八十年史』(斯文会、1998)を参照されたい。また、関連する先行研究として、陳イ芬『『斯文学会』の形成と展開—明治期の漢学に関する一考察』(『中国哲学論集』21、九州大学中国哲学研究会、1995)が挙げられる。

¹⁸⁴ 本号に掲載された主な文章(コラム類、彙報などが含まれていない)は下記の通りである。

〔 〕内は作者当時の肩書である。

★斯文会編集部「非常時の雄叫び」★井上哲次郎〔文学博士〕「非常時に際して所感を述ぶ」★菱刈隆〔陸軍大将〕「稜々たる気骨の士を求む」★藤沼庄平〔警視總監〕「汝の心に聞け」★香坂昌康〔東京府知事〕「国難を国薬とせよ」★船田中〔衆議院議員〕「自信ある門出」★吉田茂〔協調会理事〕「漢学の殻を出でよ」★宇田尚〔青山会館副会長〕「潜在するものを意識せしめよ」★久保天随〔文学博士〕「剪燈新話に関する事ども(四)」★岡井慎吾〔文学博士〕「熊本に於ける慊堂先生」★近藤康信「荀子と法家思想」

一体支那で習ったそのままのものを、日本に翻訳してもそれは駄目なことである。(略) 完全に消化して、これを日本精神にすることが出来る様にしなければ駄目ではないか。

(略) イギリス、フランス、ドイツ、何れの西洋文明にしても、それを彼土で出来たそのままの形態で持つて来て植ゑ付けようとしたのでは成功しない。中には国体に悖るが如きものもあらう。今日の要は能くこれを消化吸集し、集大成してこれを日本化するに在る。日本化せよ。(略)

漢学にしたとて同様である。儒教渡来当時を顧みるに、日本は初めの中は随分これに迷惑したのだらうと思ふ。(略) 一概にこれを排撃せずに、其の内に含まれる真理を把握し、これを実用化して活用して行くべきである。

孔子孟子の書物の中に説いてある道義觀念の如きも、立派に今日これを工場内にも施し得るのである。成程、孔孟の時代には、労働資本などいふことはなかつたであらう。然し其の説く所を実行に現はして行けば、何処へもつて行つても立派に実用に供せられるわけではありませんか。¹⁸⁵

吉田はまず字句の講釈を中心とする漢学の従来の研究手法を批判し、漢学に現れた思想を「日本精神」に沿って吸収するように、いわゆる漢学の「日本化」を主張した。つまり、吉田は漢学を学問として研究するというより、いかに国体に貢献できるかを強調している。前述した1925年の小柳の講演において、漢学は「精神的なもの」として認識され、国民精神と一致することが強調されていたが、30年代になると、このような論調は一步進み、漢学を「日本精神にする」といったように、漢学と日本精神との一体化論までに変貌してしまった。そして、このような言論が政府機関の出版物ではなく、まさに日本漢学研究の中心的存在である『斯文』に登場したという事実は、当時の漢学がいかに官学的な側面を持ったのかを充分に示しているといえる。

学術の場を借りて、このような一体化論を訴えているのは、政治家だけではなく、学者自身の間でも見られる。東京帝大において支那文学研究を担った塩谷温教授が、「何處までが惟神の道、我が国体であるか、何處からが儒道であるか、明に区別し得られないまでに、漢学が我が国体に醇化、融合してしまつた」¹⁸⁶と語っているように、日本漢学の対象がもとより古代中国人の書いた文献であり、思想である。だが、このような異国文化である漢学の中身が、もはや日本の国体の一部にでもなつたかのような認識は、少なくとも1930年代の漢学界において普遍的であり、主流であるといえる。このように、戦時中の日本における漢学の受容は忠孝を根底とする儒学を中心に展開し、国民思想の形成に役割を果たしていくのである。

そして、漢学の実用化もここにあると考えられる。前述した吉田茂の文章からは、孔子や

¹⁸⁵ 吉田茂「漢学の殻を出でよ」(『斯文』第15編第4号、1933)。

¹⁸⁶ 塩谷温「我が国体と漢文」(『斯文』第19編第9号、1937)。

孟子などの思想が、単純な学問対象だけではなく、「工場内にも施し得る」もの、つまり労働者を管理する道具としても成り立つ、という考え方を汲み取ることができる。かくして国連脱退、日中戦争の勃発など、戦争の深刻化に伴い、国内のナショナリズムは激しく刺激され、漢学の現実的な効能が次第に要求されていく。だからこそ漢学を実用化するという要望の目的は、儒学に含まれている君臣と忠孝の思想を用いて、天皇制による支配という国体に適うように国民精神の統合を図ることにほかならない。さらに塩谷温は、漢学と国民精神との関係を以下のように主張した。

元来青年の思想は空虚であるから、その隙に乗じて（略）種々雑多な思想が入り込むのである。之を一々取締らうといった所で、到底出来るものではない。そんな消極的取締よりも、もつと積極的に根本を立てねばならぬ。本とは何ぞ、即ち日本精神である。（略）然らば則ち日本精神とは何ぞや。曰く誠、曰く万世一系、曰く忠孝一本、曰く君臣一体、曰く敬神崇祖、曰く敬天愛人である。この大精神を養ふ所以のものは何であるか。余は直ちに之に答へて、漢学に若くものなしと断言する。¹⁸⁷

このように、古代から伝統学問として継続していた漢学は、大正末期の「国民精神作興」の流れを経て、昭和前期にいたると、国体明徴や日本精神の形成などにおいて、その期待された役割は徐々に明瞭化していった。これは当時の政治思想の変動に深く関連するものと考えられる。

1933年の小林多喜二虐殺事件をきっかけに、共産主義者たちが相次いで転向していったが、マルクス思想の影響が一掃されたとは言えない。中村隆英が「マルクスの訳書はなお文庫本などでいくらでも買えたし、日本資本主義論争がはなばなしく論壇を賑わせたのは、1932年（昭和7）から35年ごろまでの間であった」¹⁸⁸と述べたように、マルクス主義に関する議論は少なくとも1930年代半ば頃までは、一般の言論界に広く存在していた。こうした異論の存在はマルクス思想だけではない。石橋湛山などのような自由主義論者の出現、矢内原忠雄の反戦論、戸坂潤の唯物論など¹⁸⁹からも分かるように、1930年代は種々の思想が混在する時代であり、それゆえにこそ、当時の政治的権力者にとって国民思想を統一することが切実な課題である。そうした意味において、漢学は国民の共通的思想——日本精神の育成にとって、学問的根拠を提供できるツールの一つとして認識されたといえよう。当時の漢学という言葉の意味について、塩谷温の解釈に注目したい。

今日我等が謂ふ所の漢学なるものは、決して支那の学問を指していふのではない。漢文

¹⁸⁷ 塩谷温「非常時と漢学」（『斯文』第15編第9号、1933）。

¹⁸⁸ 中村隆英『昭和史Ⅰ』（東洋経済新報社、1993、181頁）。

¹⁸⁹ 昭和期における思想的状況について、中村隆英『昭和史Ⅰ』（東洋経済新報社、1993）、鹿野正直『近代日本思想案内』（岩波書店、1999）を参照されたい。

の我が国に伝へられてより、(略) 立派に訓読する様になり、(略) 返り点送り仮名を以て読む以上、之を国文といつて毫も差支ない。¹⁹⁰

つまり、漢学は表には中国を研究する学問として否定され、漢文も国文の一部となる。「漢学」は日本の国体精神を鼓吹するものとしてその存在を保障されていた。上記した塩谷温の解釈は、溝口雄三氏の言った「中国抜き中国読み」¹⁹¹を明白に表現したと考えられる。漢学の日本化、実用化などの要請から、当時の「漢学」の国粹主義的な性格が窺える。

第三節 中国文学研究会の漢学批判

第二節では中文研の成立前後の漢学に関する言論的環境を確認した。このように、国民思想のツールとしての漢学が時局へ付着していく中に、中文研はこれに反対する立場から1934年に発足した。中文研の漢学批判は二段階で行われている。第一段階は草創—発展期(1934.3-1937.10)に行われ、第二段階は中興—葛藤期(1940.4-1943.3)に展開された。本章は第一段階に焦点を当てる。本節では、まず中文研の成立頃の竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の漢学観を考察し、彼らの漢学批判の由来を探り出す。そして1935年に誌上に行われた漢学論争を綿密に分析することによって、第一段階における同人による漢学批判の輪郭を描き出す。さらに、最も猛烈に漢学を反対した竹内好の言論を取り出し、同時代に活動していた保田與重郎の見解と比較し、両者の関連性を提示する。

一 竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の漢学観

中文研の中心的な人物であるこの三人の中国との接触を言えば、漢学から始まったことが共通であった。

まずは竹内好の年譜を追ってみる。彼の中学校と高校時代に文筆活動の痕跡が見られるが、中国に対する関心がさほど見られなかったようだ。おそらく当時の一般教育としての漢文授業以外に中国との接点がなかったと推測できる。1931年、東京帝国大学支那文学科に入学した後、竹内は本格的に漢学に接しはじめたが、「漢字の素養がないために非常にハンデ

¹⁹⁰ 塩谷温「非常時と漢学」、前掲文。

¹⁹¹ 溝口雄三「方法としての中国」(溝口雄三『方法としての中国』、東京大学出版会、1989、133頁)。

イキャップを感じ」¹⁹²た、と回想している。彼は漢文を中心とする授業¹⁹³に対して、かなり困難を感じたのだろう。それは彼が初めて漢文を学ぶ時の話からも読み取れる。

私の体験をいうと、体操の次にきれいな学科が漢文だった。なぜきれいかというと、法則性が感じられないからである。数学ならむしろのこと、前提さえ承認すればあと推理で解けるし、英語にだってルールがあるのに、漢文だけは、理由なしの丸暗記を押しつけられる感じが、いやでたまらなかった。

幼稚な話だが、はじめて漢文をならったとき、なぜ返り点をつけ、送りがなをつけて、わざわざ単純なものを複雑化するのか、納得がいかなかった。(略)なんでこんなバカバカしいことが行われるのか、理解を絶する。ほとんど侮辱に近い感じがした。¹⁹⁴

その当時行われた漢学の授業では、漢文訓読法を駆使することが主流であり(今でもそうであるが)、上述の引用文から分かるように、竹内好は漢文訓読法に使われている返り点や再読文字などの方法によほど窮屈さを感じたに違いない。つまり、自らの漢文の知識が貧弱であるという「侮辱に近い」コンプレックスが竹内の中に著しく存在するといえる。

次に、武田泰淳の漢学との接触を見てみよう。武田はお寺で生まれたため、幼少期より漢学の教養を身に着けることができていた。僧侶である父親に「中学にはいると毎晩、一時間ずつ『十八史略』『日本外史』を講義してくれた」¹⁹⁵という。そして、中国文化との接触、および大学での勉強について、武田は開高健との対談で以下のように述べた。

開高 武田さんが中国だの、中国文学だの、中国大陸だの、中国的なるものに触れるようになった一番強烈なきっかけって何です。

武田 子供のときから親父さんに勧められて、『十八史略』やなにかをやって、『日本外史』も読んだし、『水滸伝』でしょう。『三国志』。子供のときから、『漢楚軍談』というのがあるんですよ。(略)もう一つは、本郷のような狭苦しい、鬱屈した、何の変化もない、沈んでいくような土地でしょう。そんなところにおいて、何とな

¹⁹² 竹内好「わが回想」(竹内好『方法としてのアジア』、創樹社、1978、16頁)。初出：『第三文明』十、十一月号(第三文明社、1975)。『竹内好全集』⑬に収録。

¹⁹³ 例えば、『斯文』第15編第5号(1933)に掲載されている東京帝国大学文学部の講義題目を見ると、「支那哲学支那文学関係」の授業は主に以下のように構成されている。清朝儒学史、周易注疏、支那道德思想史、支那哲学講読(荀子)、支那哲学演習(礼記注疏)、急就篇、支那語発音語法並講読、紅樓夢、支那語会話時文並小説、支那文学ト自然、琵琶記講義、支那文学演習(元曲)、文選講読、支那古代絹布ノ研究。

¹⁹⁴ 竹内好「漢文ぎらい」(『竹内好全集』⑩、251頁)。初出：『中国』第53号(中国の会、1968.4)。のちに竹内好『中国を知るために(第二集)』(勁草書房、1970)に収録。

¹⁹⁵ 武田泰淳「僧侶の父——ほんとうの教育者はと問われて」(『自伝：身心快樂』、創樹社、1977、59頁)。初出：『朝日新聞』1970.12.19。『武田泰淳全集』⑯(筑摩書房、1972)に収録。

く唐詩、唐代の詩人の書いたものを読むと、広々として、ずっと奥深い景色が想像に浮かんでくるわけ。だから懂れているわけだな。中国に対する懂れというよりも、唐詩の世界というものが、何とも言えない、いい気持ちになってくる。¹⁹⁶

このように武田泰淳は竹内と異なり、家柄と中学時代の読書歴の蓄積によって、大学に入学する以前からすでに中国への興味を持ち始め、漢文も読める人間である。彼は竹内のような漢文に対する挫折感を持っていなかったが、上述の対談から分かるように、「漢学」を主流とした「本郷」に対するイメージは決してよいものではない。にもかかわらず、彼は「狭苦しい、鬱屈した、何の変化もない、沈んでいくような土地」で唐詩の魅力を発見し、中国の古典文学に惹かれていくのである。

三人目の岡崎俊夫は武田と同じく僧侶の家柄であるため、彼もまた、大学入学以前から漢文を読解することができ、充分な漢学の素質を持っていた。これは、彼の中国哲学を専門にした一因でもある。しかしながら、漢学と因縁がある彼は、自らの大学時代について以下のような不満を漏らした。

ぼくが支那哲へ入ったのは、独文へ入りたかったけれど、卒業後の就職の心配があったのと、もう一つ、宗旨がちがうが武田と同じ坊主の子で、中学時代から宗教や哲学に多少興味をもっていたから、一つ東洋哲学をかじってみようという気もあったのだ。ところが、入ってみると幻滅、支那哲学とはいっても、哲学のテの字もない、要するに漢学なのだ。¹⁹⁷

上述のように、岡崎は漢学の素質があり、東洋哲学にも関心を抱いた。したがって、彼の言った「漢学」は明らかに中国古典学を意味するのではない。これは、当時の訓読を中心とする教育法、および前述した漢学の時局に附合する時代性に対する不満の表れだといえよう。このように、竹内・武田・岡崎の三人は、中国との最初の接点がそれぞれ異なるものの、彼らはいずれも、大学時代に接した「漢学」に対して嫌悪めいた感情を抱いていたのである。この共通点は、中文研において彼らが漢学批判を展開していく潜在的な遠因となったと考えられる。

発足ごろの中文研の立場について、竹内好は以下のように述べた。

九年（筆者注：昭和9年のこと）に正式に会を結成して、十年に雑誌の刊行をはじめたころは、一つは東大アカデミズムに対する反抗心というものがあったのですね。とくに

¹⁹⁶ 開高健、佐々木基一、武田泰淳「混沌から創造へ」（『武田泰淳全集』別巻二、筑摩書房、1979、287頁）初出：『海』（中央公論、1975.7）

¹⁹⁷ 岡崎俊夫「『中国文学研究会』のこと（1）」（『天上人間：岡崎俊夫文集』、岡崎俊夫文集刊行会、1961、154頁）。初出：『北斗』四巻二号（中国文学会、1959.4）

当時の支那文学が、対象が中国であるということ、そのために官学的な伝統的な学風が露骨に目についた。非常に権力迎合的で、幫間みたいなものです。だから余計にそれに対する反発が強かった。¹⁹⁸

つまり、成立当初の中文研は、「東大アカデミズム」、「官学的な伝統的学風」に対抗する立場から文壇に出陣した。彼らは、直ちにその批判の矛先を「漢学」に向け、機関誌『中国文学月報』において漢学論争を引き起こした。

二 竹内好と竹内照夫の漢学論争

この論争の発端は竹内好の東京帝大時代の同級生、竹内照夫によるものである。竹内照夫は竹内好と違い、終始一貫の漢学志向である。『斯文』第16編第3号（1934.3）に1934年度の「東大文学部卒業論文」の題目が掲載されている。竹内好の「郁達夫研究」と合わせて、そこには竹内照夫の「春秋筆法論」も並んでいる。つまり、二人の学術的出発点が相反対である。竹内照夫は『中国文学月報』第5号に「所謂漢学に就て」を發表し、漢学に関する議論に一石を投じた。その後、第9号まで誌上に一連の討論が現れ、主に以下の通りである。

- ★竹内照夫「所謂漢学に就て」（『中国文学月報』第5号、1935.7.15）
- ★竹内好「漢学の反省（竹内照夫氏の所論を駁す）」（同誌第8号、1935.10.23）
- ★吉村永吉「象の鎖」（同誌第9号、1935.11.27）
- ★竹内照夫「非道弘人」（同誌第9号）
- ★丸山正三郎「漢学者とヂャーナリズム（竹内好氏の所見に就いて）」（同誌第9号）
- ★武田泰淳「新漢学論」（同誌第9号）

まず竹内照夫の「所謂漢学に就て」を見てみよう。要約すれば、この文章は漢学の「雑多性」に着眼し、その学問的価値を強調するものである。その論旨をまとめてみれば、第一に、漢学とは「あらゆる科学的性分を包含し之を衣被するに堅固な道徳的観念を以てしたエンチクロペヂズムス」であり、「啓蒙的精神」と「実践性」を備え、決して封建社会のための理論的要素ではないとした。第二に、漢学には「百科全書的性質」が備わっているとし、かつこの学問がそうした要素を保ち得る理由を指摘した。第三に、「科学的真と芸術的美とが道徳的善を遠く弛せ抜いた社会が決して人間的幸福をもたらさない」と訴え、真善美を統合する頂点は聖であるとし、漢学はその百科全書性によって、真善美を探求できるため、これを聖学である、とした。

また、この文章の主眼である漢学の「百科全書性」と「雑多性」について、竹内照夫は以下のように述べた。

¹⁹⁸ 「座談会 武田泰淳」（近代文学同人編『近代文学の軌跡』、豊島書房、1968、18頁）。

第一に考へられるべきは儒教そのものに存在する雑多性に就いてである。(略) 儒教がその誕生以後経過して来た社会的環境のみに考へてみても、(略) 封建的なそれであれば、官僚専制的なそれもあり、猶且儒教的文献の中には、国家成立以前の社会も描かれてゐる。此ら諸種の環境が儒教に附着せしめた多色性を漢学はそのままに受取つたのである。又、(略) 儒家は孔子の始めから、述而不作をモットーとする所から、多くの学説はその内容に於て一学者の創見であつても、その形式は概ね先哲の演述であり、従つて長い歴史を経た後には儒教の学問的な対象は驚くばかりに増大せられ、問題の範囲も亦甚しく拡張せられる。

このように竹内照夫は、漢学の持つ「百科全書的性質」を、儒教に附着した社会環境の多面性と学説内容の拡張によって説明した。すなわち歴史の進展に伴い、漢学の中には多種多様な要素が含まれていることを指摘した。彼はこの意味で漢学を「真善美」を総合することができる学問として、聖学であると捉えたのである。

この文章の趣旨は明らかに中文研の主張に反するものではあつたものの、当時この機関誌の編集者を担当していた竹内好に高く評価された。彼は竹内照夫の原稿を読んだ後の感想を日記にこう書き綴った。

六月十六日(日)

竹内照夫、原稿を送り来る。漢学のもつ実践性と雑多性を指摘し、漢学の有する価値を(竹内注: 内在的) 抽象せるものにして極めて面白し。論粗なりと雖も之だけ書けるものは外にはなかるべし。反駁を当然書くべきなり。¹⁹⁹

竹内好が中文研を組織した理由の一つには既述の通り漢文に対する嫌悪めいた感情が含まれていたが、それでもここから読み取れるのは、彼が漢学に強い関心を抱くその姿勢、並びに、誌上に漢学に関する議論を導入しようとする編集者としての極めて寛容的な態度である。

このような竹内照夫の漢学擁護論に対して、竹内好は「漢学の反省」(第8号、1935.10.23)において、「『聖学』である漢学が何故今日の墮落(上品には不振と言はれる)を来したか」という疑問を提示し、まず「イデオロギイとして不用化され、脱棄てられた漢学が、余にも多くの封建的桎梏を一身に背負はされて、社会の進化の外に身動きもならず形骸化されたことに諸悪の根源は発足するものの如く思はれる」とし、漢学に対する自らの立場を明確に表明した。

そして彼は「幾何の規格化された型があつて、その型にあて嵌るために、定められた古文書中から恰好の字句を漁るやうな地道な学問は、近頃の我儘な、放埒な若者の好みには適は

¹⁹⁹ 竹内好「中国文学研究会結成のころ(1935年)」(『竹内好全集』⑮、115頁)。

ぬと見える」という方法論的視点から「漢学」を批判し、さらに竹内照夫の展開した「漢学が実践的である」という主張について、以下のように反論した。

今日、一般的社会思潮は多少ともヂヤナリズムの形態に依存せずには在り得ないのだが、漢学に対して不関焉を持するヂヤナリズムの不明はもとより、先づ問はるべきは、之を利用することを知らぬ(或は怖れる)漢学者自身の因循な態度ではあるまいか。(略) こと学問に関する限りは絶対服従の儒教的タブウに緊縛されて、公開的な論争一つ差控へられるのである。今日の漢学に最も必要なものは爽涼なデイレッタントの精神を許容すべき雅量であるといふことも出来やう。漢学の理念は如何にあらうとも、現実の漢学が既に学問する情熱の雰囲気を失つてゐることは掩ひ得ない。

前述したとおり、竹内照夫はその文章において、漢学の持つ「百科全書的性質」、知的内容の豊富さ、およびそれによってもたらされる「啓蒙的作用」という特性を挙げ、その「雑多性」と「実践性」を強調している。すなわち、日本の学問としての「漢学」より、その対象である漢文化の学問としての漢学の価値と特徴について記した。しかし、これに対する竹内好の反論は主に日本における漢学界の方法論と独善的態度という二点に立脚したものである。つまり、両者それぞれの主張の間には、論点そのもののずれ違いが見られるのである。

竹内好の「漢学」嫌悪の感情が露骨であったが、彼は漢学に対して関心を持ち続け、『斯文』も読んでいた。「漢学の反省」を執筆している間に、彼は1935年9月3日の日記において「昨夜床上にて『斯文』をよむに、漢文廃止反対の論すべて独断を比喻でつぎはぎしたものなり」²⁰⁰と感想を語っている。第二節にも触れたように、1930年代の漢学界では、国民精神の形成という意味で、儒学を母胎とした漢学の教条的な価値が大いに宣伝されていた。このような思想は斯界において統一感を求めるような空気を保ちつつ、異論も許されない雰囲気が漂っていた。それに対して既存学界への反抗心から出発した竹内好は、ジャーナリズムの持つ批判精神の重要性を提言し、漢学者たちの「絶対服従の儒教的タブウ」に異議を訴え、竹内照夫の主張した漢学の「実践性」を否定する。そして、教化の面で大いに称揚されていた漢学を「学問する情熱の雰囲気を失つてゐる」と糾弾している。特に、彼は漢学には「デイレッタントの精神」(Dilettante)が必要であるといい、漢学という学問に向き合うにあたり求められるものは、楽しむ、或は享受する態度である、とした。

竹内の主張した「デイレッタントの精神」は、同時代に活動している日本浪漫派の代表人物である保田與重郎に深く関連すると考えられる。そのあたりは第四節にまた触れられるが、要するに、ここまで確認できたのは、竹内の批判は漢学に「批判精神」が欠如しており、かつ「デイレッタントの精神」が必要であるという二点に集約される。

彼が上述の二点によって漢学の「実践性」を否定することは、当時の斯界の学風を考慮し

²⁰⁰ 同前、124頁。

たら、一理があるものといえよう。ただし、竹内好の文章において、竹内照夫が指摘した漢学の内面的価値としての「雑多性」に触れず、「漢学を利用して一飯をありつかんとする」というような実生活との関連およびジャーナリズムの視点で漢学の価値をひたすら否定するというのは、主観に偏る表層的な結論であり、客観的かつ建設的な主張とは言い難い。むしろ彼のジャーナリズムの一面的な視線から「漢学」の価値を完膚なきまで批判する態度は、彼自らの言った「独断」でもあるのではなかろうか。

また、竹内好の方法論に対する批判は、前述した彼の回想にも現れている漢文に対するコンプレックスをも想起させる。漢文そのものに困難を感じていた彼は、どのような感慨を内心に抱きつつ、当時の「漢学の不振」を眺めていたのだろうか。竹内照夫のような漢学を内面から批評する発言は竹内好には見られなかった。彼自身は漢学に深入りしたこともなかったし、ゆえに「ジャーナリズムの欠如」という表面的な視点からの「漢学」批判しかできなかった。言い換えれば、竹内好が否定したのは、漢学そのものではなく、「漢学」の研究法、および漢学にひたすら社会的役割を求める当時の風潮であると考えられる。

これは第9号（1935.11.27）に掲載された竹内照夫の「非道弘人」からも推察できる。竹内照夫はそもそも古典を読めていない「新進学徒」を下記のように糾弾する。

漢学なるものは骨董と書豚以外の何者でもないと断ずる性根には、救ふべからざる僻見と被害妄想とがある。六経の一瞥をさへ怠つて何の支那学がある。「古文書中から恰好の字句を漁る」が如きは抑々末である。何よりも大切なことは、デイレッタント的に読むことである。読まずして濫りに思ふが故に、「漁る」が如き醜態に陥るのである。

ここで、竹内照夫は竹内好の内在的問題に突き止め、「漢学」を批判する前に少なくともまず古典をきちんと読むべきという反論を投げ出した。つまり、竹内好の漢学批判の根源には彼のコンプレックスが潜んでいることを示唆しているのではないか。

ただし、竹内照夫と竹内好は、「漢学」について表には対抗しているものの、その文脈から共通する見解も滲みだしている。例えば、「漢学の実践性」に関して、竹内照夫は同文章において以下のように述べている。

「道を弘めるものは人であつて」、自然に流行するイデオロギーなどが若し在ると思つたらそれこそ大惑である。——人間生活に於ける個人的及び社会的条件が或る思想に及ぼす勢力の過当評価こそは現今一部に存する世界観の根本的錯誤である。漢学が今に於てよし不振であるにせよ、それは決して漢学に内在的な原因が在ることを少しも証明しない。

竹内照夫のここに挙げた「或る思想」とは、文中に繰り返して言及された「漢学的イデオロギー」に相当し、そして「個人的」な条件とは、竹内好の記した「漢学を利用して一飯を

ありつかんとする」ような個人生活の問題を想起させ、「社会的条件」とはジャーナリズムの流行を意味すると考えられる。つまり、漢学の実践性は、個人的意欲や社会に流行している思潮の中に求められているものではないと主張した。

ここは第一節に述べた国民精神の統一のために提起された漢学の实用化にも関連する。吉田茂が国体へ貢献できる漢学、あるいは工場で応用できる漢学を提唱したのは、まさに国民精神の統一という社会的条件によって漢学を利用しようとする意図に基づくものである。上述した竹内照夫の批判は、おもてには竹内好への反論だと考えられるが、一方では、このような漢学を官学化しようとする画策していた言論界への反撥としても読み解くことができるであろう。

さらに、竹内照夫は以下のように漢学の価値とその実践性を主張した。

真理の為にのみ真理を追はず、芸術の為にのみ芸術を把へず、利潤の為にのみ資本を投ぜず、治者の得意にのみ酔ふことなく政務を執る者を漢学は要求する。実践性は此に存在し、聖なる価値は此に定立する。(略) 漢学を単なる封建的観念と目して之を放擲したのは我らの父祖であつて、漢学それ自身ではない。

竹内照夫による漢学の持つ内在的な価値に対するこのような再検討は、第一節に述べた当時の国体精神の教化に利用されていた漢学論に比べると、新鮮味があり、進歩的ともいえる。言い換えれば、竹内好の展開したジャーナリズム的視点による「漢学」批判がいわばアウトサイドからの既存学界に対する反論だとすれば、一方の竹内照夫の主張した漢学論は、学問そのものが持つ価値へのインサイドからの再アプローチともいえよう。尤も、これらの竹内好と竹内照夫の論争は表面的に対立していたが、批判の矛先こそ違うとしても、既存学界の学風を問題視するという批判的な姿勢は、むしろ一致していると考えられる。

三 他の同人の反響

第5号と第8号に掲載された二人の論争は極めて刺激的であった。これに触発され、本誌第9号(1935.11.27)では特集「漢学を繞る諸問題」を組み、竹内照夫の反駁のほか、同人の吉村永吉、武田泰淳、会員の丸山正三郎など、誌上に多くの意見が掲載された。ここからも同人とはいえ、彼らの論調は必ずしも一致していないことが看取できる。

例えば、吉村永吉は「象の鎖」において、「漢学」を「支那文芸評価」を阻害するものとして批判し、特に漢学を道德教育にする点に対して激しく非難した。これについて、吉村の文章は当時の漢学界で盛んに議論された漢学の国民精神化に対する批判ではないかと筆者は考えている。まず引用文を見てみよう。

支那の文芸を道德や哲学に関連させることの好きな「大学の教授達」は、ともすれば孔

子が春秋を成つて乱臣賊子が懼れたと本気に考へてみたり、(略) ①此の傾向は概して江戸時代の御用学者から吾国にも流行し出して、多くの所謂聖典を含む、広い、そして正しい意味の支那文芸そのものとは遊離した、別の一個の拵へ上げられた概念に甚だしく満足することに慣れてきた結果なのである。その流は澎湃たるもので、②勢の激すところ朱子一家の見を道德教育の基準にしたり(略)といふのは、支那にはすでに一つの完全な或る概念が本より厳存して、支那の文芸全般はその応用乃至発展に出ると見る事大的概念——支那人自身すでに久しい以前に脱穀清算して了つた觀念——が幅を利かしてゐるのであつて、嘗てはその概念を信奉し、③今はそれを殊更に揚棄せんとするにせよ、その根本真相から遠ざかれるは一緒だ。即ち今吾々に必要なことは、④かかる追加的な特殊物を除き去つて、自然の状態に於て本然の姿に接することである。木像の孔子様を礼拝することではなくて、仲尼を含む生きた支那人全体を理解することである。(番号は筆者より)

この文章には漢学と国民教化に対する直接的批判が明確に示されていないが、文脈の前後からその示唆を察知することができる。まず、①の部分「支那文芸そのものとは遊離した」「別の一個の拵へ上げられた概念」とは何か、文章の中では明白な説明として述べられていない。しかし吉村は文章の冒頭部分に中国の古典文学を道德化する大学教授を批判し、さらに②の部分「朱子一家の見を道德教育の基準に」すると書いているように、ここで表現するところの「拵へ上げられた概念」とは、国民を教化するために中国古典文学に付与された「君臣」、「忠孝」という意義だと考えられる。そして④に書かれた「追加的な特殊物」とは、中国の古典を国民精神化するという国策の流れに従う傾向と理解しても差し支えないだろう。

したがって、吉村は中国の古典を「聖典」として解釈を加えるのではなく、「支那の古典の全体を文芸作品として平心を以て検討し直すことは、是非為すべく残されてゐる」と、漢学を文学的に考察する必要性を提言した。つまり、吉村の主張は当時の漢学を国民精神の形成に役立つと強調した漢学者たちの主張に対する反論であると読み取れるのではないだろうか。

次に挙げる丸山正三郎の「漢学とジャーナリズム(竹内好氏の所見に就いて)」は、「漢学」とジャーナリズムの不振を主旨とするものである。その内容は三点に集約されることができる。第一に、日本のジャーナリズムが持つ批判精神は儒教的論理観を揚棄していること。第二には漢学を説く政治思想経済理論は指導性を失つたため、もはや漢学者はジャーナリズムに寄与できるものを持ってないこと。第三には、漢学は古典文学としてその価値を保ち得るが、「実学」とは言えないこと。このように、丸山正三郎はほぼ全面的に竹内好のジャーナリズム論に賛成している。

こうした中に、同人として異色な意見を打ち出したのが武田泰淳である。武田は、竹内好の漢学否定論とは異なる立場で、「漢学」の存在を認めたとうえで、従来の漢学界の問題を指

摘し、「新漢学」のスタイルを提案した。²⁰¹

具体的には以下の10点が含まれる。従来の漢学に関して、武田は①「漢学はむやみに打倒さるべきものではなく、「漢籍の知識なき東洋学は不可能である」との立場を示したうえで、②他分野（東洋史学・美術史学・言語学・宗教学）との関わりを持ちながら、その研究分野を拡大すべきだと指摘した。そして③「漢学はやや進歩性を失った」ことは否定できず、④従来の「支那哲学」と「支那文学」の分野は哲学らしくもなく、文学らしくもないと述べ、⑤かといって「漢学は見棄てらるべきではあるまい」と主張した。さらに、武田は「新漢学」の建設に関して、⑥新漢学は新進学徒の共同研究とともに進展することが必要であること、⑦「現代中国文化にも関心を持ち、かつ中国の学術機関との学的協力」も必要となること、⑧各研究分野の間で互いに連携し、漢学を活性化すること、⑨古典を「バイブルではなくして、『学』の資料」として利用すべきこと、⑩これらの実現のために新漢学を指導して下さる先生が現れることを熱望すると述べた。

武田泰淳が「漢学」の存在を肯定した態度は、彼の1937年の出征するまで発表された文章から読み取れる。彼は馮夢龍、唐代の仏教文学、袁中郎などを論じ、古典文学に大きな関心を示した。なお、武田以外にも、ほかの同人によって、『三言』、『紅樓夢』、『公羊伝』、王国維などに関する論文、または随筆が、誌上に掲載されている。一方、竹内好は全く古典文学に興味を示さず、魯迅、茅盾、郁達夫など、もっぱら中国近代文学に注目した。つまり、中文研は、漢学批判から出発したとはいえ、竹内好の一家言に附和雷同することなく、同人の間にそれぞれの立場を保持しながら、国体精神に束縛された「漢学」から脱皮しようとしていたのである。

この漢学論争の余波は第10号（1935.12.31）の「会報」まで続いた。「会員消息」欄には竹内照夫と吉村永吉からの手紙が掲載され、誌上に残されたその文脈からは、漢学論争によって、彼らの言論にもある種の緊張感が走りはじめたことを読み取れる。竹内照夫は「とにかく面倒くさいからもう『漢学』について沈黙します」と明言したうえで、丸山の発言は明快であり、武田の意見は穏健であると評価した。一方、吉村永吉は「拙文御掲載に就ては御面倒をお掛けしたこと恐縮してみます」といい、「象の鎖」での言葉遣いについて以下のような解釈を加えている。

「今はそれを殊更に揚棄せんとするにせよ」なる一句は、後の「追加的の特殊物を除き去り」或は「経学的観点の打倒」といふ小生の意図する所とごつちやになつて意味不鮮明となる恐れなきにしも非ずで、実は「今はそれと、のれんと脛押し的の独相撲をとつてゐるにせよ」といふ意味に御諒解願へたら幸甚です、何れにせよ甚だ無礼の言であることは承知してありますが御海容を願はしく存じます。²⁰²

²⁰¹ 武田泰淳「新漢学論」（『中国文学月報』第9号、1935.11.27）。

²⁰² 「会報」（『中国文学月報』、第10号、1935.12.31）。

吉村の手紙ではどのような「御面倒をお掛けした」ことについて詳しく書かれていない。だが前述したように、吉村の文章には国民精神化された「漢学」への批判が滲み出している上に、さらに、会報ではわざわざ自らの言葉遣いに関する弁明を加えたことから見れば、この「漢学論争」は当局から何らかの注意喚起を受けた可能性があるのではないかと推測できる。

このような推測が可能であるのは、『中国文学月報』が刊行された後には、早くも中文研の活動が警察に目をつけられていた事情があったからである。特に、1935年4月の「謝冰瑩事件」によって武田泰淳が検挙されたあと、当局の中文研に対する監視はより一層厳しくなったというのである。竹内好の話によると、

昭和十年、満州国皇帝の溥儀が日本はじめてきた時、留学生のなかで怪しいと思ってるやつを予備拘束してね、その時に武田が捲きぞえをくっている。そういう事件なんかもあって、中国文学研究会というのは、とにかくブラック・リストにはのっているんですよ。のっているんだけど、それほど悪いことをしそうもない、微弱な会だから、つぶさなかったんだと思うんだ。(略) 戦争がはじまってからは、私の家が事務局でしたから、月一回、または二月に一回程度、特高と憲兵が必ずきました。様子を探りにとつか、牽制にとつか、くるんですよ。いやな気持ですね。しかし対応は鄭重にしてみました。いつ挙げられるか、びくびくですよ。²⁰³

この引用文からも中文研を取り巻く当時の厳しい社会的環境を察することができる。同人が検挙され、事務局も警察に睨まれている中で、漢学批判を取り上げるということは一定の危険性を伴う行動であったことだろう。したがって、中文研の漢学批判は学界への反発だけでなく、時局に対する反抗という一面も備えていると言えなくもない。

四 外国文学としての中国文学

その後、誌上においては漢学に関する論争が現れなくなるが、1937年、竹内好は北京へ留学する前に再び漢学について語っている。第23号(1937.2.1)の特集「中国文学研究の方法の問題」において、彼は「私と周囲と中国文学」を発表した。その中で、竹内は「文献解釈」という中国古典文学の研究法に対してその批判を注いだ。竹内はまず「文学とは何であるか」という問題を出し、このように述べている。

何が文学であるかを私は答へることが出来ないが、(略) ①中国文学は泰西の文学と区別さるべしとある人は言ふ。私もそれを認容してもいい。(略) だがそれが、文学といふ文字の文献的解釈か、せいぜい概念の広狭だけについて恬然と述べられるとき、私の

²⁰³ 竹内好・松本昌次「中国と私」(『状況的』、前掲書、239頁)。

情念は憤りに身をふるはさずにはゐられません。対象が特殊なるが故に方法が特殊たるべしという命題は、それ自体では可もなく不可もないでありませう。何が故に対象は対象たり得るのか。特殊は特殊たり得るのか。対象と方法とを結ぶ諸規定が、求むる心としてでなく、具はれる悪智としてそこに働かなかつたでありませうか。②「竹帛に著すを文といひ、その法式を論ずるを文学」ここに観念された文学が私と相容れぬことは無論であります、(略) 私が是非を問ひたいのは、文学といふ言葉にまつはるさまざまの観念の類別に関してではなく、さうした観念の権威に隠れ、語原穿鑿に身を委ねて自己の言葉を平然と忘れた無恥を攻めたいのです。(番号は筆者より)

中国古典文学は西洋文学とは区別され、「文献的解釈」によって研究されていた。①の部分から分かるように、竹内好は、このような区別自体を「認容してもいい」といいながら、「対象」と「特殊」を決める基準については大きな疑問を抱いていた。中国の古典文学のみ何故に特殊でなければならないのか。ここにもまた、前述した1930年代における漢学の表象、すなわち、日本の国民精神との一致性を想起させる。中国文学が西洋文学と区別された理由もまさにそこにあるのではないだろうか。中国の古典が外国の文学作品としては鑑賞されず、字句の注釈によって考究がなされていたのは、このような日本化された漢学の持つ思想的な時局性と決して無関係ではない。したがって、竹内好の見解は漢学の日本化に対する潜在的な批判であるともいえるだろう。

そして、②の部分に書かれた「竹帛に著すを文といひ、その法式を論ずるを文学」²⁰⁴というのは、中国の古文学者である章炳麟（太炎）の「文学総略」²⁰⁵に述べられた主張であり、記された文字を「文」とし、その「文」の法式学を「文学」とする見解である。言うまでもなく、章炳麟の定義した「文学」は、一般的な意味と異なる。竹内好の求めている文学研究とは、語源や文献的解釈の追求ではなく、古典文学を文学作品としてありのままに鑑賞し、それを批評する能力である。したがって、彼は、「満ち、溢れ、流るるものこそ文学でありませう。論語を一の随想として談る権利を私は吉村永吉氏（月報九号）と共に保留したい」といい、中国の古典を「文献的解釈」にこだわる学問ではなく、外国の文学作品として批評したいという願望を訴えた。

こうして、竹内好は文献考証の態度を持つ中国古典文学研究に対する不満を「漢学」にぶつけるのである。

²⁰⁴ 原文および出典：「文学者、以有文字著於竹帛、故謂之文。論其法式、謂之文学」（『国故論衡』中巻、上海文瑞樓書局、出版年不明）。竹内好がどのような経緯で章炳麟の文章を読んだか不明である。ただし、1935年、『制言』という中国の国学を内容とする雑誌が、章の国学講習会によって発刊され、竹内好の回想によると、この雑誌を「向こうから贈って来ました」（「わが回想」、『竹内好全集』⑬、初出：『第三文明』、1975.10）という。

²⁰⁵ 1906年10月から12月までに『国粹学報』に章炳麟の「文学論略」が連載された。これに基づいて執筆されたのは「文学総略」である。1910年に国学講習会によって発行された『国故論衡』の中巻に収録された。

ものの生きた全体性の代りに、ものに関する概念が、認識主体を離れて素朴に実在すると観念される、かうした低調な学風が、漢学（或は支那学）の根底に横はる文献考証的な態度に由来することは明かでありませう。現在の漢学は清朝の考証学に流を汲むといはれます。だが、そこには「己を以て自ら蔽はず」（戴東原）と揚言した烈しい批判精神、それあるが故に私の心を打つ、灼くやうな否定の精神の一片だに窺へませうか。漢学もまた伝統の中にその精神を喪つて形骸化する過程は世の万般の事物と異らぬであります。

このように、竹内好の漢学批判は、ジャーナリズムから出発したが、その内実は四書五経などの古典籍に文学的価値を発見することによって、既存学界の現状を打破したいという希望であった。彼の主張した「デイレッタントの精神」も、このような意志を物語っている。つまり中国の古典籍とは文献考証の方法ではなく、本来外国の文学作品として楽しみ、その文学的価値を享受するものであり、文学批評の方法でアプローチするものである。しかしアカデミックな漢学界において、竹内好の追求するジャーナリズム的な批判精神をいかにして、どのように実現するのか。竹内好の示す方向性には不透明性が見られる。さらには、彼の「漢学」批判に含まれている漢文コンプレックスの要素も忘れてはならない。第8号（1935.10.23）に見られる竹内好の辛辣な批判に比べると、この文章の低調な筆触から、自らの追求している中国文学の研究法とは何かという疑問に彷徨う竹内好の心境が窺える。

竹内好と竹内照夫の漢学論争は、誌上において初めて本格的に「漢学」の現状に対して疑問を投げかけたものであった。しかしながら、その後の議論は更なる発展を遂げることはなく、第一期における中文研の漢学批判は、徐々に低調化する傾向が見られたのである。また、竹内好と竹内照夫のみならず、他の同人たちもそれぞれ異なる意見を主張したが、国民精神化された「漢学」に反対する姿勢としては一致していると思われる。ただし、これまで述べた通り、彼らの「漢学」批判は徹底的に行われたとは言えない。特に竹内好はジャーナリズムの観点から「漢学」に強烈な批判を加えたものの、学問としての漢学が持つ内在的価値を無視し、そして新たな打開策も出せなかった。そうした意味で、この時期における中文研の行った漢学批判は、既存学界に新視点を提示した点では評価できるが、一方で論理的な体系を構築することはできず、その先にあるべきビジョンをはっきりと描けなかった一面も否定できない。

1937年10月、竹内好は留学生として北京へ向かい、そして武田泰淳、飯塚朗、千田九一などの同人も相次いで中国へ渡った。そこから二年間に、「漢学」に対する批判は誌上から消えてしまい、特に竹内好は三通の「北京通信」を公表した後、帰国するまでのあいだに沈黙状態となり、「漢学」に関しては誌上で言及されることはなかった。

第四節 竹内好の漢学論と保田與重郎

第三節では、中文研の「漢学」批判の経緯を考察した。この論争の中心に立った竹内好は、もっぱらジャーナリズムの立場に自らを据え、「文献的解釈」を越える研究法を力説した。では、このような竹内好の漢学論の由来はどこにあるのだろうか。

そこで本節では、筆者は当時の日本文壇に置かれた竹内好の体験を追究し、日本浪漫派の中心的人物としてその名をよく知られていた保田與重郎を取り上げ、竹内の漢学論に反映された二人の関連性を提示してみたい。

一 竹内好と保田與重郎の高校時代と大学時代

竹内好と保田與重郎は高校時代からの同級生であり、大学時代も同じく東京帝国大学で過ごした。高校には異なるクラスに在籍し、大学の専門も異なるが、その経歴からは、二人には類似性が見られる。まず、二人の高校時代と大学時代の略歴²⁰⁶を以下の通りである。

表11 高校時代における竹内好と保田與重郎の活動

	竹内好	保田與重郎
所属	文科甲類（英語）	文科乙類（ドイツ語）
主な活動	1928： 寮図書委員。図書室の管理運営と、年一回、寮生による自主刊行の機関誌『帝陵』を編集。	1928： 哲学研究会、史学研究会の会員となる。
	1929： 二年生委員として『帝陵』編集に参加。	1929： 哲学研究会で芭蕉や小西来山などに関する研究発表を行い、炫火短歌会の第一回歌会を開く。
	1930： 校友会学芸部委員となる。機関誌『校友会雑誌』の編集を担当。	1930： 田中克己とともに炫火短歌会の機関誌『炫火』を創刊。同誌の編集に携る。誌上に多くの文章を発表。

²⁰⁶ 表の作成にあたっては、久米旺生編「竹内好年譜」（『竹内好全集』⑩）、「保田與重郎年譜」（『保田與重郎全集』別巻五、講談社、1989）、桶谷秀昭『保田與重郎』（講談社、1996）を参照した。

表12 大学時代における竹内好と保田與重郎の活動

	竹内好	保田與重郎
所属	東京帝国大学文学部支那文学科	東京帝国大学文学部美学美術史学科
主な活動	1931 : 4月、RS（リーディング・ソサエティ。唯物弁証法などを研究する）に所属。 9月、支那語支那時文速成講習会に通いはじめる。10月に帝大新聞の社員に応募したが、失敗。	1931 : 8月に佐渡・越後地方に旅行。
	1932 : 8月、外務省対支文化事業部の補助金を受け、朝鮮・長春・大連で旅行、その後私費で北京に一か月以上に滞在。	1932 : 3月に大阪高等学校の同窓生と同人誌『コギト』を創刊（月刊）。誌上に「印象批評」など多数の文章を発表。 7月に朝鮮に旅行し、約一か月滞在。
	1933 : 12月卒業論文『郁達夫研究』を提出。	1933 : 「文学時評」のコラムを担当しはじめ、ヘルダアリーン論をテーマとした卒業論文を提出。
	1934 : 3月、東京帝国大学を卒業。「中国文学研究会」を組織。8月、周作人・徐祖生歓迎会を開催し、会の名を公表。	1934 : 3月東京帝国大学を卒業。4月藤原定などと『現実』を創刊し、8月に終刊。11月に「『日本浪漫派』広告」を神保光太郎などとの連名で「コギト」に掲げる。

表11から分かるように、竹内好と保田與重郎は、高校時代に雑誌の編集に携わりはじめたという共通した経験を持っている。ただし、二人の方向性は異なる。「竹内好年譜」に載せた『学芸部日誌』の抜粋から、竹内は『校友会雑誌』の編集方針を「輿論の喚起、正当な批評の機関」²⁰⁷と認識したが、同じ雑誌に投稿していた保田與重郎は異なる考えを抱いている。これについて、保田とともに『炫火』を創刊した田中克己は、「竹内がね、校友会雑誌の編集をしたとき、ぼくらと編集方針というか、性格が合わないんです。それだから、ぼくらはやむをえず私の雑誌として『炫火』というのを出した。――三年のときね。それからすぐ『コギト』になる」²⁰⁸と語った。田中克己が「性格が合わない」と評したその意味は、以下のよ

²⁰⁷ 久米旺生編「竹内好年譜」（『竹内好全集』⑰、286頁）。

²⁰⁸ 同前、287頁。

うな竹内と保田の学生時代の対照的な姿からも読み取れる。

高校時代に竹内好の編集した『校友会雑誌』は本来、学生の論文や小説、短歌など文学作品を投稿する場である。だが彼が編集を担当してからは、たびたび学校の検閲に引っかかった。また、学生ストライキにも参加し、学校との多くの衝突を引き起こした。²⁰⁹一方、保田與重郎は短歌会を組織し、独自に文芸雑誌を編集した。そして、彼は高校時代から日本の古典文学を注目しはじめ、その初期の文章には、世阿弥の『風姿花伝』を論じるものや、仏像を美学的に分析したものなどが含まれている。竹内好と保田與重郎は、同じく文芸活動に関心を示したが、文学批評の面では保田のほうが先行していたといえる。したがって、竹内はつねに保田の言動に視線を注いでいた。

1932年3月、保田は『コギト』を創刊した。竹内好の年譜において、それについて下記のように書かれている。

一九三二年（昭和七） 二二歳

二月六日、相野忠雄（大高七回生）から、「彼らの雑誌」（『コギト』）のことをいろいろ聞く。三月一日、『コギト』三部購入。数日にわたって室清と『コギト』批評。十八日、田中克己と『コギト』論。（略）

一九三三年（昭和八） 二三歳

一月四日、「コギト第二年を迎えて更に意気さかなり。杉浦の小説も進歩せり。慶賀に堪えざると共に顧みて一抹の寂寥を感ずるものあるは如何」（日記）（略）²¹⁰

さらに、1934年の日記に竹内好はこう綴っている。

六月二十六日（火）

（略）『コギト』七月号新装にて店頭に出づ。表紙その他一新せるのみならず、内容も亀井、本庄ら書き、一般雑誌へ一步踏み出そうとしていることを示す。精力的なる、むしろ感嘆すべきなり。やはり保田〔与重郎〕は莫迦に出来ぬ男なり。相当のやり手なり。

211

上記の引用文に、保田與重郎の文壇上の活動に目を留まる竹内好の姿が反映されている。彼の感じた「一抹の寂寥」とは、同じく文壇の進出を志した自らの保田に対する劣等感を感じ取った心境によるものだろう。大原祐治は、竹内好が「保田與重郎への対抗意識」²¹²を抱いていると指摘したが、保田の初期文学論を見る限り、竹内の保田に向けていた感情は決し

²⁰⁹ 同前、「一九三〇年（昭和五）」項目を参照。

²¹⁰ 同前、290-291頁。

²¹¹ 「中国文学研究会結成のころ（1934）」（『竹内好全集』⑮、64頁）。

²¹² 大原裕治「北京の輩と兵隊：「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳」（『学習院大学人文科学論集』11、2002、107頁）。

て対抗意識だけではないと思われる。

二 竹内好の漢学論にみられる保田與重郎との関連性

第三節に述べた竹内好の漢学論に含まれる中心的な論点は、中国の古典文学を文学鑑賞の視点から研究することの必要性である。しかし、竹内好の主張は、保田與重郎の初期の文章評論とも重なる考えを含んでいる。これは主に二点から見られる。一つは文学と文章の関係であり、もう一つは文学を論じる際の「個人」の立場の重要性である。

まず、文学と文章の関係について見てみよう。前述したように、竹内好は「私と周囲と中国文学」において、文の法式を論じるものを文学とするという章太炎の主張を批判した。また、竹内は「文学とは何か」という疑問を取り上げ、「文学という文字の文献的解釈か、せいぜい概念の広狭だけについて恬然と述べられるとき、私の情念は憤りに身をふるはさずにはゐられません」²¹³とその心情を率直に述べた。さらに彼は、文献考証の方法ではなく、あくまで随想として孔子の『論語』を読みたいとも訴えた。竹内はいう。

孔子が如何に文学を見たかは私も知りたいと願ふ。だが、孔子がしかく見た文学が何であつたかが究められなければ、文献から文学の名辞を漁りつくさうとも、所詮は、概念を以てする概念の置換えに過ぎないのではないでせうか。

つまり、彼は文字の解釈と文の構造に関する論考を「概念の置換え」とし、文学研究としては認めなかったのである。

このような文学と文章に対する理解は、1932年3月の『コギト』創刊号に掲載された保田與重郎の「印象批評」にも見られる。これは文学批評の方法に関する文章であり、印象批評²¹⁴の有効性を論じたものである。中には、作家の芸術的苦悩について下記のように書かれて

²¹³ 竹内好「私と周囲と中国文学」(『中国文学月報』第23号、1937.2.1)

²¹⁴ 菅野昭正は「印象批評」をこのように定義している。「19世紀末から20世紀初頭にかけてフランスで有力な潮流となった文学批評の形態。批評者が対象から受けとる(印象)impressionを重視し、作品が批評者の内面に喚起する印象の分析に批評の基盤を求めるところに特徴がある。印象批評は特定の流派をなしていたのではなく、1880年代にジュール・ルメートル、アナトール・フランスの批評作品にあらわれた傾向にたいして名づけられたものだが、イポリット・テーヌを中心とする先行世代の厳密な実証主義にもとづく科学的批評にたいする批判と修正の欲求が、その出発点をなしていた。『もはや客観的批評というものはない客観的芸術というものはない』(A.フランス)という言葉に、その立場は簡潔に表明されている。印象といっても一場の思いつきではなく、ルメートルの場合には古典主義的な伝統への深い理解、フランスの場合にはそれに加えて作品の魅力を楽しむ柔軟な感性が母胎になっており、それが彼らの批評作品におのずから体系なき体系ともいった特質をあたえている。」(『集英社世界文学大事典』、集英社、1996)

また、保田與重郎によって、「普通云はれる印象批評なる批評精神はジュール・ルメートル、アナトール・フランスらの批評態度である。その直接原因がブルンチュールらの科学的批評の排斥にあつたとしても同様に彼ら気分的集団の批評態度に他ならない。彼らは徹底的自然科

いる。

ともあれ現実と作品との間に於て作家の意識に生じる裂罅は実に言語性格そのものにある様に思はれる。その理由は、文章は^{マツ}畢意認識形式を作る場合形式論理学の範疇を破り得ない。しかも文学の本質的特色は実に思惟された概念の記述でないことである。形式論理的なる認識形式（文章）は実に思惟の運行（観念）にめざましく力をもち、しかも芸術は存在の記載であらねばならないからである。²¹⁵

上記の引用文から、保田與重郎の文章と文学に対する認識を読み取れる。文章とは、文の体系としてパターンに関する問題であり、作家の認識形式を構成することに関連する。保田は文章を構成していくこの流れを「思惟された概念の記述」として理解した。如何なる文章も、そのみをもって文学であるとはいえない。文学の芸術性は言語の羅列によってではなく、文章を通して最終的にいかに「存在」を発し得るかである。保田は、文章の構成を「概念」として理解した。このような要素は、竹内好の文学に対する理解においても見られるのではないか。

このように、芸術としての文学とは「概念」を述べるものではない。『コギト』第6号に掲載された「アンチ・デイレッツタンチズム」において、保田與重郎は「芸術を享受するものは終ひに個人であるという事実」²¹⁶を指摘し、文学を論じる際に「個人」の立場の重要性を主張した。²¹⁷前述した「印象批評」の冒頭に於いても、保田は芸術における直観の重要性を強調し、また批評家に対して「作品に愛をもつこと」、および「科学的なる教養性」を求めた。さらに保田は、「批評をさまざまに意匠づけるとしても、純粹な批評の根底に於て芸術する情熱——作者と共に——換言すると享受以前の愛があり、それより出発するものであらう」²¹⁸と述べた。ここから彼の批評に対する態度が読み取れる。つまり、批評とはまず、批評者自身が文学作品の芸術性を享受することから始まる。すなわち、批評者には個人としての鋭い直観による感受性（保田の言葉でいうと「心構へ」²¹⁹）が要求される。

また「印象批評」の最後に、保田が印象批評と作者の人間性についてこのように語っている。

学から、倫理学から、神学から、の批評を拒絶する。この意味で実に芸術批評と云へよう」と解釈されている。（保田與重郎「印象批評」、『保田與重郎全集』②、講談社、1985、18頁）。初出：『コギト』創刊号（1932.3）。

²¹⁵ 保田與重郎「印象批評」、前掲書、8頁。

²¹⁶ 保田與重郎「アンチ・デイレッツタンチズム」（『保田與重郎全集』②、41頁）。初出：『コギト』第6号（1932.10）

²¹⁷ 保田與重郎の主張した「個人」の立場について、小松原孝文氏は「破壊と建設の文学へ向けて：保田與重郎『アンチ・デイレッツタンチズム』」（『日本文学』60巻9号、2011）においても論及した。

²¹⁸ 保田與重郎「印象批評」、前掲書、22頁。

²¹⁹ 同前、20頁。

印象批評は失格しない。人は——特に左翼のイデオロギストはレエニンの断片的批評の中にさへ意味を汲まんとする。このことは就中以上の事実によつてのみ正当化されるであらう。同様に「論語」に現れた孔子の詩経を述べることにより明らかにした芸術観にしてもさうである。孔子は凡庸な訓誥学者によりしばしば生彩を失つてゐる。レエニンの芸術観の生彩を剥落する者は誰であらうか。²²⁰

左翼イデオロギーに局限されたレーニンの断片的批評と同じように、形式に拘る訓誥だけでは、孔子の持つ芸術観の生彩を見いだせないといふ保田與重郎は説いた。したがって、文学批評における「個人」の立場、および文学に現れた人間性に対する追求を実現できる面で、保田は「印象批評は失格しない」とも主張した。

このような保田の論調からは、孔子の文学観を知りたいという竹内好の掲げた主張と重なるものを想起できる。同様に竹内好の漢学論では、「個人」の文学観を重要視する傾向も見られる。例えば、竹内は「漢学の反省」において漢学には「デイレッツタントの精神」が必要であると主張し、中国の古典文学研究における文学鑑賞の目線の欠失を指摘した。そして「私と周囲と中国文学」で、彼はまた、以下のように語っている。

私は文学研究に於る鑑賞主義、主観主義の言い旧された言葉を下手に並べかへしてゐるだけかもしれません。享受と批評の解き難い二元を私もまた解き得るとは思はない。私はただ、周作人が文学史を講ずるに当つて自己の文学観から出発した、出発せざるにみられなかつた心情を、その文学観の当否とは離れて、尊いものに感じます。(竹内注：「中国新文学的源流」)²²¹

ここで明らかになったのは、竹内好の言論には、「鑑賞主義」、「主観主義」、「享受と批評」などのようなキーワードが含まれていたが、これらは1932年の保田與重郎の初期作品に繰り返し登場する。そして、竹内が『中国新文学的源流』を高く評価したのは、周作人が文学史を論述する際に「自己の文学観」から出発するという姿勢によるものである。これも保田の提唱した「個人」の立場に通底するといえる。

前述したように、この時期の竹内好は、連日にわたって『コギト』への批評を試みたほど、保田與重郎に高い関心を持っていた。竹内好の年譜と日記を見た限り、彼には保田與重郎のように広く国文学の知識と西洋文学理論を渉猟する経験がなかった。しかしそれにもかかわらず、彼の観点には、保田與重郎との強い相似性が多くみられる。これは、竹内が高校、そして大学時代にもつねに保田の行動を意識していた結果といえよう。

一方、保田與重郎の目に映った竹内好の言動はいかなるものであったのか。1969年に発表

²²⁰ 同前、26頁。

²²¹ 竹内好「私と周囲と中国文学」(『中国文学月報』第23号、1937.2.1)

された回想において、保田は次のように述べている。

漢文学の方では、旧時代の儒学が排除され、文明開化の「漢文学」は同時に歐洲風の「支那学」を加味し、それが帝国大学の学風をなしてゐたが、私らの時代に「中国文学」といふ新しい傾向が出てゐた。それは我々と同年配の若い学生たちによつてなされた理解法で、「日本文芸学」の古めかしさに比して、若さと未熟さにうらづけられた生新性があつたが、系統としては、文芸学の方をとりつてしばしば「プロレタリア文学」への妥協を示してゐた。²²²

ここからも、同時代の文壇に登壇しようとする二人が、互いをそこはかとなく意識しつつその行動を注視していた様子が窺える。中文研が草創—発展期に行った一連の漢学批判は、保田の言ったように「若さ」と「未熟さ」に裏付けられたといえよう。いずれにせよ竹内好の漢学論の形成には、彼自身の体験、および時局の表面に浮び出した既存学界の漢学論への反抗以外に、同時代を生きた知識人の論調からの影響も強く垣間見えるのである。

第五節 まとめ

漢学への反抗は、草創—発展期における中文研の中心的な課題であつた。本章ではまず1930年代に至るまでの漢学に関する言論環境を振り返つてみた。1920年代末からは漢学を国民精神にする傾向が見られはじめ、1930年代の学術誌にも表れているように、漢学と日本精神との一体化が強要されるようになった。

つぎに、機関誌『中国文学月報』に現れた漢学論争に関する言論を詳細に分析した。その結果、まず誌上で積極的に漢学に関する討論を導入しようとした竹内好の編集者としての寛容的な姿勢を確認できた。さらに、中文研の誌上に現れた漢学批判は学問としての漢学への反撥ではなく、漢学の価値を教化の面で大いに宣伝していた既存学界の学風に対する対抗であることが明らかになった。特に、従来の研究では竹内好と竹内照夫の論争に現れた対立関係のみが強調されてきたが、本研究では、既存学界の学風を問題視する両者の間には、実は表裏一体の思想が存在することが明らかになった。

中文研は漢学批判から出発したとはいえ、竹内好の思想に同調することなく、同人間のあ

²²² 保田與重郎「コギトの周辺」(『保田與重郎全集』③、講談社、1988、92頁)。初出：保田與重郎『日本浪漫派の時代』(至文堂、1969)。なお、本書は『国文学 解釈と鑑賞』1967年4月号から1969年7月号まで連載されていた「一つの文学時代——回想日本浪漫派」(全26回)を内容とするものである。

いでそれぞれの立場を保ちながら、誌上に多種多様な中国古典文学に関する研究が発表された。しかしながら、この時期の中文研の同人による漢学論の方向性には曖昧さが残っていたことも否定できない。

また竹内好の漢学論に関しては、彼自らの漢文コンプレックスの影響、および、当時日本の文芸評論界で活躍していた同窓の保田與重郎との関わりも確認できた。竹内が高校から大学時代までのあいだ、保田の言動に追いかけようとした姿勢はその文章から読み取れる。さらに彼の漢学論には、保田與重郎の初期文芸評論に通底する内容も見られる。

以上の内容を総合的にみると、中文研の漢学論は昭和初期の時局において形成されていた中国認識と深く関連していたといえる。竹内好たちの展開した批判は、中国古典文化としての漢学に向けられているものではなく、漢学を帝国イデオロギーに吸収しようとする学界の傾向に対して向けられていたのである。彼らの志したジャーナリズム的な研究手法は、結局体系的な理論を構築するまでには至らなかった。しかしながら彼らの挑戦は、中国の古典文学が時局の束縛から解放され、外国文学としての地位を回復する可能性を提供したのである。

第四章 模索—転換期：中国における二人の交叉

(1937.11-1940.3)

第一節 はじめに

1937年秋、竹内好や武田泰淳などの同人が相次いで中国へ渡り、中文研の活動は沈滞化する傾向を見せつつ、これからの方向性がさらに不透明な一面を示した。機関誌の内容が希薄となる一方、草創—発展期に行われていた講演などのイベントも中止された。しかし、この約二年間において、中文研は転換期を迎えた。中国にいた竹内好と武田泰淳は、自分の目撃した生々しい現地の風景によって、自らの中国認識の方向を再設定したのである。そこで、本章は同時に中国にいた二人に注目し、竹内好と武田泰淳の現地体験、およびそれによってもたらされた中文研変貌の要因を考察する。

周知のように、竹内好は、1937年10月から1939年10月までの間、留学生として北京に滞在していた。そして、帰国後、1942年2月に回教圏研究所の研究員として、再び中国を訪問したのである。そして、彼はこれらの中国体験を雑誌『中国文学月報』において語っており、その内容から分かるように、現地での体験、特に北京で留学した二年間は、彼の中国認識に深く影響している。武田泰淳も竹内好と同じ時期に中国で一兵士として二年間を送った。『中国文学月報』に掲載された武田の文章から、現地体験が彼に与えた衝撃が読み取れる。竹内好と武田泰淳は、同時代の中国体験を共有したが、その根底において彼らの中国認識は如何に交錯しているのか。これを解くことは、1940年以後の中文研の改革を理解するうえで大きな意味を持っていると考えられる。この課題を解明するために、本章は竹内好と武田泰淳の目に映じた戦争中の「中国」の形相、および中国体験を通して二人の間に生まれた連帯性、という二点に焦点を当てる。

竹内の現地体験に関して、すでに多くの先学によって検討されている。まず、松本健一氏の『竹内好論——革命と沈黙』を挙げたい。松本氏によると、中国文学研究会は「もともと中国という他者に学ぼうとして設けたもの」²²³であり、竹内は北京で留学しているあいだに、このような姿勢が崩れていき、自我喪失に陥ったという。そして、混迷している竹内に再生する力を与えたのは同じ時期に中国を目撃した武田泰淳である、と松本氏は指摘した。

また、鶴見俊輔氏の『竹内好——ある方法の伝記』²²⁴は、伝記的な手法で、竹内好の少年時代から戦後までの歩みを記述したものである。ただし、本書は、竹内の生涯を興味深く描

²²³ 松本健一『竹内好論：革命と沈黙』（第三文明社、1975、50頁—51頁）。

²²⁴ 鶴見俊輔『竹内好——ある方法の伝記』（岩波書店、2010、117頁）。

いたが、その北京留学時に書かれた文章は言及されなかった。

そして、岡山麻子氏は、竹内好の北京留学経験の影響について、竹内は北京での放浪生活によって、まず自らが「社会に対して何物をも持たない無所有者」²²⁵となり、そして岡本かの子の作品を通して、「人間の存在を凝視するという認識のあり方」²²⁶を意識したと指摘した。帰国後の竹内は、まず人間の存在を無視した日本の中国認識の有りようを否定し、さらに中野重治の『斎藤茂吉ノート』に触発され、彼は現実の政治秩序との対決を志した。岡山氏は岡本かの子と中野重治を取り上げ、これらの作家が竹内好の文学精神の形成に与えた影響を詳しく論じたが、当時の竹内好の活動した重要な場である中国文学研究会について、あまり論じていなかった。

一方、武田泰淳の戦場体験に関しては、主に自己精神の形成と関連しながら論じられている。例えば、兵藤正之助氏²²⁷は、武田が現地体験によって、自己と同人の従来姿勢を批判するようになり、中国文学を研究することが自分にとって何であるかという自己反省を深めたと主張している。

また、戦場体験が武田の小説創作でどのように表象されたかを考察したものもあり、竹内実氏²²⁸は武田の受けた「現地の衝撃」を「人間」と「風土」にあるとし、武田の小説に描かれた「一枚の絵のような」風景が、彼の中にある「自然の美と人事の醜」の不均衡を表現していると指摘した。

前述した諸先学と異なり、武田泰淳の戦場での行動を年譜的に解説するものとして、木田隆文氏²²⁹の成果が挙げられる。木田氏は武田泰淳の従軍期の年譜を補完し、再構成した結果、武田の現地での行程が明らかになり、「小説に描かれる作中事実のいくつかがきわめて事実性の高いことが窺え、作品舞台となった土地の設定などはほぼ実体験に基づいている」²³⁰という結論を得ている。

以上、竹内好と武田泰淳の戦時中の中国体験に関する先行研究をまとめてみた。竹内と武田は、一人は留学生として、もう一人は兵士として、同時期に中国へ渡り、全く異なる中国を見ることとなる。そして、1939年に帰国した二人はそれぞれの中国研究を再開するが、彼らの中国認識は、かかる現地体験の差異からしばしば対立する一方、時には深く連帯するようになったのである。そのため筆者は、関連史料を再整理するうえで、先行研究では論じられることの少なかった二人の中国観の連帯性に着目し、機関誌に反映された二人の主張と心境を比較考察する必要があるのではないかと考えている。これによって、帰国後、一見別方向に向かった二人の中国文学研究の再出発の裏に、どのような共通点が存在するかを明らかにしたい。

²²⁵ 岡山麻子『竹内好の文学精神』（論創社、2002、88頁）。

²²⁶ 同前、88頁。

²²⁷ 兵藤正之助『武田泰淳論』（冬樹社、1978）。

²²⁸ 竹内実「武田泰淳の中国体験」（『国文学解釈と教材の研究』第25巻第7号、学燈社、1980.6）。

²²⁹ 木田隆文「武田泰淳従軍期年譜考」（『国文学論叢』42、龍谷大学、1997.2）。

²³⁰ 同前、72頁。

第二節 竹内好:「政治」への自覚

第二節は、竹内好の北京体験を追いながら、北京で過ごした二年間が、彼の帰国後の活動にどのような影響を与えたのかを考察する。まず、北京へ行く前の竹内好の心境を探り、それと彼の現地で見た風景との間の隔たりを明白にする。そして、誌上に掲載された彼の手紙を中心に、現地での中国に対する認識の転換を、初期における竹内の中国文学に対する認識と関連させながら検討する。

一 政治への目覚めを促した北京体験

竹内好は大学時代から終戦まで、留学生、調査員、軍人と、様々な身分で中国を訪ねた。具体的には表 13 の通りである。本節は第二回の訪中を中心とする。

表 13 戦前における竹内好の中国体験

時間	目的	訪問地	本誌での報告
1932.8 ～ 1932.10	朝鮮満州見学旅行。外務省対支文化事業部。現地解散後、北京へ私費留学。	長春、大連、北京。	なし。(中国文学研究会成立前)
1937.10 ～ 1939.10	北京留学。外務省文化事業部の第三種補助金を利用するもの。語学研修の名目。	北京	「北京通信」(第 33 号、1937.12.1) 「北京通信・二」(第 34 号、1938.1.1) 「周作人随筆集・北京通信の三」(第 42 号、1938.9.1) 「二年間(黙することの難ければ)」(第 57 号、1939.12.1)
1942.2 ～ 1942.4	回教圏研究所より「回教徒団体及回教調査機関との連絡並に調査」のため、中国出張。	北京、張家口、厚和 ²³¹ 、包頭、大同、太原、開封、徐州、南京、上海、蘇州、杭州。	「旅日記抄・一」(第 85 号、1942.7.1) 「旅日記抄・二」(第 86 号、1942.8.1) 「旅日記抄・三」(第 87 号、1942.9.1) 「旅日記抄・四」(第 89 号、1942.11.1)
1943.12 ～ 1946.6	召集令状を受け、中支派遣独立混成第一七旅団補充要員となり、現地へ。	湖北、湖南。	なし。(中国文学研究会解散後)

²³¹ 綏遠と歸化城を合わせた地名。

1 初心の喪失

1937年10月、日中戦争勃発直後にもかかわらず、竹内好は語学研修の名目で、外務省文化事業部の第三種補助金を利用し、北京に留学した。『中国文学月報』に掲載されている彼の体験談は、「北京通信」(第33号、1937.12.1)、「北京通信・二」(第34号、1938.1.1)、「周作人随筆集・北京通信の三」(第42号、1938.9.1)、「二年間(黙することの難ければ)」(第57号、1939.12.1)などである。

そもそも、盧溝橋事変(1937.7.7)、第二次上海事変(1937.8.13)を経て、日中戦争が全面的に展開していた時期にもかかわらず、なぜ竹内は危険な状況において中国を訪れたのか。彼は回想において、当時の心境を次のように述べている。

私は自分が歴史の目撃者になることを予感した。そして自分が押し流されないための、全体を見通せる視点を確立したいという要求をもった。私は留学という特権を利用して、戦乱の外にいて、戦乱の全体をつかみたかった。²³²

つまり、竹内は、戦乱に巻き込まれずに歴史の目撃者として中国の現実を俯瞰したいという気持ちを抱き中国へ渡った。強いて言うなら、竹内の初心は、情に流されず、冷静な目で戦争の全貌を現地で捉えたいというものだったのであろう。しかし、1937年10月25日、天津の塘沽に着き、実際の現地の風景を見た彼は、徐々に初心を失っていく。やや長いが、次の引用文から彼が現地の風景にどれほど刺激されたかを読み取ることができる。

はじめに見ききしたことは新しい刺激となつて確かに僕の神経を震はせた。天津では各所爆撃の跡のまざまざした印象、中でも廢墟になつた市政府の前の人馬行き交ふ熱鬧のほとりに、小鳥の籠を抱いて日向ぼっこをしてゐた老人の姿は今に目に映る。白河は満々と岸をひたし、ジャンクといふのであろうか、支那のだるま船が何百艘となく日の丸の小旗をかざしてもやつてゐる。軍用トラックが警笛を鳴らして馳駆する毎に、人馬の群はさつと靡くのだ。叫喚と捲上る砂塵。さうした風景も何か心愉しむものがあつたと今は反省する。一国を挙げて戦事に赴く秋の、これが現地といふものであろうか、だが刺激は度重なると、甘美な夢を追ふやうに疼みが忘れられて、いつか僕は僕の本心を失つてゐた。無数の印象の集積だけがあつて、僕自身がないのだ。²³³

爆撃の跡と廢墟に往来する人々、日の丸を飾った中国船、軍用トラックから四散した人と馬などが、戦争中の緊張感を生々しく竹内に伝えたに違いない。にもかかわらず、これらの

²³² 竹内好「わが『戦争と平和』」(『竹内好全集』⑬、48頁)。初出：1962年4月25日発行『世界文学全集(21)』「トルストイ『戦争と平和』I」(河出書房新社刊)の月報21号に発表。

²³³ 竹内好「北京通信」(『中国文学月報』第33号、1937.12.1)

風景を見た竹内は、「心愉しむものがあった」と言い、つまり戦場の刺激感に捕らわれ、戦乱の全体をつかむどころか、戦乱の外に身を置くこともできないのである。したがって、彼が戦場の強烈な刺激において、自分の本心、言い換えれば戦争の全貌を把握するという初心に対して無感覚となっていくといえよう。

2. 北京の「長閑」

天津の緊張感に神経を震わせた竹内は、北京においてさらに衝撃をうけたのである。盧溝橋事変の後、北京の知識人や大学などがほぼ南下し、すでに日本軍に占領された北京の城内は、天津とまったく異なる様子を呈した。

北京の空気は今以てまことに長閑であります。(略) 老舎が好んで描いたやうな、あの怠けものの学生たちの姿は今殆ど見えなくなりました。(略) 嘗ては夜ごとそこに集会が催され、昼間講堂で睡足りた学生たちは夜を徹して怒号し、放歌し、茶碗を投げあつた、(略) ——かうした愉快的な光景をひそかに空想に描いて一夜公寓の門扉に耳をよせてみても、恐らく聴えるものは鬼哭に似た風の騒音ばかりであります。薄暗い軒燈の蔭を注意深く辿ると、「専租學員」と書いた黄銅の招牌の旁に、(略)「日本の方を歓迎します」といつた拙い文字が目にとまるかもしれません。²³⁴

「集会が催され、昼間講堂で睡足りた学生たちは夜を徹して怒号し、放歌し、茶碗を投げあつた」などは、老舎(1899-1966)²³⁵の小説『趙子曰』²³⁶で描かれた五四運動を背景とする1920年代の北京の学生たちの退廃的な生活である。竹内は、北京留学中にこの小説を読み、その中に「書かれた北京の学生生活は極めて良い」²³⁷と、動乱する社会に暮らす学生たちの様子に対して強い関心を寄せた。「戦争の伴う急激な文化の相克、交流」²³⁸の光景を期

²³⁴ 竹内好「北京通信(二)」(『中国文学月報』第34号、1938.1.1)

²³⁵ 老舎：小説家、劇作家。1924年、中国語教師としてイギリスでの滞在中に小説の創作を始めた。1926年、処女作「老張的哲学」を発表し、その後、「趙子曰」(1927)、「二馬」(1929)などの作品によって知られるようになった。ユーモラスな手法で北京市民の日常生活を描写する作家として文壇に高く評価されている。代表作は『駱駝祥子』、『四世同堂』など。

²³⁶ 『趙子曰』は1920年代の北京を舞台とし、動乱の社会において形成された退廃的な学生生活を描写した作品である。ただし、老舎の話によると、処女作の「老張的哲学」と違い、この作品で描写された若者の生活は、作者の想像によるものが多い。詳細は老舎「我怎樣写趙子曰」(『老舎文集』⑮、人民文学出版社、1990、初出：『老牛破車』、人間書屋、1937)を参照。

²³⁷ 竹内好「北京日記(1937)」(『竹内好全集』⑮、183頁)。原文は中国語、筆者訳。

十一月三十日(火)

十一月の最後の日。午前、楊君来る。午後、老舎の『趙子曰』を読む。書かれた北京の学生生活は極めて良い。(略)

原文：十一月三十号(禮拜二)

十一月的最后一天了。上午楊君来。下午念老舎的『趙子曰』写着北京的学生生活很不错。

(略)

²³⁸ 竹内好「北京通信」、前掲文。

待した竹内は、おそらく戦乱の激流における学生生活を現地文化の一種として想像したのだろう。しかし、「日本の方を歓迎します」のような看板からも分かるように、実際に彼が見たのは、占領後にほぼ抵抗なく日本化され、「戦争に遠ざかる」²³⁹異空間のようになってしまった北京である。彼がこの予想と大きく隔たった異空間の中に深く感じたのは、「政治」の力である。これは、彼の「北京通信」から確認できる。

僕は来る途々、たとへていへば路傍の一木一草にも政治を感じた。日本のやうな機構の複雑化した、それだけ擬制の多いところから、事実上の軍政の地へ来てみると、この印象はまことに歴々としてゐる。軍事と政治と文化とは、あたかも一本の触手の如く動いてゐるのだ。²⁴⁰

竹内の言った日本の「擬制の多いところ」というのは、北京に来る前の彼の中文研での経験と結びつけてみると容易に理解できる。例えば、1935年、在日中の謝冰瑩は溥儀の訪日の予備拘束によって警察に逮捕され、その後武田泰淳も目黒署に検挙され、45日間留置されたのである。その詳細な経緯、およびこの事件に関する考察は、すでに武田泰淳の回想、および先学によって触れられた²⁴¹ので、ここで繰り返す必要はないが、ただ、注意すべきなのは、この事件に関する当時の新聞報道において、中文研が左翼系団体と書かれたことである。1935年4月23日の『読売新聞』朝刊、「突如“赤”嫌疑で 謝泳瑩女史召喚 早大入学の喜びも束の間 夫君と共に目黒署へ」という記事において、「警視庁外事課の忌諱にふれたのは同女史が来朝以来女史を中心に中国文学研究会が組織せられ、その出入者の中に左翼系文士の顔が加はつてゐる点に赤の嫌疑がかけられたこと」云々と述べられている。実は、中文研は謝冰瑩を中心に組織されたのではなく、さらに往来する人物も「左翼系文士の顔」とは言い切れない。しかし、このような政治事情によって中文研の様相が容易に変形されていた。竹内が日本で感じた政治による文化的な「擬制」の感じは、同じく政治によって作られた北京の「長閑」においても「歴々としてゐて」、さらに明確化されたのである。そのため、彼の中に以前から形成されていた中国文学への認識は、徐々に動揺し始めた。

3. 「政治」への目覚め

前述した元の中国文学への認識から生まれた竹内の動揺は、彼の「小品文」²⁴²に対する理

²³⁹ 同前。

²⁴⁰ 同前。

²⁴¹ この事件に関して、武田泰淳の「謝冰瑩事件」（『武田泰淳全集』①、筑摩書房、1971、初出：『中国文学』第101号、1947.11）に詳しく書かれている。なお、関連する先行研究は、趙暉「謝冰瑩と中国文学研究会——竹内好、武田泰淳との交誼を中心に」（『人文学報』352、東京都立大学人文学会、2004）を参照されたい。

²⁴² 中国で一九三〇年代に林語堂が提唱した散文のジャンル。英文学のエッセイと明代文人のスタイルをもとに、個人の趣味・風格を重視した。「人間世」「宇宙風」などの専門誌も出し、知識人の一部に歓迎されたが、趣味に流れ文人の世界にこもるきらいがあり、魯迅は現実からの

解の転換から読み取れる。そして、これも後に彼の「政治と文学」への関心を促したのである。

中文研を創立した頃、竹内好は中国の小品文に非常に興味を示した。機関誌の創刊号（1935.3.5）に掲載された彼の「今日の中国文学の問題」では、第一項目として「小品文の盛行」が挙げられ、さらに、第6号（1935.8.25）、第7号（1935.9.25）は二号連続で「現代小品文特輯」として刊行された。しかし、竹内は現地に着いた後、小品文への認識を以下のように反省している。

僕らはよく小品文を問題にしました。僕などは、それは政治と文化の乖離——文化意識の遊離と見、そこから中国文学の特異な性格を導き出さうと企てた一人です。この態度は、今ははつきり言へませんが、間違つてゐないにしても、何か足が大地につかない不安なもどかしさを次第に感じて参ります。²⁴³

つまり、元々政治と文化は別個のものと考えていた竹内は、現地の風景を目の当たりにして、政治と文化との緊密な関連を痛感する。そして彼が自分の留学前に理解していた「中国」に不信感を募らすこととなった。たとえ「小品文」が一見個人趣味を重視する文学だとしても、その中に、政治の力が隠れていないのだろうか。また、もし「小品文」が「政治と文化の乖離」ではないなら、その中に読み取れた「中国」は真実とは言えないのではないか。このような思想変化に対して、彼は、以下のように自分の無力感を吐露している。

僕らがやりたいと思ったこと、それだけを生涯の祈願として必死に守りとおせると思ったことを、支那事変は事もなげにやってのけた。（略）無力である。完全に無力である。いまに国民の全部が、その目で支那を見るだろう。僕らが、自分だけに愛し自分だけに知りうると思ひ、それゆえ矜りをもちえた支那が、日常茶飯事になろうとしている。支那は墮落する。怕ろしいことである。²⁴⁴

このように竹内は、中国を自分だけが愛し自分だけが知るものとして独占し「領有」²⁴⁵しようとした。そして、中国を生きている同時代の文化、あるいは学術の対象として検討し、それによって客観的な中国理解を一般社会に普及させていくことが、竹内の言った「僕らがやりたいと思ったこと、それだけを生涯の祈願として必死に守りとおせると思ったこと」で

遊離を批判して、むしろ現実批判にこそその発展の可能性がある」と指摘した。しかし周作人などの作品は、中国現代の散文における魯迅の〈雑文〉の対極として独自の存在をなす。（丸山昇）『世界文学大事典』（集英社、1996—98）。

²⁴³ 竹内好「北京通信（二）」、前掲文。

²⁴⁴ 竹内好「佐藤春夫先生と北京」（『竹内好全集』⑭、289頁—290頁）初出：『文学通信』8、ぐろりあそさえて刊、1942.2。

²⁴⁵ 竹内好の中国「領有」に関して、大原祐治「羅漢と仏像——雑誌「中国文学」における竹内好・武田泰淳」（『昭和文学研究』45、67頁—78頁、2002.9）を参照されたい。

ある。日中戦争の勃発により、多くの日本人は中国に注目しはじめ、次第に日本において中国関連の出版物は氾濫するようになった。しかし、これらはあくまでも戦争目当ての風潮である。戦争が「中国」を「事もなげ」に日本人の視野に持ち込んだが、それによって作られた「中国」のイメージはあくまでも大陸雄飛の夢を実現する場所であり、政治の力の産物である。上述した竹内の「小品文」に対する不安も、このような「擬制」と関わるのではないか。したがって、竹内は文学と政治との関連に気づくことによって、中国を理解することに限界を感じたといえよう。これが、彼の言った「無力」だと考えられる。また、この政治に対する文学の「無力」は、彼の帰国後の活動に影響を与えたのである。

二 政治性を求める再出発

帰国後の竹内は、まず中文研の改革に取り組みはじめた。最も力を入れたのは、機関誌の市販雑誌化である。1940年4月以降、機関誌の『中国文学月報』は『中国文学』と改題され、生活社から刊行することになる。これによって、本誌の読者層が学術団体から一般社会へ広げられた。そのため、この改革は、竹内の政治的な意欲として理解できるだろう。

改題後に出された第60号（1940.4.1）において、竹内は下記のように中文研の回顧と展望を述べている。

従来の研究者が醜悪なまでに凡俗化してしまつてゐることに対する憤懣の情、さういつた感情を共にする数人の仲間が集つて自分たちの文化に対する志向を行為化したものがこの会である。（略）

経営六年、いまに最初の昏迷を脱けずに居るのは、もとより同人無気力の致すところであるが、一つには支那文学を自分たちの文化に持ち来す態度に終始疑を持し、それを拵拵によつて解決せず、自らの行為を賤み、ためらひがちに物を言ふ学界茶毒の余孽に身を委せたせるである。（略）

三年来、この会の存在を頼み、その不甲斐なさを鞭うつ世の同情が現れたが、会自体はむしろ沈湎し、自らを無みする行為によつて逆に世俗の迂愚を嗤はうとした。この態度はもとより正しくなかつた。今に及んで、支那文学の運命をわが身の上に齒ぎしりの如く感じ、宿命の如く呪ひ、世相の異形に抗して我呼ぼんとする気概に立直つた。支那文学に対する愛情の問題や、支那史に於ける近代の意味を画定することから我々の仕事をやり直さうと思ふ。我々は、自分たちの行為がこの世の力となり得ない所以を自分たちの無力の故には歸しても、錯誤の故とは承服しない。²⁴⁶（傍点筆者による）

²⁴⁶ 「中国文学研究会について」（『中国文学』第60号、1940.4.1）。

この引用文から確認できるのは、過去の歴史に対する反省と改革後の中文研の抵抗的な姿勢である。それは伝統的な漢学、および政治によって支配された侵略目的の中国ブームへの抵抗である。竹内は、改革前の抵抗を「掙扎」しながら「沈湎」として反省し、と同時に、これから「世相の異形に抗」する気概を宣言したのである。また、中文研の発足当時に定められた「中国文学の研究と日支両国文化の交歓」²⁴⁷という目的に比べると、北京で政治に絡められていた現地の風景を目撃した竹内は、単純な文学研究より、中文研の政治性を一層求めるようになったといえる。改革後の中文研の目標を、竹内はこのように決めている。それは「支那文学の代表的古典及び現代文学の翻訳、支那文学史の刊行、支那文化図書館の建設、漢文教育、支那語教育及び日本語教育の批判、事変後途絶えてゐる支那の文学団体との提携の復活等」²⁴⁸である。竹内は、以前の「中国文学の研究」という目標を諦めたように見えるが、実はそうではない。これは彼が現地で政治と文学との関係を認識した結果である。彼は安易に近代中国文学を紹介するのではなく、それを受容するためのより根底的な基礎を築こうとした。翻訳、文学史、図書館の建設、教育問題など、いずれもこのような意志を物語っている。

また、竹内の政治的な再出発について、彼の主張した「支那文学に対する愛情の問題」と「支那史に於ける近代の意味を画定すること」という二つの出発点に注目したい。

この二つの出発点について、竹内は、既に第59号(1940.2.1)の「後記」において触れていた。

歴研の東洋史の人たちと僕らの会の間にはいま清末研究会(未定)設立の相談が起こつてゐる。実際は支那史に於る近代の意味を画定しなければ僕らは支那に関して何も云へぬ筈なのだ。さういふ観点から支那を見てゐる人は従来無いわけではないが極めて少いからアカデミイに似而非学が横行しデジャナリズムに脚下に忘れた放論が行はれるのだと僕らは見たい。

現在の文化はこんな中途半端な断崖に安心して立つてゐられる事態ではないので、文化の根底を覆へずある種のさし迫つた幻影を僕らもつとよく見極めその混沌としたさまざまに僕ら努力して形象を與へることが本来の任務だといふ気はするのである。武田が月報へのこの二号つづけて書いてゐる問題も僕ははじめは単なる愛情の問題かと思つたがさうでなくてこの怪物の影を分析してゐるのだと分つてきた。

引用箇所冒頭から分かるように、竹内は中国の「近代」とは何かという疑問を考えはじめた。この時から、竹内は初めて表面的に中国文学を紹介したことを反省し、そもそも中国新文学を支えている「近代」の内実とは何かを意識するようになった。つまり、竹内は、文

²⁴⁷ 「中国文学研究会に就て」(『中国文学月報』第1号、1935.3.5)。

²⁴⁸ 「中国文学研究会について」、前掲文。

学そのものより、文学に影響を与える社会的変動の内実に注目しはじめた。これは彼の現地で体験した政治的支配の力、および政治に対する文学の無力によるものだと考えられる。

改革以前の中文研の同人たちは、中国文学に対する愛情を持って機関誌に取り上げ、翻訳もしていた。しかし、このような愛情でアカデミズムの「似而非学」とジャーナリズムの「放論」を阻止できなかった。

「武田が月報へのこの二号つづけて書いてゐる問題」とは、武田泰淳の「支那文化に関する手紙」(第58号、1940.1.1)、と「杭州の春のこと」(第59号、1940.2.1)を指している。武田は、この二篇の文章において、兵士の目で見えた中国の風景を再現したのである。詳しい説明は後述に譲るが、これらの文章において、生きた人間を無視する当時の日本の中国研究を批判する意図が読み取れる。竹内は、最初に武田の文章を「愛情の問題」だと思ったが、後に武田の言論に現れた「人間不在」の中国研究に対する指摘を理解したのである。

したがって、「支那文学に対する愛情の問題」と「支那史に於ける近代の意味を画定すること」という二つの出発点は、いずれも改革以前の中文研の中国文学観に対する清算であるといえる。前者は草創一発展期における中文研の中国文学に対する表面的な理解への反省であり、後者は「近代」に対する新たな時代認識を意味し、従来の中文研の中国文学史観に対する批判である一方、新たな中国文学史観を樹立することによる既存学界の固定観念に対する挑戦でもある。

竹内の求めていた政治性とは、当時のアカデミズム、およびジャーナリズムとの対決の中に、現行の文化を覆させる方向であり、突き詰めていけば、彼の志した学界との対決は、日本にとって「近代」とは何かという問題に通底するのである。これは、彼の留学前後の文章を比較すれば明白である。留学前の彼が本誌に発表した文章は、同時代の中国文学の状況を紹介するものがほとんどである。しかし、第60号以後、隣国の文学作品を論じる文章は一切なくなり、その代わりに、アメリカでの中国研究に注目したり、日本の中国研究に用いる「漢文訓読法」を批判したりするようになった。彼の関心の対象は中国文学そのものから、中国研究の基礎となる言語問題へ移ってしまう。これも彼が「政治性」を求めていたことを証明するだろう。

しかし、竹内はこの一連の活動において、「無力」から脱することができなかった。前述したように、彼は、第60号において、中文研の再出発の意地を堂々と宣言したものの、その後の誌上の「後記」において、彼の「無力」が常に述べられている。例えば、彼は読者からの指摘に対して、第67号にこのように返答している。

京都の一会員から批評の手紙を頂いた。(略)「今のままでは余りに低調、セルパンの出来そこねの観あり」といふ「愛するが故の苦言」で、こんな熱心な読者があるかと一寸ぎくつとした。お答へします。僕は君の考に全部同感である。いつかこの雑誌はさうなるだらう。だがそれだけで空しさは掩ひ得るか。僕は同時にこの雑誌をもつと低俗化し

たい欲望も激しく感ずるのだ。²⁴⁹

竹内は、「支那文学に対する愛情の問題や、支那史に於ける近代の意味を画定することから我々の仕事をやり直さうと思ふ」と言ったが、第 67 号までの内容を確認してみると、彼の言った「空しさ」が理解できる。改題後の本誌の紙数は、12 ページから 48 ページに増えたが、その内容は創刊時に比べて、充実したとはいいがたい。第 61 号 (1940.5.1) の「蔡元培特集」と第 63 号 (1940.7.1) の「辞典特集」以外、翻訳と書評で毎号の紙面を埋め、近代中国文学・文化を研究する文章、あるいは日本の中国研究と中国に関する評論を批判する文章はほとんど見当たらない。言い換えれば、「アカデミイに似而非学が横行しジャーナリズムに脚下に忘れた放論が行はれる」という竹内の見た現状に対して、雑誌に表れた中文研の行動は「空しさ」を蔽えない「無力」なものとなつたとしか言えない。

無論、竹内が全く行動しなかったとは言えない。例えば、前述した批判を受けた後に刊行された第 68 号 (1941.1.1) は、「アメリカと中国特集」として編集され、中には中文研の主催した「アメリカ、中国、日本」という座談会の記録のほか、「支那文学とアメリカ」(増田渉)、「中国人のアメリカ留学」(実藤恵秀)、「支那を調査したアメリカ人たち」(岩村忍)、「アメリカ映画と支那」(辻久一)、「アメリカの支那語研究」(魚返善雄)、「ホバアトの“陰と陽”」(山崎慶一)、「E 女子の柳」(武田泰淳)などが含まれている。特に座談会において、竹内は新居格、石浜知行、平野義太郎、和田清、岩村忍などを招き、アメリカのジャーナリズム、中国研究の態度、対中文化施設などの話題を取り上げた。当時文壇において活躍している評論家や東洋史学者などを招いて、この座談会を開催することは、竹内の学界と言論界に対抗するという政治的な意欲を表明する行動であったと言っても過言ではないだろう。

さらに、筆者は竹内の執筆した同号の巻頭言と「後記」に注目したい。この二篇の文章を比較してみれば、彼の抵抗しながら、結局「無力」から逃げられない心境が窺われる。まず、巻頭言の中で、竹内は、この特集を企画する目的について以下のように述べている。

われわれが理解した中国は、中国ではなかつたかもしれないのである。(略) 中国文学の研究者にとつて、アメリカに投影された中国を見、中国に投影されたアメリカを見ることは、固定した観念を打砕く手段の一つである。目前の政治にかかづらふのでなくて、実は広汎な支那学改造の問題を示唆するものに考へたいのである。²⁵⁰

ここに明確に示されたように、この特集は、アメリカに注目することによって、日本で固定された中国研究を「改造」する方向を提示しようと企図するものだった。これは、前述した竹内の決めた再出発の政治的目標に呼応するものと理解できよう。しかし、「広汎な支那学改造の問題を示唆する」と言い立てた竹内は、「後記」において相変わらず自分の「無力」

²⁴⁹ 竹内好「後記」(『中国文学』、第 67 号、1940.12.1)。

²⁵⁰ 竹内好「「アメリカと中国」特集に寄せて」(『中国文学』、第 68 号、1941.1.1)。

を訴える。

巨大な建造物の崩れかかるような幻覚がいつもあつて、その崩れ落ちるのは勿論われわれ個人の力で支へきれぬものでないことは承知してゐるが、目まひがしてならない。
(略)

アメリカ号の意義は何かとよく人にきかれる。(略) 編集者は編集より外に自分の幻覚を形象化する手段を持たないものである。今は学問のある場所に学問がなく、文学のある場所に文学がない時世だから、さういふ編集者の自負も言葉通りに受け取られると却つて困るのではないかといふ気もするのだが。²⁵¹

「巨大な建造物の崩れかかる」とは、おそらく彼が中文研を通して「改造」しようとする中国研究の形相である。しかし、北京において文化を支配する政治の力を実感した竹内は、中文研が崩れかかる中国研究を改造する任務を支えきれないと弱音を吐きつづけた。「編集者の自負も言葉通りに受け取られると却つて困るのではないか」という自己弁明は、彼の自覚した「政治的弱者」の意識を表明するものにほかならない。

本節は竹内好の戦時体験について誌面を通して検討してみた。竹内好は、戦争を傍観する気持ちで北京へ渡ったが、彼が現地で目撃したのは、戦争の痕跡と対照的に存在している北京の「長閑」である。彼はこのような感覚において徐々に留学の初心を失い、自らの従来の中国文学観も動揺しはじめた。北京体験を通して、彼は初めて文学と政治との関連性を意識するようになった。これは、彼の帰国後に行った中文研の改革に直接に関連している。竹内は北京で体験した文学の無力によって、文学研究から離れる傾向を見せた。その代り、彼は日本における中国研究の基礎を改造しようとした。しかし、その過程において、竹内は終始無力感から逃れなかった。

第三節 武田泰淳:「文化」の追究

第二節では、竹内好の北京体験とその体験が彼に与える影響を検討してみた。本節は、竹内好と緊密な関係を持っている武田泰淳を取り上げ、彼の戦場体験と思想的転換を把握する。

²⁵¹ 竹内好「後記」(『中国文学』、第68号、1941.1.1)。

一 民衆と文化的破滅を目撃した戦場体験

1937年10月、武田泰淳は、一兵士として、竹内と同じ時期に中国へ渡った。表14は終戦までの武田泰淳の訪中歴である。

表14 戦前における武田泰淳の中国体験

時間	目的	訪問地	本誌での報告
1937.10 ～ 1939.10	召集令状をうけ、輜重兵の二等兵として上海へ。	上海、杭州、南京、武漢、南昌など	「戦線の武田泰淳君より——増田涉宛」(第41号、1938.8.1) 「土民の顔」(第44号、1938.11.1) 「北京の輩に寄する詩」(第44号、1938.11.1) 「美しき古書」(第50号、1939.5.1) 「支那文化に関する手紙」(第58号、1940.1.1) 「杭州の春のこと」(第59号、1940.2.1) 「支那で考へたこと」(第64号、1940.8.1)
1944.6 ～ 1946.4	徴用のがれのため、中日文化協会に就職し、上海における東京文化編訳館に勤務。	上海	なし。

1. 民衆への観察眼

機関誌に掲載された武田泰淳の現地報告は、軍人としての訪中に集中していた。これらの文章から分かるように、彼が戦線で最も注意深く観察したのは現地の民衆である。実は、中国の民衆について、彼は出征前にすでに注意しはじめていた。元々「学者志望」²⁵²の武田が、最初に機関誌に投稿した論文は「中国民間文学研究の現状」であり、その中で、中国の民衆に関する見方は以下の通りである。

民衆は活きた文化を創り出すために努力したのに、彼等は永い間、深い闇の中に埋れ、何人もそれを理解するものはなかつた。我々は民衆文化を聖賢文化と平等に研究しな

²⁵² 竹内好・武田泰淳「『中国文学』のころ」(『武田泰淳全集』別巻二・対談、筑摩書房、1979、248頁)。初出：『文芸展望』第10号、1975.7。

ればならない。²⁵³

武田が理解した中国民衆は、活きた文化を創造する者であり、それゆえ民衆文化は、古典の「聖賢文化」と平等に研究されるべきだと彼は指摘した。そして、彼の発表した論文²⁵⁴からも理解できるように、彼が目にした民衆文化とは、情歌、生活歌、滑稽歌などのような地方の歌謡であり、あるいは山海経、孟姜女、王昭君などの神話伝説である。その後、彼は出征するまで続々と民衆文化に関する論文を発表した。²⁵⁵例えば、「中国西南地方蕃人の文化」は、広東や福建などの野蛮人と少数民族を地方の歌謡と関連しながら考察したものであり、また、「河北省実験区「定県」の文化」の中で、武田は当時の実験区としての定県²⁵⁶に注目し、農村教育をはじめ農民参加の出版や演劇などの文化活動を紹介した。要するに、戦場へ行く前の武田泰淳の理解した民衆文化は、地方歌謡・神話伝説などと深く関連したものであり、そして、彼が目にした農村文化を建設する農民達の姿は、あくまでも「実験区」としての特例にすぎなかった。

しかし、現地で目撃した中国人は、武田の従来の民衆に対する理解に衝撃を与えた。これについて、彼は第44号（1938.11.1）の「土民の顔」の中に、このように書いている。

我々は極端な表情をしてみるくせに心が少しも動揺してみないらしい農夫を沢山見ました。泣いたり喜んだりしてみても眼は何処か異常なところをみつめてみます。土民の顔は黒く日焼けし素朴に見えますが彼等の心は青黒く深い潭のやうです。子供でさへ何といふ鋭い智慧のはたらきを蔵してゐることとせう。我々兵士が交際するのはかかる心を持つた貧困な土民ばかりです。²⁵⁷

ここから読み取れる武田の「支那人」観について、岡山麻子の「武田は『支那人』を、具体的政治状況の中で見せる表情の奥に、状況を超越する精神を内包した者と見ている」²⁵⁸と

²⁵³ 武田泰淳「中国民間文学の現状」（『中国文学月報』第5号、1935.7.15）。

²⁵⁴ 武田泰淳「中国民間文学の現状」、前掲文。

²⁵⁵ 「武田泰淳年譜」によると、主に以下の論文が見られる。

- ①「中国民間文学研究の現状」（『中国文学月報』第5号、1935.7.15）
- ②「中国西南地方蕃人の文化」（『同仁』1935年12月号と1936年1月号）
- ③「山歌」（『中国文学月報』第11号、1936.3.5）
- ④「河北省実験区『定県』の文化」（『中国文学月報』第12号、1936.3.25）
- ⑤「唐代仏教文学の民衆化について」（『中国文学月報』第13号、1936.4.17）
- ⑥「猿人と髯型儀礼——『漢学会雑誌』の二論文について」（『中国文学月報』第16号、1936.7.1）

²⁵⁶ 1920年代、晏陽初（1890—1990）は中国で平民教育運動を發起し、河北省の定県が実験区と指定された。1937年の日中戦争勃発まで、学者、知識人達は定県に入り、農村の教育発展と文化力向上に取り組んでいた。

²⁵⁷ 「土民の顔」（『中国文学月報』第44号、1938.11.1）。

²⁵⁸ 岡山麻子「武田泰淳の文化論——日本近代文化への視座と『司馬遷』」（『近代日本研究』26、慶應義塾福沢研究センター、2009、108頁）。

いう主張は、確かにその通りだと考えられる。ただし、ここで筆者が強調したいのは、武田の現地で出会った「支那人」を通して、彼の「弱者」としての思考様式が読み取れることである。

武田は、後年の堀田善衛との対談の中で、彼が現地で見た農民について、より具体的に述べている。

その百姓たちがね、ぼくたちを見る眼が、こいつら、たいしたことはない、自分たちのほうがずっと優秀である、という眼なんだよ。(略)そこへこっちは徴発に行って、そういう人たちと対決するでしょ。こっちは武器をもってるし、むこうはもっていない。そうすると、向うは遠巻きにして笑って見ている。(略)それはもう、農村文化っていうものが、非常に強いっていうかな、日本人がなにいったって、蚊がとまったほどにも感じなくて、最後にはむこうが勝つということ、のみこんじゃうということね。²⁵⁹

つまり、これまで武田が理解していた「民衆」は、神話伝説や地方歌謡にせよ、文化建設を協力する農民にせよ、いずれも戦争から隔絶された「聖賢」的な存在である。そして、彼が現地で見た、日本軍を目の前にして「心が少しも動揺していないらしい農夫」は、惨めな戦争という政治状況の下で、泰然と生きている「強者」である。中国に攻め込んだ日本軍が、逆に「弱者」的な立場になってしまうと彼は痛感したのである。

彼をさらなる「弱者」的な立場に追い詰めたのは、現地の中国民衆との出会いを通して感じさせられた日本の中国研究の脆弱さである。前述した「土民の顔」において、武田はこのように語っている。

アジア的なもの、東方文化の一つの源流をなす支那を形づくっているものは彼等なのであつて、日本の漢学者と古書の発見についてペチャクチャ高等な北京語をはなす二三の学者ではありません。(略)政治家は数千の苦力を使用することができればよいかもしれない。しかし文化人・東方における知性の華を花咲かせることを夢見る人は、一人の農民の表情の中に人間の表情をよみとる深い愛がなければなりません。²⁶⁰

敵軍の前に心が動揺しない「土民」を通して、武田泰淳はいかなる研究にも見出せない中国人の精神を感じたのである。彼が以前民謡や神話などにおいて接触したロマンチックな民衆文化は、現地には見当たらなかった。そのため武田は、現実的な民衆の精神に目を向けない日本の中国研究には「東方文化の一つの源流」を探る力がないと見ているのである。

²⁵⁹ 武田泰淳・堀田善衛『対話 私はまだ中国を語らない』（朝日新聞社、1973、43頁）。

²⁶⁰ 武田泰淳「土民の顔」、前掲文。

2. 「文化」への懐疑

前述したように、中文研は創立頃から日本における中国研究の現状に不満を抱いた。武田もその同人の一人として同じ立場にあった。しかし、武田は戦場での体験を通して、従来の認識を反省し、日本の中国研究に対する批判を具体化してしまった。従軍中に送った増田涉宛の手紙において、彼はこのように語っている。

土壁ばかりの村落、まるで歴史のなかつたやうな住家に宿営してゐる時など今まで文化といふものに対して抱いてゐた考へが變るやうな気がします。(略) 私は自分の物の見方のいかに小さな形式の中で満足してゐたかといふことを知りました。東方に対する一つの決意もなくして何の袁中郎論でせう。何の中国文学研究会でせう。²⁶¹

武田は出征前に、機関誌の第 28 号 (1936.7.1) に「袁中郎論」を發表した。袁中郎は明末の詩人であり、擬古的な文学に反対し、通俗小説や民謡などを評価した人物として知られている。武田は袁中郎の「進歩的意義」について、「彼は一度も中世を讚美した事はなかつた。それを批判したのである。あらゆる権威は否定される」と評価した。このような武田の主張は、中文研の既存学界への反抗という意志を物語っている。「袁中郎論」には、袁中郎そのものというより、袁中郎を通して自分の意志を形象化しようとする武田の姿勢が反映している。しかし、戦場に行った後、武田は明らかに自らの以前の研究姿勢に疑問を感じるようになった。

そして、武田は現地で「土壁」と「歴史のなかつたやうな住家」に遭遇することによって、従来の中国文化に対する理解を否定しはじめた。彼は、初めて自分の中国研究の初心を振り返り、従来の中国文学に対する理解の仕方を内観した。つまり、中文研が伝統的な漢学を批判し、近代文学を研究対象とすることで、中国文化を理解できるのかという自己批判である。第 44 号 (1938.11.1) に掲載された武田の「北京の輩に寄するの詩」は、このような自己批判の奔出であるといえよう。彼は、「長閑」な北京で暮らしている竹内を「澄みたる北京の空だけで、お前等の眼は黄塵に濁つてゐるだらう」と揶揄し、「北京の輩よ、腸^{はらわた}を出せ」という強い口調で中文研の「東方に対する決意」を要求した。

武田の求めている「東方に対する決意」とは何であろうか。それはおそらく、彼の現地体験を記述した文章において繰り返して述べられている、戦場で見た文化の破滅に由来する。武田は 1938 年 2 月に書かれた竹内好宛の手紙において、「本は全くどこの家へ行つても沢山あります。皆目茶にふんづけてやります。わざわざ買ったことのある本など、無残に靴でけちらします」²⁶²と書いている。戦争による文化の抹殺は、彼の持っていた中国文化に対す

²⁶¹ 武田泰淳「戦線の武田泰淳君より——増田涉宛」(『中国文学月報』第 41 号、1938.8.1)。

²⁶² 「武田泰淳(柳川部隊吉野部隊吉村隊)から竹内好(北京朝陽門南弓匠營南椿樹胡同十一号)へ(消印二十七〔昭和十三〕年二月十六日・北平と十七日・北平、軍事郵便、封書)」(井上光春編『辺境』7、影書房、1988.5、4頁)。

る認識を動揺させた。これは、戦場の風景を見た時の彼の心境から読み取れる。

私は内地にゐた時にわざわざ上海や北京から取り寄せた辞典や全集や単行本を今拾ひ上げて異様な心持でその活字を読んでみました。私達の熱心に研究した古典も今は一銭の価値も無いものの如く打ち棄てられてをりました。東洋文庫の書庫にもない様な明刊本も馬糞の山の下積みになつてみました。文化とは何と無力なものであらう。(略)我々が研究し愛着を持つた支那の文化といふものはかくも無力に破壊され消滅して行くものであらうか。²⁶³

武田の目撃した文化の破滅は、北京にいる竹内好より強烈であり、日本の研究者に熱心に研究されている「古典」と「明刊本」は中国文化の象徴であると同時に、戦場においてその姿が消えていく。物質的な形をしている文化が消滅していく中に、武田は文化そのものに対する懐疑を感じるようになった。文化は無力であろうかと自問しながら、武田は中国で新たな文化の内実を発見した。それは、前述した民衆の精神、つまり民衆の価値観や思考様式などを含む内面的な文化である。「東方に対する決意」とは、このような思想に由来したといえよう。すなわち、武田の言った「決意」とは、文学作品や資料の蒐集に耽溺せず、民衆の精神を念頭に置いた中国研究の姿勢であると考えられる。

二 民衆と風土を求める再出発

武田泰淳の戦場体験は、「東洋文庫の書庫にもない様な明刊本も馬糞の山の下積みになつてみました」のような文化の破滅を目撃することだけではない。彼は、このような体験によって、目の前の中国人の様態に対する認識を深め、文化を産出する風土に対して関心を寄せるようになった。帰国後の武田は、神話や歌謡などの民間文学によって形成された浪漫的な中国文化観を、目の前の中国人の様態によって形成された現実的な中国文化観へ転換したのである。これは、彼の「支那文化に関する手紙」で明白に記されている。

日支親善のすべての機関、支那研究のための著書、それ等の文化的なものが我々には何となく影が薄いもののやうに見えて仕方ないのです。我々が戦地で見た支那土民の顔には土の如き堅固な智慧があらはれ、伝統的な感情の陰影が刻まれ、語られた事のない哲学の皺が深々とよつてみました。その顔があまりに鮮明に眼の底にとどまつてゐるので、活字になつた支那評論が色あせて見えるのですね。²⁶⁴

帰国後の武田泰淳は、日本で中国に関する著書が盛んに出版されている様子を見た。しか

²⁶³ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」(『中国文学月報』第58号、1940.1.1)。

²⁶⁴ 同前。

し、武田の目には、日本に伝えられる中国の形相と現地の風景とのあいだに大きなずれがあると見える。続いて述べられた彼の漢口の中山公園と蘆州の公園での経験からも、この点が窺える。

土地土地の支那人に接する回数が多くなるにつれ私の支那文化に対する考へも變つて来ました。(略)公園には遊びたはむれる子供もなく、(略)池に浮いたボートには乗る人もなく赤く塗つた八角の亭には語る男女の影も見えませんでした。(略)私が見てゐるのは人のみない公園の光景でありました。私はひとり考へました。此が「文化」なのか？此は確に「堆積した文化」にはちがいない。一度つくられ又忘れられてしまつた文化にちがいない。(略)もう一つ安徽省の蘆州の公園で私は文化に対する一つの想念を得ました。(略)豆葉池といふ池に臨む小さな楼の上で私は焚火をしました。焚火に使ふ薪は立派な木版本であり、火を入れるには五色の花瓶を使用しました。(略)私は文化を焼き灰や破片と化せしめ水に埋めてしまつたのであらうか。私は豪奢な王族のやうに立つてゐましたが心は瘦犬のやうにふらついてゐました。²⁶⁵

ここで言う「支那人」との接触は、活きている人間だけではなく、彼が現地で見た死骸、または人なき公園も含まれていると考えられる。そして彼が繰り返して自問しているのは、人間不在の風景には「文化」が存在するかどうかということである。換言すれば、武田泰淳は現地の風景を通して、戦争中の中国文化の破滅を体験し、真の中国を理解するために目の前に生きている「支那人」に注目しないといけないと認識したのである。

かくして日本で大いに研究されている中国の古典は現地において薪となり、焼き灰となる。日本の学者の心酔する古代中国の文化と戦時下の中国とのあいだに大きな溝があり、武田は現地で文化の破滅を体験することによって、「心は瘦犬のやうに」なり、現実の中国に目を向けなかつた自分が衰弱していくように感じた。したがって、武田は戦場体験によって、第二章で述べた中文研の初期の民衆重視を継承しているといえる。ただし、この時の武田は、すでに文献に描かれた民衆から脱皮し、現実に即した中国認識の重要性を意識するようになった。

また、武田泰淳が帰国後の誌上に投稿した文章を見れば、彼が文化と風土との関係を意識していることが分かる。「杭州の春のこと」は、杭州の風土を描いた作品である。武田は軍務が暇な時に入った民家の様子を次のように描写している。

私は時たま南画の画集や拓本等を拾ひあげて見た。悲しみも喜びもない墨で描かれた其等の絵や文字が私に語るころは何であつたらうか。わたしにはわからなかつた。人の居ない部屋の静けさのために、眼に入る部屋の姿の多様さのために私は自分自身を

²⁶⁵ 同前。

忘れる程であった。²⁶⁶

「南面の画集や拓本等」は言うまでもなく武田の認識していた従来の中国文化の形相であり、しかし戦場で見たこれらの書物の中に、彼は文化を読み取れない。なぜなら、人間の知恵を象徴するこれらの書物はすでに現地の人間によって見捨てられているからである。

その次に、武田は菜の花畑に見える一人の「鬼婆」のような農婦に遭遇した。「その眼の光は私共の積み込む目の荒い人造氷よりは冷たいやうな気さへした。私は魯迅の小説に出てくる農婦が『地獄とはあるものかないものか』とたづねる絶望的な情景を其の時思ひ出したのであつた」²⁶⁷と彼は書いている。戦場において、武田は文字ではなく、現実の人間そのものを通して、魯迅の文学に描かれている中国農婦の心境を理解したのである。武田は「文化は風土を離れては存在し得ないであらう」²⁶⁸といい、書物に書かれている文化が消失していく戦場において、彼は民衆と風土を通して中国文化のありようを再認識したのである。

このように、竹内好と武田泰淳との経歴を照らし合わせれば、彼らが共通して痛感したのは、渡航前に抱いていた中国像の崩壊である。竹内は、「思想の衝突」を求めて中国へ行ったものの、みじめな戦争の跡の代わりに、「政治」によって擬制された平穏な北京の空気を身に沁みて感じた。日本化された北京で、おのれが守ろうとした「中国」は、違う形で日本人の「日常茶飯事」となった。一方、武田は、戦地において混乱した風景を見、現地の人間と触れることによって、それまでの蕃人の歌謡や古典の神話伝説から目覚めつつ、「文化とは何か」と自問した。その中で、彼に重要視されたのは人間・風土に反映されている民衆の精神である。従って「元来の中国像の崩壊」は、竹内と武田との現地体験の共通点とも言えるのではないか。

現地での体験により竹内と武田の中の中国像がすでに崩壊したとき、支配者としての彼らが、いかに「中国」に直面するかという問いが浮かび上がってきた。また、これは帰国後の二人の中国研究の再出発の源となったともいえよう。

第四節 二人の交叉:「政治」と「文化」の間

第三節では武田泰淳の戦場体験と彼の帰国後の思想的転換を考察してみた。その結果、武田は中国に対する再認識を行い、人間と風土を通して中国文化の内実を追求する身構えをするようになったことが分かった。そして、第二節で論じた竹内好の転換も含め、両者の現

²⁶⁶ 武田泰淳「杭州の春のこと」(『中国文学月報』第59号、1940.2.1)

²⁶⁷ 同前。

²⁶⁸ 「梅蘭芳遊美記の馬鹿々々しきこと」(『中国文学』第69号、1941.2.1)

地での経験は、帰国後の彼らの方向に大きな刺激を与えたことが理解できる。本節は、帰国後の二人の言論を検討し、その中から改革後の中文研の方向転換を読み解く鍵を探り、両者の関連性を提示してみる。

前述したように、1939年10月に帰国した竹内好は、翌月から中文研と『中国文学月報』の改革を準備しはじめた。第57号（1939.12.1）に掲載された竹内の「二年間——黙することの難ければ」を見ると、本誌の改革をめぐる、竹内と武田が反対の立場に立っていることが確認できる。

某日、武田云ふ。君の月報を政治的に転換しようとする意図には賛成出来ない。我々は今が如何に不調な時代でも月報自身の持つ意味がそのために将来の約束に関してまで無益になつたとは思はない。つまり我々は今のままで、今より遥かに多く果さねばならぬ仕事を残してゐる。あくまで文化的でいいではないか。²⁶⁹

帰国後の竹内の持っている「政治的に転換しようとする意図」について、彼の帰国後の日記（1940）にその一端が窺える。

二月四日（日）夜

この時の長野（筆者注：長野賢）の話、午後から夕方までしゃべりつづけて、日本の現状、将来の見透しを彼一流の政治的解釈で一席やった。（略）長野の描いている夢は、それを文字で形象したら、すばらしい文学になるだろうと思う。俺はそういう仕事をしてみたい。無論長野の夢は政治を手段としなければ描かれまい。それを文字を手段にした夢に移すことは出来ぬものか。（略）俺は俺の内にあるもやもやしたものを形象したい。²⁷⁰

竹内が、長野賢と語り合った具体的な内容については、管見の限りでは見つけられなかったが、彼が竹内に語ったのは、日中関係、または日本の中国研究の「現状」と「将来」に関する政治性の持つ意見ではなかったかと推測できる。²⁷¹この日記の中で竹内は、自分の内にある「もやもやしたもの」を形象したいと記しているが、それは何を指しているのだろうか。同日の日記には、このような一節が見られる。

²⁶⁹ 竹内好「二年間——黙することの難ければ」（『中国文学月報』第57号、1939.12.1）。

²⁷⁰ 竹内好「北京日記（1940）」（『竹内好全集』⑤、386頁、388頁）。

²⁷¹ 長野賢は、本誌に「蕭軍のヒューマニズム」（第29号、1937.8.1）などの中国近代文学に関する論文を掲載しているほか、本号の「後記」で紹介されたように、北平で黄土層社という文学団体の同人であり、少なくとも中国研究に関連する人物であることには相違ない。

武田、このごろ不思議な気持を訴える。何が何だかわからなくなったようだと言う。文化の基礎がゆらぐ気持だろうと思う。そう云われて、武田が近ごろ書いているものが単に支那に対する愛情の疑いだけでないのがわかった。不安と云うものであろう。俺はそれを目黒村の不安と名付けた。何をしていたかわからなくなった気持。²⁷²

竹内の感じた武田の「不安」は、前述したように、武田の現地体験によって生じた日本の中国研究の現状に対する不安であろう。そして、当時の中文研の事務所は竹内の自宅でもある東京目黒区に置いたため、文中の「目黒村」は実に中文研を指しているのではないかと考えられる。換言すれば、竹内の感じた武田の「不安」は、実に中文研全体としての方向に関するものであろう。このように、竹内の「もやもやしたもの」は、彼が感じた武田の「文化の基礎がゆらぐ気持」であり、また戦時下における中国文化にいかに向き合うのかという疑惑だと考えられる。

竹内は、武田泰淳と違い、平穏な北京で自分に本音を言える「人間」との接触すら思うとおりにできなかった。例えば、第34号(1938.1.1)の「北京通信(二)」では、竹内はこのように述べている。

かへすがへすも残念なのは、事変前に来て抗日の実状を目のあたり見られなかつたことです。たとへば家一軒借りるのも容易でなかつたといふ話です。しかし、人間と人間とがどんな眼付をして憎しみあつたかは誰も話してはくれません。²⁷³

ここから分かるように、竹内好が知りたいと求めているのは、日本の侵略に直面する中国人の行動と思想のありようである。「家一軒借りるのも容易でなかつた」状況が、中国人の日本人に対する抵抗の証であるのであろう。かかる状況下で彼はその時局に関する心情を言える中国人に、果してどのぐらい出会うことができたのであろうか。

竹内好の北京時代の日記に、頻繁に登場する一人の中国人がいる。それは楊聯陞という人物で、竹内自身も当時「一番親しくつきあつた」²⁷⁴友人であつたと認めている。この最も信頼していた友人との間でさえ、「黙契のようにお互いに時局については一言も口にしませんでした」²⁷⁵という。このように、政治に翻弄されていた北京で、中国人の本音を読み取れなかつた竹内は、松枝茂夫への手紙の中に「だんだん支那、支那人、支那文学がいやになつて

²⁷² 竹内好「北京日記(1940)」、前掲文、387頁—388頁参照。

²⁷³ 竹内好「北京通信(二)」、前掲文。

²⁷⁴ 竹内好「中国と私」(『竹内好全集』⑬、220頁)。初出：1950年5月号『近代文学』(第5巻第5号、近代文学社刊)の「特集・世界の知識人へ」の一篇として発表。

²⁷⁵ 竹内好「中国人のある旧友へ」(『竹内好全集』⑬、63頁)。初出：1969年2月号『未来』(未来社刊)に「著者に聞く10」として発表。

き」²⁷⁶たとい、中国文学作品にも不信感を抱くようになった。留学前、竹内は誌上において中国近代文学を中心に執筆していたが、留学後は、中国近代文学ではなく、日本における中国研究の方向性に関心を寄せるようになった。帰国後の竹内は、政治と文化との「分ち難い」関係を現地で知ることとなり、文学作品だけでは真の中国文化は理解できないと痛感するようになったためであろう。

このような中国文化への向き合い方に対する疑問は、武田泰淳にも共通的に存在している。前掲の「二年間——黙することの難ければ」に見える、武田の「文化的でいいではないか」という主張は、間違いなく彼の戦場体験から生まれたものである。「文化的」というのは、彼が現地で見た人間や風土と深く関連している。帰還した彼は、中国の人間や風土と隔たっている日本の中国研究を以下のように批判している。

兵士達は論文を発表し書を出版するために研究しませんでした。しかしながら日本の軍隊のために、その目的のために、彼等は支那人を知らなければなりません。支那の家屋、支那の河川、支那の畠、支那の動物、支那の絵画を知らねばなりません。なる程此の事は東亜文化協議会が日本と支那の大学者を集めて何やらやつてあると言ふ程華やかなるものではありません。しかし現在のやうな状態の下では華やかなるものはすべて空しとさへ言へるのではないでせうか。私は日本に帰つて驚いたことは支那関係の出版の華やかさでありました。しかし今はその空しさに驚かすにはみられないのです。²⁷⁷

兵士は無論、研究のために中国へ行ったわけではない。しかし、中国での暮らしによって、彼らは内地の研究者に比べ、より現実的な中国人の精神に接触し、より衝撃的な風土を見た。つまり、武田の「文化的」な再出発は、現実的な中国、および中国人の生き方に注目することによって、中国の真実を再認識することだと考えられる。1938年8月31日、北京にて日中両国の学者の出席した「東亜文化協議会」が開催され、その目的は「文化の全領域に亘つて各専門別の研究を開始し支那の古文明、現代文化と日本の文化全体との混然たる交換を実現せんとする」²⁷⁸と宣伝されている。武田からみれば、このような文化の交換は文化の内実と程遠いであろう。つまり、現地で文化を内蔵する書籍が焼かれている以上、古典を研究する学者は現実の中国文化へ接近できない。政治の力に破滅されていく中国文化はいかにして持続するのだろうか。武田はつねにこの疑問を現地の人の日常生活の中に探求している。

²⁷⁶ 「竹内好（北京東四七条胡同四三）から松枝茂夫（東京都杉並区荻窪一一五〇）へ（〔昭和一三年〕一〇月一二日、封書）」（井上光晴編『辺境』5、影書房、1987. 10、7頁）。

²⁷⁷ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」、前掲文。

²⁷⁸ 「日支の学者六十名 文化交換に提携 九月北京に新団体結成」（『朝日新聞』、1938. 8. 2）。

彼の帰国後の文章を見てみれば、この主旨が彼の中に一貫されていたことが確認できる。例えば、第73号(1941.6.1)に掲載された「山西開発展を観る」は、山西の風景と人々の生活を主題とする展覧会を見た武田の書いた感想である。その中で、彼は、中国農村の原風景を再現する展覧会の意義について、以下のように書いている。

支那学とは別に、何か「支那」を身近に感ずる装置が出来なければ、到底この複雑かつ強烈な印象にぶつかって行くことはできないのではないか。もう何かしら、今までの研究や学問を嘲笑するやうな現実が充満してゐるのではないか。(略)会場の隅に、無造作にたてかけられた頑丈な耕作用の犁、その犁一本にまさる影響力を持つた文章を書くためには、支那学者は十年の心血を注がなければなるまい。²⁷⁹

前述した「日支親善のすべての機関」などが、現地の惨状を目撃した武田にとって「影が薄いもの」であり、中国現地の「犁一本」は、学者が十年間にわたって心血を注いだ成果にも匹敵するとまで指摘している。浪漫的・古典的な民衆文化に関心を抱いていた武田は、帰国後の再出発として、現実の中国風景、および生きている人間を念頭に置く「文化的」な中国認識を求め、新たな中国研究のスタイルを提言しようとしている。

竹内の「政治的」と武田の「文化的」は、一見対立的な立場であるが、通底するものであった。これについて、竹内は下記のように語っている。

中国人に対して連帯感があるんですよ。自分は日本人ではあるが、日本政府なり日本の権力なり日本の支配的なジャーナリズムに対して局外者であるという被害者意識、そういう点は同じ被害を受けている人間としての共通感がある。(略)戦争は強制されていくものだし、鉄砲も撃たなければいけないのですが、その極限で自分がどうすべきかという問題は心の底にあった。私にもあったし、武田にもあったと思う。²⁸⁰(傍点筆者による)

この一文は、表には竹内が認識した日中戦争は「弱いものをいじめ」²⁸¹的行為であり、中国はこの戦争の被害者であったという意味を読み取れるが、裏には二人の現地体験によって生じた「被害者意識」が表現されている。ただし、二人の「被害者意識」には異なる内実が存在する。竹内の場合は、平穏な北京の空気を通して、戦争における権力という政治的な支配力の強さを自覚し、その支配力の下で自分が求めていた中国文学研究は中国と同じ被

²⁷⁹ 武田泰淳「山西開発展を観る」(『中国文学』第73号、1941.6.1)。

²⁸⁰ 竹内好・高橋和巳「文学 反抗 革命」、前掲書、38頁-39頁。

²⁸¹ 同前、39頁。

害者であったと彼は認識した。一方の武田の場合は、戦場で「強者」としての中国人を目撃した。彼の文章では、竹内のような中国に対する同情的な感情は看取できない。しかし、彼は現地で民衆の強靱さを体感することで自分の弱さを認識し、次第に現地を無視する中国研究の空虚さと脆弱さへと自覚が転換することとなった。

このように、二人の帰国後の方向について、一人は「政治的」へ、もう一人は「文化的」へ、両者が交叉しながら異なる方向を提案したのである。竹内好の「政治的」とは、彼の企てた学界とジャーナリズム界への復権であり、武田泰淳の「文化的」とは現実の風土を見つめる観察眼であり、のちに彼の誌面での投稿に反映しているのである。

第五節 まとめ

本章は竹内好と武田泰淳の現地体験を考察し、中文研の改革に関わる両者の連帯性を明らかにした。竹内好は戦争を俯瞰する思いで留学生として北京へ渡ったが、現地において予想と異なる「平和」を目撃し、次第に初心を失っていく。竹内は北京の「長閑」を通して、政治と文化との不可分性を意識し、中国文学に対して動揺しはじめた。このような体験によって、帰国後、彼は中文研を改革し、新たな出発点からやり直そうとした。以前の活動に比べ、竹内は一層政治的な方向へ向かっていく。彼の政治性には、二つの意味が含まれている。一つは、現地の人間に目を向けない既存研究に対する批判である。もう一つは、「近代」を再認識することによって、新たな中国文学史観を樹立することである。

一方、武田泰淳は戦争に参加する軍人として中国に赴いた。彼は現地で多くの民衆と接することによって、自分の従来中国認識と日本の中国研究の脆弱性を意識するようになった。さらに、彼は現地で文化の破壊と消滅を目撃したことによって、書物に書かれている文化の存在を懐疑するようになり、自分と中文研に対して強烈な自己批判を行った。彼は民衆の精神において、文化の持続を模索しながら、民衆と風土に基づく中国認識を形成した。武田が帰国後に発表した文章には、このような認識が強く反映している。

竹内と武田は同じ時期において異なる中国体験をした。しかし、その中に共通性が見られる。一つは、従来中国文学史観の動揺であり、これは中文研の改革に至る直接な原因であるといえよう。もう一つは、戦争という極限状態において、中国文化にどう向き合うべきかという疑問である。これは、竹内の北京で感じた文化の擬制、および武田の戦場で目撃した文化の破壊という二種類の体験が交叉した結果といえる。中文研の改革の活動が、中国文学そのものから離れる傾向を示したのも、前述した二人の連帯性によるものだと考えられる。

第五章 中興—葛藤期：中国語問題の展開(1940.4-1943.3)

第一節 はじめに

本章は中文研の第三期(1940.4-1943.3)を中心とする。この時期、表立っての同人制度は解散され²⁸²、それに伴い機関誌もまた大きな変化を遂げた。第60号(1940.4.1)から『中国文学月報』は『中国文学』と改題され、機関誌から一般誌となり、誌面の内容も大幅に刷新されていた。この時期の誌面の特徴として、主に以下の3点が挙げられる。第一には、近代文学に関する論文が減少し、その代わりに、中国の著作を紹介する書評類の内容が増加した。また、清朝末期の白話文学を紹介しはじめ、誌面には翻訳物が多数掲載された。第二には、他国における中国研究のありようを紹介するようになった。そして第三には、中国語に関する内容が急激に増加する傾向を見せた。

第四章で述べている通り、中国での体験は、竹内好と武田泰淳の中国文学に対する認識を大きく転換させ、彼らは中国文学を築いた基礎そのものに注目しはじめ、特に竹内好は中国語問題に多大な関心を抱いた。第一章で論じた誌面の変遷にも触れているが、この時期の誌上においては、中国語問題に関する文章が最も頻繁に掲載されている。そのため、本章は、誌面における中国語に関する言論を検討し、改革から解散までの中文研の思想的な動向を把握していきたい。

中文研の中国語論に関連する先行研究は、秋吉収氏の「『中国文学(月報)』と中国語：竹内好らの活動を軸として」²⁸³が挙げられる。秋吉氏は、竹内好などが等閑視されていた中国語研究の現状に不満を持っていたことを確認したうえで、中文研の中国語に関連する活動を考察した。さらに、誌上に掲載された漢学訓読法に関する反対論をまとめ、「雑誌『中国文学月報』を逐一繙けば、中国侵略戦争というまさに極限状況下でありながらも、彼らがいかに中国に対して真剣な眼差しを注ぎ続けていたかが、ひしひしと伝わってくる。そしてその地道な営みこそが、日本の中国に対する「間違い」への精一杯の抵抗であった」²⁸⁴と結論づける。戦時下に敢えて「支那」ではなく、「中国」という当時に馴染みのない言葉を雑誌の名前に用いた中文研は、確かに秋吉氏が論じたように、近代中国に情熱を注いでいた。し

²⁸² 1940年4月以後、制度上に同人会が解散されたが、『中国文学』第60号の「中国文学研究会について」において、竹内好は「同人」という言葉を使い、旧同人のあいだに、同人意識が依然として存在する。

²⁸³ 秋吉収『『中国文学(月報)』と中国語：竹内好らの活動を軸として』(『中国文学論集』35、九州大学中国文学会、2006)。

²⁸⁴ 同前、69頁。

かしながら、戦争期という時局の背景を踏まえ、中でも特に太平洋戦争勃発後の誌面に見られる内容上の変化に着眼した時、誌上に現れていた中国語に関する言論がどのように変化していたのかは、様々な疑問がなおも残されたままとなっている。

そして、中国語が近代日本にとってどのような存在であるのかという命題に関して、安藤彦太郎氏の『中国語と近代日本』²⁸⁵を取り上げないといけない。安藤氏は、戦前の中国語教育制度をはじめ、日本の中国認識においては、リアルタイムに進行している大陸の現実への軽侮と同時に、古典への尊崇というアンビバレントな二重の精神構造が存在していたと論じた。そして、この二重構造が学問研究にも反映される。つまり、アカデミズムの学問としての中国語研究はあくまでも漢文訓読法に限定され、近代中国語が卑俗な実用語として認識されていたため、結果として中国の音韻学研究の欠失に至った。安藤氏は、上述の戦前のありようを批判しつつも、伊沢修二・何盛三・魚返善雄・倉石武四郎などの果たした中国語教育における先駆的な業績を評価した。

さらに安藤氏は、同書において中文研の中国語研究に関する行動についても触れている。『中国文学』第83号(1942.5.1)である「日本と支那語」の特集に関して言及したが、肝心の雑誌内容に触れず、編集者であった実藤恵秀の紹介のみに留まっている。

その他には、翻訳の視点から中文研を考察する先行研究も見られる。例えば熊文莉氏²⁸⁶は、中文研の翻訳活動を整理したうえで、竹内好と吉川幸次郎の翻訳に関する論争を考察した。熊氏は、中文研の翻訳活動の目的が翻訳自体だけではなく、「翻訳の氾濫及びそれに伴う誤訳の横行と対峙することも重要な仕事であった」²⁸⁷と主張したうえで、竹内好と吉川幸次郎の翻訳に関する意見の相違について「既存のアカデミックの世界に対抗するために発足した中国文学研究会と漢学・支那学の異なりそのものを如実に語っている」²⁸⁸と結論を付けた。

この結論について、筆者は基本的には同意するが、ただ一つ指摘したいのは、第二章でも論じた通り、中文研は中国近代文学の翻訳に相当の力を注いだ。また、彼らは自ら翻訳作業をただけではなく、他人の翻訳作品に対してもまた積極的に批評を行ったため、これらの翻訳論においては中国語に関する多くの議論も見られる。にもかかわらず、熊氏はこれらの中国語に関する言論を一切言及していない。翻訳は本来、言語学とも密接に繋がっている作業であり、中文研の活動においても、中国語重視の姿勢は終始一貫している。だが翻訳は、単に中国文学を客観的に紹介するための作業であるのだろうか、そしてまた、漢学アカデミズムへの対抗という内なる目的を抱いていた者たちにとって、翻訳とはいかなる意味を持つものであったのだろうか。これらの疑問は今もなお取り残されたままである。

このように筆者は、従来の先行研究によって未だ解明されていない課題として、主に以下

²⁸⁵ 安藤彦太郎『中国語と近代日本』(岩波書店、1988)。

²⁸⁶ 熊文莉「中国文学研究会にとっての「翻訳」」(『朝日大学一般教育紀要 36』、朝日大学、2010)。

²⁸⁷ 同前、23頁。

²⁸⁸ 同前、25頁-26頁。

の二点を挙げたい。第一に、中文研の中国語にまつわる行動と言論は、時局に対する「精一杯の抵抗」としての一定の評価がなされている。しかしながら、太平洋戦争勃発以降における中文研の大東亜戦争に対する認識、という要素を加味してその全体像を探っていくとき、中文研の中国語重視というスタンスは、単純に「抵抗」の産物であると解釈できるのだろうか。すなわちその内実には、より複雑な葛藤が潜んでいるのではなかろうかと筆者は推測する。第二に、近代日本にとっての「中国語」とは何であろうか。倉石武四郎や魚返善雄などの先駆者は、これらの研究に無論多大な業績を残した。だが、異色的な立場から発足した中文研の言論もまた、これをより重層的に探っていくうえで検討すべき問題である。

本章では、「翻訳」、「漢文訓読法」、「中国語教育」、「国語運動」、「支那語学」という五つのキーワードを中心に、中文研の中国語に対する認識を検討し、戦争の深化に伴って誌上に滲む複雑に屈折した彼らの心境に迫っていく。これによって、解散以前の中文研の実像を明らかにしながら、太平洋戦争勃発した前後における知識人たちの中国認識の一端を示す。

第二節 漢学批判の復活

本節では『中国文学』に掲載された翻訳と中国語教育に関する文章に注目し、その中に現れている中国認識を浮き彫りする。まず、翻訳に関して、主に1940年11月から1941年12月までの誌上に設けられていた「翻訳時評」欄を考察する。そして翻訳問題に関する議論は、当時の中国語教育問題とも関連しているため、倉石武四郎の『支那語教育の理論と実際』（岩波書店、1941）を参照しながら、誌上における中国語教育に関する意見を検討する。

一 翻訳論における漢文訓読批判と中国認識

翻訳は中文研にとって、一大事業であったといえる。第二章に示されている通り、1939年から1941年までの間に、中文研は積極的に中国の文学作品を翻訳し、『支那現代文学叢刊』（伊藤書店、1939）、『現代支那文学全集』（東成社、1940）、『中国文学叢書』（生活社、1941）のシリーズを出版した。また、作品の翻訳だけではなく、「翻訳時評」の連載を中心に、翻訳に関する批評が数多く見られる。これらの文章を整理してみると、表15の通りである。

表 15 本誌における翻訳論に関する文章

題目	作者	巻号	時間
翻訳時評	神谷正男	第 66 号	1940.11.1
翻訳時評	神谷正男	第 67 号	1940.12.1
翻訳時評	竹内好	第 69 号	1941.2.1
翻訳時評	竹内好	第 70 号	1941.3.1
翻訳時評	魚返善雄	第 71 号	1941.4.1
翻訳時評 (二)	魚返善雄	第 72 号	1941.5.1
翻訳論の問題 ²⁸⁹	吉川幸次郎 竹内好	第 72 号	1941.5.1
翻訳時評 (三)	魚返善雄	第 74 号	1941.7.1
翻訳時評	吉川幸次郎	第 76 号	1941.9.1
翻訳時評 (二)	吉川幸次郎	第 78 号	1941.11.1
翻訳雑感	岩村忍	第 79 号	1941.12.1
翻訳時評 (三)	吉川幸次郎	第 79 号	1941.12.1

1. 「翻訳時評」を設けた動機

表 15 にて示されているとおり、翻訳論に関する文章は、「翻訳論の問題」と「翻訳雑感」以外に、ほぼ「翻訳時評」である。この「翻訳時評」は竹内好の企画によって第 66 号(1940.11.1)から連載が始まり、第 79 号(1941.12.1)までの間、計 10 回²⁹⁰が連載されている。その連載は一年以上に渡って続いたという点からも、企画者がいかに翻訳を重要視していたのか、その熱意の程が窺えるだろう。第 66 号の「後記」において、竹内は「翻訳時評」欄を設置する理由について、このように述べている。

この号から、翻訳時評といふ欄を設けた。翻訳といふことは、ずみ分いろいろの問題を含んでゐるくせに、あまり問題にされない。西洋文学の方は短いなりに伝統があるからいいが、支那文学ではまだ規準になるだけの翻訳の型すら生まれてゐない。翻訳の問題は、語学や表現の問題だけでなく、考へていくと結局は人間の問題まで還元してしまう。技術だけの範囲でもかなり複雑である。この欄は二三回づつ各方面の人に書いてもらふつもりである。²⁹¹

²⁸⁹ 「翻訳論の問題」は翻訳論に関する吉川幸次郎と竹内好の往来書簡である。

²⁹⁰ 熊文莉氏が誌面を統計した結果、「翻訳時評」の掲載回数は 12 回だとしたが、筆者の再統計において、10 回しかないのが確認できる。

²⁹¹ 竹内好「後記」(『中国文学』第 66 号、1940. 11. 1)。

竹内は従来の中国文学の翻訳に見られる問題が等閑視されたままの状況を指摘している。特に、翻訳は一見すると語学と最も深く関連するものではあるが、竹内好は、語学力や翻訳テクニックの枠を超える翻訳論を主張した。彼がこれらを「人間の問題」として捉えている事はどのような意味が含まれているのだろうか。同号に掲載された「支那言語学概説」をみれば、竹内の思考の一端が窺える。

「支那言語学概説」は中国の言語学者王力の『中国語文概論』（商務印書館、1939）の訳本に対する書評である。1940年、本書は佐藤三郎治によって日本語に翻訳され、生活社より出版された。竹内好はこの訳者を以下のように批判している。

この翻訳はずる分間違ひが多い。間違ひといふより、間違ひの範囲を逸脱してしまつた出鱈目である。(略)原著と対照してみたら、悉く誤訳であつたので、改めて最初の数頁に朱を入れてみた。まつ赤になつた。(略)日本の支那語学者の論理と想念の乏しさを(さうでない人のためには気の毒であるが)この本は二重に教へてくれるわけである。(略)だが、この程度の誤訳(あるひは出鱈目)は、いまの日本の翻訳界で、決して例外的なわけではない。僕らの会の連中の間でも、もつとひどい例はいくらかもある。また僕は、翻訳の問題を、単なる語学の問題でなくもつと広範な問題に考へてゐる。²⁹²

竹内は『支那言語学概説』のような誤訳だらけの日本語訳を見るのが初めてではないと述べ、語学書であるからこそ、彼は本書に現れた「日本の支那語学者の論理と想念の乏しさ」に慨歎している。その中に訳者の中国に対する認識不足への批判が窺える。したがって、竹内は、翻訳という行為を語学の優劣という問題だけではなく、より広く言えばいかに中国を理解しているのか、そしてまた、中国語をいかに科学的な方法で勉強しているのか、という「人間の問題」として捉えたのである。

このような背景もあり、竹内好は自分を含め、さらに神谷正男、魚返善雄、吉川幸次郎の3人に依頼し、「翻訳時評」の連載を始めた。神谷正男²⁹³は、1935年～1938年の間に北京へ留学し、その研究対象は近代中国思想であった。魚返善雄(1910-1966)は上海の東亜同文書院の出身で、言語学に取り組んでいた。そして吉川幸次郎(1904-1980)は京都帝国大学の出身で、中国古典文学の研究者として知られていた。中文研の「翻訳時評」を執筆した当時、彼は東方文化学院京都研究所²⁹⁴の研究員であり、『尚書正義』(岩波書店、1940)の訳本

²⁹² 竹内好「支那言語学概説」(『中国文学』第66号、1940.11.1)。

²⁹³ 神谷正男に関する詳しい情報が不明であるが、「中国文学研究会年譜」によると、神谷は1934年東京帝国大学文学部支那哲学科から卒業し、1938年8月、北京から帰国したあと中文研の同人に参加したという。

²⁹⁴ 現在の京都大学人文科学研究所の前身。

を出版しはじめた時期でもあった。要するに、この4人は異なる専門の一員として、それぞれの立場と視点によって翻訳の抱える問題点について検討した。一年間に渡って連載されていた「翻訳時評」は、一見4人の担当者によるそれぞれ全く異なる評論であるようにも見えるが、実は彼らの論点には共通する思想が見られる。以下、詳しく見てみよう。

2. 文化現象としての翻訳

「翻訳時評」の初回目（第66号）を担当した神谷正男は、訳書の選択、原語に対する理解と自国語の表現力、出版の技術と書物の形態という三つの問題を挙げたうえ、第67号（1940.12.1）では1940年に翻訳された中国関係の叢書類と一般向けの入門書として優れたものを批評した。竹内好は、神谷のこの「翻訳時評」について、「大綱に於いて異存がないが、問題の立て方がまづい」²⁹⁵といい、下記のように異論を唱えた。

少くともわれわれの間だけでも翻訳出版に対する翻訳方法の側からの批評が盛になることは僕も切実に希望してゐる。(略)ところで、さうした内部からする批評のほか、読者としての、あるひは文化批評としての立場からの批評を考へられていいと思ふ。翻訳を文化現象として成立させる社会文化の基礎への批判を志向した批評も必要であると思ふ。²⁹⁶

前述したように、竹内は翻訳を「人間の問題」として考えるべきと主張した。ここでも、彼のこのような立場が一層明白となっている。竹内は訳者の語学的能力や出版社の形態などの内部からの視点のみならず、読み手の立場、および社会文化の基礎に関わるツールとしても翻訳を取り上げるようにと要求している。翻訳は外国を理解するのに最も重要なルートの一つであると同時に、自国がいかにか正確に外国を認識しているのか否かをも反映している。そのため、翻訳は日本人の異国と自国の文化に対する認識の仕方を反照する。こうした文化現象としての翻訳批判論が、竹内によって具現化された結果、伝統的な翻訳手法としての「漢文訓読法」への批判は誌上に提起されたのである。彼は、まず以下のように翻訳と訓読の違いを強調する。

古典の翻訳と呼ばれるものは今なほ多く従来の訓読のままである。訓読を国訳と称してゐるのだが、この二つの間には天地の隔りがある。いはば考へ方が逆になつてゐるのである。訓読によつて原文の意味の精密な把握が不可能なことを、語学力の不足と思惟の粗雑さのために感じ得ないのである。(略)文語で表現しようと口語で表現しようと、訓読と翻訳はまるきりちがふのだ。日本語を支那語に合せようとするのでなく、逆に日

²⁹⁵ 竹内好「翻訳時評」(『中国文学』第69号、1941.2.1)。

²⁹⁶ 同前。

本語によつて支那語を解釈しようといふのが独立した翻訳の態度である。²⁹⁷

竹内は訓読を翻訳法として認めていない。なぜなら訓読は「日本語を支那語に合せようとする」方法であるからだという。周知のように、訓読はまず中国語としての構文を認識し、原文に区切りを加え、そして、日本語の法則によって返り点や送り仮名をつけ、語順を変えることによって文章を読解する方法である。竹内の言った「日本語を支那語に合せようとする」というのは、恐らく訓読において、中国語の原文にある単語と表現を変えないままで、日本語の訳文に現すことを指しているであろう。

とはいえ、訓読では、日本語によって漢文を解釈するという作業がないとは言えない。例えば、訓読の際必ず付けられる「テニヲハ」は、日本語にしか存在しない表現で中国語における語と語の関係を示したものであり、また送り仮名は、中国語での動詞や形容詞などを、日本語の用言として表現する機能を持つ。²⁹⁸つまり、訓読には、日本の漢文翻訳におけるひとつの補完法として、その必要性和科学性が含まれていると認めざるを得ない。にもかかわらず、竹内好はこれらの機能を看過している。第三章で述べられているように、竹内は高校時代と大学時代に漢文の読解に非常に困難を感じていた。訓読を不得手としていた竹内がどれほど正確に訓読の仕組みと機能を理解していたのかについて、筆者は疑問を感じざるを得ない。さらに、次の文章からは、竹内の訓読批判の主眼は、方法論というよりはむしろ、文化論にあったと感じ取ることができる。

原語に忠実といふ態度から行はれる直訳が、しばしば訓読の意識と混淆され、それがまた逆に、訓読が最も忠実な原文理解であるかのやうな錯覚を起し易いのである。(略)その点では日本文化は今なほ支那文化の支配から完全に抜けてゐないといふことにもなる。文字を共通することと言葉を共通することは別である。日本語と支那語が全く異つた言語だといふことを、われわれ言葉の職務にたづさはるものは繰返し説く必要がある。

日本が支那の文化を受け入れたのは古いが、僕はさういふ歴史は信じない方がいいと思ふ。今日、支那がわれわれにとつて未知であるといふ現在の立場の方が大切なのだ。

²⁹⁹

²⁹⁷ 同前。

²⁹⁸ 漢文、訓読、日本語の関係について、吉川幸次郎『漢文の話』(筑摩書房、1986)を参照されたい。また、中国の文言と白話、現代中国語、及び日本の漢文訓読、一般文語文、現代日本語の関係について、市来津由彦「漢文訓読の現象学：文言資料読解の現場から」(中村春作・市来津由彦・田尻祐一郎・前田勉編『「訓読」論：東アジア漢文世界と日本語』、勉誠出版、2008)を参照されたい。

²⁹⁹ 竹内好「翻訳時評」、前掲文。

日本が中国文化を受け入れてきた歴史は長く、文字が共通しているとはいえ、日本語と中国語はそもそも根本的に異なる言語である。竹内のこのような見解は、彼の初期の漢学論と比べると、より一層具体的になったといえよう。第三章に述べられたように、初期の誌上に発表された竹内の漢学論は、あくまでも文学を鑑賞する立場に立脚したものである。だが北京留学を経て、彼はそれまで抱いていた中国文学に対する認識を次第に動揺しはじめ、政治の文学に対する影響が不可避である状況下においていかに中国文学を理解するべきか、という疑問を考えるようになった。そのため、竹内が「今日、支那がわれわれにとつて未知である」といったように、彼の訓読批判はつねに今の中国を正確に理解しようという意志を示しているともいえよう。

これと似たような意見は神谷正男にも見られる。神谷は、初回目の「翻訳時評」において、東亜関係の翻訳界に存在していた「翻訳書の選擇が全く定見を缺いてゐる」³⁰⁰という問題を指摘し、大陸進出という現実的な要求を満たすための翻訳を以下のように批判している。

日本が現在東亜の経済的事情や経済政策に関する知識の要請に駆られてゐるからといつて、経済関係の翻訳書が踵を絶たないといふことはよいことではない。(略) いかに経済事情を知り、経済政策を立てたところで、中国の国民を真に把握しなければ、どうにもなるものではない。(略) もう少し中国の国民精神とか、国民心理を把握するやうなものが翻訳されて然るべきではなからうか。(略) 目前の現実的要求のみに従つて功利的な翻訳書を出版することになれば国民の支那知識も依然として一面的になつて正しい支那を理解することはできないのである。³⁰¹

神谷は、日本の東亜経済に関する知識の要求のみに従つて翻訳の対象を選択することを批判し、一面的な中国理解を避けるために、経済的利益の追求という目的に基づいてのみならず、中国の国民精神を把握する書物を翻訳することの必要性を強調した。その主張に従つて、第 67 号 (1940.12.1) の「翻訳時評」において、神谷は『支那文化史大系』(大東出版社)、『現代支那文学全集』(東成社)などの中国文化に関する学術書と文芸書の訳本を紹介した。神谷の翻訳批判とは、翻訳そのものというよりは、翻訳に反映されているような近代日本の中国理解の欠失という現状に向けられたものだと考えられる。こうした意味で、竹内と神谷の主張は、翻訳を通して、日本の中国文化に対する見方への問題点を提示しているといえる。また、前述した竹内好と神谷正男の論点は、実は吉川幸次郎の主張とも非常に類似している。吉川は第 76 号 (1941.9.1) の「翻訳批評」において、誤訳の氾濫についてこのように語っている。

³⁰⁰ 神谷正男「翻訳時評」(『中国文学』第 66 号、1940. 11. 1)。

³⁰¹ 同前。

われわれの社会は、一見、非常に支那のことを気にしてゐるかのやうに見える。(略)
がしかし、世間は一たいどれほど本気に支那のことを気にしてゐるのであらうか。実は非常に冷淡であるやうに思はれる。(略)

私は、世間一般の、かうした支那に対する無関心さこそ、誤訳横行の一ばん大きな原因だと考へる。世間は、支那語翻訳界の現状を一向知りもしないし、またうすうす知つてゐても、きびしい監視の目をむけようとしない。また監視するだけの能力も、実はないのである。³⁰²

吉川幸次郎は、誤訳の最たる原因が、日本社会全体を蔽う中国に対する冷淡的な態度であると指摘し、またこの「冷淡」を「近頃の日本人の精神に存する一つの弱点」³⁰³であるとし、誤訳問題を他者理解の欠如という面にまで深化した。つまり、翻訳を言語的・文学的な問題としてのみではなく、一つの近代日本社会に蔓延する文化現象として取り上げたのである。

実は吉川は「翻訳時評」を担当する以前、1940年9月号の『文藝春秋』に「支那語の不幸」を發表した。その冒頭部で彼は「現代のわが国で、最も正当に認識されていない外国文化は支那文化であり、最も不幸な状態に放置されている外国語学は支那語学である」³⁰⁴と記しており、吉川は本文において三つの「支那語の不幸」を挙げた。まず一つ目の不幸は日本語と中国語が「同文」であるという意識である。吉川は、「同文」によって中国語は外国語として意識されにくく、しかもたとえ同じ漢語としても、日本独自に作られたものが多く存在し、その意味も本来の中国語での意味合いと異なる場合が多いと指摘した。二つ目の不幸としては「支那語はやさしい外国語だという思想」が浸透している点を挙げ、更に吉川は、「漢文訓読法」を第三の不幸として取り上げた。漢文訓読は中国語が外国語であるという意識を希薄にし、音調の理解を無視しているため中国語での心理をうまく把握できず、結局として元々の意味を誤解する可能性が高い、という主旨である。吉川は具体的な事例として新聞の誤訳を列挙し、誤訳の発生は「社会全般が直接な関係をもつ事態」に不都合を与えるといい、「支那語の不幸は救われねばならぬ。學術のためにも、政治のためにも」との結論をつけた。このような吉川の「同文」意識と「漢文訓読法」に対する批判は、竹内好の「翻訳時評」において継承されていることが理解できる。また、竹内が翻訳を「広範な問題」として認識していた点も、吉川の姿勢と一致しているといえる。ちなみに、「翻訳時評」が連載されはじめたのは、吉川が「支那語の不幸」を發表してからわずか二か月後のことであり、その後吉川も「翻訳時評」の執筆者として招聘された。こうしてみると、竹内のこの企画は、

³⁰² 吉川幸次郎「翻訳時評」(『中国文学』第76号、1941.9.1)。

³⁰³ 吉川幸次郎「翻訳時評(三)」(『中国文学』第79号、1941.12.1)。

³⁰⁴ 吉川幸次郎「支那語の不幸」(『吉川幸次郎全集』⑰、筑摩書房、1969、422頁)。初出：『文藝春秋』、1940.9。

吉川幸次郎の言論に誘発された可能性もあるのではないかと推測できる。

このような竹内の漢文訓読法に対する批判には、性急さが見られることは否定できない。無論、それは彼自身が漢学に抱いていた持論に依拠するが、何よりその大きな理由としては、彼が翻訳を社会文化の一形態として考えていたためである。つまり、竹内の批判の矛先は、漢文訓読を通して、日本人の便宜主義的な思考に基づく中国認識の現状そのものに対して向けられていたのである。これは同時代を生きた吉川、そして神谷にも通底している面があるといえよう。

3. 翻訳と日本文化の独自性

竹内好の行った訓読批判からは、もう一つの意図が読み取れる。それは日本語、突き詰めれば日本文化としての独自性に対する要求である。前述した訓読が原語に忠実するということはあくまでも錯覚であり、この錯覚は日本文化が中国文化から独立していないことを意味するという竹内の主張は、このような認識を示している好例であろう。また、彼は第70号(1941.3.1)の「翻訳時評」において、以下のように述べている。

支那語の言葉の意味がはつきり掴めないか、適當の訳語のない場合に、原語のまま使ひたくなる誘惑は、漢字を共通する限り、訓読の影響を離れても避け難いことだが、日本語を尊ぶ意味で出来るだけ止めたいものである。(略)今日の日本語は、近代語としての語彙や語法を、支那語に求める必要は殆どなく、固有の造語法や造句法を反省し、空粗な漢字の桎梏から解放する方がむしろ急務であらうと思ふ。³⁰⁵

竹内は、原語を用いて翻訳を行う方法を批判している。日本語は近代的な思想を表す語彙や語法を備えているため、中国語を翻訳するのであれば、原文の表現と語彙をそのまま使うのではなく、日本語の「固有の造語法や造句法」によって原文を解釈すべきである、と主張した。つまり、竹内の主眼は、日本語の伝統を重んじ、自国語の固有法則で外国語を解釈するという日本文化の独自性への追究にあったのである。

このような主張は、ただ竹内だけのもの決してなかった。同じく「翻訳時評」の担当者である魚返善雄もまた、これと似たような観点を持っていた。

トルコ語や安南語がローマ字に塗り潰され、支那語がラテン化文字に蚕食された不幸を日本語は経験しなくてもすむであらう。日本語は免疫せられたる言語であり、日本文は免疫せられたる文字である。しかもそれは日毎に、それみづからの力によつて発達し進化してゐる。

³⁰⁵ 竹内好「翻訳時評」(『中国文学』第70号、1941.3.1)。

いま南溟に雄飛せんとする日本人が、漢字如きものに何をクヨクヨ思ひ煩ふ必要があらう。支那の漢字は免疫力なく創造力乏しく、最も弱い文字であると考へるがよい。「假名」の「假」の字は支那語では贗物の意味だから引込めたいとか、「浪曲」は支那の字引に「淫猥な歌曲」とあるから改めたいなどといふ、新しき隷屬性に凝り固まつた支那心酔盲拜病患者が出現することは決して国のためになるものではない。³⁰⁶

漢字は元を辿れば大陸から渡来した文字ではあるが、時間が経つにつれて日本語の表記体系の中に組み込まれ、日本独自の意味を既に与えられている。したがって、日本文字としての漢字は、本来の漢字の意味にもはや縛られる必要はない、魚返はこのように説いた。ここで表れているのは、日本語の優位性という自意識であり、さらに中国発の漢字文化から独立しようという一種の対決姿勢である。このような魚返の言論は、古代から長時間に渡って漢字文化圏の中で醸成されてきた日本文化が、既に確たる独自性を持ったものであると認識したいとする、時局の中で次第に高揚していく国民意識の高まりを示す事象の一つともいえよう。

第三章においても既に記しているとおり、「君臣」・「忠孝」などの儒教イデオロギーを近代日本の国民精神に浸透させるために、漢学は一種の道具として重要視されていた。すなわち、ここに反映されている漢文への反抗、および優越的・独自の言語としての日本語という意識は、実に竹内らの第一期における漢学批判の延長線上にある。

いずれにせよ、第三期において誌上に提起された翻訳法としての「訓読」への批判は、若干客観性が欠けているものであるとはいえ、その出発点となったものは戦争中に歪んでいった日本の中国像、および中国への無理解に対する憂慮である。だがその一方で、その根底には、近代日本知識人が中華文化圏からの隷属関係の棄却を目指し、またそれによって日本文化の独自性の確立を志向していきたい、という含意をも合わせ持っていたものと考えられる。

二 漢文教育と中国語教育との衝突

六角恒広の調査によると、1938年から1941年まで、ちょうど盧溝橋事件の直後の時期に、中国語教育関係書の発行量がピーク期に至ったことは明らかになっている。³⁰⁷竹内好は第70号(1941.3.1)の「翻訳時評」において、外務省調査部の訳した「三民主義」³⁰⁸を「翻訳と称し難いデタラメ」と評し、このような誤訳が生じた理由について、「外部的には出版あるひは著述に関する倫理の欠如であり、内部的には支那語教育の完全な錯倒である」と主

³⁰⁶ 魚返善雄「翻訳時評(三)」(『中国文学』第74号、1941.7.1)。

³⁰⁷ 六角恒広『中国語関係書書目』(早稲田大学語学教育研究所、1968)、96頁-97頁参照。

³⁰⁸ 外務省調査部訳編『孫文全集』(第一公論社、1939)。

張した。彼は、翻訳問題を教育の仕組みによるものであると認識し、第 71 号 (1941.4.1) 以後、誌上に中国語教育に関する文章を掲載しはじめた。

こうして、翻訳と同様、「漢文教育、支那語教育及び日本語教育の批判」³⁰⁹は、雑誌改題後の中文研の掲げるもう一つの主題として立てられた。なお、本誌に載せた中国語教育に関する文章は、表 16 の通りである。

表 16 本誌における中国語教育に関する文章

題目	作者	巻号	時間
支那語教育について	倉石武四郎	第 71 号	1941.4.1
支那語教学に関する随想	長瀬誠	第 71 号	1941.4.1
中等教科書異変——主として 漢文・時文教科書に就て	乙寺與志夫	第 71 号	1941.4.1
漢文・支那語教育と支那学との 現実——倉石主義の感想	竹内照夫	第 73 号	1941.6.1
支那学の世界	竹内好	第 73 号	1941.6.1
支那語の教科書について	竹内好	第 78 号	1941.11.1

1941 年 3 月、京都帝国大学教授を務めていた倉石武四郎は、『支那語教育の理論と実際』(岩波書店)を刊行し、新たな中国語教育を提唱した。それは、中国語の地位向上を図るとともに、漢文と中国語を統一し、同時に従来の漢文訓読式の教育法を改革し、音読によって、漢文を教授する提案であった。倉石が、「洪水猛獣の害にひとしいと孟子なみのせりふで責められた先生があるかとおもうと、万雷の拍手をおくるといふ批評もあった」³¹⁰と回想したように、この本の刊行は学界の注目を浴び、大いなる反響を呼んだようだ。

またこれと同じ時期に、倉石は本誌の第 71 号 (1941.4.1) に「支那語教育について」を発表し、本文において、漢文と中国語とを区別するという日本人の考え方を以下のように批判した。

日本人は、支那から文化を吸収する際に、言語と文章とを引き離す習慣をつけた。(略)
しかし、支那の言語と文章とは、同じ支那人の言語活動と云ふ根によつて、堅く大地に植ゑつけられてゐる。日本人は、漢文と支那語とは全然別物であると云ふ態度をとつた。
これこそ、日本の支那学の足が地につかず、根なし草が水の面に漂つてゐる大きな原因

³⁰⁹ 竹内好「中国文学研究会について」、前掲文。

³¹⁰ 倉石武四郎『中国語五十年』(岩波書店、1973、123 頁—124 頁)。

である。³¹¹

「言語と文章とを引き離す習慣」というのは、漢文を中国語を通してではなく、訓読で理解することを指すものと考えられる。そして倉石は、中国人の言語活動を理解せずに中国の文語としての漢文を読むことは、「魂の抜けがらみみたいな書物を見てみるだけ」³¹²であるとも主張した。つまり、訓読によって築き上げた支那学は、現実の中国から乖離しており、中国を知ることには不十分である。この点について、彼は『支那語教育の理論と実際』においてさらに詳しく記している。

支那が五十年このかた、西洋文化または日本文化に触れて、内部的に起した重大な変化は、ちやうど維新後の日本の発展と同様に、その民族の将来について、最も大切な問題であるのみならず、支那の過去を研究するものも、これを離れては真の解決を興へることができない。³¹³

この倉石の記述からは、彼が実際の中国から遊離している支那学を批判し、近代中国への理解を「支那学」の基礎として据える事を訴えた事実を読み解くことができるだろう。にもかかわらず、倉石の考え方は当時の日本人には容易に受け入れられなかった。なぜならば、一般的な認識において、ある一国への関心の深淺は、その国の置かれた政治的な地位によって恣意的に決められたからである。例えば、本誌の第73号（1941.6.1）では、「倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』批判」というテーマが設けられ、その中では竹内照夫の「漢文・支那語教育と支那学との現実——倉石主義の感想」が掲載された。竹内照夫は、新たな視点で中国を理解するというのが、「先づ第一に彼をして政治的経済的武力的に強からしめ、一流大国の地位に迄昇らしめることこそ必須条件である」³¹⁴と述べ、また近代中国に関する研究の不振に陥っている原因については、「一般世人がたとえ新らしい中国に向つて好奇心や興味を抱くことがあつても、相手から掴み出してくる物は極めて淺薄皮相の一片二片に過ぎず」³¹⁵と述べている。つまり、古典中国文体語とわざわざ区別されていた「支那語」は、近代中国の後進性によって、低級言語のイメージを背負わざるを得ない。さらに、竹内照夫は、漢文の価値について、以下のように語っている。

現代我国の德育精神の構成要素中、儒教的理念と佛教思想とを看過し得ぬ。そしてそれ

³¹¹ 倉石武四郎「支那語教育について」（『中国文学』第71号、1941.4.1）。

³¹² 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』（岩波書店、1941、39頁）。

³¹³ 同前、49頁。

³¹⁴ 竹内照夫「漢文・支那語教育と支那学との現実——倉石主義の感想——」（『中国文学』第73号、1941.6.1）。

³¹⁵ 同前。

らの表現が漢文又は漢文的なること、論を俟たない。否、むしろ古典主義漢文科は、その含む修養的効果の為にこそ設定されてある、と見ることさへ可能である。だからこそ漢文科の価値は高いと自惚れるのは滑稽かも知れぬが、それでは漢文教育の自主性が否定されるのではないかと詰めよるのも浅慮である。今の世の考へでは、「支那を知る為の」学科よりも、「臣道を教へる」学科の方が大切だ、といふだけの事である。³¹⁶

つまり、ここで竹内照夫が挙げた「現実」というのは、儒教理念は日本の徳育精神の重要な構成要素ではあるが、漢文はそれらの思想を具現化するための手段として存在している。したがって漢文教育の意義は、中国の古典で中国文明の全体像を探るためというより、むしろ儒教の持つ君臣思想で国民としての「臣道」を国民に普及するためである、というものである。

当時の儒教に関する本を見てみれば、このような「現実」は確かに窺える。例えば、1935年に手塚良道の『儒教思想に於ける君臣思想』が出版され、その広告文には、以下のように書かれている。

現時は所謂思想国難の時代である。種々の外来思想は、朝に夕に我々を襲うて危険極らない時代である。(略)近時支那人の所謂三民主義が我が固有の国体思想と相容れざるは無論であるが而も儒教に於ける君臣思想の研究は今日として決して無意義な事ではない。(略)江戸時代に於いても水戸学派の学者は孔子の君臣道は我が国体を翼賛するものとした。要は取捨にある。³¹⁷

このように、「三民主義」のような近代中国の思想が危険視とされた以上、同時代の中国語よりは、古典主義の支配に置かれた訓読による漢文教育のほうが無難であると考えられたことも理解できるだろう。一方、このような風潮を批判する学者も見られる。無論、倉石もその中の一人であったが、他には前述した吉川幸次郎もまた、このような言論を批判した。彼は日本の儒学を以下のように指摘している。

江戸時代の儒学は、(略)わが国民道徳の基礎を、支那人の教えに求めることである。

(略)そのために儒学は、わが国民道徳の形成に、大きな寄与をしたこと申す迄もない。と共に一方では、甚だ不幸な結果をも生んだ。すなわち、儒学が理解した支那は、実は支那の「部分」であったにも拘らず、直ちにそれが支那の「全体」であるかのように、錯覚されることである。また儒学の態度は、支那を支那して理解せんとするものではな

³¹⁶ 同前。

³¹⁷ 「広告欄」『斯文』(17巻3号、1935年)。

吉川は、国民精神の形成という用途に合致した部分のみを儒教から掴み取るやり方だけでは、所詮中国の一部しか理解できず、したがってそうした手法は学問として非常に局所的な視点に基づくものであると主張した。代わりに彼は、「支那人の生き方を研究する学問」³¹⁹を提唱し、たとえその研究結果が必ずしも他の民族にとって普遍的な価値を感じさせるものではなかったとしても、世界史的な学問的意義を持つものになってゆくと主張した。

このように、倉石武四郎と吉川幸次郎は、当時の学界では稀にしか見られない中国語教育を提唱し、漢文教育の在り方を批判した学者であった。竹内好らの展開した主張もまた、彼らと共通する基軸を備えていたといえる。ただし、倉石の提案した漢文教育に対する改革は、支那学そのものを否定するものではなく、「行き倒れの支那学を救ふ注射薬が、新しい意味の支那語であり」³²⁰と言ったように、彼はあくまでも語学制度の改革によって、支那学を再建しようとした。こうした面も、竹内が倉石を「安全な道を選んで、いささかの空虚をも感じない人」³²¹と評し、「正統派」³²²と呼んだ所以であろう。そのため、竹内好は、誌上において、倉石の提唱した語学教育改革の必要性については賛成の意を示したが、たとえその改革が成功したとしても、支那学を救うことができないと断言した。

今日、倉石さんは、支那学の貧困を、手段の改革によつて救ひ得ると信じてゐる。実は支那学にとつては思想そのものが貧困なのである。それを忘れて無理に新しい手段を加へようとすれば、支那学は雲霧となつて四散するであらう。³²³

このように、竹内はあくまでも支那学の外に立ち、その存続を否定しようとするのである。前述したように、日本国民の精神を涵養するための漢学にとって、その思想の中核にある根源的な要素は儒教イデオロギーであった。したがって、当時の支那学、あるいは漢学（竹内にとっては両者が同義である³²⁴）の根本的な出発点は、中国を総合的に研究することではなく、日本の国家思想の中核に論理的な根拠を提供することにあつた。これに対して竹内は、

³¹⁸ 吉川幸次郎「支那学の問題」（『吉川幸次郎全集』⑩、438頁）。初出：『文藝春秋』、1940. 11。

³¹⁹ 吉川幸次郎「支那学の任務」（『吉川幸次郎全集』⑩、452頁）。初出：『文藝春秋』、1941. 1。

³²⁰ 倉石武四郎「支那語教育について」、前掲文。

³²¹ 竹内好「支那学の世界」（『中国文学』第73号、1941. 6. 1）。

³²² 竹内好は、倉石武四郎の中国語研究に対して、以下のように評価している。

東大の学統（これは前にもふれたように、まったく鼻もちならぬものである）への反逆者である点では、私たちの大先輩のわけだが、**官僚アカデミズムの道を踏み外さなかつた点では、あくまで正統派であつて、私たち異端とは世界がちがう。**異端の立場から見ると、倉石さんの成しとげた改革は、偉大ではあるが、依然として**体制内改革の域を出ない。**

竹内好「倉石さんのこと」（『竹内好全集』⑩、332頁）。初出：『中国』第67号、1969. 6。

³²³ 竹内好「支那学の世界」、前掲文。

³²⁴ 同前。

漢学・支那学の存続を真っ向から否定した訳だが、彼の言った「支那学にとっては思想そのものが貧困」というのは、国体維持のために儒教的な君臣思想のみを抽出しようとする風潮への批判であったものだと考えられる。しかし、古典本位という現状の中に、儒教を中心とする支那学の推進者たちは、明らかに「権力を獲得する」³²⁵側であった。そのため、倉石の提唱した漢文教育の改革は、順調に実行されたとは言えない。当事者の回想からも、その一端が窺える。

東京大学の中哲文学会の80周年の記念座談会において、山井湧氏は、当時の倉石武四郎の授業について以下のように語っている。

倉石先生はさっきからもお話が出てますけれども、中国語で読まなくちゃいけない。

『支那語教育の理論と実際』という本を、あのころちょうど出されたと思いますが、訓読はいけないといふ。(略)私のときは最低限に学生数が落ち込んだ時期でございまして、しかも倉石先生の演習に出ようっていう学生はほとんどいないんで、三人なんですね。三人で、ほかの二人は文学なんです、その二人の方は交代で休むもんですから、結局実質二人であって、それで非常に嚴重にしぼられました。³²⁶

すなわち、倉石の提唱した漢文教育と中国語教育の改革案は、当時の学界において大きな反響を呼んだものの、上述したように講義に出席する学生が二人しかいなかったという状況からみても、その試みは順調ではなかった。この一挿話から見ても、戦時下の大学における中国語教育の様相がいかに惨憺たるものであったのかが窺えるだろう。

このように、倉石や吉川などの学者は、漢文教育と中国語教育の持つ問題点を論理的に喝破し、それらを是正するための建設的な改革案も提唱したものの、現実的な効果が弱かった。竹内好の主張した支那学の存続それ自体に対する批判は、戦時下というこの状況においてなおさら打つ手がないと感じされる。第78号(1941.11.1)に、竹内好は「支那語の教科書について」を發表し、ある中国語会話教科書の悪質を指摘し、著者の高名を利用して悪書を流布することを「力のあるものが悪いことをした」³²⁷と批判した。最後に、彼は漢学の問題を再び提起し、以下のように述べている。

支那を知らうとすること、そのために人々がいろいろな仕方で行つてゐるやり方が、僕らにとつて触れあはぬものがあまりにも多い。僕が、いくら漢学を相手にしないと云つて

³²⁵ 竹内好は「支那学の世界」において改革の実行について、「問題はただ、その実行のために如何にして権力を獲得するかを考へればいい。これは言葉の問題ではない。力の問題である」と述べた。(竹内好「支那学の世界」)。

³²⁶ 宇野精一「戦前・戦中・戦後の時期——漢学会から東京支那学会へ——」(『中哲文学会報』第3号、1978、111頁)。

³²⁷ 竹内好「支那語の教科書について」(『中国文学』第78号、1941.11.1)。

も、漢学の方でも僕を相手にしないらしく、漢学は不死身で動いてゐる。さうしたこと
から、僕は事ごとに無力感を抱かずにゐられない。³²⁸

儒教的価値観を浸透させるためにその影響下に組み敷かれた漢学は、いくらそれを否定
する者が現れようとも、古典本位という権力者の思惑によって、その影響力が発揮しつつあ
った。竹内らの訓読反対にせよ、漢文教育反対にせよ、その権力の前では、無力感を生じさ
せる。竹内の無力感は、彼の中国での体験にも共通し、文化と政治との対立が、つねに彼の
認識の一部として機能しているといえる。

本節では翻訳と教育という二つの視点から論じられた中国語問題を考察した。中文研の
初期に展開されていた漢学批判は、長らく間沈滞期に入っていたが、この時期には再び復活
し、以前と一貫した姿勢で中国語問題に正面から対峙し、その批判対象を漢文訓読と漢文教
育に対して向けるようになっていた。竹内好は中国語問題を通して、表立っては「訓読反対」、
「漢文教育反対」という論陣を張ったが、それは君臣思想の宣伝道具として用いられている
「漢学」のありように対する疑義および抵抗に通底している。しかしながら、竹内の抵抗に
は次第に無力感が免じられず、やがて彼自身の編集した『中国文学』の誌上でも、政治の力
学に屈従していく傾向が徐々に顕著になっていく。

第三節 国語運動から「支那語学」へ

第二節では、中国語問題を通して、国民精神の形成に寄り添う「漢学」に対する中文研の
批判を考察した。しかし、このような姿勢は時局の進展とともに次第に崩れていく様子が見
せた。中国語に対する関心は、実は第一期の中文研の活動にも見られる。本節では、まず第
一期の中文研の中国国語運動への見方、および近代中国語の受容に関する文章を中心に取
り上げ、これらを通して、中国の国語運動が同時代の日本でいかに認識されたのかを明白に
し、さらには第三期の誌上に掲載された「支那語学」に関する言論と比較することによって、
「支那語」と呼ばれていた近代中国語の様相が、時間の経過に従って、誌上において変化し
ていくことを検証してみたい。

一 第一期における国語運動に対する関心

³²⁸ 同前。

1 1930年代の国語運動

本題に入る前に、まずは近代中国の国語運動の概況を簡潔に紹介する。近代中国においては、国語に関する議論と改革が繰り返して行われていた。1912年から1949年までの間には、国語の統一を中心課題とした中国語改革に関する一連の提案と動きが見られる。中文研の活動を考察する前に、1930年前後の中国国語運動の概況をみてみよう。この時期においては、発音法、表記法、簡体字などが国語運動の重要な課題として議論されていた。³²⁹

まず、発音法に関しては、「注音字母」から「注音符号」への転換がこの時期に完成されたのである。1912年の中華民国成立後、国民政府は直ちに漢字発音の統一に取り組みはじめ、翌年2月の南京臨時政府教育部主催の読音統一会では、漢字の音を示すための「注音字母」が決定され、1918年に正式に公布された。1930年、国民政府は第二四〇号訓令を発し、「注音字母」を「注音符号」と改称し、発音記号としてその普及を積極的に推進した。

もう一つ検討されたものは「国語ローマ字」である。1923年、教育部が開催した国語統一準備委員会の第五次大会において、錢玄同は「国語ローマ字」を提案し、1928年9月、「国語羅馬字拼音法式」が中華民国大学院（元教育部）によって公布され、「国音字母の第二式」³³⁰として位置づけられた。にもかかわらず、その法則は複雑であったため、広く普及するには至らず、特に1934年以後、国語ローマ字の勢いは低調になっていく。

一方、新たな表記法として提案されたのはラテン化文字である。ラテン化文字は、当時の中国共産党指導者の瞿秋白（1899-1935）と深く関連しており、その誕生をさかのぼれば、実際は中国ではなく、ソ連に由来するのである。1931年に、ウラジオストックで開かれた中国文字ラテン化第一次代表大会において、「中国漢字拉丁化的原則和規則」が承認されたが、それが本格的に中国に導入されたのは、1933年以後のことである。ラテン化文字は、魯迅、茅盾、蔡元培などの知識人に高く評価されたが、戦争中においては、主に共産党が活動していた地域で普及していた。

また、ラテン化文字とほぼ同時に提起されたのは、手頭字の必要、つまり、漢字の簡略化である。1935年2月24日の『申報』において、200名の文化人による署名入りの「手頭字之提倡」が掲載され、300個の手頭字が発表された。そして、1936年には容庚の『簡体字典』（哈仏燕京学社）が出版され、常用の約4400字の簡体字が収録された。簡体字は、ラテン化文字と共に、国語運動の一課題として大いに議論されたのである。

2 中国文学研究会の異色な論調

上述のように、1930年代の中国において、中国語の口語体化を目指した改革が盛んに行

³²⁹ 近代中国の言語改革について、大原信一『近代中国のことばと文字』（東方書店、1994）、藤井（宮西）久美子『近現代中国における言語政策：文字改革を中心に』（三元社、2003）を参照されたい。

³³⁰ 費錦昌編『中国語文現代化百年記事（1892年—1995年）』（語文出版社、1997、44頁）。

われた。一方、この時期の日本においては、学术界も含め、中国で起きている国語改革運動について積極的な関心を寄せていなかった。文語体の古典文と区別して、口語体の中国語は「支那語」と呼ばれ、「戦争語学」³³¹として扱われた。このような状況は終戦まで続いており、例えば伊地智善繼は、日本での中国語研究に対する姿勢について、以下のように批判している。

日本の国語運動に従事してゐる人たち（すなはち、假名文字論者、漢字制限論者たち）が同一のなやみにつまされて、支那におけるそれらの運動を少しばかり紹介した外には、まったくそれらの紹介さへ行はれなかつたやうに記憶してゐる。日本の支那語の先生が、注音符号等に関して、わけの分らない翻訳や、国語運動に使はれたテキストを切りぬいた教科書をつくつたことがあるにはある。しかし、そんな仕事は単なる気まぐれ程度であつて、支那語の学問的整理についての本質的見とほしや、研究的態度を学ばなかつたのである。³³²

ここからも分かる通り、日本の知識人たちは中国における国語運動の現状に関心を示さず、同時代の日本において中国語の研究はほとんど重視されていなかったことは明白である。こうした中でも第一期の中文研は、中国の国語運動に非常に強い関心を示していた。例えば竹内好は、創刊早々に「国語に関する諸問題」を發表し、国語運動の歴史を紹介したうえで、中国の国語と方言の問題、そして大衆語運動や簡体字問題なども含めて、同時代の中国で行われている中国語の改革について詳しく記した。竹内は、国語運動に注目する理由を以下のように提示している。

中国の国語問題は特に我邦の国語と密接な関係を持つ。単に漢字が共通するだけではない。過去の日本語が支那語に影響された如く、新しい支那語の造成は殆ど日本語の語彙から輸入され、日常化してゐる。国語に関する基礎的な学説は固より、その改革諸論に至るまで我邦に範を求めたものは極めて多い。漢字制限、略字、假名文字、ローマ字等の諸運動及び之に対する反対論はすべて彼我に類似の形態を見出し得る。

現在の国語学界はかなり錯雑してゐて簡単に把束することは困難だ。ともあれ、中国に於ける国語問題の動きを静観することは、我々にとつて敢て無意味な閑事業とは云はれない。³³³

³³¹ 「戦争語学」という言い方に関して、六角恒廣・横山宏『中国語への道』（大修館書店、1975）、安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書、1988）を参照されたい。

³³² 伊地智善繼「支那の国語運動と日本の支那語についての感想」（神谷衡平・宮原民平・清水元介編『華語集萃』、螢雪書院、1942、33頁）。

³³³ 竹内好「国語に関する諸問題」（『中国文学月報』第3号、1935.5.16）。

竹内は中国語と日本語との関係について、漢字を用いる点が共通するだけでなく、「新しい支那語」の形成に日本語が及ぼした影響を強調し、さらに、日本語も漢字文化と緊密な関係を持つ以上、中国の国語運動の動きには注目すべきだと主張した。つまり、国語改革という課題を見た時、日本語と中国語には、共有すべき課題もあり、中国の国語運動を注意深く観察することは、ひいては日本の国語問題に潜む問題点を探る手掛かりが得ることにもつながるであろう、と彼は主張した。

こうして、中文研は近代中国語への関心を日本国内で喚起するために、様々な試みを行うようになる。例えば第7号(1935.9.25)に、同人である武田泰淳と曹欽源が共同執筆した「言語研究部会の設立」が掲載された。その内容は以下のようである。

いよいよ言語研究部をやることにした。公羊伝を読むために山東語をやりたいとか、古韻をやるために厦門語を研究したいとか、證文を読みたい等いろいろ意見があるが、先づ手始めにカールグレンの中国語研究の支那訳をテキストとした講読会(月一回位)を十月から実行する。今後のプラン左の如し。

- (一) 支那語の発音練習
- (二) 文字の問題(注音符号、国語ローマ字、ラテン化等)
- (三) 言語発達史
- (四) 各地方言の検討

中文研は最終的にカールグレン(Bernhard Karlgren)の”Sound and Symbol in Chinese”³³⁴の中国語訳『中国語與中国文』³³⁵を講読会のテキストとする方案にまとまった。ここで着目すべきなのは、将来の計画として挙げられた(一)～(四)の項目である。プランに書かれた四つの内容は、そのいずれも当時の中国語改革の動向を反映している。例えば、(一)の標準語の発音練習は、従来の漢文訓読一辺倒の学習を打破し、中国国語運動によって成立した発音法を日本で広める行動であり、(二)の注音符号、国語ローマ字、ラテン化などは、中国語の発音記号と表記法であり、当時の中国国語運動の一環としてかなり議論がなされていたものである。そして、(三)の言語発達史は、中国における国語運動の方向を見定めるために、当時大いに研究された課題であり³³⁶、(四)の方言の検討は、中国の国語統一と深く関連している。要するに言語研究部会の打ち立てた計画は、中国の国語運動を的確に捉

³³⁴ London: Oxford University Press, 1923. なお、本書の日本語訳『支那言語学概論』は、1937年に岩村忍・魚返善雄によって翻訳され、文求堂から出版された。

³³⁵ 本書は1918年にスウェーデンで出版された。本書の中国語訳は、1933年に張世禄によって翻訳され、上海商務印書館に出版された。

³³⁶ 例えば、黎錦熙は1935年に『国語運動史綱』を出版し、清末以来の国語運動の歴史を整理した。

えた上で、その流れをベースにして構成されていたと言っても過言ではないだろう。中文研の国語運動および近代中国語に対する関心の高さがここからも窺われる。

その後、誌上においては国語運動に関する文章が多数掲載された。例えば、「言語問題特集」として発行された第24号(1937.3.1)の中に、「国語運動の歴史と問題」という総題のもと、以下の文章が掲載された。

- ◆ 「中国国語運動」 曹欽源
「総説」・「清末の国語運動」・「切音運動」・「簡字運動」・「注音符号」・「簡体字」の六節から成り、中国の国語運動の歴史を紹介する。
- ◆ 「国語羅馬字を語る」 下瀬謙太郎
国語ローマ字の誕生の背景、字音の綴り方の解釈、国語ローマ字に関する疑問などを述べる。
- ◆ 「ラテン化運動について」 齊藤秀一
「運動の現状」・「小さい歴史」・「新ローマ字の特色」・「国防とローマ字」・「ローマ字文学」の五節から成り、ラテン化文字の歴史、政治的な意義、文学創作との関連などを紹介する。
- ◆ 「中国言語学界瞥見」 言語部
音韻学、文法学、文字、字典編纂に関する中国人諸学者の研究成果を紹介する。

このように本号では、中国の国語運動の流れを概観したもの、文字改革に関連する国語ローマ字とラテン化文字、中国の言語学界の研究成果を記したものなど、中国の国語運動をめぐる諸問題が詳しく紹介された。にもかかわらず竹内好は、本号の「後記」において、以下のような不満をもらす。

出来上つたものは編輯者自身を満足させてない。なぜ問題的に³³⁷提上げなかつたか。言語の哲学は今日の文学に少くも根幹の一つを提供する筈である。さうした心意気がなかつたとは言ふまい。すべては力の不足である。

これは小誌のために寄稿を肯んぜられた方へ献ずる不遜な抗議では断じてない。むしろ逆で、かうした啓蒙を強ひられる我々自身の環境へのなにか見すほらしい嘆息である。二十頁のリフレットにかぶさる日本文化の重みである。³³⁷

ここで見て取れるのは、竹内好の感じた二重の不満である。

³³⁷ 竹内好「後記」(『中国文学月報』第24号、1937.3.1)。

第一に、「出来上つたものは編輯者自身を満足させてない」と言うように、中文研が作り上げたこの号の内容自体への不満である。本号では、「国語運動の歴史と問題」という課題を設けたが、竹内の期待とは裏腹に、実際そこに掲載された文章は、国語運動の歴史と現状を紹介するだけに留まるものであった。下瀬謙太郎が「国語羅馬字を語る」において、ローマ字問題に関する三つの疑問点を取り上げた以外は³³⁸、中国の国語運動の進展、あるいは諸政策に対する質疑や指摘、さらには日本における中国の国語運動への無関心に対する批判はほとんど見当たらない。竹内が「なぜ問題的に提上げなかった」のかと批判した理由はここにあるといえるだろう。

第二に、当時の「支那語」学界への不満である。前述したように、1930年代の中国では言語改革が盛んに行われていたが、日本では漢文を学術研究の中心に据える一方、「支那語」はあくまでも「戦争語学」として取り扱われた。つまり中国語は大陸において現に大きな変動を示しているにもかかわらず、そうした動きに対する日本での受容は、「紹介」、或いは「啓蒙」の段階にしか至っていなかった。これらの状況を見た竹内は、「我々自身の環境へのなにか見すばらしい嘆息」を漏らしたと考えられるのである。

このように、言語の改革が絶えずに変化を見せ続けていた中国の学界と、相変わらず「支那語」に対する無関心な態度を示し続けていた日本の学界とのあいだに大きな隔たりが生じ、「漢文」と「支那語」のあいだにも引き続き不均等の状態が継続していた。こうした中で、中文研の誌上では中国語研究の現状と方法に関して、互いに批判あるいは指摘が行われたものの、中国語を言語学的に研究すべきという見解については意思統一がなされていた。竹内好をはじめとする中文研は、この状況を打破するために、誌上で様々な努力を重ねてきたが、戦争の進展によって活動の行き詰まりを感じた彼らの中には、屈折した感情も徐々に芽生えはじめていくのである。

二 「支那語学」に関する言論の断層

では、中文研の努力と屈折した感情とは、具体的にどのようなものであったのだろうか。まずは本誌における「支那語学」に関する言論の概況を見てみよう。その中には、音韻論・語彙論・記号学は言うまでもなく、言語習得および言語政策に関する文章も含まれる。詳細は以下のとおりである。

³³⁸ 下瀬謙太郎は「国語羅馬字拼音法式」の内容を紹介したうえで、なぜ国民政府が国語ローマ字を積極的に実行しないのか、なぜ国語ローマ字の複雑な拼音法式を改善しないのか、何時になれば国語ローマ字を普及できるのかという三つの疑問を提起した。

表 17 「支那語学」に関する論文・随筆・批評

題名	作者	掲載号	発行日
音韻雑感	曹欽源	第 2 号	1935.4.5
中国言語学界瞥見	言語部	第 24 号	1937.3.1
北京語の話二三	曹欽源	第 31 号	1937.10.1
北京語の話二三 (続)	曹欽源	第 32 号	1937.11.1
支那語 (北京語) の母音に就いて	永島栄一郎	第 42 号	1938.9.1
支那の新語について	曹欽源	第 53 号	1939.8.1
古書を読む	曹欽源	第 59 号	1940.2.1
支那語の辞典	曹欽源	第 63 号	1940.7.1
支那及び支那語に関する西洋のレキシコグラフィ	岩村忍	第 63 号	1940.7.1
支那語の表記法	魚返善雄	第 63 号	1940.7.1
アメリカの支那語研究	魚返善雄	第 68 号	1941.1.1
書評：魚返善雄編著「大陸の言語と文学」	竹内好	第 69 号	1941.2.1
祖国雑感——特に国語問題と支那語問題について	永島栄一郎	第 73 号	1941.6.1
記号の問題	魚返善雄	第 73 号	1941.6.1
支那語学と云ふもの	永島栄一郎	第 74 号	1941.7.1
明代の言語資料としての「元朝秘史」について	小林高四郎	第 80 号	1942.1.1
支那語界・回顧と展望	魚返善雄	第 83 号	1942.5.1
明治初期の支那語	中田敬義	第 83 号	1942.5.1
詠婦舎閑話	宮島大八	第 83 号	1942.5.1
陸軍と支那語	坂西利八郎	第 83 号	1942.5.1
外交と支那語	岩村成允	第 83 号	1942.5.1
出版と支那語	田中慶太郎	第 83 号	1942.5.1
台湾と支那語	曹欽源	第 83 号	1942.5.1
日清貿易研究所と東亜同文書院	鈴木択郎	第 83 号	1942.5.1
思ひ出でる支那語研究の懐古	青柳篤恒	第 83 号	1942.5.1
支那語一夕話	秩父固太郎	第 83 号	1942.5.1
伊沢修二のこと	竹内好	第 83 号	1942.5.1
想ひつきしまま	須田禎一	第 84 号	1942.6.1

1935年から1940年までのあいだ、「支那語学」に関する発言を最も頻繁に行ったのは、曹欽源である。曹欽源は、1907年に台湾で生まれ、1933年、東京帝国大学支那哲学支那文学科を卒業し、戦後は台北大学で教鞭を執った。彼は、中文研で主に言語研究部会を担当し、言語学に関する論文を積極的に発表した。常に時局に関して議論を行っていた竹内好や武田泰淳などと異なり、彼はもっぱら学術的な文章を中心とした。例えば、「音韻雑感」は中国語の古音と方言の関連について検討したもので、「北京語の話二三」および「北京語の話二三（続）」は、北京語の声調の特徴を考察したものである。また、「古書を読む」において彼は、『詩経』の一段落について、古音と最も近い中国南方音での読み方を提示した。これらはいずれも音韻学に関する文章であり、中国語の発音の変遷を論じ、中国語の音韻を重視する必要性も強調した。また、「支那の新語について」は、日本から輸入された新語を示したうえで、音訳により造られた新語の欠点を指摘した。「支那語の辞典」は、当時の中国と日本で出版された諸辞典を評価する論文である。このように、本誌では1935年から1940年までのあいだ、曹欽源を中心として、中国語を言語学として研究しようとする傾向が確認できる。

しかしながら、太平洋戦争勃発の前後にあたる1941年頃から、「支那語学」を時局と関連させながら議論する文章が徐々に姿を見せはじめるようになる。例えば、第73号(1941.6.1)において、永島栄一郎は、自分の経験と結びつけながら、なぜ中国語を学ぶのかについて、「第一には一応支那語を知り、支那人と自由に意志を交換することが出来るやうになると云ふ実利的の目的（略）、第二には支那の事を研究するにも支那語を知らなければならない（略）、第三には支那語を学び、支那語自体の研究をすると云ふ立場もある」³³⁹という三つの目的を主張した。特に、彼が強調したのは、日本における「第三の真の支那語学」³⁴⁰研究の欠如である。そして、中国語を知ることの重要性について、彼は以下のように述べている。

現に不祥にも今回事変が突発し、異常な緊張をしてみた時我々の頼りになる後続部隊はどしどし増加して来るのに通訳の不足で各皇軍部隊はなやんでみた。しまひには誰でもよいからと云ふので自分も通訳として僅かの間ではあつたがお手伝して来た。それは所謂實用支那語ではあつたが、いやしくも一外国の核心に触れるためには言語の充分な疎通が如何に重要であるか言を俟たない。所謂實用支那語も現状に於ては非常に大事ではあるが、只それだけではなく立派な辞書の編纂とか、その言語自体の研究にまで至るやうでなければならない。³⁴¹（傍点筆者による）

ここで永島は、学術的な「支那語学」の建設とその必要性に着眼しているが、時局的な内

³³⁹ 永島栄一郎「祖国雑感(特に国語問題と支那語問題に就て)」(『中国文学』第73号、1941.6.1)。

³⁴⁰ 同前。

³⁴¹ 同前。

容もまた、この文脈の裏には含まれている。永島は、戦場の通訳不足問題に名を借りて、初めて「実用支那語」の重要性を主張して。「実用支那語」とは、戦争色に染められた言葉であり³⁴²、当時の日本において、大陸進出のための日常会話や時文³⁴³などを中心に教える中国語を指す。それまで「実用支那語」に対する容認論は誌上に現れることは決してなかったが、「現状に於ては非常に大事ではある」という「実用支那語」に対する永島の肯定的な意見は、本誌において「支那語」に対する時局の関与を追認していく契機となったのである。

1941年12月、アメリカとイギリスに対する「宣戦布告」がなされた後、第80号(1942.1.1)の巻頭には「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(以下略称「宣言」)が掲載されたが、この文章の執筆者は竹内好である。彼は、太平洋戦争勃発後の「大東亜戦争」に対して、以下のように述べている。

この世界史の変革の壮挙の前には、思へば支那事変は一個の犠牲として堪え得られる底のものであつた。支那事変に道義的な苛責を感じて女々しい感傷に耽り、前途の大計を見失つたわれらの如きは、まことに哀れむべき思想の貧困者だつたのである。

東亞から侵略者を追ひはらふことに、われらはいささかの道義的な反省も必要としない。敵は一刀二断に軌つて捨てるべきである。われらは祖国を愛し、祖国に次いで隣邦を愛するものである。われらは正しきを信じ、また力を信ずるものである。

大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界史上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそ、われらである。³⁴⁴

「宣言」を本文のタイトルにわざわざ書き加えたことによって、これが中文研の旧同人グループの大東亜戦争に関する総意としての「宣言」であると理解しても差し支えないだろう。本文の発表は1942年1月であり、中文研の大東亜戦争への見解の質的变化ともいえる。この文章によって、中文研の地道な中国研究を、単純に「精一杯の抵抗」と位置づけることに疑問が感じられる。また、この時期から誌上には戦争賛美の言葉も並びはじめた。同号の「後

³⁴² 戦前の日本における中国語教育は「商務」と「軍事」の二面から出発し、実用主義の性格を持っていた。これについて、安藤彦太郎氏は『中国語と近代日本』の第一章で具体的に論じている。

³⁴³ 「時文」について、倉石武四郎氏は当時の状況を以下のように述べた。倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』(前掲書、21頁-22頁)。

時文といふのは、明治以来、外交官など支那関係の実際の事務にたづさはつた人々が、実用の文牘を読むために、勉強したものであつて、もとより実用一點ばりの、極めて興味のないものである。官庁の規則や公文、尺牘、新聞電報、広告と言つたやうなものが、その内容であつて、ただ漢文の教科書に見られない現代の事がらや、違つた種類の文字の使ひかたなどに出会ふのが物珍しく、中学校でも、最初の一二回ぐらゐは、生徒も興味をもつといふことである。

³⁴⁴ 竹内好「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(『中国文学』第80号、1942.1.1)

記」では、編集を担当した斎藤秋男が次のように述べた。

僕らの心霊は一点の曇りもなく「大東亞戦争」に参ずる輝かしい光栄に泣いた。
僕らは、祖国の寛らかな意志を信じ、総力戦の理念の高さを疑はずあればこそ、東亞の
文化の遺産を育ぐみ、それを創造にまで推し進めることを任としつつ、つたない文字を
書きつづけてきた。(略)

隣邦の、近代国家への育成のために、激しい時代にその生命を捧げていつた幾多の人々
の凜然たる眉宇が、僕の臉のうちに去来するのであるが、全く新しい中国の誕生への第
一步でなければならぬ。³⁴⁵

前述した本号の冒頭に掲載された「宣言」、さらにこの「後記」からも分かるように、太
平洋戦争の開始によって、中文研は日中戦争に対する態度を一変させ、総力戦の持つ理念の
高さを疑わず、中国を近代国家に育成するために筆を取るべきと確信したのである。したが
って、この時期における中文研の活動からは、先行研究で評価されていた彼らの「時局への
批判」、また「精一杯の抵抗」を読み取ることはできない。

三 「支那語学」から逸脱した「支那語」

1942年、中国語に関する問題が再び中文研に提起され、第83号(1942.5.1)は、「日本と
支那語」特集として発行された。本号について、安藤彦太郎氏は、「中国語界の先駆者たち
の貴重な原稿をあつめた」³⁴⁶一冊と評価した。「執筆(談話)者紹介」に掲載されている名
前を見れば、確かに豪華な顔ぶれであったことが確認できる。

執筆(談話)者紹介(ほぼ年齢順)³⁴⁷

中田 敬義氏 …… 元外務省政務局長、日本美術協会副会頭
宮島 大八氏 …… 善隣書院院長
坂西利八郎氏 …… 陸軍中將、貴族院議員、日華倶楽部会長
青柳 篤恒氏 …… 早稲田大学教授
岩村 成允氏 …… 宮内省御用係、外務省囑託、明治大学教授
秩父固太郎氏 …… 満鉄総裁室囑託

³⁴⁵ 斎藤秋男「後記」(『中国文学』第80号、1942.1.1)。

³⁴⁶ 安藤彦太郎、前掲書、146頁。

³⁴⁷ 『中国文学』第83号、1942.5.1。

田中慶太郎氏 …… 文求堂主
鈴木 択郎氏 …… 東亜同文書院教授
曹 欽 源氏 …… 東洋大学講師 (旧同人)
魚返 善雄氏 …… 東京帝大、文理大講師 (旧同人)

これらの執筆者の中には、中国語学の研究者だけではなく、外務省や宮内省などの省庁関係者、満鉄関係者も見られる。他には出版関係者、教育関係者も含まれている。また、各文章は、主として執筆者たちそれぞれの中国語学習の経緯、およびいかに中国語を各々の仕事に活用していたかをその内容とする。つまり本号は、これらの人々を通して、広範な分野における中国語の習得と応用の実践法を記すことを主眼としたのである。

そして「後記」において、編集担当の実藤恵秀は、本号の特集テーマ設定の意図について、次のように語った。

支那語の歴史は、語学以外の問題をふくんである。これには日支文化交渉史、日本人大陸進出史がからまつてゐる。かゝる興味あるものにもかゝらず、いままで、支那語に直接関係ある団体あるひは雑誌が、日本支那語史をつくらなかつたのは、ふしぎといふのほかはない。(略) われら待望の日本支那語史は、いつになつたらできることやら、つひにしびれをきらして、この特集をこころみることにした。³⁴⁸

つまり、本号では「支那語学」という枠から大きく逸脱し、日本の大陸進出史という観点から「支那語」と日本との関係を捉えようとしている。本号の主題は、もはや語学研究としての中国語からかけ離れしまった。

さらにここで注意すべき点は、誌上に初めて軍部関係者が登場したことである。陸軍中将の坂西利八郎は、「陸軍と支那語」において、陸軍の中国語教育に深く関わっていた日清貿易研究所(東亜同文書院の前身)を紹介した後、自らの中国語学習歴について述べていた。この文章からは、坂西の持つ「漢文」と「支那語」に対する異なる態度が読み取れる。例えば彼は、日清戦争終結後、対中関係の需要に応じて現れた新旧二種類の「支那通」について、このように評価した。

これらの若くして新しい「支那通」は以前の古い支那通とは違ふ。前の支那通は詩を巧みにし、漢文を能くし、四百余州を併呑せざれば止まずとの概を以て世の中に蒞んだのであるが、今後のものは必ずしも然らずして、あまり漢文なぞに巧みなるもの少なく又詩なぞをつくる人の如きはあまりなかつたやうであるが、一般の国際情勢にも通曉し、

³⁴⁸ 実藤恵秀「後記」(『中国文学』第83号、1942.5.1)。

就中高等帥兵の能力に於て十分である所の支那通を産出するに至つたのである。所謂大言壯語を以て快とする流儀が漸く変化し来り実質実務的に支那語支那事情を研究する必要の時代となつたのである。³⁴⁹

坂西は、漢詩・漢文に堪能な「支那通」を「大言壯語を以て快とする流儀」と皮肉り、同時代の中国を熟知し、国際情勢を把握することこそが肝要であると主張した。すなわち、戦争の時代においては、実務的な研究が必要だということである。坂西は近代中国語習得の必要性を強調したが、彼の見解はあくまでも戦時需要に応えるためのものであり、時局の要求に従って近代中国語を学習することこそが、現実的な状況に相応しいという意味しか読み取れない。つまり、これまでの本誌において批判されていた「実用支那語」が³⁵⁰、この時期の本号において明白に評価されたのである。

さらに、「支那語界・回顧と展望」において、旧同人の魚返善雄は、「支那語」の習得を日本軍の外地への進出と結びつけながら、以下のように述べている。

昭和六年の満州事変には、かなり気の早い支那語教師があつて、看板を「満州語」にしてしまつたが、今度の大東亜戦争では、もはや左様な心配は無用となつた。のみならず、支那語は今や日本語の進出と密接に結び付けられ、更にまた、周辺の諸言語とも関係づける必要に迫られてゐる。皇軍の進出した安南は、タイは、ビルマは、みな支那系の言語である。これを学び伝えることも支那語学徒の任務の一つといつてよい。(略) 南支南洋に亘つて三千万の人口を擁する広東語や、これに次ぐ厦門、福州、上海の諸方言も、北京語の基礎の上に再認識されねばならない。それが現実の支那に即応する国策的な方途であつて、支那語学徒の負担また重大なりと言はなければならぬ。³⁵¹

魚返善雄は、まず太平洋戦争勃発後に「支那語」を習得することの必要性を述べ、そして中でも彼が特に強調したのは、東南アジアにおける日本語の普及および日本軍進出のために中国語の担うべき役割である。それらの国々の言語は、いずれも歴史において中国語の影響を受けたものであり、日本軍の進出によって、安南・タイ・ビルマなどの言語を理解する必要も新たに生じた。そのため、「支那語」は、そこから影響を受けた周辺言語とも関連させながら学習する必要もあると彼は主張した。魚返のこの言論の中に含まれている時局的な意義もまた、坂西のそれと通底していることは明白である。このように、太平洋戦争勃発

³⁴⁹ 坂西利八郎「陸軍と支那語」(『中国文学』第83号、1942.5.1)。

³⁵⁰ 本誌における「実用支那語」に対する批判について、竹内好「書評 支那語発音四声速習表」(『中国文学』第63号、1940.7.1)、長瀬誠「支那語教学に関する随想」(『中国文学』第71号、1941.4.1)を参照されたい。

³⁵¹ 魚返善雄「支那語界・回顧と展望」(『中国文学』第83号、1942.5.1)。

以前は学術分野のひとつとして位置づけられていたはずの「支那語学」と、この時期に提唱された「戦争のための中国語習得」という論調との間に、深い断層が形成されたといえよう。

第四節 まとめ

本章は誌上に取り上げられた中国語問題を中心に、中文研の第三期の思想的動向を検討した。まず、第二節では「翻訳」、「漢文訓読法」、「中国語教育」を通して現れた中文研の漢学批判の復活を考察した。第一期に行われた漢学批判が、第二期の沈滞期を経て、竹内好の中で北京体験を通して新たに芽生えた中国文学の基礎への回帰思考へ変容したのである。竹内は、まず翻訳での誤訳問題に注目し、誌上に翻訳時評を設けた。竹内をはじめ、神谷正男、魚返善雄、吉川幸次郎などの執筆者は、翻訳を「人間の問題」として扱い、語学問題を超越した翻訳論を展開した。彼らは、それぞれの間に異なる立場があったものの、訓読に対する批判的な態度は共有しており、これもまた、日本の中で蔓延している便宜主義的な思考に基づく中国認識という現状に対する彼らの省察であるともいえよう。また翻訳論を通して、竹内好の日本文化に対する自己認識の側面も窺える。彼は原語を用いる翻訳法を批判し、日本語の伝統を重要視した。このような日本語の独自性に関する言論は、彼の戦後における日本文化の主体性を重んじる思考にも通底するのではないかと考えられる。

第三節では、「国語運動」と「支那語学」を中心に、誌上に現れた第一期と第三期における中国語に対する見方の変遷を考察した。第一期の中文研は中国の国語運動に大きな関心を寄せ、中国語を言語学的に研究しようとする姿勢を保っていた。しかしながら、1941年の前後から時局と関連しながら「支那語学」の役割を論じる文章が掲載されるようになり、戦争における「支那語学」の時局的意義が強調されるようになった。このような転換は、中文研の内部に存在している葛藤を表しているのではないか。

要するに、本章で述べられている通り、誌上の翻訳論で示された中国理解に基づく言語観、および第一期における中文研の行動からみると、戦時下における功利的な面のみを求める中国認識に対して彼らが対抗しようとした痕跡が確かに見受けられる。だが結局、彼らはこのような姿勢を最後まで貫くことをできなかった。第三期の時局に沿うような中国語に関する言論は、中文研の人々の屈折に満ちた心境を如実に物語っている。また、『中国文学』誌上において、中国語は近代日本の自己意識にも関わる問題として論じられている。同文意識に対する批判、および日本語の独自性に関する主張もこのような問題意識に基づくものであるといえる。

終章

第一節 中国文学研究会の終結

第五章で述べたように、第80号(1942.1.1)における「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」の公表は、中文研の戦争に対する態度の転換を物語っている。しかし、これによって彼らがそのまま時局に流されたわけではない。その後の誌面に、「支那語学」で見られるような時局に沿う言論が見られる一方、政治的な要請に応じない一面も示されている。このようなジレンマに終止符を打ったのは、中文研の解散である。1943年3月、竹内好は中国文学研究会を解散し、『中国文学』第92号を終刊号(図6参照)として廃刊した。竹内好がこの決断を下したのには外在的要因と内在的要因があると考えられる。

外在的要因として挙げられるのは、なによりも時局の影響である。第84号(1942.6.1)に掲載された「会員及び一般読者諸君へ緊急の願ひ」に、「小誌の必要とする紙の何分の一も配給を受けられない」と書かれており、紙不足の事情が窺える。また、出版統制は誌面の内容にも及んでいる。第87号(1942.9.1)から、松枝茂夫の訳した李圭の『思痛記』が連載されはじめた。この翻訳物が「残酷すぎ」、「本来なら削除を命ずるところだが雑誌の特殊な性質に鑑みて今後の注意だけでよい」と当局に注意されたことを竹内好は第89号(1942.11.1)の「後記」に述べている。しかし、『思痛記』の連載は中止されなかった。竹内はこの連載について以下のように語っている。

なぜ「思痛記」を訳載したかといふと、一般に中国文学研究会の態度として云ふのであるが衰弱した日本文学に生気を注ぎたいといふ念願があるからである。書かれてある事柄はいかにも残酷であるが、書き手の眼は決して狂つてゐない。むしろ甚だしく健康である。(略)当局の好意ある注意によつて「思痛記」は極端な箇所だけ削り連載を続

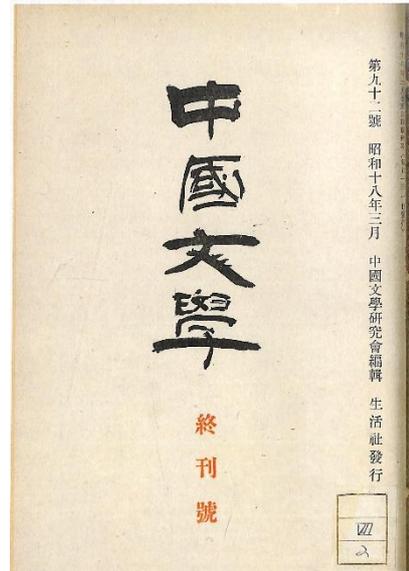


図6 『中国文学』終刊号

けるつもりである。³⁵²

『思痛記』には民間人に対する太平軍の無残な殺戮と略奪が描かれ、それは直ちに読者に戦場の残酷さを連想させた。当局の注意に対して、竹内は「衰弱した日本文学に生気を注ぎたい」といい、自主的に内容を削ることによって連載を続けた。第二章で述べた通り、竹内からみれば、1937年から1945年までの日本文壇の特徴は、「強権による自由の精神の完全な抹消、およびそれと表裏の関係にある時局便乗型のエセ文学の横行」³⁵³であり、彼はこのような方法によって文学不在の時代と対峙しようとした。

しかし、この時の中文研はすでに進退きわまった状態となっていた。前述した紙配分と雑誌に対する検閲などの出版統制の問題以外に、日本文学報国会との間の衝突も見られる。1942年11月3日、日本文学報国会主催の「大東亜文学者大会」が開催され、満州国、中華民国、仏印、インドネシア、ビルマ、フィリピンの六か国の文学者が出席した。中文研もその参加に招待された。1943年の「日本文学報国会部会別会員名簿」³⁵⁴によると、竹内好・武田泰淳・岡崎俊夫・松枝茂夫・実藤恵秀・飯塚朗・増田渉らの旧同人がいずれも「外国文学部会」に入っていた。しかし、その招待は竹内好によって辞退されたのである。第89号(1942.11.1)に掲載された「大東亜文学者大会について」の中で、竹内はこのように述べている。

はつきり云へば、大東亜文学者大会は、日本文学報国会にとつて恰好な催しであるかもしれぬが、中国文学研究会の出る幕ではないと思ふのである。(略) 少くとも公的な立場を持った中国文学研究会としては、役人ぶつた歓迎の片棒を担ぐことは伝統が許さぬのである。(略) 絶対の立場として云へば、つまり今日の文学を信ずるか信じないかといふことになるのである。僕は、少くとも公的には、今度の会合が、他の面は知らず、日支の面だけでは、日本文学の代表と支那文学の代表との会同であることを、日本文学の榮譽のために、また支那文学の榮譽のために、承服しないのである。

盧溝橋事件(1937.7.7)勃発後、郭沫若、林語堂、老舍、茅盾などの文人はほとんど重慶に集まっていたため、第一回の大東亜文学者大会に出席した中国代表の中に名のある中国

³⁵² 竹内好「後記」(『中国文学』第89号、1942.1.1)。

³⁵³ 竹内好「転向と抵抗の時代」(『竹内好全集』⑦、207頁)。初出：野間宏ほか編『日本プロレタリア文学大系』第8巻(三一書房、1955)。

³⁵⁴ 『会員名簿：昭和18年度』(日本文学報国会、1943)。

人文学者は一人もいなかった³⁵⁵。また、この大会の使用言語は日本語のみ³⁵⁶であり、平等に他国の文学者と交流する姿勢は見えない。竹内好が「役人ぶつた歓迎の片棒を担ぐ」ことを断ったのは、まさにこの政治に支配された会合の性質を見通した結果だといえる。郭沫若と親交を持ち、老舎や茅盾などを積極的に日本に紹介し、種々の活動を通して近代中国を日本に知らせようとした中文研は、このような会合を「東洋新生のため」³⁵⁷だとは認めなかった。

以上述べた種々の事情は、中文研の解散の外在的要因になったと考えられる。このような外在的な要因に伴い、中文研に内在的な変化も起こっている。この点については、竹内好の「中国文学の廃刊と私」を通して見てみよう。

この文章は終刊号としての第 92 号（1943.3.1）の最後に掲載されている。竹内はその中に、「党派性を喪失した」³⁵⁸こと、および「中国文学といふ態度が大東亜文化の建設に対して存在の意味を失った」³⁵⁹ことを中文研の解散の理由として挙げた。突き詰めていえば、これらの理由はいずれも中文研がいかに戦時体制において主体的に存在し得るかという問題に由来すると考えられる。

竹内は中文研の発展を振り返り、以下のように述べた。

最初、中国文学研究会が成立したとき、混沌の中から自己を定立し生成してゆくための本源的な矛盾が確かに内在してゐた。われわれは議論を闘はし、それによつて次第に環境から自己を選び出し、その選び出すことによつて逆に環境を支配する位置に立たうとした。（略）そして世間も、会をそのものとして程よく認めるやうになり、われわれ自身はその評価を一応は甘んじて許すかに見える。根源的な矛盾が消えて、安定が来た。持続の日がはじまつたのである。そのやうな会を、私は不満に思ふ。私にとつて、会は不断に成長するものである。永久に自己否定を繰返すものである。³⁶⁰

中文研の創立は「本源的な矛盾」によるものであったが、そして世間が中文研そのものを認めるようになると、このような矛盾が消えてしまったという。中文研創立頃の状況を振り返ってみると、竹内の言った「本源的な矛盾」が理解できる。中文研の主要メンバーはほとんど漢学を中心とした東京帝国大学から卒業したが、彼らはアカデミズムの漢学と支那学に反対し、時局に沿うジャーナリズムの中国論を否定する立場で、近代中国文学を対象とし

³⁵⁵ 第一回大東亜文学者大会に出席した中華民国の代表は以下の通りである。

銭稻孫・沈啓元・尤炳圻・張我軍・周化人・許錫慶・丁西林・潘序租・柳雨生・周毓英・龔持平・草野心平。

³⁵⁶ 尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（『文学』第 29 号、岩波書店、1961.5）。

³⁵⁷ 「大会宣言」（『朝日新聞』朝刊、1942.11.6）。

³⁵⁸ 竹内好「中国文学の廃刊と私」（『中国文学』第 92 号、1943.3.1）。

³⁵⁹ 同前。

³⁶⁰ 同前。

て選んだ。つまり、中国研究の方向に対する疑惑が彼らの「本源的な矛盾」である。

そして、彼らは世間の現実的な中国に対する無関心に逆らう立場を取ったが、このような無関心は、中文研の解散の時点ですでに改善されていた。実藤恵秀の言ったように、「天下国家から論ずれば、『中国文学』の出はじめたころ、日本は中国文学を知らなかつた、ところが、今ではけつこう知つて来た」³⁶¹。にもかかわらず、中国文学に対する関心の源は、中国そのものを知ることにあるのではなく、あくまでも「大東亜文化の建設」という大義名分によるものであり、大東亜文学者大会に誘われた中文研は、政治との合体を迫られ、自らの「党派性」を喪失しつつあった。大東亜共栄圏の建設に求められた文化統合に協力できない竹内は、中文研の存在の意味を否定することによって、自らの立場を保とうとしているのではないか。

そして、竹内は、太平洋戦争勃発後の中文研の変化について、このように回想した。

「中国文学月報」なんかみてもらえば分かりますが、蘆溝橋の前とあとでは全く違うんだな。支那語教科書の批判とか、ああいうのは続いていますが、それと同時にそうでもなくもっと自虐的な一面が強くなる。

つまり、中国文学をやっている何を相手に闘えばいいのか、敵が鮮明でなくなるわけですよ。(略)最初の学風の問題というようなものはだんだん問題でなくなっちゃうわけですよ。全部戦局の進展と合わせて、そっちのほうへ流れていくでしょう。(略)

そういうものがみんな現状維持になってしまったから、われわれの立つ瀬はなくなりますよ。しかし、われわれは、その外へ出てたたくこともできないわけなんだな。無力だ。(略)要するに時流に流されている自分をどうにもできないという無力感でしょうね。³⁶²

竹内の言った「自虐的な一面」とは、言うまでもなく誌上に現れた時局に流された言論である。例えば吉野治夫の論じた「満州文芸現況」において、「日満両系作家の協力親和」³⁶³が称賛され、また林俊夫の論じた「新しき和平文化」の中に、「日支提携」と「和平建国」に協力した映画界を取り上げ、「新しき支那の姿は、かくも日本に近づきつつある事を、十分注意せねばならない」³⁶⁴と述べられている。旧同人である神谷正男でさえ、「現代支那の文学は、今日の日本の知識社会にとつては、好むか好まざるにかかわらず、これを理解し、これを向上進歩せしむるための努力することは宿命的な使命ではないかと思う」³⁶⁵といっ

³⁶¹ 実藤恵秀「無題」(『中国文学』第92号、前掲書)。

³⁶² 竹内好「わが回想」(竹内好『方法としてのアジア』、創樹社、1978、21-22頁)。初出：『第三文明』十、十一月号(第三文明社、1975)。『竹内好全集』⑩に収録。

³⁶³ 吉野治夫「満州文芸現況」(『中国文学』第69号、1941.2.1)

³⁶⁴ 林俊夫「新しき和平文化」(『中国文学』第85号、1942.7.1)

³⁶⁵ 神谷正男「翻訳時評」(『中国文学』第67号、1940.12.1)

た。同時代の中国文学は、日本に協力し、日本に内包される形で、日本に指導される対象となりつつあった。したがって、竹内が「支那は究極において否定されねばならぬ。そののみが理解である」³⁶⁶といい、このような大東亜文化に包括されつつある中国文学を拒否することによって、中文研の主体性を維持しようとしたのではないか。終刊号の表紙に再び郭沫若の題字を使ったのも、このような初心への回帰を物語っていると考えられる。

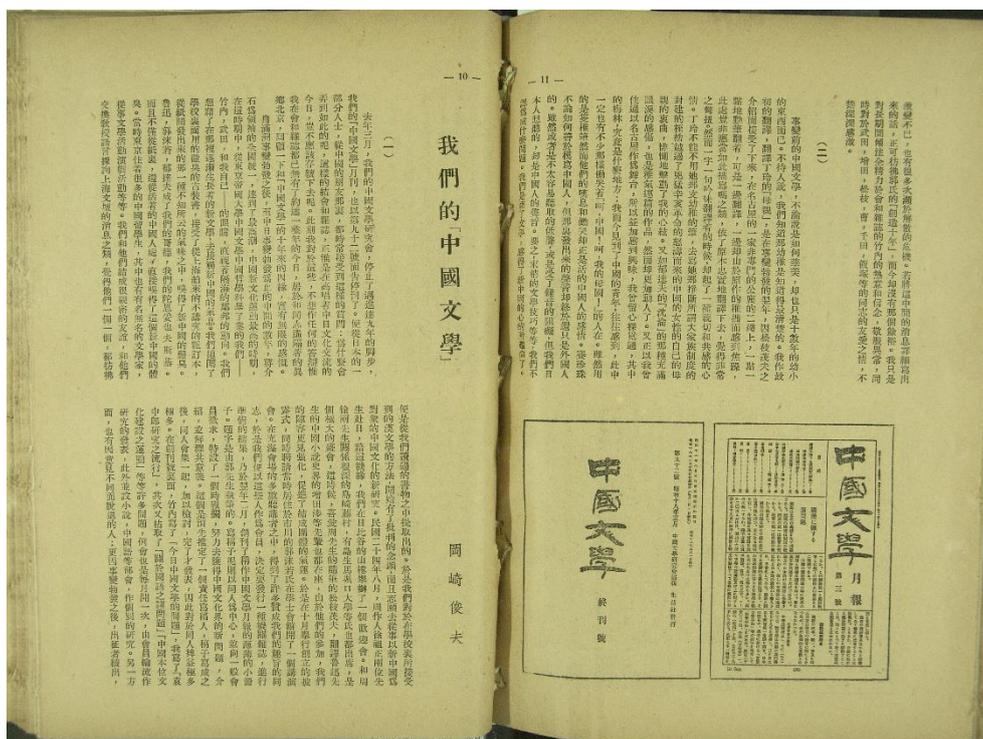


図7 岡崎俊夫「我們的『中国文学』」(『藝文雑誌』第2巻第2号、1944.2)³⁶⁷

中文研が解散して一年後、朝日新聞北京総局で働いていた岡崎俊夫は、周作人の主催した芸文社の機関誌『芸文雑誌』において「我們的『中国文学』」(「我々の『中国文学』」、図7参照)という文章を発表した。岡崎はそこで、中国文学研究会の成立と解散した事情を述べたうえ、最後にこのような心境を語っている。

私はかつて東京にいる数多くの中国人の友達と話し合ったが、結局破れない壁みたいな隔たりを感じ、心の中で涙を流したこともあった。しかし、今の友達とは涙を流す以前に、その非常に厚い壁がすでに建てられている。(略)この壁はどこから来たのだろうか。私は一日も早くこの壁をぶち壊し、ともに泣き、ともに笑い、ともに炎となり燃

³⁶⁶ 竹内好「中国文学の廃刊と私」、前掲文。

³⁶⁷ 中国国家図書館所蔵。

焼することを祈っている。³⁶⁸

この文章の発表された経緯は不明であるが、文章から旧同人としての岡崎の中文研に対する未練な気持が容易に察知できる。そして、ここに書かれている「隔たり」は、戦時下の中国と日本との「隔たり」を暗示していると同時に、一年前に極限状態に置かれた中文研が体感した真の中国との「隔たり」を物語っていると感じられる。

第二節 結論

中国文学研究会は、1934年から1943年までの間に、同時代の中国文学に注目すると同時に、新たな中国研究法を提示するために、漢学を批判し、中国語に関心を寄せ、さまざまな方法によって中国にアプローチしようとした。本研究は、中文研の足跡を追いながら、戦時下における彼らの中国認識の変遷を考察し、主に二つの問題を明らかにした。一つは、1930年代から1940年代までにおいて近代中国を研究する唯一の団体として、中文研の全体像はいかなるものかという問題であり、もう一つは、彼らの活動は日中文化交流史においてどのような役割を果たし、どのような意味を持つものであったかという問題である。

そして、本研究の特色は、一人の知識人とどまらず、中文研に関連する多くの知識人を取り上げ、多面的な視点から、戦時下における中国認識の再検討を試みた点である。以下、各章での分析によって明らかとなったことを要約しながら、中文研の全体像を整理していきたい。

第一章では、まず1930年代前後の日本における中国認識の形成に注目し、政治界・調査機関・学術界・メディア界・文学界という五つの分野で形成された中国論を考察した。その結果、1930年代の中国論には同時代の中国民衆への関心が希薄である傾向が分かった。調査機関が多数存在し、中国に関する情報が日本に溢れていたものの、中国人の実態を反映するものは少なかった。また、大学における中国研究は支那学のような新たな研究視点が形成されていたが、同時代の中国文化界に対して無関心のままである。つまり、日本国民の中国理解を深める土台が築かれていない状態であった。このような言論環境において、中文研

³⁶⁸ 原文：我曾在东京和不少的中国朋友交谈过，最后却碰到了一层牢不可破的隔膜，心中流泪过。然而今日的朋友则到不了流泪了，立即便到达了极厚的隔膜。（略）这个隔膜是从什么地方来的呢。我以为我们要愈早愈秒地来互相除去这层隔膜，一起哭，一起笑，一起成为火燃烧。岡崎俊夫「我們的『中国文学』」（『藝文雜誌』第2巻第2号、1944.2）。原文中国語、翻訳は筆者による。

は既存の学界に対する対抗、および同時代の中国人に注目することという二つの方向に向かって出発したのである。

また、中文研の創立に関わった竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三人の中心人物に注目し、彼らが高校時代と大学時代において示した知的関心の共通性を明らかにした。つまり、彼らには、左翼運動との関わり、ジャーナリズムと文筆活動への強い関心、漢文中心の大学教育への不満、および同時代の中国文学への関心といった共通点が見られる。このような共通点によって彼らの作り上げた中文研は、日本文壇に進出しようとする性格を帯びている。1935年に発行された機関誌『中国文学月報』は、当初は12ページぐらいのものであった。とはいえ、中文研の発足と機関誌の創刊が日中の文壇で活躍していた多くの文人に参与した事実からも、彼らが当時の文壇に一定の知名度を広げたことを察知できるだろう。また、機関誌の変遷をたどることによって、機関誌の時期ごとの特徴を明らかにした。第一期(1934.3-1937.10)では、誌上において近代中国文学に関する内容が最も充実していた。また、漢学批判、および中国古典文学に関する考察も多くなされている。第二期(1937.11-1940.3)では、竹内好と武田泰淳の不在によって、機関誌は全体的に低調期に入り、第一期のような活発な議論が見えなくなる。そして、第三期(1940.4-1943.3)では、最も多く現れたのは中国語に関する論述であり、これは第一期の漢学批判の継承だと考えられる。

第二章は、第一期における中文研の同時代の中国文学への関心を中心に、彼らの中国文学に対する認識の内実を探ってみた。まず、雑誌掲載記事を量的に分析した結果、中国近代文学に関する文章は、第60号(1940.4.1)以前に集中していることが分かった。また、中文研は誌上に中国文学を取り上げるだけでなく、例会や懇話会などのイベントを開催することによって、同時代の中国文学者との交流を促進し、特に、郭沫若から様々な支持と協力を受けていた。また翻訳活動も彼らの一大事業といえる。中にも増田渉は同人として誌上に発言することが少なく、中文研での役割は不明瞭であったが、実際は中文研の翻訳活動にとって、増田は無視できない存在であることが分かった。

次に、中文研の中国文学者との交流に関して、増田渉と魯迅との関係、および謝冰瑩・茅盾との交流を中心に考察した。増田渉と魯迅との付き合いが、誌面に反映されている一方、初期の機関誌の編集方向にも影響を与えていると考えられる。そして、茅盾と謝冰瑩などの左翼作家との交流において、中文研の同人たちは中国文学に現れたリアリズムに関心を向け、これはまた、彼らの中国民衆への注目にも関連する。彼らの中国民衆に対する関心は、初期の機関誌に掲載された漫画と木刻画、および農民文学に関する文章を通して読み取れる。そして、1937年から1940年までのあいだ、誌上に一連の農村文学に関する論文と翻訳が掲載されていた。中文研の同人たちの執筆した沈從文、葉紫、蕭軍に関する論文を比較した結果、彼らに共通して見られるのは、政治に圧倒された文学に対する批判的な態度である。

このように、中国近代文学の日本での受容に対して、中文研は作品の輸入から人的なネットワークの構築まで、大きな役割を果たしたことが明白となった。そして、中文研の関心は

主に中国の民衆を表現することに向けられており、さらに中国文学の政治性などを批判したのは、変動する自国文学に対する彼らの思考にも通底し、日本プロレタリア文学の批判的な継承ともいえよう。

第三章では第一期における中文研の中心的な課題であった「漢学への反抗」について考察した。まず1930年代に至るまでの漢学に関する言論環境を振り返ってみた。1920年代末からは漢学を国民精神にする傾向が見られはじめ、1930年代の学術誌にもそれは表れているように、漢学と日本精神との一体化が強要されるようになった。

次に、機関誌『中国文学月報』に現れた漢学論争に関する言論を詳細に分析した。その結果、まず誌上に積極的に漢学に関する討論を導入しようとした、竹内好の編集者としての寛容的な姿勢を確認できた。さらに、中文研の誌上に現れた漢学批判は学問としての漢学への反撥ではなく、漢学の価値を教化の面で大いに喧伝していた既存学界の学風に対する対抗であることが明らかになった。従来の研究では竹内好と竹内照夫の論争に現れた対立関係のみがクローズアップされてきたが、本研究では、既存学界の学風を問題視する両者の間には、実は表裏一体の思想が存在すると究明した。

中文研は漢学批判から出発したとはいえ、竹内好の思想に同調することなく、同人のあいだでそれぞれの立場を保ちながら、誌上に多種多様な中国古典文学に関する研究が発表された。しかしながら、この時期の中文研の同人による漢学論の方向性には、なおも曖昧さが残っていたことも否定できない。

また、竹内好の漢学論に関しては、彼自らの漢文コンプレックスの影響、および、当時日本の文芸評論界で活躍していた同窓の保田與重郎との関わりも確認できた。竹内が高校から大学にかけての間、保田の言動を追いかけようとした姿勢はその文章から読み取れる。さらに彼の漢学論には、保田與重郎の初期文芸評論に通底する内容も見られる。

このように、中文研の「漢学論」は昭和初期の時局において形成されていた中国認識と深く関連していたといえる。竹内好たちの展開した批判は、中国古典文化としての漢学に向けられているものではなく、漢学を帝国イデオロギーに吸収しようとする学界の傾向に対して向けられていたのである。彼らの志したジャーナリズム的な研究手法という斬新な提言は、結局は体系的な理論を構築するまでには至らなかった。しかしながら彼らの挑戦は、中国の古典文学がやがては時局の束縛から解放され、外国文学としての地位を回復する可能性を提供したのである。

第四章は、竹内好と武田泰淳の中国体験について考察し、中文研の改革に関わる両者の連帯性を明らかにした。竹内好は戦争を傍観する思いで留学生として北京へ渡ったが、現地において予想と異なる「平和」を目撃し、次第に初心を失っていく。竹内は北京の「長閑」を通して、政治と文化との不可分性を意識し、中国文学に対して動揺しはじめた。このような体験によって、帰国後、彼は中文研を改革し、新たな出発点からやり直そうとした。以前の活動に比べ、竹内は一層政治的な方向へ向かっていく。彼の政治性には、二つの意味が含ま

れている。一つは、現地の人間に目を向けない既存研究に対する批判である。もう一つは、「近代」を再認識することによる新たな中国文学史観の樹立である。

一方、武田泰淳は戦争に参加する兵士として中国に赴いた。彼は現地で多くの民衆と接することによって、自分の従来中国認識と日本の中国研究の脆弱性を意識するようになった。さらに、彼は現地で文化の破壊と消滅を目撃したことによって、書物に書かれている文化に懐疑するようになり、自分と中文研に対して強烈な批判を行った。彼は民衆の精神における文化の持続を模索しながら、民衆と風土に基づく中国認識を形成した。帰国後に発表した武田の文章には、このような認識が強く反映している。

竹内と武田は同じ時期において異なる中国体験を得た。しかし、その中に共通性が見られる。一つは、従来中国文学観の動揺であり、これは中文研の改革に至る直接の原因であるといえよう。もう一つは、戦争という極限状態において、中国文化にどう向き合うべきかという疑問である。これは、竹内の北京で感じた文化の擬制、および武田の戦場で目撃した文化の破壊という二種類の体験によるものといえる。中文研の改革の活動が、中国文学そのものから離れる傾向を示したのも、前述した二人の連帯性によるものだと考えられる。

第五章は誌上に取り上げられた中国語問題を中心に、中文研の第三期の思想動向を検討した。まず、「翻訳」、「漢文訓読法」、「中国語教育」を通して現れた中文研の漢学批判の復活について考察した。第一期に行われた漢学批判が、第二期の沈滞期を経て、竹内好の北京体験において生まれた中国文学の基礎への思考と変容したのである。竹内は、まず翻訳での誤訳問題に注目し、誌上に翻訳時評を設けた。竹内をはじめ、神谷正男、魚返善雄、吉川幸次郎などの執筆者は、翻訳を「人間の問題」として扱い、語学問題を超越した翻訳論を展開した。彼らは、それぞれの間異なる立場があるものの、共通して訓読に対する批判的な態度を持っており、これもまた、日本の便宜主義的思考に基づく中国認識の現状への反省であるといえよう。翻訳論を通して、竹内の日本文化に対する自己認識の一側面も窺える。彼は原語を用いる翻訳法を批判し、日本語の伝統を重要視する。このような日本語の独自性に関する言論は、彼の戦後における日本文化の主体性に関する思考に通底するのではないかと考えられる。

次に、「国語運動」と「支那語学」を中心に、第一期と第三期における中国語に対する見方の変遷を考察した。第一期の中文研は中国の国語運動に大きな関心を寄せ、中国語を言語学的に研究しようとする姿勢を持っていた。しかしながら、1941年前後から時局と関連した「支那語学」の役割を論じる文章が掲載されるようになり、戦争における「支那語学」の時局的意義が強調されるようになった。このような転換は、中文研の内部に存在している葛藤を表しているのではないかと考えられる。

翻訳論で示された中国理解に基づく言語観、および第一期における中文研の行動からみると、戦時下における功利的な中国認識に対して、中文研は対抗しようとした姿勢が確かに見られる。しかし、彼らはこのような姿勢を貫くことができなかった。第三期の時局に沿う

ような中国語に関する言論が中文研の人々の屈折に満ちた心境を物語っている。また、『中国文学』誌上において、中国語は近代日本の自己意識にも関わる問題として論じられている。同文意識に対する批判、および日本語の独自性に関する主張もこのような問題意識によるものであるといえる。

以上に述べた通り、中文研は戦時下の日中文化交流史において大きな役割を果たしたと言える。彼らは初めて同時代の中国文学を日本人の視野に取り入れ、文学作品の紹介だけではなく、様々な人的ネットワークの形成にも貢献を果たした。また、彼らは中国を介して、つねに日本文化の様態を内観していた。漢学批判から読み取れる国民精神化された学問への反撥や、現地報告に反映した竹内好の政治への目覚めと武田泰淳の文化観などが、彼らの内省する姿を如実に語っている。中文研は、戦局の進展の中に巻き込まれる運命を避けられなかったが、その解散こそ彼らの立場を保つ最終手段であったとも言えるのではないか。

本研究は中国文学研究会というミクロな視点から戦時下の日本知識人の中国に対するさまざまな行動と心境を明らかにした。残された課題も数多く挙げられる。例えば、本研究において戦時中の中文研の活動を全面的に考察したものの、戦後の活動について触れていない。中文研の戦後の活動は戦前と大きな断層が見られるが、中文研の歴史を知るためには、その戦後の活動についての考察が無視できない。そして、よりマクロの視点も必要であろう。日中文化交流史にとどまらず、日本文化の近代化において中文研が果たした役割がいかなるものか、まだ考察する余地がある。近代日本知識人の中国認識という課題は、さらに多様な視点によって検討されなければならない。

資料:『中国文学月報』・『中国文学』の内容一覧

【注】

★この資料は、1935.3～1943.3に発行された『中国文学月報』・『中国文学』(復刻版、汲古書院、1971)の全92号を通読したうえで、それぞれの文章の内容のキーワードをまとめて作ったものである。

★内容が毎号ずつ統計されている。刊号の後ろに記載されたのは:
発行時間／編輯者／頁数(広告含まない)／発行所

★編輯者について:名義上の編輯者は、竹内好と松枝茂夫だけであるが、雑誌の「後記」で書かれたように、実際の編輯作業は、同人が順番でやっている。「後記」で明記した場合は、名義上の編輯者とともに記載しておく。

★各文章が以下のように分類され、分類番号が題名の左に注記されている。
なお、以下の分類に属さないものは「*」と注記した。

- A 近代中国文学・文化
- B1 近代文学・論文などの翻訳
- B2 古代から清末までの文学の翻訳
- C1 漢学批判
- C2 日本の中国研究に関する批評、資料など
- D 中国の古典文学と伝統文化
- E 中国語問題
- F 現地体験
- G 文学創作
- H 日中関係と日中交流事情
- I 諸国と中国との接点
- J 中文研関連
- K 文化消息・会報・コラム類

★表の内容:分類番号／題名／作者／キーワードの順

【第一卷】

第一号 1935年3月5日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

A	今日の中国文学の問題(時報)／竹内好	小品文、農民文学、大衆語
D	袁中郎研究の流行(古典復興の一樣態)／岡崎俊夫	袁中郎、公安派
K	「中国文学月報」への感想と希望／塩谷温、新居格、穂坂唯一郎、白川次郎(尾崎秀実)、高橋君平、小沢正元	
A	雑言／増田渉	中国文学、検閲制度
A	対研究中国文学者的一点貢献／杜宣	同時代の中国文学の概況
A,D	作家と作品／一戸務	支那小説家の個性表現
K	会史 後記 例会予告 中国文学研究会に就いて	

第二号 1935年4月5日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

A	来朝中の中国文人(時報)／実藤恵秀、武田泰淳、岡崎俊夫、竹内好	鐘敬文、巴金、沉桜、梁宗岱、冰瑩
E	音韻雑感／曹欽源	音韻学
A	孫中山の死／実藤恵秀	「孫中山之死」、劇曲
A	新旧問答／森川勢南	支那学界評論
D	全像水滸伝の出現／斎藤護一	全像本水滸伝
K	文藝雑誌の変遷①	『繡像小説』
K	文化消息	馬廉、簡体字表、丁玲、『新小説』、商務印書館、存文会(国語)、「雷雨」
K	会報 後記 例会予告	

第三号 1935年5月16日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

E	国語に関する諸問題(時報)／竹内好	国語運動、大衆語、簡体字、存文会
H	与謝野先生記念／周作人	与謝野寛
A	兪平伯氏会見記／目加田誠	兪平伯にインタビューした時の記録
D	閑話／楊雲萍	中国の古典文学に関するエッセイ
K	文藝雑誌の変遷②	『新小説』
K	文化消息	「十教授宣言」(国民党文化政策)、本位文化建設座談会、新韻、児童問題、簡体字、国際文化事業、『小説月

		報』再刊、阮玲玉、傅增湘・董康、傅抱石個人展、Pearl Buck、中国新文学大系
K	会告 後記 中国文学研究会について 会報 例会 予告	

第四号 1935年6月18日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

A	「中国本位文化建設」の運動／岡崎俊夫、実藤恵秀	本位文化建設
D	数と文学／中島千秋	易経、数
D	支那小説のことなど／荒井瑞雄	三国志演義、支那通俗小説
A	楽焼の郁達夫／岡崎俊夫	郁達夫、支那現代文学
A	笑(林語堂)一有不為斎隨筆の一／松枝茂夫訳	隨筆、翻訳、(『人間世』No.16)
K	文藝雑誌の変遷③	『新新小説』
K	文化消息	中国哲学会、中外文化協会、中国語言学会、瞿秋白、文芸雑誌、雷石楡、留学生の文学運動、世界文庫
K	会報、後記、例会予告	

第五号 1935年7月15日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

A	中国民間文学研究の現状／武田泰淳	新文化運動、民間文学研究の実状
C1	所謂漢学に就て／竹内照夫	漢学の価値、雑多性
A	中国作家と人生的情熱／小田嶽夫	魯迅、郁達夫、郭沫若、主観的作家
H	釈中巽の事／沢村幸夫	民族感情
K	文藝雑誌の変遷④	『月月小説』
K	文化消息	簡体字、義務教育、地方文化建設、平民読物、「読書季刊」創刊、発禁情報、K.A.Wittfogel・Paul Pelliot・張世禄、「留東新聞」創刊、「業書集成」出版
K	会報、会員消息、後記、研究会略規	

第六号 [現代小品文特輯] 1935年8月25日 (竹内好) 11P 中国文学研究会

B1	小品文の危機(魯迅)／増田渉訳	小品文
B1	小品文の遺緒(林語堂)／松枝茂夫訳	小品文、書き方(『人間世』No.22)
B1	蠅(周作人)／実藤恵秀	小品文、蠅、神話、小林一茶
A	漫画：我們所造的(豐子愷)、北海所見蒙古人(葉淺予)、夏(胡考)	平民生活、(『太白』、『時代漫画』、『時代漫画』)
A	解説／竹内好	小品文、漫画

K	文化消息	出版法、復古反対、北大日本文学科、国語、日本語熱、 錢稻孫、中国映画、「留東学報」
K	後記、会報、広告（サイレン社）	

第七号 [現代小品文特輯二] 1935年9月25日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

B1	南京豆（老舍）／武田泰淳訳	小品文、「落花生」、(『時代漫画』)
B1	所謂自伝なる者（郁達夫）／竹内好訳	小品文、「所謂自伝也者」、伝記理論、(『人間世』)
B1	孔子の国籍（海戈）／竹内好訳	外国教授の議論、(『論語』)
B1	再婚風俗（嚴濟寛）／岡崎俊夫訳	再婚、民俗、礼教、婦人問題、(『太白』)
B1	雙鳳凰專齋小品文 ^{三則} （劉半農）／松枝茂夫訳	錢玄同、周作人、(『人間世』)
B1	詩を談る（梁宗岱）／松枝茂夫訳	詩、離騷、文化破壊主義、(『人間世』)
A	木刻：三農婦（羅清楨）、口入屋（野夫）	平民生活、(『文学』、『太白』)
A	解説	小品文、木刻
K	文化消息	曾孟樸逝く、「雷雨」公演、『太白』・『水星』停刊、『日 文研究』創刊
K	会報 例会予告 後記 中国文学研究会略規 訂正	

第八号 1935年10月23日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

H	北平に於る日本文化研究の現状（講演）／錢稻孫	講演記録、中国の日本文化研究
E	中国文学と用語／長瀬誠	白話運動、国語
D	小説戯曲批評の研究に就いて／齊藤護一	文芸批評家、李卓吾、金聖嘆
C1	漢学の反省（竹内照夫氏の所論を駁す）／竹内好	漢学、ジャーナリズム
A	翻版書に就て（現代書誌学）／実藤恵秀	中国の新刊書、翻版書、出版業
K	文藝雑誌の変遷⑤	『小説時報』
K	文化消息	簡体字、注音漢字、禹貢学会の地図、支那語学会の機 関誌、漢学大会、『宇宙風』・『独立漫画』・『劇場藝術』 創刊
K	会報 例会予告 後記 研究会略規	

第九号 1935年11月27日 (竹内好) 12P 中国文学研究会

A	周作人論／増田渉	周作人、小品文作家、小説作家
C1	象の鎖／吉村永吉	漢学
C1	非道弘人／竹内照夫	漢学、ジャーナリズム
C1	漢学者とジャーナリズム（竹内好氏の所見に就いて）	漢学、ジャーナリズム

	／丸山正三郎	
C1	新漢学論／武田泰淳	漢学
A	現代中国の木刻／資料部	木刻、農村や労働者生活
E	中国におけるエスペラント運動／資料部	エスペラント運動、国語運動、左翼主義
E	国語運動史綱（黎錦熙著）／実藤恵秀	国語運動、書評
K	文藝雑誌の変遷⑥	『小説月報』
K	文化消息	中国文学珍本叢書、偶然論、留学生新劇
A	木刻：泊（張慧）、工場地帯（新波）	平民生活
K	会報 例会予告 後記 研究会略規	

第十号 1935年12月31日 （竹内好） 12P 中国文学研究会

A	今年度の中国文化／武田泰淳、岡崎俊夫、実藤恵秀	国学：歴史地理学、書誌学、古代文化研究、章太炎 文壇：農村文学、通俗文学、国粹文化、翻訳、作家、 作品 出版界：古典出版、近代的古典、雑誌、翻訳、出版社
K	文藝雑誌の変遷⑦	『小説月報』（続）
K	文化消息	戈公振逝く、徐志摩全集、倫敦の中国藝術展、現代書 局破産、魯迅、胡蝶、『駱駝草』復刊、『文学時代』・『現 代詩風』創刊
K	会報 会員消息 後記 研究会略規	

第十一号 1936年3月5日 （竹内好） 12p 中国文学研究会

D	石達開とその日記／岡崎俊夫	太平天国、小説、日記文学
D	『山歌』明・馮夢龍編・顧頡剛校点／武田泰淳	民間歌謡、馮夢龍研究、書評
A	『生活全国総書目』生活書店／実藤恵秀	書誌学、書評
D	『中国文芸珍本叢書』上海雑誌公司版／岡崎俊夫	古典小説、書評
J	一年あれこれ	一年回顧
A	中華民国主要大学文学院支那学関係講義題目調査／ 資料部	国立中央大学文学院、湖南省立湖南大学文学院、国立 清華大学文学院、同大学文科研究所、国立北平師範大 学・国立四川大学、
K	文藝雑誌の変遷⑧	『小説叢報』
K	文化消息	陶希聖・顧頡剛、丁文江逝く、歴史語言研究所、新文 学研究会、通俗化雑誌、『申報週刊』創刊、郁達夫・『論 語』、『海燕』・『譯文』

K	会報 例会予告 会員消息 後記 研究会略規	
---	-----------------------	--

【第二卷】

第十二号 1936年3月25日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

A	河北省実験区「定県」の文化／武田泰淳	実験区、農村文化建設
A	中国哲学界の現状／資料部	純西洋哲学：実用主義、新實在論、新唯物論、新唯心論 中西哲学兼綜：唯生論、新法相宗、新陸王派、新程朱派
A	留東外史と其の日本観／実藤恵秀	留東外史、不肖生、中国人日本観
K	会報 会員消息 後記 研究会略規	

第十三号 1936年4月17日 (竹内好、岡崎俊夫) 16P 中国文学研究会

I	清宮二年記／目加田誠	『清宮二年記』、宮廷文学、徳齡
D	唐代仏教文学の民衆化について／武田泰淳	仏教文学、民間文学、唐代
K	文藝雑誌の変遷⑨	『礼拝六』
A	文壇茶話図(魯少飛)／編集部	漫画、文壇鳥瞰図(『六藝』創刊号)
K	文化消息	周作人来朝、『標準語大辞典』、『四部備要』・『四部叢刊』、全国図書館目録
K	会報 例会予告 同人名録 後記 研究会略規	

第十四号 1936年5月1日 (竹内好、岡崎俊夫) 12P 中国文学研究会

D	蘇曼殊論(境遇に敗北した蘇曼殊の文学)／飯塚朗	蘇曼殊
A	茅盾論／竹内好	茅盾
A,D	支那かぶれ／青木正児	回想、古典文学、近代文学
H	徒然草を読んで／魏敷訓	徒然草
D	陶と詩／岡崎俊夫	陶器、詩
K	文藝雑誌の変遷⑩	『小説海』
K	文化消息	中国哲学年会、『藝文』・『文藝生活』創刊、留東劇団
K	会告 会員録 後記 研究会略規	

第十五号 1936年6月1日 (竹内好、岡崎俊夫) 12P 中国文学研究会

A	中国映画の現状／岡本武彦・千田九一	近代映画
D	芝叟が『売油郎』の事ども／石崎又造	三言、俗文小説
K	文化消息	洪深・梁漱溟来朝、『作家』雑誌
K	会報 例会予告 後記 研究会略規	

第十六号 1936年7月1日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

D	猿人と鬘型儀礼―「漢学会雑誌」の二論文について― ／武田泰淳	古代文化研究、『礼記』
D	紅樓夢を振り返る／吉村永吉	紅樓夢研究
K	文化消息	国語辞典、注音活字、『文季月刊』創刊
K	後記 会報 例会予告 研究会略規	

第十七号 1936年8月1日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

D	逝ける章炳麟／豊田穰	章炳麟急逝、業績紹介
D	公羊伝に就て／竹内照夫	『公羊伝』、『春秋』
D	文章と薬／松枝茂夫	韓愈
A	故郷／陣内宜男	白話文学、魯迅、「故郷」
D	蘇曼殊に関する資料／飯塚朗	蘇曼殊
B2	「紅樓夢を振り返る」中引用文の翻訳／吉村永吉	『紅樓夢』、翻訳
K	文藝雑誌の変遷⑩	『新青年』
K	後記 第十二―六号正誤表	

第十八号 1936年9月1日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

A	茅盾印象記／増田渉	茅盾、「子夜」、インタビュー
D	中国文学の胚胎期／長瀬誠	文字、古代史
A	文芸家協会と文芸工作者／日高清磨瑳	文藝家協会、文藝工作者宣言
H	輸入出版物の発売禁制状況（昭和十一年上半期の集計）／資料部	出版、発売禁物
K	文藝雑誌の変遷⑪	『小説画報』
K	会告 後記 会報 研究会略規	

第十九号 1936年10月1日 (竹内好) 15P 中国文学研究会

D	沈復と芸娘／藤井正夫	『浮生六記』
---	------------	--------

D	今古奇観に就いて／千田九一	口語体文学、話本、『三言二拍』
A	疑古派か？社会史派か？／武田泰淳	顧頡剛・疑古派、郭沫若・社会史派、旧国学打倒
I	Key Economic Areas in Chinese History／小野忍	地域経済史、書評
K	文藝雑誌の変遷⑬	『新潮』
K	章炳麟について（通信）／小川環樹	章炳麟、白話文
K	文化消息	国防文学、丁玲、林語堂、叢書大辞典、世界文庫
K	会報 例会予告 後記 研究会略規 広告（河出書房）	

第二十号〔魯迅特輯〕 1936年11月1日 （竹内好） 36P 中国文学研究会

A	幻想の魯迅／長瀬誠	魯迅
A	魯迅と転変／実藤恵秀	魯迅、革命文学論戦
A	魯迅論／竹内好	魯迅、政治と文学
A	阿Q正伝雑評／飯塚朗	魯迅、「阿Q正伝」、農民作家
A	中国小説史略について／土居治	魯迅、小説史
A	魯迅先生の書翰より／山本初枝	魯迅、書簡（浮世絵、詩、発禁、漢文廃止）
A	李長之の「魯迅批判」—北新書局／吉村永吉	書評、魯迅論
B1	死（魯迅）／竹内好訳	魯迅
A	魯迅筆名	魯迅
A	魯迅著訳書名、附版画輯目／増田渉	魯迅
A	魯迅邦訳目録、附邦語自著／岡本武彦	魯迅
B1	文壇風景（汪子美）／竹内好訳	魯迅、周作人、プロレタリア文学、『時代漫画』No.26
A	木刻 魯迅像／流岩	魯迅、木刻
K	後記 会報 例会予告 研究会略規	

第二一号 1936年12月1日 （竹内好） 16P 中国文学研究会

A	よろめく「学報」の群／武田泰淳	学報、『文学年報』、『燕京学報』、『歌謡週刊』、『清華学報』
H	新聞・雑誌に於ける日華関係／実藤恵秀	新聞、雑誌、日中交流
A	魯迅著訳書目追記／増田渉	魯迅
K	「章太炎的白話文」に就いて／豊田穰	第19号小川環樹への返答
K	訂正／小野忍、竹内好	
K	文化消息	郁達夫来朝、魯迅全集、『現代日本文学叢刊』、『宇宙風』日本号、新雑誌

K	第十七—二十号正誤表／校正係	
K	会報 例会予告 後記 研究会略規	

第二二号〔作家論特輯〕 1937年1月1日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

A	郁達夫覚書／竹内好	郁達夫、生活、藝術、著作
A	沈從文小論／岡崎俊夫	沈從文、農村文学
A	曹禺論／土居治	曹禺、「雷雨」
A	王魯彦のこと／岡本武彦	王魯彦、題材、内容思想、表現
A	現代文学入門書／竹内好	
K	文学雑誌の変遷⑭	『小説林』
K	集会のたより 後記 会報 研究会略規	

第二三号〔中国文学研究の方法の問題〕 1937年2月1日 (竹内好、長瀬誠) 19P 中国文学研究会

C2	中国文学史研究方法論序説／長瀬誠	中国古典文学の特殊性、実証主義＋主動的鑑賞（主観主義）、思想史
C2	中国古典文学作品研究に関する感想／岡本武彦	主観的帰納
C1	私と周囲と中国文学／竹内好	方法論、漢学形骸化、鑑賞主義
D	雑抄二則／橋川時雄	章太炎、筆談記録、詩、漢学
C2	支那文学研究書史／近藤柰	目録
K	文藝雑誌の変遷⑮	『民権素』
K	集会のたより 会報 後記 研究会略規 広告（改造社）	

【第三卷】

第二四号〔言語問題特輯〕 1937年3月1日 (竹内好、実藤恵秀) 20P 中国文学研究会

E	支那言語学の任務と方法／魚返善雄	音韻論、文字論、意味論、詞形論
E	中国国語運動／曹欽源	国語運動、読音統一、簡体字、国語ローマ字
E	国語羅馬字を語る／下瀬謙太郎	ローマ字運動、ローマ字ピンイン法式
E	ラテン化運動について／斉藤秀一	ラテン化運動、ローマ字
E	中国言語学界瞥見／言語部	音韻学、文法学、文字、字典
K	集会のたより 会報 後記 研究会略規	

第二五号 1937年4月1日(竹内好) 16P 中国文学研究会

B1	日本文化を談るの書(周作人)／松枝茂夫訳・解説： 竹内好	ユーモア趣味、浮世絵、日本文化、日中関係
B1	魯迅の仕事(周作人)／吉村永吉訳・解説	魯迅、学問研究、創作、「關於魯迅」(『宇宙風』No.29)
C2	東洋史「学界展望」と「論文目録」一覧／藤枝晃	日本の東洋史研究、目録
K	四月曆 研究会略規 広告(文求堂)	

第二六号〔王国維記念特輯〕 1937年5月1日(竹内好、吉村永吉) 24P 中国文学研究会

D	王静安先生を憶ぶ／神田喜一郎	王国維
D	王先生と初対面の追憶／青木正児	王国維、劇曲
D	王国維展望／長瀬誠	王国維、略歴
D	紅樓夢評論と人間詞話に就いて／目加田誠	王国維、紅樓夢評論、人間詞話
D	人間詞話など／小川環樹	王国維、人間詞話、劇曲史
D	王国維の悲劇／岡崎俊夫	王国維、悲劇精神、浪漫主義哲学
D	王国維点描／吉村永吉	王国維、文学思想、人性解放
K	五月曆 後記 会報 研究会略規 広告(東京顕微 鏡院)	

第二七号 1937年6月1日(竹内好) 16P 中国文学研究会

D	王静安の経学に就いて／豊田穰	王国維、経学、古史研究
D	屈原的性格への憧れ／梅村良之	屈原、離騷、行動主義
B1	達夫の来訪(郭沫若)／土居治訳・解説：竹内好	郁達夫、(『宇宙風』No.35)
J	王国維特輯号を読む(謬れる傾向についてとくに同 人に)／竹内好	雑誌批評、漢学悪
K	文藝雑誌の変遷⑩*⑪は誤植	『詩』
E	支那語五種表記法例／言語部	表記法
K	六月曆 会報 第二十一～六号正誤表 後記 研究 会略規	

第二八号〔作家論特輯〕 1937年7月1日(竹内好) 20P 中国文学研究会

D	袁中郎論／武田泰淳	袁中郎
A	冰心素描／陣内宜男	冰心、小説、詩、散文
A	葉紫瞥見／飯塚朗	葉紫、『豊収』、農民文学

A	「第三代」の蕭軍／千田九一	蕭軍、「東北作家」、コスモポリチック
C1	雑言／増田渉	日本主義、漢学
E	国語辞典に失望す／実藤恵秀	中国の国語辞典
A	最近詩壇を語る／徐力衡	宗派性 詩雑誌 諷刺詩 詩の大衆化
J	留別の言葉／竹内好	支那留学の声明
K	七月暦 後記 会報 研究会略規	

第二九号 1937年8月1日 (竹内好) 16P 中国文学研究会

B1	湖上(葉紫)／飯塚朗訳・解説	農民
A	蕭軍のヒューマニズム／長野賢	蕭軍、農民生活、人間愛
D	「人境廬詩草」に就いて／豊田穰	黄遵憲、新詩
A	周作人著訳目録／松井秀吉、松枝茂夫	周作人、目録
K	文化消息	曹禺・蘆焚・何其芳、創刊雑誌、歴史劇、日本叢書、日中文学提携
K	八月暦 会報 後記 研究会略規	

第三〇号 1937年9月1日 (竹内好) 8P 中国文学研究会

B1	山中送客記(艾蕪)／松枝茂夫訳	国境地帯、流民
K	九月暦 会報 後記 再後記 研究会略規	

第三一号 1937年10月1日〔現代長編代表作一〕 (竹内好) 12P 中国文学研究会

B2	断鴻零雁記(蘇曼殊)／飯塚朗訳・解説	自伝的小説
B1	苔莉(張資平)／実藤恵秀訳	張資平、「苔莉」、翻訳
B1	離婚(老舍)／松井秀吉訳	老舍、「離婚」、翻訳
E	北京語の話二三／曹欽源	北京語、発音
K	会報 後記 研究会略規	

第三二号 1937年11月1日(竹内好) 8P 中国文学研究会

B1	懐郷病者(郁達夫)／大高巖訳	郁達夫、「懐郷病者」、翻訳
D	「平話」への一里塚／猪俣庄八	平話、唐宋時代の中国社会
E	北京語の話二三(続)／曹欽源	北京語、発音
C2	愚劣なる教訓／梅村良之	支那文学研究法批判
H	中国人日本留学大事記／実藤恵秀	年表
K	第三一号「北京語の話二三」正誤表	

K	会報 後記 研究会略規	
---	-------------	--

第三三号 1937年12月1日（竹内好、松枝茂夫） 16P 中国文学研究会

F	北京通信／竹内好	北京風景、日本文化
C2	秋箋／飯塚朗	支那文学研究、古典研究批判
I	支那小説談—陳季同訳「支那短編小説集」について (アナトール・フランス)／小野忍訳	『聊齋志異』、志怪小説、重訳
H	万葉集の漢訳／松枝茂夫	『万葉集』、漢訳
D	踏歌考／豊田穰	唐代、民間歌舞、日本伝来
B1	真理外二篇(冰心)／飯塚朗訳	「真理」(新詩)、冰心、翻訳
K	文化消息	戦時下の中国大学
K	会報、後記、研究会略規	

第三四号 1938年1月1日（松枝茂夫） 20P 中国文学研究会

F	北京通信・二／竹内好	戦時、北京、固有文化
C2	支那の原始社会形態に就いて／井上芳郎	郭沫若、古代社会史、考古学
B1	好莱坞談(林語堂)／猪俣庄八訳	ハリウッド、映画、"The Good Earth"、「大地」
H	売油郎と紺屋高尾／工藤篁	三言、醒世恒言、日本での翻案小説
B1	周作人先生よりの書信の一節(原文・訳文)	周作人、松枝への書簡、日本文化、日本研究
C2	「愚劣なる教訓」批判／齋藤護一	支那文学研究法
C2	飯塚氏に御垂教を乞う／関正郎	古典文学研究
H	「万葉集の漢訳」補記／松枝茂夫	万葉集漢訳
B1	蛋歌二首／故・松井秀吉訳	民歌
K	会報 後記 研究会略規 広告(文求堂)	

第三五号 1938年2月4日（松枝茂夫） 18P 中国文学研究会

B2	馮燕の話(小説)／故松井秀吉	『馮燕伝』(唐、伝奇小説)に據る
B2	秋(何遜)／松井秀吉訳	『玉台新詠』、「秋閨怨」
B2	宵待草(王台卿)／松井秀吉訳	『玉台新詠』、「陌上桑四首」
D	清末諸家の学問的態度(覚書)／神谷正男	清代漢学者、曾國藩、張之洞、康有為
D	「剪燈新話」の舶載年代／沢田瑞穂	『剪燈新話』、伝奇、翻案
I	「大地」を読んで／竹内照夫	『大地』
I	支那思想史に於ける外来文化(全増版)／小野忍訳	思想史、佛教、ジェスイット教(イエズス会)
C2	雑言／豊田穰	支那古典文学鑑賞

B1	一女兵士の自伝（謝冰瑩）／松枝茂夫訳	謝冰瑩、自伝
K	会報 第三三、三四号正誤表 研究会略規	

【第四卷】

第三六号 1938年3月1日（松枝茂夫） 12P 中国文学研究会

B2	桃花扇（一幕）／飯塚朗	伝奇劇曲、翻案作
B1	生存—長榮に贈る（沈從文）／梅村良之訳	北京、戦争
A,H	郁達夫と徒然草／近藤春雄	翻訳、郁達夫、徒然草、戦争
K	会報 後記（松枝） 研究会略規	

第三七号 1938年4月10日（松枝茂夫） 20P 中国文学研究会

H	中国情死考／実藤恵秀	情死研究、心中、日本文化影響
B1	落日の光（蘆焚）／飯村聯東訳・解説	農村
H	和歌の漢訳について／豊田穰	明代、漢訳和歌
K	単語帳 四角号碼検字法／実藤恵秀	検字法
K	第三五、三六号正誤表 会報 後記（飯村） 研究会略規	

第三八号 1938年5月1日（松枝茂夫） 8P 中国文学研究会

B1	超人（冰心女士）／猪俣庄八訳・解説	愛、孤独
D	支那の楽器／五十嵐悌三郎	支那、楽器
K	単語帳 読経・存文運動／豊田穰	読経、存文
K	会報 研究会略規	

第三九号 1938年6月15日（松枝茂夫） 8P 中国文学研究会

E	支那語さまざま／曹欽源	国語問題
B1	礼儀と衛生〈上〉（劉呐鳴）／実藤恵秀訳	上海、都市文学
K	単語帳 一千一百個基本漢字／飯村聯東	基本漢字
K	会報 後記	

第四十号 1938年7月15日（松枝茂夫） 16P 中国文学研究会

I	マンダリン紳士—十八世紀の英吉利に於ける chinoiserie—／太田七郎	イギリス、シノワズリ、中国趣味
A	李健吾の喜劇について—中国文学の知性—／武田泰淳	李健吾、劇曲
A	「第三代」小感／小田嶽夫	リアリズム、蕭軍
A.I	雑書雑談／増田渉	書評（事変前出版された本）
I	マレクセーエフ博士のこと／小野忍	西洋の支那文学研究
K	会報 後記（小野） 研究会略規	

第四一号 1938年8月1日（松枝茂夫） 16P 中国文学研究会

A	わたしの支那あさり／池田大伍	劇曲、新劇
I	マルコ・ポーロとラシッド・エッヂン／岩村忍	西洋支那研究
I	パゴダのある庭園—十八世紀の英吉利に於ける chinoiserie（其の二）—／太田七郎	庭園、イギリス、シノワズリ、中国趣味
D	読唐詩瑣談／豊田穰	唐詩
H	近代中国人著作在日本初印本覚書／実藤恵秀	中国人著作、日本出版
F	同人消息／武田泰淳	戦線の武田泰淳より、増田渉宛
K	会報 後記（小野） 研究会略規	

第四二号〔北京特輯〕 1938年9月1日（松枝茂夫） 22P 中国文学研究会

A	新啓蒙運動（新五四運動）点描／神谷正男	新啓蒙運動（1938年）、国難文化運動
D	都門雑誌中之俗曲史料／楊蓮生	『都門雑誌』、俗曲
F	周作人隨筆集・北京通信の三／竹内好	周作人
E	支那語（北京語）の母音に就いて／永島栄一郎	北京語、音韻学
H	近代中国人著作在日本印本記注／一会員、竹内好	
K	竹内好よりの通信	
B1	我を葬る（葬我）（朱湘）／飯塚朗訳	現代詩
K	会報 後記（豊田） 研究会略規	

第四三号 1938年10月1日（松枝茂夫） 10P 中国文学研究会

H	伽婢子命題考／一会員	『御伽婢子』、翻案、命題
F	北京行／飯塚朗	北京
H	詩経国訳に就いて／竹内照夫	『詩経』、歌謡、翻訳
D	読唐詩瑣談補記／豊田穰	唐詩

D	日本雑詠／沙起雲	竹枝詩
K	会報 後記（豊田） 研究会略規	

第四四号 1938年11月1日 （松枝茂夫） 12P 中国文学研究会

F	土民の顔／武田泰淳	土民、東洋文化
A	郭沫若と郁達夫の印象／古谷綱武	郭沫若、郁達夫
I	パール・バックの支那／岡崎俊夫	パール・バック、西洋人の支那観
D	道情について／沢田瑞穂	道情、演芸
F	北京の輩に寄するの詩／武田泰淳	同人批判
K	北京文化消息／神谷正男	北京大学校長、外国語学校
K	会報 後記（松枝） 研究会略規	

第四五号 1938年12月1日 （松枝茂夫、神谷） 12P 中国文学研究会

B1	中国文学史研究の三段階（鄒同祜）／岡本武彦訳	文学史研究法
B1	誰か知る（徐志摩）／飯塚朗訳	新詩
C2.I	倭漢洋管子書目／岩村忍	『管子』、日本、中国、西洋
B1	華北民歌	民歌
K	北京文化消息／神谷正男	日支親善、師資館入学試験、仏教利生会、華北電影職校、中国学院、劇曲学校、国画研究員、高等教育の回復、山東省文化保管委員会
K	会報 後記（神谷） 研究会略規	

第四六号 1939年1月1日 （松枝茂夫） 10P 中国文学研究会

B1	初夜（蕭軍）／猪俣庄八訳	兵隊、憲兵
F	北京雑記／実藤恵秀	北平図書館、『後不如帰』
C1	うめぐさ漫談／松枝茂夫	漢文訓読批判
K	会報 後記（松枝） 研究会略規	

第四七号 1939年2月1日 （松枝茂夫） 10P 中国文学研究会

C2	中国における文化運動の史的段階／神谷正男	文化運動史
A	現代支那の知識階級／源衣水	知識階級、支那事変
C1	日本の漢学者／神谷正男	漢学者、批判と反省
K	北京文化消息	日本人教師招聘、経学講習所、新民会映画班、北京師範学院、巡廻図書館、留日同学会事業資金会、不正教

		科書、社会教育、実験区の教育計画、天津市教育分会
K	会報 後記(神谷) 研究会略規	

【第五卷】

第四八号 1939年3月1日 (松枝茂夫、岡崎俊夫) 10P 中国文学研究会

A	幻想の魯迅と中国／野村正男	魯迅、中国観
B1	村人の春(老向)／岡崎俊夫訳・解説	実験区、農村
F	黄瑠璃の破片／飯塚朗	北京、日記
A,D,I	雑書雑談／増田渉	「西学東漸記」、「慈禧写照記」、「康藏軼征」、「四十自述」、「素園石譜」
K	会報 後記(岡崎) 研究会略規	

第四九号 1939年4月1日 (松枝茂夫、岡崎俊夫) 12P 中国文学研究会

A,D	伝統と創造／飯村聯東	文学、反逆的精神
A	冰心の脆弱性／飯塚朗	冰心、閨秀作家
D	洛陽才子他郷老—詞人韋莊のことども／岡崎俊夫	唐代、詞
E	憎まれ口／小野忍	誤訳、翻訳法
B1	我が夢、我が青春(郁達夫)／岡崎俊夫訳・解説	郁達夫、自叙伝
K	会報 後記(岡崎) 研究会略規	

第五〇号 1939年5月1日 (松枝茂夫) 10P 中国文学研究会

A	作家論／梅村良之	政治性、文学性、リアリズム、ヒューマンイズム
D	美しき古書／武田泰淳	古書、書評
A	中国の作家諸氏へ／山本三八	文学、政治
A,D	作家と文学—作家論より見たる支那文学の一性格— ／金坂博	詩文作家、劇曲作家
K	文化消息	作家群、近状、文学創造性
K	会報 後記(飯村) 研究会略規	

第五一号 1939年6月1日 (松枝茂夫) 14P 中国文学研究会

A	虚妄の愉悦—松枝氏訳の「辺城」を中心に—／柳沢三	沈從文、「辺城」
---	--------------------------	----------

	郎	
B1	古代英雄の石像（葉紹鈞）／猪俣庄八訳・解説	童話
I	支那印刷術の西漸と波斯／岩村忍	印刷術
H	閒情詠詞抄／沢田瑞穂	古今体詩、翻訳
K	文化消息	『朔風』
K	会報 後記（飯村） 研究会略規	

第五二号 1939年7月1日 （松枝茂夫、猪俣） 16P 中国文学研究会

A	「第三代」について／藤井冠次	蕭軍、農村文学
F	本を追ふ／実藤恵秀	『東瀛学校挙概』、『西学東漸記』、『欧化東漸史』、『中国近七十年来教育記事』、『東西学書録』、『新学書目提要』、『任闕齋東游漫録』、『銀婚感言』
B1	破家（王代昌）／細田三喜夫訳	王代昌、翻訳
I	アレクセーエフの「大地」評／川崎直一、藤枝晃・共訳	露国支那学
K	会報 後記（猪俣） 研究会略規	

第五三号 1939年8月1日 （松枝茂夫、小野） 10P 中国文学研究会

A	林語堂雑感／竹内照夫	林語堂、幽默
B1	荒村（蓬子）／小山正孝	新詩
B2	弓の名人譚（列子）／猪俣庄八訳・解説	『列子』、人間性
F	満州の本屋／実藤恵秀	満州、本屋、紀行
E	支那の新語について／曹欽源	中国語、言葉、新語
A	上海文壇の現状／神谷正男訳	上海、左翼文学
K	会報 後記（小野） 研究会略規	

第五四号 1939年9月1日 （松枝茂夫、猪俣） 10P 中国文学研究会

B1	離郷の前夜（呉組細）／梅村良之訳	平民文学、封建制度を抵抗する婦人
A	My old 沈先生／山本三八	新詩、茅盾
B1	童年（李健吾）／金坂博訳	児童文学
D,H	「慶長見聞集」と「売油郎独占花魁」／石崎又造	「慶長見聞集」、三言、説話伝承
B1	五四文学運動の歴史的意義（郁達夫）／猪俣庄八訳	五四運動
A	李健吾の「十三年」／金坂博	戦争、上海、文化回復運動
K	会報 後記（猪俣） 研究会略規	

第五五号 1939年10月1日 (松枝茂夫、小野) 14P 中国文学研究会

I	文化民族としての支那民族／土方定一	
I	アメリカ支那学瞥見その他／岩村忍	アメリカ支那学、考古、古書
IE	支那語読方ノ改良ヲ望ム／ビー・エチ・チャンブレ	漢文訓読法
F	訪書談義／実藤恵秀	中国、本屋街
A,D	雑言／増田渉	画譜、印譜、挿画
K	新刊紹介	金瓶梅の英訳、パール・バック、東西交渉史序説、蒙古人の友となりて
K	会報 後記(小野) 研究会略規 広告(伊藤書店)	

第五六号 1939年11月1日 (松枝茂夫) 12P 中国文学研究会

A	臧克家と卞之琳／武田泰淳	臧克家、農民文学、卞之琳、知性派
A	欧陽山走り書き／山本三八	欧陽山、作品特徴、平民文学(下級階層)
A,D	新文学者と旧文学研究／近藤春雄	旧文学研究、鄭振鐸、顧頡剛
C2,H	メモ四つ／幼方直吉	文学・歴史研究、梁啓超、東洋思想、『海上述林』
K	会報 後記(小野) 研究会略規 広告(伊藤書店)	

第五七号 1939年12月1日 (松枝茂夫) 16P

D	文人の芸術／目加田誠	詩、小説劇曲、宋、元、明
F	北京から見た南方／実藤恵秀	北京、南方地方、比較、紀行
F	二年間(黙することの難ければ)／竹内好	日記抄録
K	後記(竹内) 研究会略規	

第五八号 1940年1月1日 (松枝茂夫) 16P 中国文学研究会

B1	手(蕭紅)／長野賢訳・解説	平民文学
F	支那文化に関する手紙／武田泰淳	戦争、文化壊滅、中国観
K	会報 後記(竹内) 広告(伊藤書店)	

第五九号 1940年2月1日 (松枝茂夫) 16P 中国文学研究会

B1	雞(郭沫若)／吉村永吉訳・解説	自伝、(在日朝鮮人の部分省略)
F	杭州の春のこと／武田泰淳	杭州、土民の顔
F	朝陽門無事入城／実藤恵秀	北京、紀行
E	古書を読む／曹欽源	南方音、古書朗読

D	目加田さんの文章／竹内好	「文人の芸術」批判
A,C2	読書雑感／豊田穰	戦時下学術文化界、支那文学史研究法
K	後記（竹内）	

【第六巻】

第六十号 1940年4月1日（竹内好） 48P 生活社出版

A	周作人—伝記的素描—／松枝茂夫	周作人、日本観、魯迅、比較論
B1	娘の見た林語堂／小野忍訳	林語堂像、三人娘、日記
A	林語堂「支那に於ける言論の発達」評／佐倉井正一	林語堂、民論、ジャーナリズム
D	弁駁／目加田誠	「目加田さんの文章」の回答
D	返答／竹内好	「弁駁」の回答
J	中国文学研究会について／竹内好	中国文学研究会、成立史、展望
K	文化消息	蔡元培逝去説、重慶の文学者生活、重慶の出版、成都の通俗文芸運動
K	後記（竹内） 広告（生活社）	

第六十一号〔蔡元培特輯〕 1940年5月1日（竹内好） 48P 生活社出版

B1	中国文学の世界史的理念（蔡元培）／編集部訳	文学思想史、文芸復興、文学革命
B1	私の北京大学に於ける経歴（蔡元培）／増田渉訳 解説／編集部	蔡元培、伝記、五四運動、文学革命
A	蔡元培の文化的側面／神谷正男	蔡元培、伝記、教養の養成史
A	「大過渡期」を廻って／藤井冠次	『大過渡期』（茅盾）、作品論
K	文化消息	『国語辞典』、『創元支那叢書』、上海文芸雑誌、上海通俗文学
J	同人綴方浜松紀行／竹内好・武田泰淳・吉村永吉	浜松紀行
K	後記（竹内） 第六十号正誤表 広告（生活社）	

第六十二号 1940年6月1日（竹内好） 48P 生活社出版

D	康有為の生涯と思想の発展（附・康有為の著書）／ 山口一郎	康有為、伝記、思想変遷
D	聊齋志異の狐達／高林静夫	『聊齋志異』、狐説話、勸善懲惡精神、反逆文学

A	雑書雑談（二）／増田渉	現代社会、支那留学生
A,C,I	新書解題の一・西北旅行記の中から／小野忍	西北、新疆、紀行
K	「周作人—伝記的素描」補記／松枝茂夫	訂正事項
K	文化消息	『中国版画史』
K	後記 第六十一六十一号正誤表 広告（生活社）	

第六十三号〔辞典特集〕 1940年7月1日（竹内好） 48P 生活社出版

H	われわれのアンシクロペディ／羽仁五郎	『言海』、福沢諭吉
E	支那語の辞典／曹欽源	国語問題、辞典、音韻学
C2	東洋史関係の辞典その他について／鈴木俊	東洋史関係辞典、年表、地名・人名辞典
E,I	支那及び支那語に関する西洋のレキシコグラフィー ／岩村忍	支那学、西洋辞書学、紹介
E	支那語の表記法／魚返善雄	表記種類、ローマ字
E	書評「支那語発音四声速習表」／竹内好	音韻学、教科書
K	文化消息	羅振玉逝去、『學術』、中国文法討論
K	後記 第六十二号正誤表 広告（生活社）	

第六十四号 1940年8月1日（竹内好） 48P 生活社出版

B1	綏遠の王同春—王同春開発河套記—（顧頡剛）／編輯 部訳・解説	歴史記述、地方開発
F	支那で考へたこと／武田泰淳	戦場記憶
I	最近の蒙古関係の翻訳書—新書解題の二—／青木富 太郎	モンゴル関係書、紹介
F,J	支那と中国／竹内好	言葉、中国観
B2	老残遊記〔自序・第一回〕（劉鉄雲）／岡崎俊夫訳・ 解説	劉鉄雲、『老残遊記』、翻訳
K	文化消息	重慶政府の文化政策、昨年の上海文芸界
J	短訊／千田九一・土居治・松枝茂夫	会員消息
K	後記 広告（生活社）	

第六十五号 1940年9月1日（竹内好） 48P 生活社出版

B1	賽金花口述・一（劉半農、商鴻達）／竹内好訳・解説	賽金花、伝記
H	平林寺と黄遵憲の詩碑／実藤恵秀	黄遵憲、日本研究、紀行
B2	老残遊記〔第二、三回〕（劉鉄雲）／岡崎俊夫訳	劉鉄雲、『老残遊記』、翻訳

H	日本華僑の今昔／千万生	華僑史
K	後記 第六十三—四号正誤表 広告（生活社）	

第六十六号 1940年11月1日（竹内好） 48P 生活社出版

B1	没落（黎錦明）／飯塚朗訳・解説	『小説月刊』No.7、創作専号
B2	老残遊記〔第四回〕（劉鉄雲）／岡崎俊夫訳	劉鉄雲、『老残遊記』、翻訳
*	燕京鬼話／一秋宵つれづれなるまま子語らざるところいでや吾語り出でむ一長野賢	北京、怪奇、夜遊神、生首往来、百鬼夜行
B1	賽金花口述・二／竹内好訳	賽金花、伝記
E	翻訳時評・一／神谷正男	翻訳書の選択、翻訳技術、出版技術、翻訳書目録
A	書評「旅途通訊」（巴金）・「記丁玲」続集（沈從文）／武田泰淳	戦時中中国、丁玲
E	書評「支那言語学概説」（王力）／竹内好	『中国語文概論』、誤訳
K	文化消息	中蘇文化協会、馬君武逝去、王独清逝去説、『小説月報』創刊、劉呐鷗の死、映画女優（陳雲裳、李綺年）
K	後記 広告（生活社）	

第六十七号 1940年12月1日（竹内好） 48P 生活社出版

B2	老残遊記〔第五・六回〕（劉鉄雲）／岡崎俊夫訳	第七回以降の梗概付
I	安南文学の一例として見たる伝奇漫録／奥野信太郎	『伝奇漫録』、ベトナム漢文古典文学
A	馮友蘭の「新理学」に就いて／竹内照夫	哲学、馮友蘭、『新理学』
B1	義和団の乱〔賽金花口述・三〕／竹内好訳	賽金花、自伝、義和団
E	翻訳時評・二／神谷正男	支那書、関連翻訳書の書評
A	書評「近二十年中国文芸思潮論」「中国小説史」／増田涉	李何林、郭箴一
E	書評「支那文を読む為の漢字典」／竹内好	『学生字典』（商務印書館）
K	文化消息	文化工作委員会、大学専門学校数、英訳謝冰瑩自伝、北京風物映画、長江文学会、昆明の大学移転、桂林の魯迅記念館、国立中正大学開学
K	後記 第六十五—六号正誤表 広告（生活社）	

第六十八号〔アメリカと中国特輯〕 1941年1月1日（竹内好） 76P 生活社出版

	「アメリカと中国」特輯に寄せて／竹内好	巻頭言
I	アメリカ、中国、日本（座談会）／新居格、石浜知行、	中国とアメリカの関係、アメリカのジャーナリズム、

	平野義太郎、和田清、岩村忍、増田渉、竹内好	アメリカの中国研究、生活様式、共同研究、近世日支文化関係、三民主義、日中文化提携
I	支那文学とアメリカ／増田渉	胡適、支那人アメリカ留学生
I	中国人のアメリカ留学／実藤恵秀	留学史
I	支那を調査したアメリカ人たち／岩村忍	ラファエル・パムペリー (Raphael Pumpelly、地理学)、アンドリュース (Roy Chapman Andrews、探検)、ロス教授 (E.A.Ross、社会学)、ハンティングトン (Ellsworth Huntington、社会学)、ワーナー (Langdon Warner、敦煌古美術)、ラウファー (Berthold Laufer、考古学)、ラティモア (Owen Lattimore、支那辺境調査)
I	アメリカ映画と支那／辻久一	比較、アメリカ映画受容、支那民族心理
I	アメリカの支那語研究／魚返善雄	両国関係、アメリカ人の支那語学研究史
I	ホバアトの「陽と陰」／山崎慶一	Alice Tisdale Hobart、アメリカ人支那観
B1	E女子の柳／武田泰淳	胡適、アメリカ人支那観
A	漫画 ハリウッド水滸伝人物選 (汪子美)	解説付
A	雑誌『現代』の現代アメリカ文学特輯号	中国雑誌、内容紹介
I	中国関係アメリカ名人録／編集部	
K	「中国文学叢書」刊行予告	
K	表紙解説	出典
K	後記 広告 (生活社)	

第六十九号 1941年2月1日 (竹内好) 48P 生活社出版

I	仏国極東学院のことども／松本信広	フランス、法国遠東博古学院紹介
I	『支那の小説』と西欧の精神／中橋一夫	パール・バック、支那小説特長
H	満洲文芸現況／吉野治夫	満洲文話会、日満両系作家の協力親和、代表雑誌、『新青年』と『大同報』の文芸欄
H	中支邦人の文芸運動／高木喬	文芸団体、代表作家・雑誌、現地文学
B1	新文芸運動の行くべき道 (郭紹虞)／編集部訳	新文芸運動の実用性、欧化問題、作文、句式、言語文字、語録体、中国文学の音楽性
E	翻訳時評・一／竹内好	翻訳現状、歴史、翻訳法
A	梅蘭芳遊美記の馬鹿馬鹿しきこと／武田泰淳	『梅蘭芳遊美記』、斎如云、異文化接触、書評
D	愈宗海を聴く／奥村伊九良	愈宗海、昆曲
H	西園寺公と漢籍／文求堂主人	漢籍
A.E	魚返善雄編著「大陸の言語と文学」／竹内好	言語学、文学論、翻訳論、書評

K	「図書季刊」／竹内好	雑誌紹介、図書目録
K	文化消息	冰心・茅盾・巴金歓迎会、范長江、郁達夫、西安・昆明の文化現況
K	後記（岡崎） 広告（生活社）	

第七十号 1941年3月1日 （竹内好、齋藤秋男〔この号から専任編集〕） 48P 生活社出版

D	民国初年の文人たち／今関天彭	陳衡恪、陳散原、康有為、龔定盦（自珍）、寶竹坡、翁覃溪（方綱）、袁勵準、樊樊山、易實甫、林琴南、蘇曼殊、沈子培、章炳麟
D	「孔子改制考」にあらはれたる康有為の改革思想の本質／齋藤秋男	学術思想界発展史、康有為、政治改革
I	アメリカの支那学／吉川幸次郎	アメリカ支那学者、印象記
F	中日学院・北京大学／尾坂徳司	中国留学自叙伝
F	北京日記抄／千田九一	北京日記
B1	林琴南先生（蘇雪林）／編集部訳	林紓、伝記
A	孔子の映画	「孔夫子」、民華影業公司作品、写真集
E	翻訳時評・二／竹内好	各翻訳者の批評、松枝茂夫、吉川幸次郎ほか
K	文化消息	洪深、張聞天死去、グラネ逝去
K	後記 第六十七一九号正誤表 広告（生活社）	

【第七巻】

第七十一号 1941年4月1日 （竹内好） 48P 生活社出版

D	日本雑事詩・一／実藤恵秀	黄遵憲、版本、内容
E	支那語教育について／倉石武四郎	支那語、漢文、注音符号、漢字
E	支那語教学に関する随想／長瀬誠	支那語虐待、漢学、現代支那文化の融合、戦争語学
H	中等教科書異変一主として漢文・時文教科書に就て一／乙寺与志夫	教科書の選定、文部省統制制度
E	翻訳時評・一／魚返善雄	質の低さ、訳者の資格、受容的な訳者と適合的な訳者
B1	今後の文芸界の二つのこと（茅盾）／編集部訳	青年文芸工作者、文芸網の織り成し
A	書評「支那人の精神」／岡崎俊夫	辜鴻銘”Spirit of the Chinese People”、支那人観
K	文化消息	冰心逝く

K	後記 第七十号正誤表 広告 (生活社)	
---	---------------------	--

第七十二号 1941年5月1日 (竹内好) 48P 生活社出版

I	グラネについて／野原四郎	マルセル・グラネ、西洋の支那宗教研究
F	大衆の体臭／飯塚朗	支那大衆、支那観
B2	日本雑事詩 (黄遵憲)・二／実藤恵秀訳	翻訳、訳注
D	崑曲覚書／辻久一	崑曲、俳優
E	翻訳時評 (二)／魚返善雄	直訳と意識、原文と訳文の対照、大正期翻訳
E	翻訳論の問題／吉川幸次郎、竹内好	書簡、翻訳論論争
I	新刊紹介／斎藤秋男	実藤恵秀訳『西洋文化の支那への影響』(張星焯著)
K	文化消息	共産党地区の文化情況、上海の「文化抗建委員会」、「中日文化」の創刊
K	後記 広告 (生活社)	

第七十三号 1941年6月1日 (竹内好、齋藤秋男) 48P 生活社出版

E	祖国雑感一特に国語問題と支那語問題に就て一／永島栄一郎	支那語勉強の目的、国語問題、日本語の普及運動
	倉石武四郎著「支那語教育の理論と実際」批判 (以下3件)	
E	漢文・支那語教育と支那学との現実一倉石主義の感想一／竹内照夫	訓読法支持論、漢文科の転換面
E	支那学の世界／竹内好	支那学の存続問題
E	記号の問題／魚返善雄	注音符號、音韻学
B2	日本雑事詩 (三)／実藤恵秀	翻訳、訳注
I	「西太后に侍して」の著者／田中克己	徳菱 (齡)、作者経歴
H	山西開発展を觀る／武田泰淳	山西開發展覽會
A	小田嶽夫「魯迅伝」／武田泰淳	書評、魯迅、支那観
C2	「長安の春」／竹内好	書評、石田幹之助、文学的感性
K	文化消息	「中日文化」第二期・第三期、受贈雑誌、王雲五「戦時中国文化の動向」、日本文化紹介の大図書館
K	後記 (竹内、斎藤) 正誤表 (一) 広告 (生活社)	

第七十四号 1941年7月1日 (竹内好、齋藤秋男) 49P 生活社出版

I	トレチャコフと「鄧惜華」／一条重美	鄧惜華略歴、創作経緯
B2	日本雑事詩 (四)／実藤恵秀訳	翻訳、訳注

E	翻訳時評（三）／魚返善雄	会の翻訳作、日本語への反省、調和とリズム、ことだま、訳文の長さ、不必要な支那語の流用
E	支那語学と云ふもの／永島栄一郎	国語国字問題
A	悔恨／岡崎俊夫	支那現代文学
I	「康熙帝伝」	書評、異邦の皇帝、被征服民族
D	初期の雑誌いろいろ	清末民初雑誌写真
D	中国雑誌年表（1）／実藤恵秀・斎藤秋男	1896年～1912年
K	後記（竹内、斎藤） 広告（生活社）	

第七十五号〔創作特集〕 1941年8月1日（竹内好、斎藤秋男） 49P 生活社出版

G	合歓の花／飯塚朗	北京の日本人学者、小説
G	女ふたり／岡崎俊夫	親日、抗日、小説
G	黒い紗の女／長野賢	北京、税務調査、小説
G	支那もの界隈／小田嶽夫	支那取材、支那題材小説の創作経緯
J	会へ行く路／武田泰淳	研究会、同人に関する感想
*	九州一週の記（吉村迂齋のあとを尋ねて）／吉村永吉	日記、九州紀行
K	後記（斎藤）	

第七十六号 1941年9月1日（竹内好、斎藤秋男） 49P 生活社出版

H	小詩と日本詩歌／中道定雄	日本詩歌の中国への影響、訳例
C2	支那経済地理研究のために一新書解題の三ー／野口定男	支那経済地理研究の重要性、支那社会の性格、東亜解放
E	翻訳時評（一）／吉川幸次郎	実藤訳「日本雑事詩」批判、支那詩のリズム、支那語に対する無能力
F	訪燕襍記／薄井恭一	北京風景、紀行
D	岡本武徳氏訳「官場現形記」（第一冊）／岡崎俊夫	李伯元、「官場現形記」書評
D	中国雑誌年表（2）／実藤恵秀・斎藤秋男	1913年～1919年
K	文化消息	冰心生存、王濟遠画展、許地山逝去、辺疆学校、ソ聯で「中華」出版、ゴリキー記念、二学院の増設、中国の稿料値上げ雑誌、民歌演唱大会、抗戦作家 欧米作家に感謝、宋美齡賞発表、重慶側の劇団、映画「延安内幕」、周璇の失踪
K	後記（斎藤） 正誤表（二） 広告（生活社）	

	民国三十年に寄す／田中克己	巻頭言
A	民国三十年来の文学思潮／増田渉	民国新文学への播種者(梁啓超・林紓・嚴復)、新文学運動
A	好きな作家・好きでない作家／松枝茂夫	魯迅、郁達夫、郭沫若、周作人、沈從文、茅盾、胡適、林語堂、劉半農、俞平伯、艾蕪。
A	「小説月報」から「作家」まで—文芸雑誌の変遷—／岡崎俊夫	支那近代文芸雑誌変遷
E	国語運動の三十年／曹欽源	音韻、基本漢字、簡体字、注音漢字、国語大衆化
A	民国以来の商務印書館／実藤恵秀	商務印書館歴史、事業、出版情況
A	学生生活／武田泰淳	『留東外史』、民国初年留学生生活、学生騒動
D	前清の遺老／今関天彭	北京：陳寶琛、劉廷琛、鄭孝胥、樊樊山、羅振玉 上海：沈子培、朱祖謀、康有為、
H	華夏を中心として故大隈老侯を偲ぶ／青柳篤恒	大隈重信、日清提携論、康有為を救う、袁世凱帝制の阻止、二十一個条の要求
F	民国初年の瑠璃廠／田中慶太郎	瑠璃廠の文化風景
A	戯劇協社と南国劇社—上海新劇史の一節—／升屋治三郎	新劇史研究、新劇運動の分期、南国社、田漢
H	中国辛亥革命に対する我国の輿論／吉川尚	辛亥革命、日本新聞報道の写し
K	清華の三十年／編輯部	清華大学略史、事業
A	三十年来中国文化界年表／編輯部	1912年～1941年
K	後記(竹内、齋藤) 「中国文学叢書」刊行予告 広告(生活社)	

A	民国三十年来の文学思潮・二／増田渉	魯迅と周作人、文学研究会と創造社
F	四馬路訪書記／西村捨成	上海本屋廻り、商務印書館、中華書局、作者書社、大東書局、生活書店、上海図書雑誌公司、世界書局、北新書局、百新書店、求益書社
D	洋務論者の系譜—中国近代思想史研究のノートから—／齋藤秋男	洋務運動の発展、曾國藩、李鴻章、太平天国、理論と実践、張之洞
E	翻訳時評(二)／吉川幸次郎	明治以来の支那学、読書法の間違い(単語尊重)、支那語理解の法則(音調の調和と文法)
F	北平・北京追想／梅沢康夫	北京の学生たち、中国インテリ、戦時下の北京

D,F	京劇回顧／太田七郎	京劇、俳優
E	支那語の教科書について／竹内好	会話教科書、教科書統制
A	小野勝年訳「北京年中行事」／竹内好	敦崇『燕京歳時記』訳本の書評
D	呂樂慎一訳「子不語」／岡崎俊夫	袁枚『子不語』訳本の書評
C2	神谷正男「現代支那思想研究」／齊藤秋男	書評、支那民族主義、新生活運動
C2	藤原定「近代支那思想」／齊藤秋男	書評、顧炎武の封建思想、曾国藩の郷土主義、梁漱溟の家族主義的共同体的思想、三民主義
K	文化消息	西康省の文化機関、魯迅三十年集、「筆談」創刊、受贈及交換雑誌
K	後記（齊藤） 広告（生活社）	

第七十九号 1941年12月1日（竹内好、齋藤秋男） 48P 生活社

B1	黄昏より（落華生）／千田九一訳	落華生、「黄昏後」、翻訳
D,I	「洪秀全の幻影」について／青木富太郎	叛乱研究、太平天国、“The Visions of Hung-Siu-Tshuen and Origin of the Kwan-si Insurrection”（原題）、創作動機、漢訳本
E	翻訳雑感／岩村忍	学術書の翻訳
E	翻訳時評（三）／吉川幸次郎	粗枝大葉主義批判、言語に対する洞察力
F	続訪燕襍記／豊田穰	北京、資料調査、学者訪問、日支学術比較
A	映画「家」——中国聯合影業公司作品	スチール写真、巴金
A,B1	重慶文化界の動静（方紀）／編集部訳	文芸陣地の撤退、文化界聯合夜会、文芸講演（老舍、孫伏園、郭沫若）
H	王世民「一中華人の見た日本精神」 渡邊泰亮編著 「支那の少年は語る」／実藤恵秀	中国人の特殊な日本観（皇道精神の下で、両民族の融合を如何に処理すべき）、日本人の教育体験談
H	実藤恵秀「近代日支文化論」／岡崎俊夫	対支文化工作基礎論、留日学生教育論
K	文化消息	国立編訳館の現業、西南聯大復旧
K	通信	読者たより
K	後記（齊藤） 正誤表（三） 広告（生活社）	

第八〇号〔現代中国と日本作家特輯〕 1942年1月1日（竹内好、齋藤秋男） 49P 生活社出版

	大東亜戦争と吾等の決意（宣言）／竹内好	大東亜戦争、東亜解放、巻頭言
	現代中国と日本作家(以下4件)	
H	支那を描くといふこと／酒井森之介	対支認識、近代日本作家の支那観（3種）
H	支那と事変／千田九一	文学作品の支那像

H	芥川の「支那遊記」をよんで／古谷綱武	「支那遊記」、芥川龍之介の支那観の批判
H	支那を書くといふこと／竹内好	阿部知二の「北京」、対支認識、多田裕計の「長江デルタ」、『中国文学』（民国三十年記念特輯）の失敗
I	奥地支那の大学（ディーン）／編集部訳	戦時下の支那高等教育、国民党政府の教育統制
H	佐藤春夫「支那雑記」／武田泰淳	支那に対する唯美的な見方、書評
H	石浜知行他五氏共著「上海」／幼方直吉	都市上海の近代性と国際性、ジャーナリストの随筆、書評
H	青木正児「江南春」／竹内好	支那学者に対する新認識
K	通信／柳田泉、新垣淑明	読者たより
D	林琴南翁／今関天彭	林紘、略伝
D,E	明代の言語資料としての「元朝秘史」について／小林高四郎	元末明初の支那語、研究資料紹介
K	文化消息	韶関の文化施設、華文雑誌「東光」
K	後記（斉藤） 広告（生活社）	

第八十一号 1942年2月1日 （竹内好） 40P 生活社出版

F	大陸の美術／三浦常夫	熱河（建築、佛像）、北京（博物館、骨董）、雲崗（石佛）、南京（文物）、支那文化の腐敗
H	「上海繁昌記」其他／増田渉	「滬遊雑記」、内容、日本翻刻本、「上海繁昌記」の成り立ち
B2	老残遊記の面白さ／田中克己	「老残遊記」、文学的価値、史料的面白さ
A	書評『馬相伯先生年譜』／実藤恵秀	馬相伯、近代政治の縮影、外憂内乱事変を目睹した唯一人
G	玉璜伝（創作）／武田泰淳	小説
A	周作人について／吉田敏幸	書簡
H	「支那民俗誌」の焼失／竹内好	永尾龍造
K	文化消息	曹禺「北京人」、武漢青年劇団、陳大悲の紙芝居
K	後記（竹内）	

第八十二号〔南方と中国文学特輯〕 1942年3月1日 （竹内好） 44P 生活社出版

B1	商人の妻（落華生）／千田九一訳	「商人婦」翻訳
B1	バーモからマンダレーへ（艾蕪）／岡崎俊夫訳	ミャンマー、風景、平民の顔
I	「南海寄帰伝」供養その他一支那・佛教・南方などー／鏡島寛之	義浄法師、「南海寄帰伝」、仏教の東南アジア（南方圏）伝播

D	「乗槎筆記」の星嘉坡	斌椿、木版画
K	南方地名漢英対照表	東南アジア地名
南方関係支那文献解説(一)／編輯部(以下5件)		
D	呉広需「南行日記」／武田泰淳	印度視察記(1881年)
A	「民俗」檳榔專号／武田泰淳	ビンロウの歴史
D	王昶「征緬紀聞」／武田泰淳	戦争報告(1769年、ビルマを攻めた)
A	落華生「綴網勞蛛」／千田九一	創作集、南方(南洋)を書いた支那の小説
A	艾蕪「漂泊雜記」／岡崎俊夫	西南辺境紀行
K	後記の詩(武田)	
K	正誤表(四) 広告(生活社)	

【第八卷】

第八十三号〔日本と支那語特輯〕*四、五月合併号 1942年5月1日 (竹内好) 89P 生活社出版

E	支那語界・回顧と展望／魚返善雄	支那語の日本受容、支那語学に関する理解
E	明治初期の支那語*大東亜戦争雜詩付／中田敬義	個人的な支那語勉強経験、明治初期の日清関係
E	詠帰舎閑話／宮島大八	個人的な支那語勉強経験、明治初期、興亜学校(興亜会)、「古逸叢書」
E	陸軍と支那語／坂西利八郎	日清貿易研究所、個人的な支那語勉強経験
E	外交と支那語／岩村成允	個人的な支那語勉強経験、支那留学、領事時代の支那語応用、欧米の支那語、チャイルス博士
E	出版と支那語／田中慶太郎	東京の外国語学校、文求堂初期の出版、支那語科と教科書、福島将軍(福島安正)
E	台湾と支那語／曹欽源	台湾の支那語教育、内地人(日本本土)側の台湾語研究
E	日清貿易研究所と東亜同文書院／鈴木扨郎	日清貿易研究所の成立、南京同文書院、東亜同文書院
E	思ひ出づる支那語研究の懐古*写真付／青柳篤恒	個人的な支那語勉強経験、明治時代支那語教育、詠帰舎、宮島大八
E	支那語一夕話／秩父固太郎	個人的な支那語勉強経験、教授法研究、支那語教授の現状
E	伊沢修二のこと／竹内好	略歴、吃音矯正法の発明と実践、支那語音表記符号
K	寸言集／宮原民平・永持徳一・有馬健之助	支那語研究に対する希望と意見

E	日本支那語研究年表(明治の部)／実藤恵秀・魚返善雄	
E	書評:松本亀次郎「華訳日本語会話教典」／実藤恵秀	日本見学編の面白さ
H	書評:岩波新書の「香港」(小椋広勝)と「上海」(殿木圭一)／実藤恵秀	文化面(教育・学術)の展望の不十分、日本人という方面の閑却
A	書評:新民印書館編纂「北京案内記」／実藤恵秀	内容紹介(観光篇、案内篇、生活篇)
K	執筆者紹介	
K	後記(実藤)、広告(生活社)	

第八十四号〔中国文芸の精神特輯〕 1942年6月1日 (竹内好) 33P 生活社出版

J	会員及び一般読者諸君への緊急のお願い	紙配給の窮屈、書店への配布を中止
C2	支那文学の精神(座談会) 東方文化研究所経学文学研究室／吉川幸次郎、平岡武夫、安田二郎、入矢義高、田中謙二、小尾郊一	「精神」の意味、文学論＝文辞の技巧論、詩の精神、調和の文学、劇曲小説(人生の再現)、現代文学(鍛錬足りない)
D	支那画の精神／増田渉	山水画、2種類の画家、現実への否定的精神、運命と戦う精神
A	支那の星／須田禎一	近代新詩における星、星座との対照
E	想ひつきしまま／奥平定世	支那語勉強法の批判(注音符號)
K	文化消息	上海映画界の転換
K	後記(竹内)	

第八十五号〔新文化の建設特輯〕 1942年7月1日 (竹内好) 29P 生活社出版

H	漫談二題／内山完造	日本と支那の城、支那の食人論への指摘
H	かくれたる先輩—林善一氏のこと—／実藤恵秀	林善一、『留東外史』翻訳、排日の種本
H	新しき和平文化／林俊夫	「日支提携」の裏側(自慰的行為)、新鋭文化人の退歩(抗戦文化層の勝利)
H	対支文化工作について／梅沢康夫	見世物文化の現代支那、文化浸透
J	通信／齋藤秋男	『中国文学』に対する元編集者の思い
A	中支劇界通信／升屋治三郎	上海話劇、『楚霸王』と『楊貴妃』、『夢裏京華』、『武漢青年劇団』
A	新中国の文化建設(中華日報)／編集部訳	文化団体の活動、文化溝通の情況、文化事業の調整と接収
F	旅日記抄・一／竹内好	北京風景、国語辞典編纂處、俞平伯、同蒲線(戦時下日本人と中国人の接触)

K	訂正／周作人	徐祖正との関係の訂正
K	後記（竹内） 広告（生活社）	

第八十六号 1942年8月1日 （竹内好） 29P 生活社出版

F,G	公寓／小森政治	北京生活、日本人の中国観
D	定本日本雑事詩について／豊田穰、実藤恵秀	定本『日本雑事詩』の由来
F	旅日記抄・二／竹内好	太原、開封、杭州
K	後記（竹内） 会告 広告（生活社）	

第八十七号 1942年9月1日 （竹内好） 33P 生活社出版

B2	思痛記・一（李小池）／松枝茂夫訳・解説	『思痛記』、太平天国、戦争文学、翻訳
A	啼笑因縁に就て／飯塚朗	『啼笑因縁』にまつわる著作権侵害事件、張恨水、大衆小説
F	旅日記抄・三／竹内好	上海の民家、上海の都会的性格
K	新刊摘録	
K	後記（竹内） 会告 広告（生活社）	

第八十八号 1942年10月1日 （竹内好） 32P 生活社出版

A	現代支那文化襍感／矢野安房	五四運動、郷村建設運動、新生活運動など
B2	思痛記・二（李小池）／松枝茂夫訳	『思痛記』、太平天国、戦争文学、翻訳
A	啼笑因縁の梗概／飯塚朗	啼笑因縁、あらすじ
F	通信／齋藤秋男	現地報告
K	後記（竹内） 会告 広告（生活社）	

第八十九号 1942年11月1日 （竹内好） 25P 生活社出版

I	「北京籠城」について／清見陸郎	義和団事変に関する外国語文献、戦争文学
B2	思痛記・三（李小池）／松枝茂夫訳	『思痛記』、太平天国、戦争文学、翻訳
F	旅日記抄・四／竹内好	「齋藤茂吉ノート」
J	大東亜文学者大会について／竹内好	大東亜文学者大会への援助を拒否した理由
K	後記（竹内） 広告（生活社）	

第九十号 1942年12月1日 （竹内好） 17P 生活社出版

D	清代公羊学の形成に就て／竹内照夫	毛奇齡と孔広森
H,I	金雲翹について／太田辰夫	中国小説を題材にしたベトナム古典文学、馬琴『風俗

		金魚伝』、日・支・安南の文化交渉
K	後記（竹内）	

第九十一号 1943年1月1日 （竹内好） 29P 生活社出版

H	鑑真と弘法—中日文化交流史上の二和尚—（褚民誼） ／実藤恵秀訳	唐代日中文化交流、仏教の伝播、漢語の影響、日本の 平民教育
B2	思痛記・四（李小池）／松枝茂夫訳	『思痛記』、太平天国、戦争文学、翻訳
D,E	「好述伝」の翻訳を讀みて／豊田穰	「好述伝」（佐藤春夫訳）の誤訳
K	後記（竹内） 広告（生活社）	

第九十二号〔終刊号〕 1943年3月1日 （竹内好） 64P 生活社出版

G	閃鑠／武田泰淳	小説
A	苦悶の作家—巴金の生ひ立ち— 附・巴金著作目録／飯塚朗	巴金略伝
F	北京行状記／岡崎俊夫	北京風景、人力車、支那服、白薯
J	無題／実藤恵秀	会に関する回想
J	断想／猪俣庄八	会に関する回想
A,D	雑書雑談／増田渉	『滬遊雑記』、『博物新詩』、『徐愚齋自叙年譜』、『瀛壖 雑誌』
H	蘇州日記を讀んで／豊田穰	高倉正三、蘇州見聞、書評
J	長泉院の夜—中国文学の廃刊に寄せて—／千田九一	廃刊原因
J	中国文学の廃刊と私／竹内好	廃刊原因の説明
J	通信／松枝茂夫	廃刊支持の意
J	中国文学の廃刊について	廃刊声明
J	中国文学（中国文学月報）総目次	
J	中国文学研究会大事略記	

参考文献

*すべて時間順

【日本語文献】

新聞記事

「外交難局に非ず 躍進的国家に非常時は当然 広田外相抱負を語る」(『朝日新聞』朝刊、1933.9.15)

「日支親善は文学から——魯迅氏の弟中心に歓迎会」(『読売新聞』、1934.8.2)

「日支の学者六十名 文化交換に提携 九月北京に新団体結成」(『朝日新聞』朝刊、1938.8.2)

「大会宣言」(『朝日新聞』朝刊、1942.11.6)

雑誌および雑誌記事

『中国文学月報』、『中国文学』〔全 92 号、復刻〕(汲古書院、1971)

犬養毅「支那保全と東亜」(『朝鮮公論』1 卷 9 号、1913)

犬養毅「支那問題と日本帝国の国是」(『支那』4 卷 2 号、東亜同文会、1913)

犬養毅「禍根を将来に残す勿れ」(『洪水以後』8、一元社、1916)

小柳司気太「日本と漢学の思想」(『明治聖徳記念学会紀要 23』、明治聖徳記念学会、1925)

犬養毅「内憂外患の対策」(『朝鮮及満州』294 号、朝鮮雑誌社、1932)

吉田茂「漢学の殻を出てよ」(『斯文』第 15 編第 4 号、斯文会、1933)

塩谷温「非常時と漢学」(『斯文』第 15 編第 9 号、斯文会、1933)

島田和夫「同志徳永の理論的誤謬について」(『プロレタリア文学』1933.10)

宮本百合子「社会主義リアリズムの問題について」(『文化集団』1 卷 6 号、1933.11)

広田弘毅「日本外交の基礎」(『中央公論』第 49 卷第 1 号、1934)

柳沢健「周・徐両先生を迎へて」(『支那』25 卷 9 号、東亜同文会、1934.9)

村田修子「来朝中の中国女流作家謝冰瑩女史を囲んで」(『婦人文藝』、新知社、1935.1)

諸橋轍次「国学としての漢学」(『斯文』第 17 篇第 3 号、斯文会、1935)

塩谷温「我が国体と漢文」(『斯文』第 19 編第 9 号、斯文会、1937)

宇野哲人「儒教の現代的意義」(『斯文』第 19 篇第 6 号、斯文会、1937)

坂井喚三「日本主義と漢学」(『斯文』第 19 篇第 6 号、斯文会、1937)

飯島忠夫「国体の明徴と支那の覚醒」(『斯文』第 19 篇第 12 号、斯文会、1937)

手塚良道「国民精神と漢学に就いて」(『精神科学』3、精神科学会、1938)

津田左右吉「日本に於ける支那学の使命」(『中央公論』、1939.4)

伊地智善繼「支那の国語運動と日本の支那語についての感想」(神谷衡平・宮原民平・清水元介編『華語集萃』、螢雪書院、1942)

尾崎秀樹「魯迅的思考・竹内好」(『日本』8巻2号、講談社、1965.2)

「増田渉教授略歴(自記による)」(『人文研究』第19巻第10号、大阪市立大学文学部、1968)

鹿地亘「竹内好の文学思想——魯迅論をめぐって」(『民主文学』28号、日本民主主義文学会、1968.3)

駒田信二「『中国文学研究会』で」(『文学界』30巻12号、文藝春秋社、1976.12)

増田渉「思い出すこと」(関忠果など編『雑誌『改造』の四十年』、光和堂、1977)

松枝茂夫「増田渉さんの思い出あれこれ」(『文学』45巻5号、岩波書店、1977.5)

堀田善衛「彼岸西風——武田泰淳と中国」(『世界』379、岩波書店、1977.6)

宇野精一「戦前・戦中・戦後の時期——漢学会から東京支那学会へ——」(『中哲文学会報』第3号、東大中哲文學會、1978)

粕谷一希「保田與重郎と竹内好」(『諸君』11巻9号、文藝春秋、1979.9)

竹内好「竹内好の手紙(上)」(井上光晴編『辺境』5、影書房、1987.10)

武田泰淳「戦地からの手紙」(井上光春編『辺境』7、影書房、1988.5)

論文

尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」(『文学』29巻5号、岩波書店、1961.5)

安田武「武田泰淳の文学とひとつの謎——その戦争体験について1」(『文学』29巻12号、岩波書店、1961.12)

安田武「武田泰淳の文学とひとつの謎——その戦争体験について2」(『文学』30巻4号、岩波書店、1962.4)

山敷和男「武田泰淳の中国文学論について」(『漢文学研究』11、早稲田大学漢文学研究会、1963.12)

戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点」(『理想』397、理想社、1966.6)

佐々木充「武田泰淳における『文化』——『司馬遷』の成立まで」(『帯広大谷短期大学紀要』6、1969.3)

大内秋子「佐藤春夫と支那文学」(『日本文學』37、東京女子大学、1971.1)

近藤龍哉「中国文学研究会について」(『歴史評論』269、校倉書房、1972.11)

高橋春雄「政治と文学論争史——戦前における三つの論争を中心に」(『国文学解釈と鑑賞』38巻14号、至文堂、1973.11)

幼方直吉「北京・上海における竹内好の生活とその意味」(『思想の科学』第6次91、1978.5)

竹内実「武田泰淳の中国体験」(『国文学解釈と教材の研究』第25巻第7号、学燈社、1980.6)

- 前田愛「SHANGHAI 1925：都市小説としての『上海』」（『文学』49 卷 8 号、岩波書店、1981）
- 児野道子「孫文を繞る日本人——犬養毅の対中国認識」（平野健一郎編『近代日本とアジア：文化の交流と摩擦』、東京大学出版社、1984）
- 丸山昇「『魯迅添削・呉組細宛増田涉書簡原稿』解説」（『汲古』10、汲古書院、1986.12）
- 北河賢三「戦時下の世相・風俗と文化」（藤原彰・今井清一『十五年戦争史 2』、青木書店、1988）
- 陳イ芬「『斯文学会』の形成と展開--明治期の漢学に関する一考察」（『中国哲学論集』21、九州大学中国哲学研究会、1995）
- 佐藤一樹「漢文における近代アイデンティティの模索——漢文科をめぐる明治、大正の論議」（『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』53、1995）
- 木田隆文「武田泰淳従軍期年譜考」（『国文学論叢』42、龍谷大学、1997.2）
- 代田智明「自分を滅ぼすことで悪を滅ぼす」（『アジア遊学』25 号、勉誠出版、2001.3）
- 大原祐治「北京の輩と兵隊——「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳」（『学習院大学人文科学論集』11、学習院大学、2002）
- 孫歌「日本漢学の臨界点——荻生徂徠・竹内好から引き継ぐもの」（原田勝正編『「国民」形成における統合と隔離』、日本経済評論社、2002）
- 大原祐治「羅漢と仏像——雑誌「中国文学」における竹内好・武田泰淳」（『昭和文学研究』45、2002.9）
- 丸川哲史「イメージと中国の敵対：武田泰淳における経験と夢」（『ユリイカ』471、青土社、2003.1）
- 竹内栄美子「日本近代文学のアジア（7）武田泰淳の〈中国〉——魯迅と竹内好と」（『アジア遊学』53、勉誠出版、2003.7）
- 十重田裕一「改造社のメディア戦略と上海——第二次世界大戦前日本の『中国』言説の一側面」（『アジア遊学』62、勉誠出版、2004.4）
- 趙暉「謝氷瑩と中国文学研究会——竹内好、武田泰淳との交誼を中心に」（『人文学報』352、東京都立大学人文学会、2004）
- 秋吉収「『中国文学（月報）』と中国語：竹内好らの活動を軸として」（『中国文学論集』35、九州大学中国文学会、2006）
- 大里浩秋「同仁会と『同仁』」（『人文学研究所報』39、神奈川大学、2006.3）
- 王俊文「一九三八年の北京に於ける竹内好と『鬼』の発見——ある『惨として歡を尽くさず』の集まりを中心として」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 10 号、2007.11）
- 斎藤希志「『支那学』の位置」（『日本思想史学』39、日本思想史学会、2007）
- 吉田公平「近代の漢学」（『日本思想史学』39、日本思想史学会、2007）

勝山稔「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について--佐藤春夫「百花村物語」を中心として」(『中央大学アジア史研究』32、白東史学会、2008.3)

岡山麻子「武田泰淳の文化論——日本近代文化への視座と『司馬遷』」(『近代日本研究』26、慶應義塾福沢研究センター、2009)

孔穎「晚清中央政府の法制官董康の日本監獄視察について」(『或問』第18号、近代東西言語文化接触研究会、2010)

熊文莉「中国文学研究会にとっての「翻訳」」(『朝日大学一般教育紀要』36、朝日大学、2010)

小松原孝文「破壊と建設の文学へ向けて：保田與重郎『アンチ・デイレッツタンチズム』」(『日本文学』60巻9号、2011)

勝山稔「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について：増田渉の事例（一九二七）を中心として」(『国際文化研究科論集』19、2011.12)

大日方純夫「内務省の検閲と第二次世界大戦前日本の出版文化」(鈴木登美・十重田祐一・堀ひかり・宗像和重編『検閲・メディア・文学——江戸から戦後まで』、新曜社、2012)

中谷いずみ「日中戦争の時代——アジア進出と『民衆』の登場」(戦争と文学編集室『コレクション 戦争と文学 別巻〈戦争と文学〉案内』、集英社、2013)

根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇——『中央公論』誌を中心に」(『現代中国研究』、中国現代史学会、2015)

著書

斯文会『斯文六十年史』(斯文会、1929)

『満洲と満鉄』(南満州鉄道株式会社、昭和13年版)

牧野謙次郎『日本漢学史』(世界堂書店、1938)

實藤惠秀『日本文化の支那への影響』(蜚雪書院、1940)

倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』(岩波書店、1941)

『会員名簿：昭和18年度』(日本文学報国会、1943)

松枝茂夫訳『現代中国文学全集第八巻 沈從文篇』(河出書房、1954)

京都大学文学部編『京都大学文学部五十年史』(京都大学文学部、1956)

岡崎俊夫『天上人間：岡崎俊夫文集』(河出書房新社、1961)

竹内好『魯迅』(未来社、1961)

六角恒廣『近代日本の中国語教育』(播磨書房、1961)

近代中国研究センター編『中国関係日本文雑誌論説記事目録2』(創文社、1965)

武田泰淳『司馬遷——史記の世界』(講談社、1965)

竹内実『日本人にとっての中国像』(春秋社、1966)

広田弘毅伝記刊行会編『広田弘毅』(広田弘毅伝記刊行会、1966)

鷲尾義直編『犬養木堂伝』中巻（原書房、1968）
 近代文学同人編『近代文学の軌跡』（豊島書房、1968）
 六角恒広『中国語関係書書目』（早稲田大学語学教育研究所、1968）
 東亜同文会編『対支回顧録（上）』（原書房、1968）
 『吉川幸次郎全集』⑰（筑摩書房、1969）
 近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』（鹿島研究所出版会、1969）
 竹内好『状況的：竹内好対談集』（合同出版、1970）
 増田渉『魯迅の印象』（角川選書、1970）
 村松暎編『奥野信太郎 回想集』（三田文学ライブラリー、1971）
 竹内良夫『華麗なる生涯：佐藤春夫とその周辺』（世界書院、1971）
 『武田泰淳全集』①（筑摩書房、1971）
 『武田泰淳全集』⑪（筑摩書房、1971）
 『武田泰淳全集』⑫（筑摩書房、1972）
 『武田泰淳全集』⑬（筑摩書房、1972）
 『武田泰淳全集』⑮（筑摩書房、1972）
 『武田泰淳全集』⑯（筑摩書房、1972）
 神谷忠孝、高橋春雄、吉田熙生編『現代文芸評論』（双文社、1973）
 埴谷雄高編『武田泰淳研究』（筑摩書房、1973）
 武田泰淳・堀田善衛『対話 私はもう中国を語らない』（朝日新聞社、1973）
 倉石武四郎『中国語五十年』（岩波書店、1973年）
 竹内好・橋川文三『近代日本と中国（上）』（朝日新聞、1973）
 竹内好・橋川文三『近代日本と中国（下）』（朝日新聞、1974）
 六角恒広・横山宏『中国語への道』（大修館書店、1975）
 松本健一『竹内好論：革命と沈黙』（第三文明社、1975）
 矢部貞治『近衛文磨』（読売新聞社、1976）
 武田泰淳『自伝：身心快樂』（創樹社、1977）
 武田泰淳『生きることの地獄と極楽』（勁草書房、1977）
 坂野潤治『明治・思想の実像』（創文社、1977）
 竹内好追悼号編集委員会『追悼 竹内好』（刊々堂出版社、1978）
 竹内好『方法としてのアジア』（創樹社、1978）
 兵藤正之助『武田泰淳論』（冬樹社、1978）
 『武田泰淳全集』別巻二（筑摩書房、1979）
 倉石武四郎『ことばと思惟と社会』（くろしお出版、1981）
 『竹内好全集』⑦（筑摩書房、1981）

- 『竹内好全集』⑩（筑摩書房、1981）
『竹内好全集』⑫（筑摩書房、1981）
『竹内好全集』⑬（筑摩書房、1981）
『竹内好全集』⑭（筑摩書房、1981）
『竹内好全集』⑮（筑摩書房、1981）
野村浩一『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』（研文出版、1981）
『竹内好全集』⑰（筑摩書房、1982）
熊倉正弥『新聞の死んだ日々』（朝日ソノラマ、1982）
増田渉『雑書雑談』（汲古書院、1983）
畢克官著・落合茂訳『中国漫画史話』（筑摩書房、1984）
丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』（東京堂出版、1985）
東亜文化研究所編『東亜同文会機関誌・主要刊行物総目次』（霞山会、1985）
『保田與重郎全集』②（講談社、1985）
吉川幸次郎『漢文の話』（筑摩書房、1986）
原覚天『満鉄調査部とアジア』（世界書院、1986）
文化集団社編『「文化集団」別巻』（久山社、1986）
鷺田小彌太『昭和思想史60年』（三一書房、1986）
『保田與重郎全集』⑳（講談社、1988）
井上清・衛藤瀋吉『日中戦争と日中関係』（原書房、1988）
安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書、1988）
東亜文化研究所編『東亜同文会史』（霞山会、1988）
小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年（上）』（集英社、1988）
六角恒廣『中国語教育史論考』（不二出版、1989）
溝口雄三『方法としての中国』（東京大学出版会、1989）
『保田與重郎全集』別巻五（講談社、1989）
『後期プロレタリア文学評論集2』（新日本出版社、1990）
『海を越えた友情——増田渉と魯迅』（鹿島町立歴史民俗資料館、1990）
芦谷信和、上田博、木村一信編『作家のアジア体験：近代日本文学の陰画』（世界思想社、1992）
北条常久『「種詩く人」研究——秋田の同人を中心として』（桜楓社、1992）
藤井省三『東京外語支那語部：交流と侵略のはざままで』（朝日新聞社、1992）
江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店、1992）
中村隆英『昭和史I』（東洋経済新報社、1993）
大原信一『近代中国のことばと文字』（東方書店、1994）

子安宣邦『近代知のアルケオロジー』（岩波書店、1996）
桶谷秀昭『保田與重郎』（講談社、1996）
川西政明『わが幻の国』（講談社、1996）
小林英夫『満鉄——「知的集団」の誕生と死』（吉川弘文館、1996）
祖父江昭二『近代日本文学への射程——その視角と基盤と』（未来社、1998）
霞山会編『東亜同文会史論考』（霞山会、1998）
長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』（吉川弘文館、1998）
斯文会編『財団法人斯文会八十年史』（斯文会、1998）
松枝茂夫『中国文学のたのしみ』（岩波書店、1998）
エドワード・E・サイード著/大橋洋一訳『知識人とは何か』（平凡社、1998）
鹿野正直『近代日本思想案内』（岩波書店、1999）
松枝茂夫『松枝茂夫文集』第二卷（研文出版、1999）
藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』（大明堂、1999）
小林英夫『近代日本と満鉄』（吉川弘文館、2000）
東方学会編『東方学回想（全9巻）』（刀水書房、2000）
杉野要吉編『交争する中国文学と日本文学——淪陥下北京 1937-1945』（三元社、2000）
西所正道『「上海東亜同文書院」風雲録：日中共存を追い続けた五〇〇〇人のエリートたち』（角川書店、2001）
小島晋治等編『20世紀の中国研究：その遺産をどう生かすか』（研文出版、2001）
翟新『東亜同文会と中国』（慶応義塾大学出版会、2001）
吉見俊哉編『1930年代のメディアと身体』（青弓社、2002）
岡山麻子『竹内好の文学精神』（論創社、2002）
斎藤秋男『“大正”文学少年懐古』（龍溪書舎、2002）
本庄比佐子、内山雅生、久保亨編『興亜院と戦時中国調査』（岩波書店、2002）
礪波護、藤井讓治編『京大東洋学の百年』（京都大学学術出版会、2002）
藤井（宮西）久美子『近現代中国における言語政策：文字改革を中心に』（三元社、2003）
王成『阿部知二が描いた“北京”』（国際日本文化研究センター、2004）
川西政明『武田泰淳伝』（講談社、2005）
藤井省三編『「帝国」日本の学知5 東アジアの文学・言語空間』（岩波書店、2006）
小林英夫『満鉄調査部の軌跡：1907-1945』（藤原書店、2006）
倉石武四郎『本邦における支那学の発達』（汲古書院、2007）
満鉄会『満鉄四〇年史』（吉川弘文館、2007）
加々美光行『鏡の中の日本と中国：中国学とコ・ピヘイビオリズムの視座』（日本評論社、2007）

- 太田尚樹『伝説の日中文化サロン：上海・内山書店』（平凡社、2008）
- 王敏編『国際日本学とは何か？日中文化の交差点』（三和書籍、2008）
- 中村春作・市来津由彦・田尻祐一郎・前田勉編『「訓読」論：東アジア漢文世界と日本語』（勉誠出版、2008）
- 石毛慎一『日本近代漢文教育の系譜』（湘南社、2009）
- 中村春作・市来津由彦・田尻祐一郎・前田勉編『続・「訓読」論：東アジア漢文世界と日本語』（勉誠出版、2010）
- 丸川哲史『竹内好：アジアとの出会い』（河出書房新社、2010）
- 馬場公彦『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』（新曜社、2010）
- 渡邊一民『武田泰淳と竹内好——近代日本にとっての中国』（みすず書房、2010）
- 鶴見俊輔『竹内好——ある方法の伝記』（岩波書店、2010）
- 勝山稔編『小説・芸能から見た海域交流』（汲古書院、2010）
- 松本三之介『近代日本の中国認識——徳川期儒学から東亜協同体論まで』（以文社、2011）
- 胡桃沢耕史ほか著『コレクション 戦争と文学 7 日中戦争』（集英社、2011）
- 川西政明『新・日本文壇史 6：文士の戦争，日本とアジア』（岩波書店、2011）
- 米原謙・金鳳珍・區建英『東アジアのナショナリズムと近代——なぜ対立するのか』（大阪大学出版会、2011）
- 子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』（青土社、2012）
- 山口俊雄編『日本近代文学と戦争——「十五年戦争」期の文学を通じて』（三弥井書店、2012）
- 井上桂子『中国で反戦平和活動をした日本人——鹿地亘の思想と生涯』（八千代出版、2012）
- 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』（創元社、2014）

【中国語文献】

雑誌記事：

- 岡崎俊夫「我們的『中国文学』」（『藝文雑誌』第2巻第2号、1944.2）

論文、著書：

- 章太炎『国故論衡』中巻（上海文瑞樓書局、出版年不明）
- 『梅斐爾徳木刻士敏土之圖』（三間書屋、1930）
- 葉紫『豊収』（奴隸社、1935）
- 『魯迅書簡——致日本友人増田涉』（香港朝陽出版社、1973）

- 茅盾『茅盾文芸雜論集』上集（上海文芸出版社、1981）
- 沈從文『沈從文文集 第四卷·小說』（花城出版社、1982）
- 『老舍文集』⑮（人民文学出版社、1990）
- 楊義·中井政喜·張中良『二十世紀中国文学図志（上、下）』（業強出版社、1995）
- 費錦昌編『中国語文現代化百年記事（1892年——1995年）』（語文出版社、1997）
- 張菊香·張鉄榮編『周作人年譜（1885—1967）』（天津人民出版社、2000）
- 孫歌『主体弥散的空間：亞洲論述之兩難』（江西教育出版社、2002）
- 李慶『日本漢学史』第二部（上海外語教育出版社、2004）
- 葉浅予『葉浅予自伝：細叙滄桑記流年』（中国社会科学出版社、2006）
- 徐冰『20世紀三四十年代中国文化人的日本認識——基于《宇宙風》雜誌的考察』（商務印書館、2010）

謝 辞

本論文の作成にあたっては構想段階から完成に至るまで、実に多くの先生方からのご助力を賜りました。主指導教員を担当してくださった勝山稔教授には、長期にわたって丁寧なご指導を頂きました。本論文を提出するにあたって、心より御礼申し上げます。勝山先生からは論文上の指導だけではなく、日常生活の面も様々なサポートを頂きました。研究が進まない時期もありましたが、先生より頂いた暖かい応援のお言葉のおかげで、その都度立ち直ることができました。

また、講座の演習にて丁寧なご指導をくださった旧アジア文化論講座の石川秀巳教授、佐野正人准教授、およびアジア・アフリカ講座の黒田卓教授、大河原知樹准教授、朱琳講師にも深く感謝いたします。旧アジア文化論の演習では、つねに濃厚な議論を行いながら、自分の論文を繰返して検討することができました。そして、アジア・アフリカ講座の演習では、黒田先生、大河原先生、朱先生は幅広い視野からの様々なご指摘を頂くことができました。なお、東北大学大学院文学研究科日本思想史講座の片岡龍先生から、専門分野以外の視点からたくさんのご教示をいただきました。心より感謝いたします。

そして、みずほ国際交流奨学財団からは、2012年から2014年まで多大な支援を頂きました。奥寺訓久氏からいつも暖かい励みの言葉を賜り、感謝を申し上げます。また、小林節太郎記念基金の在日留学生研究助成プログラムのおかげで、中国での資料調査を実施することもできました。

お世話になった全ての方々のお名前を並べることができませんが、李敬淑さん、大谷亨さん、陳熙さんを始め、先輩の方々、および大学院生の方々など研究室のメンバーには常に刺激的な議論を頂き、精神的にも支えられました。また、大谷亨さんと金成栄一さんは、ネイティブチェックのお手伝いをしてくだりました。本当にありがとうございました。

参 考 論 文

朱 琳

武田泰淳のインテリ論と戦争体験
―「新しき知的士族について」を中心に―

朱琳

武田泰淳のインテリ論と戦争体験

—「新しき知的士族について」を中心に—

朱 琳

問題の所在と先行研究

武田泰淳（一九二二—一九七六。以下「泰淳」と省略する）は、一九四三年に処女作『司馬遷』を出版後、「審判」（一九四七）、「秘密」（一九四七）、「蝮のすゑ」（一九四七）等の作品を発表し、戦後派作家としての地位を築いた。

そのため泰淳に関する先行研究の大半は、戦後における文筆活動に集中していたが、一九六〇年代に入ると、泰淳が作家に転身する以前の活動も注目されるようになった。その嚆矢となったのが安田武である。安田は、「秘密」を初めとした一連の作品を掲げ、泰淳の戦争体験と対照しながら、その文学的原点の在処と思想的主題を考察した⁽¹⁾。そして安田の後、泰淳の戦争体験に関する研究が発表された⁽²⁾。

近年においては思想的な観点に立ち、泰淳とその周辺人物——特に竹内好との関係についての考察も行われるようになった。例えば渡邊一民は、泰淳と竹内に焦点を当て、二人の間に見える「竹内が短兵急に新し

い問題提起をおこなう一方、泰淳がつねに一歩さがって多様な角度から検討する複眼的視座を守りぬいた⁽³⁾」という関係を明らかにしている。

このように、渡邊一民の試みを除けば、泰淳に関する研究の多くが、文学的考察であり、かつ泰淳の戦争体験を手掛かりに彼の文学作品を読み解くという手法で共通していた。しかしこれらの先行研究には、二つの視点が欠けているのではないかと筆者は考えている。それが泰淳の①戦争体験後の思索と、②戦後日本の前途に対する思考である。

泰淳は戦時中のみならず、その生涯を通じて、戦争や中国に対するさまざまな思索を絶えず行っていた。また彼は中国での体験や観察を通じて、戦後日本の行方も深く思念していた。つまり、泰淳を考察する場合には、文学的視座のみならず、思想的な視座からもアプローチする必要がある。

かかる視座に立脚した場合、特に注目すべき点は、泰淳による敗戦直後の言論である。敗戦によって「戦後」の意識が形成され始めたこの時期、日本では多くの知識人が活発な思想的活動を行い、戦後の知識人の

あるべき姿が論じられたが、小説家である泰淳も、「新しき知的士族について」を執筆し、積極的に知識人のあり方に関する議論に参加していたのである。

この文章は一九四九年に自殺したユダヤ系ドイツ人作家クラウス・マン (Klaus Mann) (4) の遺書に対する反論で構成されている。その中で泰淳は、クラウス・マンの言論を引用しながら、彼の予言したインテリの死を痛烈に批判した。これは、敗戦直後から盛んに行われていた近代化論(5)を想起させる。日高六郎の指摘した「欠如理論(6)」のように、当時の知識人は、敗戦後の日本の近代化問題を検討する際に、つねに他者(＝西欧)から近代化の基準を求め、いかに近代的人間を確立するかを思考していた。

このような状況下、当初泰淳はこの議論に参加していなかったが、近代化の基準を殊更に西欧に求める風潮に抗い、「アジア」の立場から近代日本知識人のあり様を追求した「新しき知的士族について」を執筆する。そのためこの文章は、泰淳の思想を探りうる重要な一篇であると同時に、当時の日本知識人が他者をいかに認識していたのかを知ることができる格好の資料ともいえる。

本稿は、まずクラウス・マンと泰淳とを比較しながら、泰淳のインテリ論を把握する。そして、なぜ泰淳が当時絶望に陥っていたインテリに対して「生」を強調したのかを考察するため、彼の背後にある戦争体験と、その思想的根源を探ることしたい。

一 クラウス・マンの死および日本での余波

泰淳のインテリ論を検討する前に、クラウス・マンの自殺について触れる必要がある。

クラウス・マンはその生涯において、第一次世界大戦・ナチスやファ

シズムの台頭・第二次世界大戦など、さまざまな歴史上の重大事件を経験した。彼は祖国ドイツから亡命し、反ナチス作家として活動したが、ファシズムの権力の前に孤独感と無力さを実感した(7)。そして彼は東西冷戦に突入した世界の将来を悲観し、一九四九年自ら生命を絶った。彼の遺書の中では、冷戦下のヨーロッパとインテリについて、以下のよう

に述べられている。

引き裂かれ苦しめられたヨーロッパといふ地球上の一角の空気は弾劾と逆ねちと侮辱と誹謗と罵言とに満ちみちてゐる。東と西とが睨み合つて対峙してゐる一方では、イデオロギーの戦ひはヨーロッパの最もすぐれた人々をすべて動員してゐるのだ。中立、明智、客観性といふやつなものには極悪非道の裏切り行為だと考へられてゐる。自己の態度を明かにし、錨をおろし、戦ひ、兵士となること、それがインテリの使命だとされてゐる。(8)

つまり当時のヨーロッパのインテリは、共産主義か資本主義かというイデオロギー上の二者選択を強いられており、クラウス・マンは「自殺」という行為によって、自分の真の知性への追求、客観的に思考する権力を守ろうとしたのである(9)。このように、クラウス・マンの自殺の余波は、日本にまで到達したのである。

まさに一九五〇年代の日本は、「混沌」といわれている時代となっていた(10)。冷戦の深刻化や朝鮮戦争の勃発、激動する国内外の時局(11)に対して、多くの知識人が無力感を抱いていた。例えば、一九五二年五月に発行された『群像』において、「日本のインテリゲンチヤは無力か」という特集があり、学者や作家などはインテリの「無力」に関してさまざまな意見を述べている。その中で、桑原武夫は、日本インテリの

弱さについて、①体力の弱さ、②蓄積した知識と現実の生活との結びつきが弱い、③インテリという身分によって生まれた「特権意識」という三点を指摘している(12)。また中野重治は、インテリの「無力」の実態について、『インテリ』がいくら平和を要求してもほとんど国が戦争方向へ持つて行かれる、いくら憲法をまもろうとしてもどしどし憲法改悪の風むきが強くなる。結局のところ、『インテリ』がいくら叫んでも実力にはかなわぬのではないかという意見がぼつぼつあらわれてきた。つまり『インテリ』無力論である(13)と述べている。

その上で泰淳の「新しき知的士族について」は、一九五二年に出版された『インテリは生きておられない』（久保田正文編、北辰堂）に収録されており、まさにこの背景から生まれたものである。本書では、クラウス・マンの遺書「インテリは生きておられない——ヨーロッパ精神の試練」（高橋義孝訳）(14)をめぐって、渡邊一夫、伊藤整、高橋義孝、中野好夫、泰淳などの知識人が、それぞれの見解を綴ったものである。

この中で興味深いのは、クラウス・マンが、自らの「死」によって政治的危機における無力なインテリの行方を示そうとした一方、日本の知識人たちは、反対の立場からインテリの「生」を主張した点である。

例えば、渡邊一夫は、「クラウス・マンの証言がいかにかのつびきならぬものであらうとも、またそれがいかに痛切なものであらうとも、（略）、私はクラウス・マンとは反対の結論をしか抱けないのである(15)」と表明し、さらに「大衆の代りに（敢てかういへば）思考し苦悶する知識人は、その責任上その役割上、時空を通じて結び合ひつつ、いかに苦しくとも、いかに切なくとも、生き通さねばならぬ(16)」と「生」の必要性を説明した。また、記者の高橋義孝は、クラウス・マンの文章の特徴を述べた上で、「私は今ここにかうして生きてゐる。それが『インテリゲンツレル』は生きてゐられるか、どうか」といふ問ひへの

私自身の明白な解答でなければならぬ(17)」と述べ、インテリの「生」の可能性を強調した。このように、渡邊一夫、伊藤整、高橋義孝、中野好夫は、西洋文学者あるいは評論家として、多かれ少なかれクラウスの自殺に注目することで、インテリの「生死」に関する議論を展開している。

これらの議論の中で、泰淳は他とは異なる見解を示している。ほかの執筆者と異なり、泰淳は戦時中から中国文学に深く関わりを持つ一方、西洋文学とは距離を保っていた。そしてクラウス・マンの自殺について、泰淳は、一人の「東方の文化人(18)」の視点から、「そもそもインテリとは何か」という問いを提示しているのである。

二 武田泰淳の「アジア」的なインテリ論

二・一 異なるインテリ観

泰淳の「新しき士族について」は、その副題目である「あやまれるインテリ論を駁す」からも分かるように、彼はクラウス・マンの主張に共感せず、そのインテリ論が間違っていると率直に断言した。両者のインテリ観を比較することによって、彼らの主張の違いが歴然と見えてくる。まずクラウス・マンを見てみよう。彼は遺書において、自分のインテリ観を以下のように提示した。

インテリの関心が僧侶のそれと同じく、就中精神的な価値に向けられてゐて、物質的な成功を狙つてはをらぬといふかぎりにおいて、インテリは僧侶の後継者であり世俗的対照物なのである。僧侶と同じやうにインテリは、人生や社会のことを判断するにあたつて純粹に功利的な「リアリスティック」な観点から出発せず、ある種の理

想をふまへて判断を下す。(略) インテリの使命は、自分自身の法則と福音、自分自身の真理を発見することにあるのだ。真のインテリは、何物をもそのまま受取らず、一切を疑ふ。(19)

彼の遺書にも触れている通り、クラウス・マンの論じる「インテリ」は、「批判的な知性」を持つ哲学者・文学者・科学者・芸術家を指し、物質的な成功や功利的な観点に左右されず、「ある種の理想」によって物事を判断する人々を意味する。クラウスの述べた「ある種の理想」とは、それぞれのインテリの希求する法則・真理で、「自ら進んで承認した根本的な諸価値や諸原理(20)」であるという。つまり、彼によって提示された「インテリ」は、理想主義的かつ懐疑主義的な人間像を示している。反ナチス亡命者であるクラウス・マンは、過酷な政治的弾圧・迫害を経験したからこそ、インテリの「批判的知性」を強調し、現実的に拘らない「理想」を重要視したのであろう。

その一方、泰淳は「インテリは、既に家運の衰頹をなげく老師の丁稚小僧ではない(21)」といい、自らのインテリ観について以下のように語っている。

彼等の有能な仲間、店の埃くさい商品をのろろと運ぶ古自転車はかへりみない。もつとスピイデイな運行に遅れないため、交通機関はおろか、交通路線まで改造しつつある。(略) 哲学的でも文学的でもない知的実践者を、すぐさま文明の裏切者よはりするのは、かなり性急であり、又古風ではないだらうか。これらの有能にして無名な精神的技術者たちが、インテリの良心の代表者を気取らないからと言って、彼等を、非インテリときめつけられる権利を、どのインテリが所有してゐるのだらうか。(22)

このように泰淳は、クラウス・マンと異なる「インテリ」像を提示している。前述の通り、クラウスの描いた「インテリ」像は、「一切を疑う」批判的な精神の持ち主である。それに対して泰淳は、他人の指示に依存せず、自主的かつ積極的に現実世界を改造するために行動している人間を「知的実践者」若しくは「無名な精神的技術者」と称し、彼らを「インテリ」としている。クラウスのインテリ観の象徴が「理想」であるのに対し、泰淳のそれは「現実」であった。

そして「インテリ」の機能に関しても、両者の見解は大きく異なる。クラウス・マンは不合理な体制を批判する政治的責任を求めた一方、泰淳は自立的な思考力と主体的な行動力を求めた。両者の求めるインテリ像の相違は、彼らの異なる戦争体験に由来しているのではないかと考えられる。

まずクラウス・マンについてであるが、彼はドイツ文学者の亡命について、自伝において下記のように書いている。

自分がなにを欲するかを、われわれは知っていた。今日の要請は明瞭に示されていた。亡命中のドイツ作家は自分の機能を二重のものともなしていた。一方では、全世界にむかつて第三帝国に警戒せよと呼びかけ、この体制の真の性格を啓蒙すると同時に、「もう一つの」「よりよいドイツ」、非合法の、それゆえひそかに抵抗を続けるドイツと連絡をとって、祖国での抵抗運動に文筆の武器を送らねばならなかった。他方では、ドイツの精神、ドイツの言語の偉大な伝統、その発祥の国ではもはや行われぬ伝統を異郷にあって生かし続け、みずからの作品創造によってさらに発展させることが必要であった。(23)

このようにクラウス・マンは、必ずしも自発的に亡命を選んだのではなかった(24)。しかし、彼は「文学者の集団出国(25)」を目撃し、彼自身も亡命することにより独裁体制に反抗し、文学者に負わせた政治的な責任を果たそうとした。彼のこうした姿勢が、その遺書において書かれた精神的価値を追求するインテリの姿勢と一致している。亡命という過酷な体験によって、クラウスの「インテリとはいかにあるべきか」という概念が裏付けられたに違いない。

一方泰淳は中国文学研究者であり、彼が接していたインテリも主に中国研究者である。一九三七年、泰淳は一兵士として従軍し中国に派遣された。帰国後、彼は現地体験を経験したことで、日本国内において行われた中国研究に空虚さを禁じ得なかった。また泰淳が戦時中に執筆した一連の文章では、頻繁に現地の風景や人間を描写していた(26)。彼はこれによって、生の中国の姿を日本に伝えようとした。と同時に彼は当時の中国研究の現状に関して、以下のように語っていた。

私が日本に帰って驚いたことは支那関係の出版の華やかさでありました。しかし今はその空しさに驚かすにはあられないのです。(略)我々が戦地で見た支那土民の顔には土の如き堅固な智慧があらはれ、伝統的な感情の陰影が刻まれ、語られた事のない哲学の鍔が深々とよつておりました。(略)生きて動いてゐる支那人が支那を形成してゐるわけです。(略)相手が生きてゐる事を忘れては華閩も角力も出来ないでせうが、同時に舞踏も弾奏もできないのです。(27)

泰淳が戦地で見たのは、武装した日本兵の前に「心が少しも動揺してないらしい(28)」「農民であり、「馬糞の山の下積みになつて(29)」「い

た漢籍である。つまり、彼は対抗する現地の人間と破壊された文化の産物を見たがゆえに、「日支親善」の体制の下に行われた中国研究の「空しさ」を指摘しているのである。この「空しさ」は、過酷な体験を通して中国研究者が自立的な思考力と主体的な行動力を失った結果であり、泰淳の求めているインテリの機能は、彼の戦時中に目撃した時局に抵抗できなかった日本の中国研究者たちの姿勢に由来するものだといえる。

また、両者におけるインテリ観の違いは、「アジア」と「ヨーロッパ」という双方の視座の相違にも関連するであろう。詳細は後述するが、泰淳は、クラウス・マンの自民族・地域中心的視点を強く批判しているのである。

二二二つの視座

クラウス・マンは、「世界は不可分の全体であつて、すべての国民と階級とは同一の問題と同一の危険とに直面してゐるのである(30)」と述べ、ヨーロッパのインテリについて次のように説明している。

ヨーロッパのインテリが「最もよく危機を意識してゐる」のも不思議ではあるまい。その上、彼らはほかの大陸のインテリたちよりも余計に意識的且つ積極的にインテレクチュアルなのだ。(略)共通の苦しみは統一する力を持つ。国民的な対立やイデオロギー上の相剋は可成りあるにしても、今日のヨーロッパ(殊にヨーロッパのインテリ)には、ヨーロッパは一体だといふ気持ちが強い。(略)彼らはここにこゝと同一の悲劇的家族に属し、零落しても誇りの高貴な一種族の成員なのだ。(31)

とあり、ここではヨーロッパのインテリが最も危機感を持った一群とし

て強調されている。しかし、クラウス・マンのいった「危機」は単にヨーロッパだけの問題ではない。戦後の米ソ対立と冷戦によって、世界を席巻したイデオロギー上の対立、および思想・言論などに対するさまざまな統制が引き起こされた。そのような背景の中にクラウス・マンのいった「目下の危機」は、政治的動乱に由来したインテリの「独立的で批判的な知性」の喪失であった。彼は、これが全世界に共通する問題だと認識したものの、この「危機」に押し寄せられたヨーロッパのインテリを「誇りの高貴な一種族の成員」と呼んだ。このクラウスの発したインテリの行方に関する予言の中には、ヨーロッパ以外の地域のインテリの姿は見えない。敷衍すれば、クラウスは自民族・自地域に拘泥し、他民族・他地域を含めた思考に発展していないのである。

泰淳は、このクラウス・マンの西欧に偏重した視線を敏感に察知している。彼はクラウス・マンについてこのように語っている。

零落しても誇りの高い高貴な一種族の成員たる彼は、起ち上りつつも誇り高くない卑賤なるアジアの諸種族の成員には一顧もあたへてみない。(略) 彼には愛惜すべき知的遺産(たとへそれが亡びつつあるにしても)の継承者たるの、恵まれた自覚があつた。(略) その恵まれた自覚なくして、破滅の域に押しやられねばならなかつた、多くのアジア種族の運命を自撃してゐる以上、卑賤なる成員の一人たる私は、ここに或るヨーロッパ知識人の死は認めても、全世界のインテリの死の予想を認めることはできないのである。(32)

このように泰淳はクラウス・マンの自殺を「知的に自殺したこと」と評価する一方、「この知的なるものは、あくまでヨーロッパ知識人のそれであり、かつヨーロッパ知識人の一部の代表のそれである(33)」と述

べるように、クラウスの自殺によって表した知性を「ヨーロッパ知識人」と限定している。泰淳はそれとは対照的な意味で、アジアの動乱を自ら目撃した「卑賤なる成員の一人」と自称したのである。つまり、彼は「ヨーロッパ—アジア」・「高貴—卑賤」という対比を強調することによって、クラウスのインテリ論が決して普遍性を持たないと批判しているのである。

そして、「アジア諸族の運命」について、泰淳は彼自身の戦時中に触れた中国民衆のほか、中国古来の歴史上の知識人たちの姿にも重ね合わせて論を展開している。例えば、同じく戦乱の時代を生きた古代の知識人について、このように述べている。

「論語」や老荘の時代は、決して平穏な黄金時代ではない。戦乱や天災は地を蔽っていたけれど、これらの哲学者たちは誰一人として悲惨事を詠嘆して論理を見棄てたり、罪惡の現世をおそれて天上の救いを求めようとはせず、ひたすら理知のひろがり、人間智力のかためを図っていた。(略) 後に至って封建政府の形式主義のよりどころとなつた古代哲学者も、その発生のはじめ、いかなる西洋哲学にも、劣らぬほど理知的、人間的、革命的であり、新鮮そのものであつたことは忘れてはならない。(34)

このように泰淳は春秋戦国時代における諸子百家の出現を指摘し、戦乱状態にあつても知的活動を継続した東洋知識人の事例を挙げることによつて、たとえ儒教が封建社会を維持する基礎となつたとしても、その根源は東洋知識人の知を求める努力があつたにほかならないと主張した。泰淳からみれば、インテリは必ずしも政治的危機と対決する存在であるとは限らず、時に政治を動かすことも可能であると主張する。彼が重ん

じたのは、たとえ政治的危機においても、インテリがいかに「知能」を発揮し真理を探究するかである。従って、泰淳は下記のようにクラウスと異なる意味で「インテリ」の使命を定義した。

インテリとは、その知能によって、この世に於て何者かであり得る人々である。(略) 先覚者であると共に先行者である。彼等は奇を好んだり、あはてて駆け出す必要はないが、とにかく新しき事態を造り出す力の一部とならうとする。たとへ絶望するにしても、なほその絶望を純粹明確に形象化することによって、原動力とならねばならぬ。(35)

このように泰淳による「インテリ」は、自分の所属している階層に関係なく、既存の環境へ能動的に作用を及ぼし、絶望的な状況においても常に「知能」を発揮する人々であると理解しているのである。ここで筆者が注意するのは、泰淳が掲げる「知能」と、クラウスが掲げる「知性」に対する見解の相違である。この相違は何に由来しているのだろうか。

これは両者がそれぞれ「知性」の見解を見出すに至るまでの過去を回顧すれば容易に理解できる。クラウスは若い頃からソクラテス・ニーチエを愛し、ノヴァーリスを耽読した(36)。彼のいう「知性」には、伝統的なヨーロッパ思想から継承された精神的自由と道徳的使命の意味が読み取れる。その一方、泰淳は幼年期から古代中国の文献に親しんでいた。そのため、彼のいった「知能」は、漢文としての意味、つまり各分野において必要とする知識と、知識を発揮する能力と理解できる。これは前述した「知的実践者」としてのインテリ観と一致するといえる。「知能」の詳細についてまた後述するが、要するに、泰淳はクラウスを批判

する形で「アジア」のインテリ像を提示したものの、その根底において両者の思想的なズレが存在する。この点に関して後章で詳しく論じるが、ここでクラウスのインテリ論に対して、泰淳の批判が必ずしも適切とは限らないのではないかと筆者は考えている。

三 絶望状況におけるインテリの行方

三-1 「知性」・「知能」と権力

クラウス・マンは「文明は、最も近代的に武装した野蠻が殺到してきたために今や破壊にひんしてゐる(37)」と述べ、彼が当時の米ソ冷戦の対立構造にヨーロッパの伝統精神の凋落を感じ、自殺を選んだのである。それに対して、泰淳は、クラウス・マンが「知的に自殺したことは疑ふべくもない」と認めたが、この論理は全世界に通用するものではないと指摘する。「自殺」よりインテリの「生」の意義を強調した。それが泰淳の主張である。

たとえ絶望状況に落ちても、インテリは生きなければならない。泰淳はクラウスと正反対の方向に、戦後インテリのあり方を主張したのである。この考えを理解するためには、次の二点を注意すべきであろう。第一にクラウス・マンの指摘したヨーロッパに露呈された「知性」と権力の対立に対して、泰淳は「知能」と権力の協調性を見出した。第二に泰淳が自らの敗戦体験によって生まれた「滅亡」の思想である。

まず、第一を検討したい。遺書の最後にクラウス・マンは、スウェーデンで出会った大学生の話を通して、政治的権力に対するインテリの無力感と不安を吐露している。

僕ら(筆者注：インテリを指す)は叩きのめされてゐる、片付け

られてしまつてゐる。もういい加減に『まさにその通り。』と認めてしまへばいいのです。二つの反精神的強大国の戦ひ——アメリカの金とロシアの神がかり——はもはや知的な自由と廉潔とにたいして少しの余地も残してはゐないのです。(38)

二つのイデオロギーの板挟みとなつていたヨーロッパ知識人に対して、クラウス・マンは「絶望」しか感じ取れなかつた。つまり、彼はインテリを権力外の一群であると認識しているのである。

一方、泰淳はインテリを権力の外に置かない。むしろ「社会のあらゆる階層から、新しい知的権力者が輩出しつつある(39)」という一文から、彼の「知能」と権力の協調性を主張しようとする意思が読み取れる。そして、彼は権力者がいかに知的行動を実現するかについて以下のように論じている。

彼等(筆者注:「理想的なモデルとしての社会主義国家の支配者」を指す)はそれを彼等自身の集積した「科学」によつて統計と宣伝力によつて圧倒的に人民の耳に鳴りひびかせて置く。(略)そして自分たちの「科学」の絶対的正しいことを、立証し、説得し、承認させようと必死に努めねばならない。彼等が無知だからではなく、知的であればあるほど、必然的にさうなるのである。(40)

権力者の自分の集積した「科学」(つまり政治的主張や政策など)、およびその「科学」の正しさを「立証」、「説得」する行為は、新たなものの発見・技術の創出も知的行為として理解できる。つまり、泰淳によれば権力者は現実社会を能動的に改造し、変化を引き起こす「先行者」と「先覚者」である。そして、権力者は権力者となる過程において、自ら

の「知能」を發揮しないとイケない。その意味において彼らは知的であると泰淳は主張する。

次に、泰淳が理解した権力者の「知能」について述べておく。泰淳が理解する権力者の「知能」については、彼の毛沢東に関する言論からその一端が窺える。泰淳は、一九五三年に「毛沢東の文章」を發表し、毛沢東の独特な知的行為について、このように述べている。

彼の農村社会調査を読んでみても、たんなる机上の統計や、外国の理論の受売りでなく、自分の脚と眼を充分に使つて、丹念に調べた模様がよくうかがえる。

一つの実行から一つの自信へ、その自信からもっと大きな実行へ、その実行から更に大きな自信へと、飽くことなく牛の歩みをつづけた。(41)

つまり知的理論を形成するために、「統計」や「外国の理論」より一層重要なものは、それらが試行錯誤に由来した経験の蓄積であるというのだ。ここで、泰淳が強調したのは、積極的な行動者としての毛沢東の姿勢である。このような姿勢に対して、彼は魅力的に感じたに違いない。例えば、一九六五年に竹内実との共著である『毛沢東 その詩と人生』のあとがきにおいて、泰淳は次のような心境を述懐している。

非行動者は、行動者にあこがれる。非行動者は時によると、行動者の言行を解説することによつて、自分もまた行動者であるかの如きフリをする。しかしながら、行動者と非行動者のあいだには、目もくらむほどの距離があり、気も遠くなるほどの断絶がある。(42)

毛沢東の出身は農家であるが、彼は単なる農民ではない。長年の革命生活、つまり実行的な体験において創出した『実践論』（一九三七）、『矛盾論』（一九三七）、『文芸講話』（一九四二）などの知的理論は、毛沢東の「自身の集積した『科学』（43）」である。また彼は自らの「科学」を用いて、さまざまな手段によって権力者としての不動の地位を保っていた。これはまさに泰淳の強調した「自己の使命を忠実かつ執念ぶかく果たしている（44）」という「知的行為の強烈な魅惑（45）」であるといえよう。上述したことから分かるように、泰淳のいった「知能」とは、知識の蓄積とその知識を能動的に応用する能力である。このような「知能」の主体は、クラウス・マンの挙げた哲学者や文学者のみならず、一般大衆も含められるのである。

インテリの批判的姿勢と自由的精神を重視するがゆえに、クラウス・マンをはじめとしたヨーロッパ知識人たちは、死を選ばざるを得なかった。しかし泰淳はアジア、特に中国の現状と歴史に注目することによって、権力者のさまざまな動きを知的努力と認識したのである。彼はクラウスの絶望を深く理解した。だが、「種々の不安と不満の影を羅列して、それ以上一步も踏みださうとしない絶望者と、最後まで知的努力を棄てずに精神的宇宙に身体を賭けた実験者と、いづれか興味ある登場人物であらうか（46）」という一文から分かるように、彼は真のインテリとして認めたのは知能——知識の蓄積とその知識を能動的に応用する能力なのである。

ただ、この泰淳の批判は、必ずしも全てが妥当とは言いきれない面もある。

第一次世界大戦を経験したクラウス・マンは、戦争がヨーロッパにもたらした衝撃を一度体験し、西欧文明の没落という危機感を持っていた。違いない。このような心情の中で、彼はヨーロッパ知識人として戦争、

権力に対抗するという姿勢を取ることが当然である。泰淳はクラウス・マンを批判するとき、このような西欧の歴史を言及していない。つまり、泰淳がどの程度でクラウス・マンの真意を理解したのか、筆者には疑問が残るのである。

三 ニ インテリの「生」と滅亡の思想

「新しき知的士族について」の中に、泰淳の「生」に対する執着の強さが鮮明に示された。

ウルフ、トラアー、ツプイク、マサリックが自殺したといふ事実は我々を打つ。(略) 彼等の自殺に重量をあたへてゐるのは、彼等が自殺するまへに、様々なやり方で自己のインテリ性を実証してゐたからである。(略) 彼等は敗北(或は完成)する前に、自己の使命を忠実かつ執念ぶかく果してゐる。(略) 彼等の死は、彼等がその背後に蓄積した生の緊張によつて、我々を打つ電流となつたのであり、学ぶべきはまず、その生の蓄電である。(47)

この引用文に読み取れるのは、インテリがいかなる状況においても知的努力を諦めずに生き続けることを先行させるべき、という泰淳の論理である。そして、クラウス・マンは芸術家の「異常性」(例えばドストエフスキー、ファン・ゴッホ)を通して、文化の基盤が動揺する危機を指摘した(48)が、泰淳はそれらの「異常性」を「インテリ性を堅持する」行為として捉え、「決して精神的エネルギーの衰弱ではなく、むしろ活力の噴出」であると反論した(49)。泰淳のこのような「生」に対する執着の中に、単なる行動力を重視するだけでなく、彼の敗戦体験によつて生まれた「滅亡」の思想(50)の影が映し出されているのであ

る。

一九四五年、秦溥は上海で敗戦を迎え、自国の破滅を体験した。彼は敗戦後の心境を次のように語っている。

月日が悪くなくなっても、我々の悪さはかわらないであろう。何故ならば、今や我々は罪人であるからだ。世界によって裁かれる罪人であるからだ。(略) 冷たいしずけさ、すべての日常的な正しさを見失った自分たちだけのしずけさの裡に、何とかすがりつく観念を考えている。するとボカリと浮び上って来たのは「滅亡」という言葉であった。(51)

「滅亡」に関して、秦溥は「滅亡」が「生存するすべてのものにある」と述べ、戦争による国の消滅を世界の「消化作用」、「月経現象」と見なすという比喻を通して、「滅亡」が世界の存続するための「本能的現象であると述べている(52)。

この点について、先行研究では、秦溥の「滅亡」を「けつして衰弱の形式ではない、エネルギーにしぶとく生きる生存の形式である(53)」と解釈している。が、そもそも秦溥の「滅亡」とは何であろうか。そして、「滅亡」のような限界的状況において、インテリがいかに行動すべきか。これについては、秦溥の司馬遷と『史記』に対する注目と緊密な関係が見られるのである。

一九四六年に発表された秦溥の随筆「司馬遷の精神—記録について」で、彼は司馬遷と『史記』についてこのように述べている。

この殺人被殺人の世界に、絶対的なるものは存在できない。あまりにも人間臭く、あまりにも死滅にみちみちていて、永続や不滅や繁栄

や美満が存在できないのである。(略) 世界は、もろもろの個人、もろもろの種族、もろもろの王朝の滅亡を榮義とし、吸収し、持続する。この非情な持続をする絶対世界を描くのが歴史家の任務である。それ故、彼(筆者注：司馬遷)は歴史家を「天子のたわむれもてあそぶお相手」とは考えない。文史星曆をつかさどる宇宙的な批判者とみなすのである。

英雄が倒れようが、国が亡びようが「歴史」は在る。むしろ倒れ、亡びるものを内容として世界史が存在する。人々は生れ、食事をし、睡り、働き、恋し、生み、病み、死ぬであろう。国は起り、勝ち、負け、亡びるであろう。ある人物の悲しき物語はつたえられ、ある国の悲憤な歌はのこるであろう。しかもそれら人間原子、人間分子の非持続こそ、「史記」的世界全体の持続を支えている。(54)

この文章において、秦溥は司馬遷を通して、絶望に落とされたインテリの生き方に触れる一方で、「滅亡」と世界の関連性にも言及している。匈奴に投降した李陵を弁護したために、漢の武帝によって宮刑を処された司馬遷は、絶望的状态に苦悶しながらも自らのインテリ性を發揮し当時空前の歴史書『史記』を完成させた。そして、『史記』の内容を見ると、秦溥が「生、老、病、死」を人間の生存の「絶対条件」と称した(55)ように、『史記』に描かれた世界は、英雄・国・王朝の盛衰によって構成されていた。

そのため、人物・民族・国などの個体の衰弱と消滅のような「非持続」が、「絶対世界」(つまり歴史の流れ)の存続にとって、「絶対条件」であると彼は理解した。そのため秦溥は「滅亡」に対して、クラウス・マンのような絶望的な心情を抱かなかった。彼は「滅亡」と人間について以下のように述べている。

（前略）滅亡が変化の一部であるように、発展もまた変化の一部なのであるから。変化の相（真のすがた、裏側のかたち）に触れたとき、人間はショックをうけ、極限状況の壁の冷たさを感じる。だが、そのことは、決して、万事がそれでおしまいになったことを意味するのではない。むしろ、万事がそこから新しく始まることを意味するのである。（略）

自己保存、種族保存の本能を与えられている私たちが、「変化」の法則を忘れがちになるのはやむを得ない。しかし人間が、限界状況におかれる運命をもっているからには、たえず、「変化」のはたざわりで、自分自身を自ざめさせるチャンスにあたえられているのである。（56）

このように「滅亡」は「非持続」であるが、世界の全体的持続にとっては「変化」の一部にすぎない。日本は敗戦により国家体制が根本的に否定された。これは日本のインテリにとって一種の「滅亡」ともいえる。新しき知的士族について」の中で、泰淳はこのような「限界状況」において、自分がどのように行動すべきかと自問自答していた。

司馬遷が宮刑を経験した後、『史記』を完成させ自らの使命を成し遂げたように、泰淳は敗戦を味わった後、『蝮のすゑ』の発表によって戦後派作家の道を歩み始めたのである。そのため、彼は「生」を重視し、インテリがいかなる悩み・不安に直面しても、生き続けて絶えずに自分の「インテリ性」を裏証すべきだと強く主張したのである。

おわりに

本稿は武田泰淳の「新しき知的士族について」を取り上げ、戦後日本の近代化論という背景から今まで検討されなかった泰淳のインテリ論を

分析してみた。本論の要約は以下の通りである。

泰淳のインテリ観は、二つの特徴を持っていた。それは①泰淳は、クラウス・マンと異なるインテリの主体を提示したことであり、積極的に現実世界を改造する人々を「インテリ」としている点である。そして②インテリの機能に関して、クラウス・マンは政治的責任を重視するが、泰淳は自主的思考力と主体的行動力を主張した点である。このような違いは、「アジア」と「ヨーロッパ」という両者の視座の違いによるものである。クラウス・マンの場合、「西欧中心」的な思考様式が示された一方、泰淳の場合は、彼の古代中国知識人への関心に帰結したのである。

また、泰淳が何よりも強調したのは、絶望状況におけるインテリの「生」の必要性である。泰淳は、権力者の中に見られる「知能」を認め、インテリから権力者を生み出す可能性を提示した。ただし、「生」の必要性を強調することでクラウス・マンの「自殺」を批判するという泰淳の姿勢が、彼のヨーロッパの歴史の流れに対する認識の不足を露呈した形となったのである。

そして、泰淳の「生」に対する執着の裏には、彼の敗戦体験によって生まれた「滅亡」に関する思索が色濃く反映していた。

クラウス・マンと異なり、泰淳のインテリ論はほぼ中国の歴史と現状に対する観察によって得られたものといっても過言ではない。そして、かつて兵士として中国への侵略に参加した泰淳の思考には常に（彼自身も含め）戦時中の日本知識人たちの姿勢に対する反省が見え隠れする。

また、泰淳のインテリ論には、彼自身の「アジア」的インテリとしての自主性が鮮明に現れた。このような言説には、未だ紛争の絶えない現代においても通底する思想が潜在しているのではないかと、筆者は考えている。

註

- (1) 安田武『武田泰淳の文学とひとつの謎——その戦争体験について』(『文学』二九卷二二号、岩波書店、一九六二)、安田武『武田泰淳の文学とひとつの謎(完)——その戦争体験について』(『文学』三〇卷四号、岩波書店、一九六二) 参照。
- (2) 例えば、根岸隆尾「武田泰淳論——(民衆) 発見を基軸に」(『評言と構想』第二輯、評言と構想の会、一九七五)、兵藤正之助『武田泰淳論』(冬樹社、一九七八) などを参照されたい。
- (3) 渡邊一民『武田泰淳と竹内好——近代日本にとつての中国』(みすず書房、二〇一〇、三二八頁)。
- (4) クラウス・マン(一九〇六—一九四九)：ドイツの作家。トーマス・マンの長男。シュンペレンに生まれる。早くから文学活動に従う。一九三三年亡命。ヨーロッパ各地で暮らす。オランダで亡命者の雑誌「集合」(一九三三—一九三五)を出版し、反ファシズムのために戦う。三七年、アメリカで市民権を取得。兵士としてヨーロッパに帰り、通信員として活躍した。小説『悲愴交響曲』"Symphonie Pathétique" (一九三五)、『メノイスト』"Mephisto" (二六)、自伝『転回点』"The Turning Point/Der Wendepunkt" (英語版四二二ドイツ語版五〇没後刊)。第二次大戦後まもなくカンヌで自殺。
- (5) 小栗浩(『集英社世界文学大事典』第四巻、一九九七)。
戦後の近代化論に関しては、日高六郎編『現代日本思想大系三四 近代主義』(筑摩書房、一九六四)、生松敏三『近代日本への思想的反省』(中央大学出版社、一九七二)、日高六郎『戦後思想と歴史の体験』(勁草書房、一九七四)、内山節『戦後思想の旅から』(有斐閣、一九九二)、鹿野政直『近代日本思想案内』(岩波書店、一九九九) などを参照されたい。
- (6) 日高六郎は「欠如理論」について、「敗戦は国体原理の崩壊である以上、それは西歐化の選択原理の崩壊でもあった。(略) 国体原理による西歐化の取捨の限りも指摘された。そこで西歐文明を、その精神をよくめて全面的に学ぶ必要が強調される。むしろ西歐文明をささえる人間類型あるいは精神そのものに注意が向けられたといってもよい。ところで注意がその側面にむけられると、西歐に存在するもの——民主主義の原理とか、個人の自由と独立とか、ナショナリズムと個人主義の結合とか、普遍宗教あるいは超越的原理の自覚とか——が日本には全く存在しない、あるいはほとんど存在しないという、いわゆる『欠如理論』となりやすい」と述べている(日高『戦後思想と歴史の体験』三四頁)。
- (7) クラウス・マン著、渋谷寿一訳『反抗と亡命——転回点』(晶文社、一九七〇)「亡命」の章を参照されたい。原作の"The Turning Point"は一九四一年に英語で発表されたが、一九四九年に著者がドイツ文で書き直され、没後に刊行された。本書は、そのドイツ語版の"Der Wendepunkt—Ein Lebensbericht" (一九五〇)の全訳である。
- (8) クラウス・マン「インテリは生きていられない——ヨーロッパ精神の試練」(『インテリは生きていられない』北辰堂、一九五二、二九—三〇頁)。
以下、「マン」インテリは生きていられない」と略記。
- (9) クラウス・マンは同性愛者であるため、彼の自殺に関して、同性愛ヒロスの視点から論じられたものも見られる。具体的には奥田敏宏『トーマス・マンとクラウス・マン——《倒錯》の文学とナチズム』(ナカニシヤ出版、二〇〇六)を参照されたい。
- (10) 内山節『戦後思想の旅から』(有斐社、一九九二) 参照。
- (11) 一九五〇年、マッカーサーは国家警察予備隊の創設と海上保安庁の増員を指令。一九五一年、日米安全保障条約調印。一九五二年、海上警備隊設置。一九五四年、アメリカ水爆実験、および自衛隊法の公布など。このような変動していた時局が、国内の再軍備反対、米軍基地拡張反対などの闘争を

- 招き、知識人たちの関心を集めた。
- (12) 桑原武夫「日本インテリの弱さ」『群像』七巻五号、講談社、一九五二。
- (13) なかの・しげはる「これからの話」『群像』七巻五号、講談社、一九五二。
- (14) 原題目：『Die Heimsuchung des europäischen Geistes』。
- (15) 渡邊一夫「しかし、インテリは生きてゐなければならない」『インテリは生きてゐられない』北辰堂、一九五二、五六頁。
- (16) 渡邊「しかし、インテリは生きてゐなければならない」、六一頁。
- (17) 高橋義幸「インテリは生きられるか？」翻訳者としての感想若干『インテリは生きてゐられない』北辰堂、一九五二、八九頁。
- (18) 武田泰淳「新しき知的士族について」『インテリは生きてゐられない』北辰堂、一九五二、一〇〇頁。以下、「武田泰淳「新しき知的士族について」」と略記。
- (19) 同前、一二頁参照。
- (20) 同前、一三頁参照。
- (21) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一〇八頁参照。
- (22) 同前、一〇八頁参照。
- (23) クラウス・マン著、渋谷寿一訳『反抗と亡命——転回点』(晶文社、一九七〇、一九〇～一九一頁)。
- (24) 同前、一八六～一八七頁参照。
- (25) 同前、一九〇頁参照。
- (26) 武田泰淳の現地を描いた文章として、例えば、「土民の顔」(一九三八)、「支那文化に関する手紙」(一九四〇)、「杭州の春のこと」(一九四〇)、「支那で考へたこと」(一九四〇)などが挙げられる。
- (27) 武田泰淳「支那文化に関する手紙」『中国文学月報』第五八号、一九四〇、一一。
- (28) 武田泰淳「土民の顔」『中国文学月報』第四四号、一九三八、一一。
- (29) 武田泰淳「支那文化に関する手紙」、前掲書。
- (30) マン「インテリは生きてゐられない」、一七頁参照。
- (31) 同前、一八頁参照。
- (32) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一〇九～一〇〇頁参照。
- (33) 同前、一〇八～一〇九頁参照。
- (34) 武田泰淳「美しきとはげしき」『武田泰淳泰淳全集』第二巻、筑摩書房、一九七二、一九～二〇頁。初出：『桃源』(吉昌社、一九四七年二月号)。
- (35) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一二二頁参照。
- (36) クラウス・マン著、小栗浩訳『マン家の人々——転回点』(晶文社、一九七〇)。「教育」の章を参照。
- (37) クラウス・マン「インテリは生きてゐられない」、一六頁参照。
- (38) 同前、四〇頁参照。
- (39) 武田泰淳「新しき知的士族について」、前掲書、一一六頁参照。
- (40) 同前、一一九頁参照。
- (41) 同前、二九一頁参照。
- (42) 武田泰淳「あとがき」(武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』文藝春秋新社、一九六五、三九八頁)。
- (43) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一一九頁参照。
- (44) 同前、一一四頁参照。
- (45) 同前、一一四頁参照。
- (46) 同前、一一九～一二〇頁参照。
- (47) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一一四頁参照。
- (48) クラウス・マン「インテリは生きてゐられない」、一一一～一二六頁参照。
- (49) 武田泰淳「新しき知的士族について」、一二〇～一二二頁参照。
- (50) 武田泰淳の「滅亡」の思想に関して、多くの先学によって検討されてきた。

例えば：

大江健三郎「同時代としての戦後——滅亡にはじまる」『群像』二七卷四号、講談社、一九七二。

森川達也「武田泰淳における『滅亡』の思想」『国文学 解釈と鑑賞』四六七号、至文堂、一九七二。

池田純澄「武田泰淳『司馬遷』の意義——部分的滅亡と全的滅亡」『国文学 解釈と鑑賞』四六七号、至文堂、一九七二。

立石伯「滅亡と天啓」『群像』三二卷三号、講談社、一九七二。

高橋啓太「敗戦と『残余の生存』——武田泰淳「滅亡について」論」『国語国文研究』一四〇号、北海道国語国文学会、二〇一一。

(51) 武田泰淳「滅亡について」『武田泰淳全集』第二二卷、筑摩書房、一九七二、九二頁。初出：『花』第八号(新生社、一九四八)。

(52) 同前、九三頁参照。

(53) 桶谷秀昭「武田泰淳——『諸行無常』と『我儚』について」『国文学 解釈と鑑賞』四六七号、至文堂、一九七二、一二頁。

(54) 武田泰淳「司馬遷の精神——記録について」(石井恭二編『武田泰淳エッセンス』河出書房新社、一九九九、一九九頁)。初出：『新時代』一九四六。

(55) 武田泰淳「限界状況における人間」『武田泰淳全集』第三三卷、筑摩書房、一九七二、二八三頁参照。初出：『現代の魔術——武田泰淳評論集』(未来社、一九五八)。

(56) 同前、二九二～二九三頁参照。

(東北大・院)

発行者 日本思想史研究会

〒九八〇・八五七六 仙台市青葉区川内二七番一号

東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室内

電話・FAX 〇二二(七九五)六〇六七

<http://www.sai.tohoku.ac.jp/shisoshu/kenkyukai/>

代表者 佐藤弘夫

編集者 『年報日本思想史』編集委員会

印刷所 オレンジ工房

正 誤 表

頁,行	誤	正
1 p7,注11	竹内実「昭和文学における中国像」、前掲書。	→ 竹内実「昭和文学における中国像」（『日本人にとっての中国像』、春秋社、
2 p8,上から3行目	作家が数多く	→ 作家を数多く
3 p10,注23	中国文学研究会の「抵抗」について：	→ 中国文学研究会の「抵抗」について、
4 p18,注45	を参考した。	→ を参考にした。
5 p20,注55	当時の諸学者の研究活動について、	→ 当時の諸学者の研究活動については、
6 p21,上から18行目	向けてなかった。	→ 向けていなかった。
7 p23,注68	短編小説を多数収録されている。	→ 短編小説が多数収録されている。
8 p30,上から15行目	東大支那哲学支那文	→ 東大文学部
9 p32,上から12行目	ジャーナリズムに近きながら	→ ジャーナリズムに接近しながら
10 p37,上から19行目	対中文化政策を言及した	→ 対中文化政策に言及した
11 p40,下から4行目	中文研が唯一であった。	→ 中文研が唯一であった。
12 p46,上から15行目	表8を参照する。	→ 表8を参照されたい。
13 p46,注115	早稲田高等学院に教鞭をとっていた。	→ 早稲田高等学院で教鞭をとっていた。
14 p49,上から4行目	改造社を入社してから、	→ 改造社に入社してから、
15 p49,上から7行目	証言が残られている。	→ 証言が残されている。
16 p50,下から1行目	できたことである。	→ できたのである。
17 p54,上から13行目	北伐に参加した	→ 北伐に参加した
18 p54,上から16行目	文壇に一躍脚光を浴びる。	→ 文壇で一躍脚光を浴びる。
19 p54,上から17行目	「九・一八」事変を抗議して	→ 「九・一八」事変に抗議して
20 p54,下から4行目	翌年の『婦人文芸』	→ 翌年の『婦人文藝』
21 p64,下から6行目	綿密的に描写する	→ 綿密に描写する
22 p65,上から9行目	米の畑	→ 田んぼ
23 p68,上から9行目	言わせざるを得ない。	→ 言わざるを得ない。
24 p74,正文上から1行目	漢学批判を盛んに行われた。	→ 漢学批判を盛んに行った。
25 p74,正文上から14行目	多面性が呈している	→ 多面性を呈している
26 p74,正文上から15行目	漢学の持ち広義的意味	→ 漢学の持つ広義的意味
27 p76,注183	挙げられる。	→ 挙げられる。
28 p77,下から7行目	もとより	→ もとより
29 p78,下から11行目	文庫本など	→ 文庫本など
30 p80,下から10行目	僧侶である父親に	→ 僧侶である父親が
31 p87,上から12行目	番号は筆者より	→ 下線番号は筆者による
32 p89,上から11行目	溥儀が日本にはじめてきた時	→ 溥儀が日本にはじめてきた時
33 p92,表11題目上から2行目	略歴を以下の通りである。	→ 略歴は以下の通りである。
34 p119,上から2行目	その中から	→ その中から
35 p125,上から14行目	『中国文学』第83号（1942.5.1）である「日本と支那語」の特集	→ 『中国文学』第83号（1942.5.1）「日本と支那語」の特集
36 p128,注293	支那哲学科から卒業し、	→ 支那哲学科卒業し、
37 p129,上から7行目	「翻訳時評」の初回目	→ 「翻訳時評」の一回目
38 p131,上から5行目	動揺しはじめ	→ 動揺させはじめ
39 p131,上から10行目	初回目	→ 一回目
40 p134,下から4行目	ピーク期に至ったことは	→ ピーク期に至ったことが

頁,行	誤	正
41 p140,上から15行目	無力感が免じられず、	→ 無力感が免れなくなり、
42 p140,下から9行目	崩れていく様子が見せた。	→ 崩れていく様子を見せた。
43 p159,下から14行目	中にも	→ 中でも

* なお、本論中で敬称の不統一が見られた。お詫びして訂正願いたい。